
姉さん（が）、事件です

深岡雅裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉さん（が）、事件です

【Nコード】

N6318S

【作者名】

深岡雅裕

【あらすじ】

僕には姉が一人いる。姉さんは、無敵だ。どんな常識も非常識も姉さんにはきつとかなわない。姉さんと僕の日々は淡々とヤマなしオチなしイミなしを地で行くようで、けれども些細な騒ぎには事欠かない。それでも日々は平和に過ぎていて……って姉さん、また事件？

登場人物、まとめ（前書き）

これまでの登場人物です。

ネタバレ含みます。

登場順にまとめています。

……まあネタバレしたところで大して問題はないか、この話の場合、
どういう連中が出てくるのか興味がある方はこちらをさらっと流し
見てからとかいかがでしょうか。

登場人物、まとめ

響空（初登場『僕と姉さんとしろいおばけ』

主人公。姉の弟。中核。

姉を鏡写しにして拡大して髪を切って乱すとよく似ている。

自覚のないシスコン。自分を一般人と認識しているが大概アレ。

響翼（初登場『僕と姉さんとしろいおばけ』

弟の姉。絶対無敵。この物語における機械仕掛けの神。

弟を鏡写しにして縮小して髪を伸ばして整えるとよく似ている。

自覚のあるブラコン。色々あって涼莉のママ。ポケットに刃物が入ってる。ファンタジー全否定思考の持ち主。

ましゅまろ（初登場『僕と姉さんとしろいおばけ』

お化け。幽霊ではない。元・人。

白くて丸くてころころしていてフワフワしていて食べると甘い。浮くし壁も貫通できる。

カロリーゼロなのでいくら食べても太らない。食べたぶんはいつの間にかもとに戻っている。

涼莉（初登場『僕と姉さんと迷子の子猫』

子猫。化猫。猫又。ロリ担当。

人に化ける事ができるというかどちらもほんとうの姿。

幼くして化猫になったので人間形態での見た目通りの年齢。大体11，2歳くらい。

朝瀬夕陽（初登場『僕と姉さんと迷子の子猫』

幼なじみ男。ポチとタマの飼い主。鉄壁。

翼を慕っているものの空という強大な壁により一行に進展はしない。させるわけがない。

普段は見た目も中身もイケメンだが翼が関わると途端に人としてダメになるというか終わる。

マリジョア・エスカナーリオ（初登場『僕と姉さんとまっくろシスター』

シスター。外見中身どちらも真っ黒。自由人。

国籍年齢本名一切不明のシスター。自由すぎる振る舞いが目立つ美人。

怒ると教会に飾ってある十字の交差点に髑髏の取っ手がついた十字架を持ち出す。重い硬い。十字架の中身は××××。

リア・B・シルメリア（初登場『僕と姉さんと青い吸血鬼』

吸血鬼。姐さん気質。ブレイカー。

白い肌と金の髪、赤い瞳と尖った耳と牙を持つ正真正銘吸血鬼。

基本的に吸血鬼の弱点はそのまま適用されるもののその程度では死なない理不尽極まった存在。

水津弥綺月（初登場『僕と子猫と二人の幼なじみ』

幼なじみ女。巫女。神域。

神に愛されたというか溺愛されている少女。日常的に神様の加護が働いているため人生イージーモード。

ただし本人の努力があつてこそ。しかし空に対しての想いは努力が全力でスルーされている。頑張れ女の子。

ジスティード・ガルガンチュア（初登場『僕と姉さんと異界の魔王』

魔王の中の魔王。ややフリーター。チート。

便利道具棄剣パンタグリユエルの使い手。この世界を生きるには強すぎる存在。今日も眠い。

色々面倒があつて翼に脱衣麻雀で打ち負かされた。負かされた事自体は色々思うところがあるが翼に恩義があるのでなんだかんだで協力的。

海原エッジ（初登場『僕と姉さんと夏の水着』

神父。気弱なエロオヤジ。ゾンビ。

見た目は三十後半だけどゾンビなので長い時間を死んできた。

四角くたたまれても数時間で復活する再生能力のせいでシスターに遠慮無くボコられる。

哉羅大地（初登場『僕と姉さんと夏の水着』

未来人。日本かぶれの日本人。リセット。

昔の日本に憧れて遥か未来からやって来たものの江戸時代辺りに行くとして間違えて現代に。

時間移動には色々問題があるので開き直って今の時代を楽しんでいい。エロいが耐性はほぼゼロ。

日ノ影光璃（初登場『僕と姉さんと夏の水着』

お嬢様。超能力者。ヤンデレ。
翼の親友で幼なじみ。家は大富豪で本人は超能力者。効果は限定しない。故に超能力。
ジュスティードに惚れている。

アリア・イリス・リリス・パンドラ（初登場『僕と姉さんと夏の水着』

魔法少女マジカルリリス。その他。共演者。

空のひとつ上で翼のひとつ下。××××の魔法少女。最近のライダーじみて複数のフォームがある。

夕陽が気になるお年頃。

登場人物、まとめ（後書き）

ということとで簡潔に。

僕と姉さんとしろいお婆け

僕と姉さんはまあなんて言うか、似ていない、と思う。

中学生と高校生。歳の差は二つ。そういった点を考慮する以上に、なんか、違う。

姉さんはなんというか、こう……言葉に出来ない様な人で、まあ色々ときぬけているところがあるのだ。

僕としては改めて欲しいのだけれど、なかなか聞き入れてもらえない。

今日も、そんな事のひとつだった。

「姉さん、これ、なに？」

僕は頭を押さえて、尋ねた。

マンションの自宅で晩ご飯の準備をしていたところ、姉さんが帰ってきた。

そしてエプロンをしたまま（友人の言うところの主夫スタイル）玄関に向かったところ、先の発言が飛び出した次第である。

ねえ、姉さん。

「もう一度聞くよ姉さん。そのズタ袋、何？」

さすがの僕にも、色々と限界とかあるんだけどなー。
しかしそこはさすが姉さん、悪びれない。

「うん、拾った!！」

ニッコリと太陽のようなスマイルの姉さん。

ちなみに姉さんは高校の制服姿だ。夏の青空に映える白いセーラー服は姉さんにとても良く似合っていて、身内の鼻屑目をなしにみてもかなりのものではないかと思っている。なにしろ、幼なじみの（男）が毎年この季節になるのを楽しみにしているくらいなのだから。

そんなに僕に目を潰されるのを楽しみにしているとは知らなかった。

ちなみにそんな姉さんと僕は割と顔が似ている。無論、姉さんが男顔なのではなく、僕が女顔なのだけれど。これを幸運と呼ぶか不幸と呼ぶか幼なじみ（女）と一日論争をしたけれど、結論は『似てなければ何も悩まずに済んだ』という当たり前のものだった。

話題がそれたから戻そう。

姉さんが手にしているのは、真っ白いズタ袋——のようなもの。なぜか頭に三角の白い布がついていたりはんぺんみたいな手がついていたり表情が（○△○）デフォルトだったりと。

まあ。

つまり。

——また姉さんが変なモノをもって帰ってきました。

うーん。

まあ。

「幽霊かぁ……」

しかもコテコテの。

そんな僕のひとり言が届いたのか、姉さんはきょとん、と目をまん丸にして。

「あははは！ やだなあ空、ユーレイなんているわけがないじゃない！」

「はあ……」

姉さんの明るい否定に僕は気のない返事を返すことしかできない。我が家には確実にオカルトじみた存在が潜んでいるんだけど、姉さんにとってそれはちよっぴりかわった『何か』であって決して常識の外にあるものではないらしい。

「ええと、それで結局それは、何？」

さて姉さんはコレを一体何と判断してもって帰ってきたのか。

「ましゅまろ」

「え？」

「だから、ましゅまろ」

「マシュ……」

「あまいよー」

「た……」

食べたんだ……それ……。

とろけるような幸せいっぱいの姉さんの表情だけれど、その事実
に僕の心は猛吹雪ですよ。

呆然としていると、僕の足を叩くものがあつた。

視線が自然と下がる。

「ああ、涼莉すずり……」

それは小さな猫だった。毛並みは美しく色は青みがかつた灰色。
宝石みたいな瞳がこっちをじっと見ていた。

小さな前足でたし、たし、と僕の足を叩いている。

うん、まあ。つまりメシよこせてことだね。

はあ、と深くため息を付いた。

そんな僕を見て姉さんは、とても心配そうに。

「どうしたの、空。そんな疲れた顔をして。そんなんじゃ、幸せが逃げて行っちゃうよ」

二人三脚でね、とドヤ顔でのたまった。

原因に心配されるというのも、なんというか色々と納得がいかない。あと二人三脚って相方は誰なんだろうか。

包丁をリズムよく上下させる。

とととと、と小気味のよい音がまな板から響く。

刻んだキャベツをボウルにいれて、つくっておいたドレッシングを軽くふりかけて混ぜる。

夕食を作りながらも、僕の意識は今にいる姉さんに向かっていった。

姉さんはもって帰ってきた幽霊をクッション替わりにしてリビングでくつろいでいる。どうやら座り心地はいいらしい。涼莉は姉さんに近づきたいようだが、幽霊の存在にきょどきょどしていた。たまにこっちを見るのは助けろってことなんだろうけど……うーん。

サラダの仕上げにレモンを絞った。

「姉さん。ごはんだよ」

「わあい。ありがとう空、愛してるよ」

「だったらたまには姉さんが用意してくれてもいいじゃない。僕よ

りもずっと上手なんだし」

「おねーちゃんは空の手作りのご飯が食べたいんだよ」

うん、いい笑顔。

こんな笑顔で断言されたらとてもじゃないけれど反論できない。特に現状不満があるわけでもなし。料理は手間だけれどそれだけに楽しみや甲斐というものもあるわけで。

だったら、たまに出てくる姉さんのおいしい料理を楽しみに待つ、位の気持ちでいたほうがこころの健康にもよさそうだ。

まあぶっちゃけ、姉さんを制御できる気がこれっぽっちもしないって言うだけの話なんだよね。

涼莉のご飯を器に用意する。幽霊を気にしながらもやってきた涼莉は、行儀よくその場にちょこんと座った。

幽霊は相変わらず（○△○）な表情でころんと床の上に転がっていた。姉さんに押しつぶされて息も絶え絶え——っていやいや息していないでしょ君。まあいいか。

それでは。

「「いただきます」」

二人の声と、にゃあ、という涼莉の声が綺麗に揃った。

「それで姉さん、あの白っこいの、一体どこで拾ったの？」

「うん。あのね、学校の帰り道に、こう」

と、手をふよふゆらゆらとゆらして。

「ぷかぷかしてたから、たたき落として」

「随分乱暴だね！」

「柔らかそうだったから」

「まるで理由になっていない……」

相変わらずの自由な発想に戦慄を覚えるね。

「で、そのままにしておくのも可哀想だったからもって帰っていたんだけど、途中で少し小腹が空いたのね」

「うん、加害者が何いってんのって感じだよ」

「でも夕食も近いし何か買うのも……って思ってたなら、ちょうどいいものが目の前にあるじゃない」

「いやあ、そこでそれを食べるって発想は出てこないかなあ僕なら」「まあまあ。それで食べてみたらふわふわして甘くておいしいから、ああそうかましゅまろだーって」

「とりあえず味と食感以前に考慮すべき情報はあるとおもうんだけど、無視なんだね姉さん」

床の上の幽霊を見る。思い出しているのか、プルプルと震えている。まあ確かに食感はやさそうだけど。

そんな事を考えていると邪念を感じ取ったのか、はっとした様子の幽霊と目があった。

(○△○)

いやそんなじつと見られても。

ていうかこれ今更だけど幽霊だよ。幽霊でいいんだよ。全体的なフォルムが『ねないこだれだ』の例のアレをふくらませた感じで手ははんぺんみたいな三角形で頭に三角巾が付いているっていう、まあ幽霊というか『おばけ』って感じなんだけど。

……さすがにこのタイプの幽霊は初めて見たなあ。

食べる人はもっと見たことがないけど。

夕食はつつがなく終わり、後片付けは姉さんに任せて僕はお風呂に入る。

こちらをじーっとみる幽霊の視線が気にならないでもなかったけれど、まあなにか悪さをするようにも見えないし。

「ふひー」

今日一日の疲れがお湯に溶けていくみたいな感覚。

当面問題はないとしても、あの幽霊、これからどうしよう。ていうか姉さんをどうしよう。

まさかと思うけれど、全部食べつくしたりしないよね……いや、するかも。気をつけてあげよう。

あと、ペット許可のマンションだけでも飼う場合は管理会社に連絡が必要なんだけど、ええと、幽霊ってペットになるのか？ あ、だめだ電話の向こうでくすりと幻聴が聞こえた。まあどこか汚すってこともないだろうし、いいか……。

「ていうかもー、またなんで変なモノを拾ってくるかなあ」

癖だとはいえ。

趣味だとはいえ。

まあ姉さんにとっては醍醐味なんだろうけれど。

姉さんはよく物といわず者といわず、よく拾ってくる。未来人異

世界人超能力者は見たのでそろそろ宇宙人でも拾ってくるんじゃないかと密かに考えている。実際拾ってきたらどうしよう。

でまあ、なにかしらごちゃごちゃやったりやらなかったりしてどこかに言ったりその辺に居着いたりとまあ色々あるわけで。

今回もおんなじパターンになるのかどうか、今からやや気が重かったりするのです。

「とはいえ、姉さんの事だからそうそう大げさな事にはならないと思うけどね」

キャラの強さの割に街を巻き込んだ大騒動、みたいなことにはならないのが不思議だ。何か変なパワーでも発してるんじゃないだろうか。

のぼせる前に風呂をでる。

パジャマに着替えてリビングに戻った僕を待っていたのは。

「——っ！　——っ！——っ！！！」

「ふにゃー！　にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃー！！」

「ほーら涼莉、慌てないの」

抑えつけられてじたばたする幽霊と、爪を立ててそれに喰らいつく涼莉。そして押さえつけている張本人、姉さんだった。

「大丈夫だよ涼莉。まだまだいっぱいあるし勝手に元に戻るからね。たんとお食べ」

「にゃー。にゃー」

姉さんの言葉で落ち着く涼莉。やはり母親と慕う相手の言うことはよく聞くようだ。
ていうかね。

「あのー、姉さん。何事？」

「あ、空。うん、涼莉がましゅまろを警戒しているみたいだったから、仲良くさせようと思って」

「仲良く……」

完全に自然界の捕食関係が出来上がっているように見えるのは気のせいだろうか。

「というか猫にそんなもの食べさせて平気なの？」

いや。

それを言うなら人間が幽霊を食べるってのもどうなんだろう。

とりあえず幽霊を引き剥がした。

あんだけびったんばったん暴れられたらさすがに哀れだ。

ついで言うとな下の階でラップ音とかポルターガイストとか起きていたら嫌だし。

どうもこのマンション、一般人以外の入居者に侵食されつつあるからね。貴重な一般人を追いつ出すようなマネはしたくないのだ。

「とりあえず、姉さん。涼莉にあまり変なモノを与えないで。太ったりしたらどうするのさ」

「え？ 大丈夫だよ。だってそのコカロリーゼロだもん」

まさかのカロリーオフ宣言。

いや確かに幽霊だからそうなるのかも知れないけど。

「ええと、姉さん？ これ、なに？」

ぐい、クッションみたいな白い幽霊を引き寄せる。うわあ何この

手触り。すごい気持ちいいんだけど。

思わず強く握ってしまった。

幽霊がぎよっとしてこっちを見るけど気にしないようにしよう。

今はこの手触りに集中するのが先だ。

「何って、ましゅまろじゃない」

「うん、そうだよ。じゃあ姉さん聞くけど、マシユマロって洋菓子で、そりゃあもう砂糖が当然のように使われてい」

「え？」

「え？」

姉さんがきょとんと首を傾げる。仕草と表情の組み合わせが実に可愛い。

「空、何を言ってるの？ このコはましゅまろだよ？」

「え、うんだからマシユマロだよ。お菓子の」

そんな僕の言葉に。

姉さんは口を押さえて肩を震わせて笑う。

「あはは、やだなあ空。お菓子のマシユマロはこんなにちっこい白い物だよ？ そのましゅまろは、大きくて動いて空を飛ぶじゃない」

「—————」

まさかの『ましゅまろ』固有名詞宣言！

ああそういえば姉さん涼莉の事も『猫』じゃなくて『ねこ』ってよく分からない分類してたっけ！！

「ああ、うん……なんとなくわかったよ……」

何を言っても無駄だっということが。

「……まあとにかく、このコも嫌がっていることだから」

そう言って幽霊を持ち上げる。

そして気づいたけど、一回り小さくなっていた。結構食べたね、涼莉……。

むによん。

幽霊の手応えは弾力的かつサラツとしており、実に心地良い。

……。

えい。

むちり、と。

ちよびつとだけ噛み付いてみた。

甘くておいしかった。

その後。

幽霊は『ましゅまろ』と名付けられて、うちに住み着いた。住み着いたというか、姉さんが囲い込んだというか。軽く監禁である。そしてそれに伴い、我が家には新たにルールが設けられることとなった。

『ましゅまろは一日に三口まで』

さて少し後日談。

僕は自室で正座をしている。

ちなみに僕の部屋は洋間でフローリングなので、正座をするとき
よつと痛い。

なぜ僕がそんな事をしているかといえば。

「なんで食べるかな」

「いえ……」

つい。

ふわふわと宙に浮かぶましゅまろ。喋れたらしい。

しかし声はなんというかこうドスが効いているというか、スケバ
ンというかレディースというか。とにかくそんな感じで。怖かった。

人間、衝動にまかせるとろくなことにはならないね。

反省。

僕と姉さんと迷子の子猫（前書き）

思ったよりも長くなりました。

僕と姉さんと迷子の子猫

夏になっていの一番に思い出すのは、涼莉との出会いになるだろう。

そんな事を言ったら姉さんは『ええ？　じゃあお姉ちゃんとの思い出は？』と不満たらたらだったのだけれど、現在進行形で濃密な想い出を大量生産されている以上思い出す必要性を特に感じない。

とはいえ、僕と涼莉との出会いも元々は姉さんが引き合わせたものだ。さらに言えば、この出会いは涼莉にとっても僕にとっても余録のような物に過ぎなかった。

そう。

出会いなんて大層なものでもないのだ。こうして続く日々に比べて見せたら。

夏休みはまだ遠くて、雨の香りの強く残る六月末の日曜日。

しとしと薄いカーテンのように降り注ぐ雨の街中を、折りたたみ傘を広げて小走りに駆けていた。

ただしひとりではない。そして一緒にいるのは姉さんでもない。残念なことに。

「ほら夕陽急がないと間に合わなくなるよ。まあその場合は置いて行くけどさ」

「おいおい幼なじみ、そいつあ酷いんじゃないのか？　仮にも俺達は親友同士じゃねえか——おいこらなぜ足を速める」

「え？ いや別に、なんか気持ち悪い雑音が聞こえてね」

「おいおい大丈夫かよ。お前の身に何かあったら大変だからな。何かあったらすぐに俺に言えよ？」

「あはは。夕陽は馬鹿だなあ」

夕陽はなぜそんな事を言われているのかまるで分かっていない様子だった。まあ察しの良い夕陽は夕陽じゃない別の何かなんだけど。

ということで僕と夕陽は幼なじみだ。大変遺憾ながら。そして夕陽は姉さんを尊敬している。尊敬というか崇拜している。信仰している。そして症状は年々重症化の一途を辿っている。病状が進行している。

身長は中学三年生にして既に百七十後半に突入し、成長は止まる気配を見せない。そしてスポーツマンを思わせるしなやかな体と爽やかな笑顔。清潔感を感じさせる髪型。

やれやれ。本来なら彼女の五人や六人いてもおかしくない顔と性格だっというのに。そして刺されればいい。

さて。

なぜ僕が日曜日という貴重な時間をこうして夕陽と共に消費しているのかといえば、それにはもちろん理由がある。それ相応の、相応の理由が。

「空。昨日から涼莉がいないの。夜までに探してきてね」

自室のベッドでヘッドフォンで音楽を聞いていたら、いきなりそれが抜き取られて、そんなことを言われた。

目を開けて飛び込んできたのは、こちらを覗き込むようにして
みている姉さんの笑顔。

「……ええと」

顔、近っ！

「どうしたの、空？」

「いやちよっといきなりで驚いてさ。涼莉、帰ってきてないんだ？」

「そうなの。昨日の朝からだから、もう丸一日。さすがに心配にな
ってきたから、探してきてほしいの」

「うーん、姉さんの言いたいことは分かるけれど……」

しかし、涼莉は猫——『ねこ』である。

猫一匹を街中から探し出すというのはそうそう簡単なものでもな
いのではないだろうか。

闇雲に探したところで見つかるとは思えない。そんな特別なスキ
ルを身につけた記憶もないわけで。

「それはなかなか難しいよ、姉さん」

「そだね。でもお願い」

「—————」

うわぁい、超強引。

第一、昨日から雨が降っていて外出する気にもならないのだ。ど
うにかして説得しないと、本当にこのままじゃあ外に押し出されて
しまう。

ひとまず体をベッドから起こして、姉さんに向き合った。

向き合ったら部屋の惨状——というか部屋の扉の惨状が目に入っ
た。

………うん。

「わかったよ姉さん、とりあえず探してみる」

「ありがとう空！ うーん、お姉ちゃん思いの弟を持ってわたしは

幸せだよ!!」

満面の笑みを浮かべる姉さん。

その後ろには、綺麗に斜めに真つ二つにされた部屋の扉が転がっていた。

まあ、涼莉が心配だからあんな暴挙にでたのだろうことは想像に難くないので責めたりはしない。せめてきちんと直してくれるのなら。

ああちなみに断っておくけれど、何も姉さんは弟ならば姉のために何でもしなければならぬとか、言う事を聞いて当然だとか、そんな風に思っているわけではない。正直、姉さんが探したほうが早いと思うのだけれど、涼莉がどこかに行ってしまったときに探すのが、いつの間にか僕の役割になっていただけの話だ。

多分、一番最初の頃の流れがそのまま来ているんだろう。

で。

さすがに僕一人で雨の中涼莉をさがすのは大変なので、夕陽にも手伝ってもらうことにしたのだ。姉さんが困っているといえは大抵のことは手を貸してくれるので、非常に便——ありがたい事だと思う。

とはいえさすがに夕陽も涼莉の普段の姿を知ってる訳ではないし、知っていたら知っていたで色々と問題だ。

だからこうして小走りになって、見落としがないようにあちらこちらを見回る羽目になっていた。

制限時間は今日の夜。

正直、見つかるかどうかは難しそうだ。

「なあおい空。やっぱり何かヒントでもないと、こんなの見つけようがないぜ？　そもそも涼莉ちゃんはなんで帰ってきてないんだよ？」

「それがわからないから姉さんが心配しているんだと思うよ」

「そっか。たしかに雨もうつとおしいし、この中涼莉ちゃんが寒さに震えているとなると、さすがにちょっと心配だなあ」

「ああ……そうだね」

そうか。雨か。

だから姉さんは。

「なんかこう、ねえかなあ。捜し物を勝手に見つけてくれたり、何でも願い事を聞いてくれる道具」

「あるよ」

「ま、そうだよな。そんな都合のいい道具があるわけ——あるのかよっ?!」

「夕陽、通りの真ん中でそんな大声出さないでよ、恥ずかしい」

「あ、ああ悪い、すまなかった」

軽く手を上げて苦笑いを浮かべる夕陽。

「……………え？　もしかして謝罪ってそれだけ？　誠意足りなくないい？」

「あれ、俺今そんなに悪いことしたのか……？」

「ほら土下座して謝らないと。生まれてきたことを全世界に向かって」

「はっはっは、相変わらず空は冗談がきついな！　……………冗談だよな？」

「え？」

「まさかのマジ返しだよチキショウ!!」

頭をかかえる夕陽。本当にうるさいなこの男。

「つて、そうじゃなくてだな。あるのか、そんな都合のいい道具が。だったら早速そいつに頼ろうぜ!!」

「あるよ。道具じゃなくて……道具じゃなくて……ええと」
道具じゃなくて。

なんだあれは。

「おいどうしたんだよ。そんな難しい顔をして」

「いや、アレをどう表したものと」

「そんなに難しい物なのか？」

「うん……」

アレの形を想像する。

大きさは変幻自在で小さければ目に見えないサイズから大きいと雲を衝くサイズまで。

ただし重さは変わらず常に僕と同じ。なんか合わせているらしい。色は赤と青と紫と茶色が混ざっているけれど基本となっているのはショッキングピンクとクリーム色。

形も不定形だけれど大抵の場合は綿毛の集まりに機械じみた足がわさわさと生えていて、よく鳥の巣がどこかに出来ている。温かいらしい。

主食は海水とバター。特に無塩バターが好みだとか。

主成分はグルコサミンとプルトニウム。ただし放射能は特にない。どこでも生きられるけれど海に入ると体から黒い小さい同じようなものがいっぱい湧き出してきて面倒くさいらしい。

日本語は通じるけれど主言語はアセンブリ。グリム童話を読んでもらうと別の意味で怖い。

胡散臭い関西弁を使う辺りがまた得体のしれなさをパワーアップさせている。

たまに卵を生む。
空を飛べる。おならで。

「っっていう感じなんだけど」

「なにそれ。ていうかなにそれ?!」

「なにそれって……夕陽の言うところの都合のいい道具」

「願い叶えてもらっても対価で何か大事なモノを奪われそうで怖いよ!」

「まあ、奪われるんじゃないかなあ……」

思わず、夕陽の下半身に視線を向けてしまう。

「――え、何? 嘘、やめろよちよっと! 嫌だよ!」

「いや、僕に言われても。頼ろうって行ったのは君じゃないか」

「そんな得体の知れない存在だと知っていたら頼ろうとか思わねえよ第一俺の童貞を捧げる相手はすでに決めて」

「そこで姉さんの名前を出してみろブチ殺すぞ」

「……………ハイ……………」

優しい僕の言葉になぜか夕陽が真っ青になる。まあいい、いつものことだし。

第一。

「大丈夫だよ。別にアレは君の童貞を奪ったりなんかしない」

「そ、そうなのか……?」

「奪うとしたら処女だよ」

「どっちも嫌だあああ!」

鳥肌を立てて青い顔を白くしてお尻を両手でかばう夕陽は、うん、

実に滑稽だった。

さて。

夕陽で遊んばかりもられない。

雨はだんだんと強くなってきている。いくら涼莉とはいえあまり体にいい天気でもない。

ちなみに、アレに頼るの夕陽が強く反対してきたのでやめにしておいた。まあ、その意見には僕も賛成。アレは別に親切で願い事を叶えてくれるわけでもないのだから、よっぽどでもない限り頼らない方が身のためだ。

そんなわけでまた街をうろうろ見て回っているのだけれど、やはりそう簡単には見つからない。

時刻はもうすぐ十七時。そろそろ姉さんも痺れを切らす頃だろう。

ちょっとまずいな。

どちらかといえは見つからないだろう、と思っていた。それは当然のことで、常識的な考えだろう。

だからこの流れも成り行きも、当然のこと、そのはずだったのに。内心で、涼莉が見つからないことに不安を覚えていた。

涼莉を信じていないわけではないけれど、何か不慮の事態が起きないとも限らない。でなければ、この世の悲劇はもっと数を減らすはずなのだし。

それが涼莉に降りかからないなんて断言できる存在はこの世にはないのだから。

大体。

僕と涼莉の出会い、彼女の悲劇が原因だったじゃないか。

「……うん。そうだね」

「お？ どうした空」

「いや……そろそろいい時間だし、一度帰ろうかと思って」

「っておいおい、本気か？ 今から戻ったら次にもどってきたら暗くなってる探すどころじゃねーぞ」

「うん。だから夕陽とは今日はお別れだね。付きあわせて悪かったね」

「いや……ていうかここまできたら最後まで付き合うぞ？ 俺も気になるからな」

こういうやつなのだ。夕陽は。

とても真っ直ぐで正直で。本当、暑苦しいやつなのだ。

「いや、いいよ。大丈夫」

「………ん、まあ、お前がそういうってんならな。じゃあ、帰るか」

「僕は買い物をしていくから先に帰っててよ。冷蔵庫の中身、だいぶ少なくなってるんだ」

「そうなのか？ じゃあ荷物持ち位ならやるぞ」
うーん。

気のいい奴なのは確かなんだけど、この鈍さにはもう殺意すらわくなあ。この鈍さのせいで何人もの女の心があえなく敗北している事を考えると、いい加減矯正すべきなのかと真剣に思う。

ていうかさ。

「……あのねえ夕陽。僕と君がBLだの何だの言われるのは、君が

そうやってやたらと気を利かせることが原因でもあるんだよ」

「じゃあな空！ 夜道には気を付けろよ！！」

素早い切り替えだった。

素直のいいところ悪いところ両面を笑えるくらいにみられるのはある意味貴重かも知れない。

ちなみに、さっきの噂は本当にある。本当にどうにかしたい。心底。

十九時。

夜だ。

やっぱり涼莉は見つからない。
さすがに少し寒くなってきた。

「ふう」

息が漏れる。

夕陽と別れて二時間ずっと探し続けているけれど、あいも変わらず手がかり一つ見つからない。

猫は見かけるんだけど、ね。

いつの間にか街の中央を外れて、すこし寂れたところへと来ていた。店のシャッターが降りているけれど、それは時間に関係はない。このへんの商店は軒並み店をたたんでいる。

このあたりには用事もなければ友達もいないので、滅多に足を運ばない。運ぶとすれば、それこそ知り合いにみられたくないときくらいだ。

だから予想外だった。
その、唐突な遭遇は。

「にあっ!!」

小さく、鋭い、確かな声。
それは。

「涼莉？」

聞き間違えるはずがない、涼莉の声だ。

走る。ようやくつかんだ手がかりではあるけれど、それ以上に。

——今の声、何かがあったんだ！

ただの鳴き声ではない。切羽詰っていた。あるいは、不慮の事態か。

足に力を込めて走る。一度きりの声では大体の方向しかわからないけれど、こうなればもう自棄だ。虱潰しに当たってやる。

僕は声が聞こえてきたとおぼしき方向への角を曲がり、とにかくあたりを見回す。上も下も右も左も、見逃さない。

そして。

「涼莉っ！」

彼女を見つけた僕は声を張り上げた。

ていうか勝手にでっかくなっちゃった。

いやいやいやいや。ていうか、いやいやいやいやいや!!

「な、何やってんの、涼莉？」

涼莉は、壁に向かっていった。

何の建物だろうか。黒くて、継ぎ目がなくて、なんというか、得体が知れない。高さからして三階建てくらいだろう。

周りには他の建物はなくて、空き地のど真ん中にどーんと建っている。

うん。胡散臭い。

壁は垂直でつるつるしている。そして、涼莉はそれを登ろうとしていた。

とはいえ垂直で掴むところもないとあってはのぼりようがない。それでもすたたと僕の身長の数倍くらいの高さまで駆け上がるのだから野生って恐ろしい。

というか。

「いや本当、何してんの？」

「にゃっ?!」

ようやく僕に気づいたらしく、こちらを向いて愕然とする涼莉。

そんなに驚かなくても。

というか。本当。こんな壁、涼莉なら駆け上がるまでもないだろうに。

涼莉は僕の登場がよほど予想外だったのか、その場で固まってしまった。

そこに。

「にゃ〜」

「うん？」

弱々しい声が降ってきた。
そちらを見上げると。

「なん……だと……」

建物の上には猫がいた。子猫だ。ちりん、と鈴の鳴る音が聞こえたから、首輪をしているんだろう。飼い猫か。

……飼い猫が、なんでこんな訳の分からない建物の上に？

ていうかどうやって登った。とてもじゃないが登る方法はないぞ。見た限り、建物に屋上があるようにも見えない。見た目は長方形のブロックのようだ。

いや、それはどうでもいいか。今重要なのは、この上に子猫がいるということと、涼莉はどうやらあの猫を助けたいらしい。

とはいえ……。

「涼莉。君はあのコを助けたいんだよね？ だったら、どうしてそんな格好をしているの？」

「にゃっ」

僕の疑問に、ぷいっと涼莉は顔を逸らした。どうやら教えてくれるつもりはなく、また方針を変える。

ふむ。

とはいえ、このままでは埒があかない。ただでさえ登りにくい壁は雨のせいでさらに条件が悪いだろう。それに、いくら弱い雨とはいえ、子猫の体力が持たないのではないだろうか。

さりとて僕にどうする力があるわけでもない。夕陽を帰したのは失敗だったか。いやしかし。

そんなことを考えていると、足に触れるものが。

たし、たし。

叩くのは、涼莉だ。

「ええと？」

「にゃっ」

くい、と首で壁を指す。これは……。

「そこに立ってってこと？」

「にゃにゃ」

ふう。

何が何だかよくわからないけれど、とりあえず従おう。

壁際に立つ。傘に半分隠れた視界の向こうに涼莉が見える。上からは、時折ちりん、と鈴の音。

何だこの状況。
と。

「ふうふうう——にゃっ!!」

体をしならせ、涼莉が弾丸のように走る。

その勢いは雨に塗れた泥を僕の身長よりも高く跳ね上げ、振りかかる雨粒を弾くほど。

っておいちよっとその勢いで僕に向かってきて何をする気だっ?!

「ちよちよちよ、涼莉さああああああっ?!!」

泥がひときわ高く跳ね上がる。

涼莉の姿が影を残して消える。

とす、と音と重みが手に返る。

僕のやるべき事は瞬時に理解した。

「涼莉——」

軽く膝を曲げ、つま先に力を込めて。

「飛べえっ!!」

僕は大きくジャンプして、傘を全力で真っ直ぐ上に放り投げた。
見上げる視界に広がる傘の先。その先で、勢い良く飛ぶ硯の姿。
行けるか——いや、行け！！

壁に足をついて、一步、二歩、三歩。そこから先はもうわからない。
駆け上がる涼莉の姿を睨むように目に焼き付けて。

「あだっ?!」

着地に失敗。こける。ってそれどころじゃない！
見上げる。

「あ……」

ちように視線の先では、涼莉も同じように失速していた。あと数
センチ。ほんの少し。

何か、どうにかできないか。いや僕にはそんな力はない。じゃあ
どうする。何も無いのか？ 何か……。

「俺に任せとけよ、親友」

「え……」

いつの間にか。

夕陽が僕の傘を持ってそこに立っていた。

傘から手を離すと、それはふわりと宙に浮いて。

「ポチ、運べ」

風に巻かれて空へと登っていった。傘はふわりと涼莉を受け止め
て、そのまま上へと登っていった。

「……着いて来ていたの？」

「いや？ 一度帰ったぜ？ まあけどやっぱり気になったんでな。
探してたんだ」

「ずいぶんとタイミングがいいねえ」

「ああ、俺もびっくりだ」

夕陽のことだし、嘘を言っているわけでもないんだろう。となると、ほんとうに偶然、このタイミングでやってきた分けか。

いやはや、主人公だね。

涼莉は子猫を傘の上に乗せて降りてきた。

「はい。お疲れ様」

降りてきた傘を受け止める。風の支えが無くなって微妙に重い。ぐらり、と傘が傾いた。

と、子猫が慌てて傘に爪を立てた。

バリバリッ！！

「やめてっ！！」

しかし僕の懇願虚しく傘は爪で穴があいてしまった。あーあーあー……。

降りてきた子猫は涼莉の後ろに隠れる。が、しっぽでたし、と叩かれると驚いたように駆けて逃げていく。が、少し離れたところで振り返って。

「なー」

小さく鳴いてそのまま行ってしまった。

「……よかったの？」

「な」

僕の疑問に涼莉は小さく答えた。

……まあ、いいか。

「さて、と。それじゃあ帰ろうか。姉さんが心配してるよ、涼莉」
涼莉を抱える。雨に塗れた体は冷たかった。

家に帰った僕を迎えた姉さんは一言。

「うん、ギリギリかな」

「そう……………」

アウトだったらどうなっていたんだろう。想像するのも怖い。
とりあえず傘をダメにして雨にぬれていたのも、お風呂に入る事になった。夕陽は今日はこのままうちで夕食を食べるらしい。まあ、役に立ってもらったんだし文句をいう立場にはないだろう。ちっ。

「ふう……………」

湯船に浸かっていると疲労がじんわりとしみ出していくような心地良さがあるね。

そのまま、体の芯まであっためるように肩までお湯に浸かっていると、脱衣所の扉の開く音が聞こえた。

「空ー」

「何、姉さん？」

「涼莉も雨にぬれているから、一緒に入っちゃって」

――は？

――。――。――。

え？

思考が停止している間に、いつの間にか涼莉が浴室に立っていた。

「ね——姉さああああああん?!」

「なあに、空?」

「なにこれいや、どうしたのこれ?!」

「んふふふ。わざわざ涼莉のために用意したんだよ? かわいいでしょ、にあってるでしょー」

聞こえてくる声は自慢げだった。自身満々だった。いや、たしかに似合っているけど、似合い過ぎててちよつとどうしたものかと。

涼莉は水着姿だった。しかもスクール水着だった。胸にはひらがなで「すずり」と名札がついている。マジで専用によいしらしい。

すらりと伸びた手足は細くてしなやかで色は白く健康的。ところどころ小さな傷があるのは、まあ普段から外を出歩いているせいだろう。背丈は耳も合わせて僕よりも多少低いくらい。髪の色は青みがかった灰色で、そこから飛び出す猫の耳も同じ色の毛に覆われている。

その腰の少ししたのあたりからはすらりとしたしっぽが伸びて、ゆらりと揺れた。

女のコ。

ネコ耳姿の女のコが、スク水でそこに立っていた。見た目の年齢は十と少しと見ていいだろう。

「うにゃ」

恥ずかしそうな声が浴室に響いた。

ええと。

まあつまり。

これが、涼莉のもうひとつの姿、ってことになります。ええ。

「はあ」

「にゃー」

とりあえず、揃ってお湯に浸かった。ふたりとも体が冷えていたことは確かだし、特に涼莉の方は昨日からずっとあの壁に挑んでいたらしい。そりゃあ疲れようってものだ。

かといって僕がすぐに外に出れば姉さんがなんて言うかわかったものでもない。

ということでこんな状況。

背中合わせでこうしているとなんとなく落ち着いてくる。

正直なところ、涼莉の姿は心臓にかなり悪かった。なにしろその容姿はどう控えめに言っても美少女と言って過言ではない。その上であんなマニアックな姿をさらされたら、慌てようってものだ。

「そういえば」

「なあにー」

最初は恥ずかしがっていた涼莉も、今はのんびりとしている。少し視線を向ければ、耳がくたりと寝ているのが見える。

「あんなに大変だったのなら、僕らを呼びに戻ってくればよかったじゃないか。いや、そうでなくても、その姿になればすぐに助けられただろうに」

「むー。違うのー。涼莉は、涼莉がそうされたみたいだに涼莉みたい

な子を助けたかったのー」

「……………というと？」

「あの子はとても怖がっていたの。高いところじゃなくて、ひとりなのを。涼莉と同じだったの。だから、助けるためでも涼莉があの場所から居なくなるのはダメだったし、涼莉がこの姿になっちゃったら、それはズルなもの」

「ずるい、かなあ……まあ、涼莉がそう思うのなら、そうなのかもね」

「にゃあ」

ちゃぽん。

今回の後日談というか、ちょっとしたおまけ。

僕は風邪を引いた。

雨に濡れたのと、疲れてろくに髪を乾かさずに寝たのがまずかったらしい。まあ、自業自得である。

で。

「にゃあ」

「あもう、涼莉さん？」

「なあに？」

「どいてくれませんか？ さすがにちょっと重……ってていたたたたたなんでもないなんでもないです！！」

ぎゅう、とほほをつねられた。

ベッドで眠る僕の上に、涼莉が寝ていた。ただしいつもの猫の姿ではなく、青みがかった白いワンピースの姿をまとった少女の姿で。

はあ。

他所の家がどうかは知らないけれど、我が家のパワーバランスは常に女性側に支配されている。つまり僕は最下層というわけである。ましゅまるも声からするにどうやら女性らしいしね。いやはや、肩身は狭くなるばかり、ですよ。

そんなことを考えていると、涼莉が僕の瞳を覗き込むようしして見ていた。

「ええと、何か？」

「うにゃ。あのね、空」

ぴこぴこと耳が動いて、ぱたぱたとしっぱが振れている。なんだろう。

「心配、した？」

「え？」

「だから、涼莉が帰って来なくて。ママみたいに心配した？」

「ああ……」

どうだろう。

考える。

「いや。涼莉ならきつと大丈夫だって信じてたからね」

「むー」

ぷくつと頬をふくらませた。心配して欲しかったのだろうか。とはいえ、素直に答えるのはなんとなく気恥ずかしかった。

だから。

「でも……」

「にゃ？」

ほんの少しだけ、素直に答えよう。

「見つけたときは、ほっとした」

「にへへ。にゃ」

本格的な夏の前。

暖かな日差しに包まれて、僕は眠った。

僕と姉さんとまっくろシスター

古着や読み込んだ小説、マンガ、ライトノベルなどをダンボールに詰めていく。

本日七月の第一土曜日はフリーマーケットで、僕ら姉弟も参加することになっているのだ。

開催場所は一周五キロのランニングコースもある大きな公園。コースはぐると公園を大きく一周する形になっていて、そのなかは遊歩道やちょっとした遊具、噴水まである芝生の広場になっている。フリーマーケットとして利用されるのはその広場だ。

ちなみに。

僕は現代の中学三年生らしく、適度に自堕落だと自覚している。なのでこういうイベントには何か理由でもない限りは参加しないのが常だ。

だから僕がなぜフリーマーケットに参加することになったのかといえど、それには当然理由がある。

「そろそろ要らない物をどうにか整理したいねー。と思ったので、フリーマーケットに参加することになりました」

「え？」

二日前。夕食時。

姉さんの突然な言葉に、僕は味噌汁をかきこむ手を止めた。

前兆も脈絡もないのはいつものことなのだけれども、それでも驚くことは驚く。

「ほら。今度の土曜日、公園であるでしょ？ それにお店を出すのよ」

「ふうん。まあいいんじゃないかな。正直、父さんが送ってくるガラクタの置き場所もなくなってきたことだしね」

父さんは考古学者を自称しているけれど、なんというか、あのひとを考古学者と呼ぶのは全世界の同業のひとに非常に申し訳ない気持ちになる。なので僕は弄古学者と呼んでいる。弄繰り回す学者様。世界中を自由気儘に駆け回る父さんは、その先々で目にしたためずらしい物を、これでもかとうちに送りつけてくるのだ。さすがに勝手に捨てることもできずに、父さんの部屋に積み上げているけれどそれもそろそろ限界。

不用品は整理しても問題ないだろう。前回帰ってきた時以前のもので放置されている物ならば、処分しても特に問題はないはずだ。そろそろあの部屋もガス抜きをしないと、また変なモノが湧いて出てきかねない。

「じゃあ空、お願いね」

「え？」

「じゅーんーびー」

「……え？」

いや。そんな机をぱしぱし叩かないで。

言いたいことは理解していたけれども、そこで素直に納得してしまつたら負けだろう。

姉さんも僕の意図を見抜いたのか、ぷくつと口をふくらませた。姉さんの場合そうやってむくれても可愛らしさが幾何級数的に増大するだけなのでこちらとしてはむしろ得なのである。

とはいえ姉さんを甘やかしてばかりもいられないので、さすがに

断固とした態度をとらなくてはならない。

あと、土日はのんびり寝たい。

「もう、空ってば、何が不満なの？　こんなにおねーちゃんをお願いしているのに」

「いや……だって父さんの部屋だよ？　さすがに僕の手には負えないよ。あんな危険な場所」

「そんな危険な場所をお姉ちゃんに掃除させようっていうの。ひどいよ、空」

「……その危険度を増大させたのは、僕の記憶が正しければ姉さんだったと思うんだけど」

あやしいアイテムのあれこれをシツチャカメツチャカかき混ぜて異空間を生んだのは記憶に新しい。最近は近所の銭湯の煙突の上に住んでいる何でも願いを叶えてくれるアレも、その異界の扉の向こうからやって来たのだ。掃除中に間違って未来の殺戮兵器を呼び出してしまったときは本当に肝が冷えた。

そういった非常事態——非常識事態に対応できるのは我が家でも姉さんくらいのもものなだけど。

「じゃあ、当日はお弁当を作ってあげるから！　ふたりで食べよう！」

「む」

姉さんお手製のお弁当か。うう、確かにそれは食べたい。とても食べたい。

いやしかしそれで命を賭ける？　いやいや、僕だって命は惜しいのだし。

「空あ……」

「——ああもう、わかった。わかりました。僕が荷物をまとめます」

しかたない。姉さんの料理を初夏の陽射しの下で食べられることは確かなかなか貴重な体験だ。諦めて軍門に下るとしよう。

念の為に断っておくけれど。決して涙目で上目遣いになった姉さんの表情に押されたわけではない。決して。

なぜか涼莉がじとつと、ましゅまろも（。㐤。）な表情で見ていたけれど、理由はよくわからない。

姉さんの不用品は小さなダンボールにひとつ分。僕のはそれより少し多い。

そして父さんの部屋から出土した不用品はダンボール三つ分。

詰め込んでいる間に銀河が三つくらい新しく誕生してしまったのはご愛嬌といったところか。いやはや肝が冷えた。

さて。荷物をまとめたのはいいけれど、こうして見てみると問題が。

「これ、どうやって持って行こう……」

量、重さ、共にそれなりの量になった事に頭をかかえるほかないと、悩んでいると携帯が鳴った。この着信音は姉さんだ。

ちなみに、姉さんは軽い荷物を持って先に出ている。

「もしもし。どうしたの、姉さん？」

『うん、荷物の方はどうかなって気になって』

「それが、結構な量になって頭を抱えていたところ。さすがに今から往復していたら時間がなくなっちゃうし」

そもそも会場までコレを運ぶのが相当な重労働ではなからうか。はて。もしかして僕、ものすごく面倒なことになっていないか。しかし、そんな僕の考えを姉さんは見抜いていたかのようなだった。

『やっぱりねー。そう思って、お迎えをお願いしたわ。マンションの一階まで全部運んじゃって。すぐに付くはずだから』

それじゃあねー。

と言って、姉さんは電話を切った。

はて。迎えとは誰のことだろうか。さすがにここで人外魔境をよこすようなことはしないだろうと思いつつ、どんな人外魔境も姉さんにとってはちよつと変わった特技を持ったひと、という扱いになることを思い出した。

ここで魔王様とか呼ばれてもちよつとなあ……。

二年前にひっそりと世界はピンチになっていたんだけれど、まあ姉さんとの脱衣麻雀でプライドをズタズタに引き裂かれて、現在は半ひきこもりの生活を送っている。

基本的に頼みごとなら大抵のことはイヤイヤながらも聞いてくれる気さくな人だ。

まあ、とりあえず運べばいいか。いちいちかけ直すのも手間だし。そう結論づけて、僕は荷物を外に運び始めた。

「いやあ、まさかシスターだったとは思いませんでした」

「そうですか？ 空君は勘違いしているようですけれど、私と翼ちゃんとは別に仲が悪いというわけではないんですよー？

お困りとあらば手を差し伸べます。それが神の望むことですから」
「本当に感謝しています。けどねシスター、運転中にアクセルべた踏みで両手を離して目をとじてお祈りするのやめてくれないからほら死ぬもう死ぬそのカーブで僕死ぬよ!!」

猛スピードでカーブに突っ込んだワゴンはしかし、目をカッと見開いたシスターの鮮やかなドリフトによって甲高い音とタイヤの跡を残しながらそれを乗り切った。

「……え？」

「いや、今明らかに命の危険が迫っていましたから。なかった事にしようとしなくてください」

「またまたー。私が空君の命を危険に晒すワケがないじゃないですかー」

いや。

まあ運転の腕は信用していますけれども。

僕が今乗っているのは黒塗りのワゴン車。ところどころに宗教チックな飾り物が転がっているのは、まあ持ち主がそういう人物だからである。

シスター。

マリジョア・エスカナリーオ。

年齢国籍不詳のシスターで、この地区にある唯一の教会に住んでいる。見た目だと二十代半ば以降って感じなんだけれど、質問すると例外なく記憶喪失になるのはどういう事なのだろうか。

同じ協会に住んでいる神父さんとは仲がいいのか悪いのか、よく追いかけてっこをする姿が商店街で目撃されている。この細腕なのに人間サイズの巨大な十字架を持って全力でダッシュしているのだから、人間見た目によらないと思う。その十字架も中々変わった見た目をしていて、十字の交差点にドクロの形の取ってがあったり普段は布で包んで革のベルトで持ち運んでいたりと、なんというか――

血の匂いしかない。

白い肌と蜂蜜色の髪が神父さんの返り血に染まった姿は恐ろしさと美しさを備えていると地区でも評判だ。

さて。

そんなシスターの運転する車が、僕を迎えに来てくれたのである。姉さんが連絡をとったらしいのだけれど、僕の記憶が正しければふたりは連絡先を交換することを心底嫌がっていたはずだ。一体どうしたのだろうか。

「驚きましたよ。番号を見て空君から電話がかかってきたやったーと思ったら、翼ちゃんだったんですからー。私の電話相手に番号偽装とは中々やってくれますねー」

ちなみに先ほどからシスターの呼んでいる『翼』というのは、姉さんの名前だ。今まで出てこなかったのは単に機会がなかっただけで、伏線でもなんでもないのである。

「ははは、姉さんですから何をやっても驚きませんね。あととりあえず殺気を押さえてくださいシスター。体感で気温が三度くらい下がりましたよ。ついで言うとおんたなぜ俺の電話番号を知っている」

僕は貴女に電話番号を教えたつもりは毛頭ない。誰がそんな命知らずな真似をするか。

「嫌ですねぇ空君。個人情報なんてちょっと工夫すれば簡単に手に入るものですよ?」

「笑顔ですごいこと言った!」

「? お金と暴力で大抵のことは解決できるんですよ? 知らないんですか?」

「そんな常識を説くように言われましても……」

「それに、空君、気づいていますか？ 今私たちは車の中にふたりきり。いくら車のドアが簡単に開くとはいえ、この速度では外に飛び出すなんてことは不可能。……うふふ、密室も同然ですね！」
「なぜ今このタイミングでそんな不穏な事を言った！！」

シスターは。

服装以上に、中身が黒い。

無論彼女に僕をどうしようという考えなど全くない。あるはずがない。あつてはならない。ないはずである。ないと思う。ない……と、いいと、思うんだけれど。

そんな感じで。

会場につくまでひたすらに、僕は彼女のおもちゃ扱いだった。

いやほんと、抵抗しないと何されるかわかんないからさ、この人。

並べた商品は、なんというかこう。うん。

「これ、売れたら売れたでなんかやだね」

「姉さんそれ思っていたけど言わないようにしていたのに……」

僕らのスペースは異様な空気を漂わせていた。

サイズ的には手のひらに収まるものから十五センチほどの大きさのものまで色々。材質も木や革や石やよくわからない何かまで色々。色も、黒や茶色や白、半透明から発光するものまで色々。

色々な置物がずらりと並んでいた。

父さんが送りつけてきた謎物品たちである。

いくつか勝手に空の向こうに飛んでいこうとするものは、紐をつけて別の置物を重石がわりにしておさえている。

なんかぼーぼーと毛が生えてくる石の像は、定期的に火で炙って毛を焼き払っている。

そんな細かなフォローが必要な空間になっていた。

「これ売れなかった場合粗大ごみとして回収してくれないかな」

「その場合、焼却炉で新種の生命体が生まれそうだけど」

なんでうちにはこんな得体のしれないものが眠っているのだから。

や、原因は明らかに父さんなんだけども。

まあ。

売れたら喜ぶ程度で。

それ以外にも、服とか本とかふつうのものもおいているわけだし。うん。

というわけで、僕らは並んだ。

「しかし姉さん、もっと早くに話をくれたら良かったのに」

「やーやー。おねーちゃんもいきなりな話だったんだよ」

「うん？」

妙だな。

このフリーマーケットは規模が大きいこともあって参加希望者もそれなりに多くて倍率も高めだ。

当然、飛び入り参加なんて出来るわけもなく、抽選をぐり抜ける必要があるはずなんだけれど。

「……またなにかしたの？」

「ちょっと空？ あなたはどういう目でお姉ちゃんを見ているんですか。ちゃあんと、応募しましたとも。ええ。落選したけどね」

「おい」

「まあまあ。まあまあまあ。話はコレで終わりじゃないんだよ。実はゆうちゃんも応募していたらしいんだよ」

「へえ、そうなんだ。珍しい」

ちなみにこのゆうちゃんとは夕陽の事である。夕陽はそろそろその呼び方を卒業して欲しいらしいが聞き入れては貰っていない。

「でもなんだかゆうちゃん、急に用事が入ったとかでねー。だから、参加券を代わりにもらったの」

「なるほど。大体の理由はわかったよ」

しかし夕陽に用事か。なんだかそれはそれで、厄介ごとの気配がするのは気のせいかな。気のせいってことにしておこう。

そうこうしているうちに、商品が売れていく。

まず売れたのは、姉さんのお古のワンピースと帽子。次に、僕の小説コレクションがいくつか。

そして。

「わあー、あはは、おかーさんおかーさん、これ、おもしろーい」

「え、ええ……そう、ね……？」

幼稚園くらいの女の子が、謎の置物に興味を示していた。それを見るお母さんの顔はひきつっている。ていうか、ちょっと泣きそうだ。

まあ、理由はわかる。だって置物の顔が、じっとお母さんの方を見ているのだ。どれだけいじっても、ねじっても、咆哮を変えても

上下を逆さまにしても。じつと。

ただ、それ以外の部分としては確かに子どもの遊び道具になりそうだった。何しろバラバラにしてはめ込みなおすというパズル要素があるのだ。知育にももってこいだろう。

顔がじつと見つめてこなければ。

「おかーさん、これ欲しいー」

「え、あ、うん……」

お子様は無邪気におねだりしているけれど、まあ、うん、僕としてはお母さんの気持ちはとても理解できる。だってあいつ父さんの部屋で作業しているあいだじゅうずっとこっち見てるんだもん。たまに光るし。

「うーん、じゃあ、ちょっとそれ、貸してくれるかな」

見かねた姉さんが手を差し伸べた。

置物を受け取った姉さんはこちらに背を向けて、なにやらそれはいじり始め。

「おぼこげぎよらあっ?!」

野太い奇声。

視線が集まった。

そんな事はどこ吹く風と姉さんが振り返って、きよんとする女の子に置物を差し出した。

「はい。もう大丈夫だよ」

「んう？ おー。おー？ おー！ あはははー！ おかーさん、これおもしろいよー！」

置物が。

なぜか、伸びる、という特性を獲得していた。代わりに、顔がじつと見る事はなくなっていた。

お値段、三百五十円となりました。

置物は存外売れた。

何か問題がある場合は、姉さんがよくわからない処置を施した。何をしているのかは見せてくれないけどその度に謎の絶叫たまに喘ぎ声が聞こえてくるのは正直どうかと。全部男臭い声だし。

そんなこんなで、恐ろしいことに商品もほとんど無くなって時間もそろそろ終了時刻が近づいてきた頃。

「あらあら。おふたりとも、ここにいましたか」

「あ、シスター。今日はありがとうございました」

「うふふ。いいですよ、私と空君の仲じゃないですかあ」

いや。僕とあんたは特別な配慮をもらえるような特別な関係は何一つないよ。そんな命知らずもとい恐れ多い真似しませんよ。

シスターは僕らのスペースを見回して、うん、とひとつ頷いた。

「前々から思っていたのですが、この街の人たちはなんというか、前のめりですねー」

「それには心底同意しますよ、ええ」

荷物を運んでいるときは『邪気が、邪気が』と騒ぎ立てていたシスターである。この光景は確かに驚愕に値するものだろう。

「翼ちゃんがまた何かしたんですかあ？」

「あははー。やだなあマリイ、そんなあたしがいつも何かしてるみたいな言い方はやめてくださいよー。いや、ほんとにね？」

「うふふふ」

「あはははは」

なぜだろう。

まだ日も高いというのに、全身を寒気が襲うのです。

このふたりが一緒になると何故かこうなるのはもはやどうしようもない事なのか。世界は争いに満ちている。実に嘆かわしいことだ。とか現実逃避していると、シスターがひとつの置物に目をつけた。眼を閉じたオッサンの彫像である。え、なに、こういうのが趣味なのだろうか。

「おやおやー。なんだかこう、すごくこう……邪悪な気配を感じますね。置物としてはまともなのに売れ残っているのはそのせいでしょうかねー」

今まさか置物としてはまともって言ったかこの人。

「なあにマリイ、靈感商法なら他所でやってほしいところなんだけど」

「私のやっていることより貴女のやっていることのほうが数倍靈感商法じみていますよ？ 因果を歪めてまで物売りつけるなんてそ

うそうでできることではありませんから――」

ぐうぐうぐう。

間に挟まれる僕がゴリゴリと音を立てて削られてゆく。

「ま。それはそれ。せっかくです。この置物を――」
「嫌です」

ここでまさかというかむしろ当然のごとく姉さん超即答。シスターが笑顔で固まる。

シスターはやれやれとかぶりを振って、ふ、と息を漏らす。

「ま。それはそれ。せっかくです。この置物を――」
「嫌です」

再チャレンジは二秒で終わった。

二人の間で比喻ではなく火花が散る。きん、きん、と甲高い音が繰り返しているから何かがあぶつかっているんだろう。何かが。その何かは見えないけど。

「だいいちマリィ、そんないかにも物騒な評価を下しているものをどうして欲しがるの？」

「面白いじゃないですか。悪質で、悪辣で、冒瀆的で非道德的。ええ、ええ。そそります」

「ちょっとシスター公の場で年齢制限掛かりそうな発言と顔はやめてくれませんかね」

泣く子が気絶する。

「あらあら、ごめんなさい。というわけで、下さい。そのまま」

「その発言を聞いたらいくら僕でも売りたくなりますよ。ていうかいんですかそんなの教会に置いて」

「いいんじゃないですか別に。それで怒って神様が降臨するなら儲けもんですよー。信者も増えてガッポガッポです」

だから。

そういう黒い話題はなるべく聞きたくないんですけど。

「荷物を運の手伝ったじゃないですかー」

む、それを言われると弱いな。

「またまたそんな事言ってー。あたしは別に手伝って、なんて言っています。ただ単に空が困ってるって言っただけだもの。あなたが親切にしてくれたことは感謝するけれど、あなたの下心からの行動に謝意を示す必要は感じ無いわ」

「うふふ、そう言われると困っちゃいますねえ」

いや。

ていうかさ。

「なんか今のやり取りで壊れたよ、置物」

「「え？」」

いつの間にか――。

彫像は頭からまっぶたつに割れてしまっていた。おっさんの目から赤い液体が溢れているのはひとまず無視しておくとして。

どうやら、ふたりの放つオーラに耐え切れなかったらしい。まあ、気持ちにはよく分かる。僕の心臓もそろそろ限界だった。

結局。

そんなモノを貰っても仕方がないと、結局、シスターはそのまま帰ってしまった。

なんとも締まらないオチだね、まったく。

今回のおまけというか、挿話。

「じゃーん！ どうですか、おねーちゃんのお弁当は！」

「お、おおお……さすが姉さん、見た目からしてレベルが高い……！」

「最近空も随分腕を上げているからねー。ここらでひとつ、おねーちゃんの威厳を魅せつけてみようかと」

「ううん、僕も最近はできるようになったと思ってたんだけど、どうやらまだまだだったみたいだね」

「ふっふっふ。これがおねーちゃんの力なのだ。てことで、食べよ

うか」

「うん、そうだね。それじゃあいいただきます」

「いただきます」

「……うん、おいしいね、このぶり大根。味がしつかりしみてる」

「でしようでしょう。こっちの煮っころがしも上手に出来てるよ」

「本当だ。こりやすい」

「それと、唐揚げにも隠し味があるんだよ。食べて食べて、はい、

あーん」

「あーん。ん……本当だ、いつもより濃い目の味付けなのにサツパ
リした感じがする。さすがだね、姉さん」

「えへへー。もっと褒めてー」

「うん、すごいすごい」

「てへへへへ。あ、空玉子焼き食べさせて」

「うん。コレも美味しそうだね。はい、あーん」

「あーん」

「僕も食べよう……うわ本当に美味しいなコレ。僕が作るのとなぜ
コレほどまでに差が……」

「へへへーん、精進しなさい、空」

「まったく姉さんには頭があらがないよ」

「えへへへへへ」

「あははははは」

後々聞いた話になるんだけど、どうもあのフリーマーケットの
日、やたら甘々なスペースがひとつあったとか何とか。

僕がぐるっと見た範囲では見かけなかったから、それ以外の場所
だったのかな。

何にせよ、TPOはわきまえるべきだろうにねえ。やれやれであ

る。

僕と姉さんとまっくろシスター（後書き）

シスターの十字架は当然、暴力神父のアレ。

僕と姉さんと青い吸血鬼（前書き）

もつと。もつとはっちゃけたい。

僕と姉さんと青い吸血鬼

「おいーっす」

「ういーっす」

家に帰ると、リビングには酒を飲んでいる金髪美人がいた。

向かいには姉さんが座っていて、ちよっとお高めのフルーツジュースを飲んでいる。

ふむ。

「なんじゃこりゃあ……」

さすがにご近所迷惑を考えて大声は出せなかったけれども、僕の気持ちは大体そんな感じだった。

金髪美人は暗い青色のマントと帽子の姿だった。室内なので帽子はさすがに外しているけれど。

腰を床に落としているせいで長いさらさらとした金髪が床に広がっている。

にやにやと笑っているけれどそれが嫌味を感じさせない雰囲気がある。

年の頃は姉さんと同じか少し上、といった所だろうか。身長は僕よりわずかに低いくらいか。女性としては、高い部類に入るだろう。向けられる瞳の色は、真紅。この瞳を持つ存在に、僕は以前も会ったことがある。

「ええと、姉さん。こちらの人は？」

「おかえり、空。この人はリア。ちょっと知り合った縁でねー、ご飯をご馳走しようと思って」

「紹介に預かったリアだよ。よろしく、少年」

金髪の彼女――リアは、ハスキーボイスで手をひらひらと振った。

「リア。このコはあたしの弟の空だよ」

「一目見て分かったよ。確かにこの上なくあんたの弟さね」

勝手に紹介が終わってしまった。

僕はどうすればいいんだ。

「ていうことで空、晩ご飯はひとり分多めにお願いね」

「ってこの流れなら姉さんが作るんじゃないの?!」

「ううん。空の料理が美味しいって話をしてたんだから、空が作らないと」

「何その理不尽な話の流れ……っ!!」

本人の意志が何一つ介在していない……。いやまあやることはいつも通りだから何も問題はないんだけどさ。心情的な問題というかこう。

仕方なく僕は制服から部屋着に着替えた。そんな僕の後ろを涼莉とましゅまろがそれぞれすたすたところとついてくる。

ていうかましゅまろ。お前は、飛べ。浮けるんだから。最近めつきり横着を覚えたなこいつ。

「ふたりとも何でついてきて……って、ああ……そうか。

大丈夫だよ涼莉。さすがに姉さんが呼び込んだんだから、例え吸

血鬼と言っても何かされることはないって……たぶんね」

「にあっ?!」

何しろ僕とて初対面でまともに言葉を交わしていないわけで。さらにいうなら、姉さんには無害で僕らに有害でない可能性がどこにあるだろうか。逆のパターンだっていくつもあったけれど、姉さんはその辺、自分で処理していた。

僕らは？ ムリムリムリ。例えばこの中で物理攻撃力が一番高いのはおそらく涼莉だろうけど、それにしたって吸血鬼なんていうのは存在のグレードが違う。

まったく、気苦労が次から次へと出てくるのはもう運命と割り切るしかないのかなあ。

そんな事を考えながら着替えを終えてリビングへと戻った僕らを待ち受けていたのは。

「お……おいすー……う」

「いやああああ！ なんかいきなり死にそうなんだけどー?!」

顔を真っ青にして机に頭をのせてぴくぴくと痙攣しながらも、にこやかな笑顔を浮かべ（ようとして大失敗し）たリアさんだった。

「え、何、なんでいきなりそんな大ダメージを」

急いで駆け寄った僕の鼻に強烈な匂い。

ふと見ると、今朝作っておいた濃厚ガーリックトーストが転がっていた。

いや。

その。

「何故食べたそしてなぜ与えた姉さんっ?!」

「いやー、なんか小腹が空いちゃったから。苦手だって言ってたんだけど、まさかそこまで苦手だったなんて」

いや。これは苦手ってレベルじゃない。そして嫌だと言っている人に無理やり食べさせちゃダメ。

「あたしも無理に勧めてはないよ? 最初は食べてなかったんだけど、一口だけでもって」

えー。

「……なにしてるんですか、あなたは」
「いうか大丈夫なのか。」

「いやあ、その子があまりにも美味しそうに食べるもんだからねえ……。まあ、ちょっとだけ、ほんのちよつとなら、いけるかなーって思っただけどやっぱ無理だったわー」

「なにちよつとした好奇心に命かけてるんですか……」

リアさんはまだ若干ぴくぴくしていたけれど、それでも起き上がった——ってめちゃくちゃ顔色悪っ! 半死人だよこれ!

「ははは、不死者の代表である存在を捕まえて半死人とはなかなか面白い表現だ」

「心を読むなよ」

リアさんはけたけたと笑った。

「ま、心配しなくてもいいよ。それでも体は丈夫だからね」

「いやまあ丈夫は丈夫なんでしょうけども」

人間とは比較にならないほどに。だからといって弱点を当たり前のように食べて大ダメージを受けるのはどうなのかと。

「ふむ。私が信用ならないかな? まかせときなって、こんなもんもう一口食べたって——おげばあっ!!」

「だからあんたは一体なんなんだ!!」

止めるまもなくガーリクtoastを大きく噛みちぎり、そのまま泡を吹いて倒れる金髪美人の吸血鬼。

姉さんは何が面白いのかお腹を抱えて笑っていた。

いや、あなたが連れてきた客が今まさに大変な事になってるんだから笑ってる場合じゃないって。

まあ結局そうそう簡単に死なないのが吸血鬼らしく。

ちよっとお手洗いに言って聞くに耐えない声が聞こえて、しばらくして戻ってきた彼女はずいぶんとすっきりとした顔になっていた。いやまあ、うん。なんだろう。色々と悲しい。

「ふう……いやあ、ま、ご飯を食べる前に余計なもんを吐き出してきたと思えば、」

「それ以上何もいわないで、お願いしますから!!」

美人からそんな言葉聞きたくない!!

すでにキッチンに入っている僕としては結構切実な願いでもある。やる気に影響するとか、僕の食欲がつくる料理に影響するのは致し方がないので。

調理しているだけでも暇なので、僕はリビングの二人の会話を聞いている。

「さてさて。それで翼。あなたは吸血鬼なんて信じない、ということだったっけ」

「そだよ。だって、いたら怖いじゃない、吸血鬼」

「ま、そりゃあそうかもね。人間じゃあどうやって吸血鬼みたいな非常識な存在には敵いっこないわけだし」

「え? いやいやそうじゃなくって」

「違うの?」

「違うよーやだなーリア。だって物語の中の吸血鬼はたいいてい村の人達に倒されたりするじゃない。だから勝てないってことはないと思うよ?」

「ふうん、まあ、そういう考え方もあるかもね。それでも結局、一対一だとよっぽどのことでもないと思てないと思うけど」

「あー、まあ、一対一だったらすすがにねー」
ねー、涼莉ー。

と言って、涼莉を抱く姉さん。涼莉のしっぽが揺れる。

己とある意味近しい非常識な存在を抱く姉さんを、リアさんはな
んというか絶妙に納得の行かないといった表情をしていた。

「翼は、吸血鬼のどんところが怖いっていうの?」

「印象、かなあ」

「印象?」

「うん、ほら吸血鬼ってなんかさ」

姉さんはにこやかに。

「でっかい蚊みたいじゃない」

正真正銘吸血鬼相手に一番言っちゃいけないこと言っちゃった。

包丁の音と。

涼莉の鳴き声と。

マシユマロの動きが。

ぴたりと、止まった。

くつくつと、スープが煮えたぎる音とテレビのバラエティのや
ましい笑い声だけが部屋に満ちる。

氷河期をもたらした張本人は、きょんとした顔で正面に座る吸
血鬼――姉さんの言うところの第一印象『でっかい蚊』を見ていた。
リアさんは耐えていた。よく耐えていると思う。怒りで机に指が

めり込んでいたけれど、まあこれは言ったほうが明らかに悪いのでむしろこちら謝罪したいくらいだ。

一名を除いて凍りついた中、最初に動きを取り戻したのは、当の吸血鬼だった。

「そ、そう。それが理由なんだ」

「そだね。それにコウモリに化けられるってのがちょっとね、うん、まあ汚いよね、衛生的に」

そこか。そこ気にするのか、姉さん。

「あとひきこもりだし。まともな職業付けないよね。まあ体質的な問題なんだけど、うーん、情け無いかなあ」

容赦無いな姉さん。命に関わるんだからいいじゃない。

「ていうか弱点多いよね。にんにくとか十字架とか流れる水とかさー。やられるために生まれてきました、って言わんばかりで笑いを誘うのが救いかも」

目の前の本人がなにひとつ救われてるように見えないよ、姉さん。
「まあそれでもさっきリアが言ったように基礎スペックが高いあたり、なんていうか狙った感じでちよつといやだなー。厨二病っていうんだっけ」

あるいは黒歴史ね。生きているだけで黒歴史扱って僕だったら今すぐ窓ガラス割って飛び出すレベルだよ。

まあ。

部屋を見回せば、そういう存在が涼莉とましゅまろ以外にもいくつか目につく。ていうか一番のチートは姉さんなんだけど。

「まあ総じて、好感度としては台所の黒い悪魔とあんまり変わらないかな」

「ふぐっ！」

人類が下す中でも最低位に位置するであろう評価を付きつけられたリアさんは、胸を押さえて倒れた。小刻みに揺れる肩。泣いてるのかも知れない。知れないけどもはやどうやってフォローすべきな

のか、僕にはわからない。

ただただ心のなかで謝る僕。

そんな僕の内心など知らない姉さんは、首を上げて言った。

「リア、もしかして吸血鬼好きだったの？」

ちやうねん。

食事は普通に進んだ。

ただその。

「ああ姉さん、『きゅう……』

「ぎろ」

「……り」は、こっちの漬物と、合わせて食べてくださいな……」
約一名の心に深い傷を残したらしい。

リアさんは駅前のホテルに泊まっているということなので僕が途中まで送って行くことになった。

『女のコの一人歩きはあぶないでしょー。空、ちゃんと送ってくるんだよ』

必要ないというリアさんに対して、姉さんは強引に僕を送り出した。

「あの子、本当にアタシの事を人間だと思ってるんだね……実は違

うんじゃないかと疑ったけど」

「いや、姉さんの相手の急所をあえて狙うような発言は天然でいつものコトなので、はい」

リアさんは半目で額を抑えていた。

納得いかねーできねー、とつぶやきが聞こえる。うんまあ。

ちらり、と視線がこちらを見る。

なんだろう。

「あんたは、アタシがなんなのかすぐに分かってたみたいだけど」

「僕はそういう事に抵抗ないんで。ていうか涼莉とましゅまろの存在があると認めざるをえないというか。姉さんみたいな強引な解釈はなかなか難しいというか」

「まあ、そうだよねえ。何さ『ねこ』と『ましゅまろ』って。勝手に分類を新しく作るのは良くて幻想上の存在を認めるのはだめなのか」

「ああでも姉さんツチノコ存在は認めてますよ」

「そっちがよくて吸血鬼はダメなんだ……」

判断基準どこだろう。二人で首を傾げる。

とはいえ考えたところで答えが出るわけもなく。

「まあ何にせよあのレベルで完全否定されるとさすがに絶句するね」

「絶句」

「文句でもないよ。笑えるね。いや笑えないけどさ」

すっごいダメージ受けてましたからね。

絶句してた。

「台所の黒い悪魔って。ゴキ……ってさ、いくらなんでも酷いだろ。吸血鬼ってもっとこう、オドロオドロしくて高貴なイメージとか、あるじゃん？　なのになんでそんな、なあ？」

マントが震える。言いたいことはよくわかる。よくわかるけど、見てるところ、もう吸血鬼に見えない。

「まあ姉さんのイメージですから。鬼と聞いて最初に出てくるイメージが『しまパン』ですから」

「やっぱり着眼点に納得いかねー」

天を仰ぐリアさんの髪が、流れてきた風にふわりと浮かび上がる。月明かりをきらきらと弾く美しい波に目を奪われた。

吸血鬼という印象があるからか、月を背負う姿がよく似合う。

「――ていうかさ」

その前髪から覗く瞳。真紅の瞳。

それに射ぬかれて全身の神経が一瞬けいれんを起こす。

え？

何事？

リアさんの纏う空気が、雰囲気が一変する。変化する。変質を起こす。

空気が重く深く質量を持ったかのように肌に絡みつき足が大地に縫いつけられる。

（いや、ていうかさ……）

あかいあかいひかり。

リアさんの瞳から光が漏れている。ひらりひらりと雪のように零れる紅い光。血よりも赤く鮮やかに禍々しく。

「あんたはアタシを吸血鬼だと知っているのに、恐れないよね」

近所の住宅街が異界になってしまったみたいな圧迫感。いや、異界でもこれほどの息苦しさは感じたことはない。

心臓の鼓動が、流れる血液が、やかましく耳の奥で音を立てているのに透き通るようなその声だけははっきりと聞き取れる。

「アタシとしてはそれはそれで驚異を感じるなあ。アタシの事を理解してちゃんと怖がってるのに、なんでそんなに普通なんだろ。

もしかしてアンタ、自分が死なないとか死ぬわけがないとか、そういう風に信じているタイプ？」

「いやまさかそんな風に考えたことはありませんよ。ただ僕は姉さんが連れてきたなら大丈夫かなって思ってただけで」
「ふうん？」

リアさんは三步近づいて、僕の顔を下から覗き込んできた。
赤い瞳の中にひたいに汗をにじませる僕が映る。
というか彼女は一体何が気に入らないのか。

「ええと、リアさん？」

「いや、ねえ。アタシの存在意義としてはああいう扱いは困るっていうかさ。たしかに話していて面白いし興味深い存在だよ、アンタの姉は。ああいう手合いはそうそういない。だから招待されたんだしね。

けど予想外というか想像以上というか、あそこまで認識が強固だとするとそれはそれで脅威ではある。

さて、その原因は、なんだろうね？」

「さあ……僕にはなんとも……」

リアさんはわずかに瞳を閉じて。
指先を僕の鼻先に差し出した。
一体何事だろうか。
と。

「ふ……っ!!」

リアさんがその場を大きく飛び退く。さらに大きく舞い上がり、マントを翻して宙で踊る。

目を凝らすと、彼女の周りに無数の光の線が走っていた。キラキラと光るそれは荒れ狂うマントに弾かれる。

しゅ、と何かが通り過ぎる音がしてそちらを見ると、植木が綺麗に斜めに斬れていた。

どうやら打ち返した線がかすめたらしい。

そこでようやく、僕は彼女を襲っているものの正体に気がついた。

斬撃だ。

鋭く、速い。

やがて攻撃は終わり、ゆっくりとリアさんが降りてくる。

その姿は吸血鬼といよりは、天使といったほうが受け入れられるほどの神々しささえ感じた。

音もなく地に降り立ち、ふう、と息を吐く。頬に走る一筋の赤を拭うと、そこには何も残らない。指に残った血をなめ、ゆっくりとこちらへ向かってきた。

「……今のが、自分が死なないと思う理由？」

「今のは僕も驚いていますよ。たしかにこのへんなら姉さんの射程内ですけど、まさか今日知り合いになった人相手に攻撃をかますとは思いませんでした」

「驚かないのね？」

「驚いてますよ。まさか姉さんに切れないものがあるなんて。すごいですね、そのマント」

僕の発言に、なぜかリアさんは深い溜息を付いた。

「ふう……ふ、くくくく、あはははははっ!!」

そして笑った。

ええと、なんですか、一体？

「いやなに、気にするな。面白い物を見ることができて満足したってだけの話だから」

そう言っただけでリアさんは自分の親指を少し噛み切った。赤い血がぷつぷつと浮き出て、そのままふわりと浮き上がり珠となる。

月光を受けて透き通るそれは空を滑って、僕の胸元へ。

「……えっと？」

「プレゼントだよ。手を出しな」

はあ、と差し出した僕の手には、朱玉が落ちる。

ころり、と手の中に転がったそれはかすかな温かみを持っていた。

「これは、一体？」

「吸血鬼の血。存在の結晶さ。お守りみたいな物だと思っておけばいい。肌身離さず持っているろ、なあんでロマンチックな事は言わない。ただ、危険を身を感じたら懐に入れておきな。確実にあんたを守る。断言してやるよ」

「はあ、それは」

ありがとうございます。

けど、そんな事に巻き込まれないのが一番だと思うんですけどね、僕。

「さ、て。見送りはここで結構だ。これ以上翼に目をつけられたら、

こんどこそ本気で首を取られかねないからね。そいつは全く、痛そうだ」

く、と。

冗談めかして笑う。

「じゃ、アタシはこれで」

青いマントがふわりと舞い、その姿が消える。

何をしたのかはわからないけれど相手は吸血鬼。何をしたところで驚くことはない。

「ふう」

ため息をついて、送られたプレゼントを手のひらで転がす。

どうせなら厄除祈願でもくれればよかったのに。

そんなことを思ったけれど、それが欲しければもっとふさわしい場所があるか。

ポケットに朱玉を入れて、きた道に戻った。

……とりあえず。

明日からこのへんの道路は全面的に大工事が行われるんだろうな、と、ぱっくりと開いた裂け目を跨ぎながら最後に一着、ため息を漏らした。

おまけというか、締めというか、締まらないというか。

帰った僕を待っていたのはむくれた姉さん。

今日は困惑してばかりなんですけれど、なんですかね、姉さん。

「被告人、空」

「えー、僕何もしないよ？」

「いいえ！ おねーちゃんは見えていました！ まったく、あろうことか送り届けようとした女の口相手に――き、き――キスを迫ろうだなんて！ 破廉恥、鬼畜、淫乱！！！！」

「いやいやいや姉さんそれ凄まじい誤解だよ？！ ていうか何見てたの？ いつも思うんだけど姉さん視力いくつさ」

「とりあえず、一番下のマークまでは判別できるよ」

「それはすごいね……」

「うん。ボードにどんな傷があるかまでバッチリ」

「見えすぎだよ?!」

その視力は野生の国とかで培われるものだと思う。

「とにかく！ ふしだらなことはいけません！ そういう事は、きちんとステップを踏むべきだよ!!」

「わかってる、わかってるから大丈夫だから！」

姉さんがぶんぷんと顔を真赤にして詰め寄る。あ、いい匂い。

「まったくもー。どうにかすんでのところでおねーちゃんが割って入ったからよかったものの、あのままりアの唇を奪ってごらんない――切り落としてるわよ」

「何を?!」

「試す?」

「嫌だよ! 試して大丈夫なのそれ、取り返しつくの?!」

「うーんとねえ、とりあえず再生したとか生え直したって話は、聞いたことがないかなあ」

「いやあああああっ!!」

考えるだに恐ろしい。

や、何を切り落とすかなんてわかんないよ、わかんないんだけどね?

「……ていうか姉さん、それ、おかしくない?」

「うん? 何が?」

「や、だってさ。その姉さんの言い分だと僕じゃなくてリアさんに攻撃するのはどう考えてもおかしいじゃない」

「というか、アレは異常な場の雰囲気に関われた僕を助けるためだと思っただけ。それにしても容赦がなさ過ぎたが。」

「え?」

姉さんがぴたり、と動きを止める。

こめかみに指を当てて、うにーっと体を傾ける。僕も傾く。なんとなく。

「そうだね。おかしいね。あはは、無意識だったみたい」

「無意識……だと……?」

「あははっ、変な話だよねー。そうだよ、今度から気を付けないと」

「その前に斬りつけることをやめようよ、姉さん」

と、いうかですね。

「あの、姉さん」

「なあに？」

「僕が誰かとキスとかしたらどう思う？」

その瞬間。

「————、え？」

姉さんの顔からありとあらゆる表情と感情がこそげ落ちた。
場の空気が変質どころか完全に破壊され、闇に覆われる錯覚を覚える。

一瞬で喉が干上がって、膝が笑い、立っているので精一杯。
こ、これは……一体？！

「……空」

「は、はいっ」

なぜか敬語になった。
だって。なんか怖い。

「おねえちゃん、あんまりそういう冗談、すぎじゃないかなあ」

「え、あ、うん、ごめんね！」

「で、も」

姉さんが僕の首に手を回す。自然と僕の体は前かがみになる。姉さんの顔が視界いっぱい広がる。

僕とどこか似ていて、柔らかくて、違っていて、幼い顔。甘い香

り。頭がくらくらする。

「もしも空にそんな相手ができたら、きちんと、隠さずに、教えるんだよ?」

わかったね?

そう言って、足取り軽く姉さんは髪を揺らしながら自室へともどっていった。

姉さんが去ってしばらくたって、ようやく呼吸を止めていることに気づいた。

「ふはっ! はあ、はあ、はあ……」

酸素を急いで取り込む。

ああ。

怖かった。

でもまあ綺麗だったから納得だと思っておこう、うん。

「それにしても、あんな質問にあれだけ反応するとは……ううん、弟離れを指摘したほうがいいのかなあ」

「……空」

考える僕に、声。

そちらを見ると、猫の姿から人間の少女の姿へといつの間にかシフトしていた涼莉が立っていた。

「あれ、珍しいね涼莉。どうしたの?」

涼莉は特に用事がない限りはこの姿をとることはない。

「うん。ちょっと今のやり取りを聞いてて、空に聞きたいことがで

きたの」

「ふむ」

なんだろうか。とりあえず聞いてみることにする。

「その……空は、もし、ママが誰かと付き合ってて、きす……とかしてたら、どう思う？」

「————、え？」

「ひうつ?!」

唐突な質問にちよつと虚を突かれてしまったけれどまあ確かに姉さんもそろそろ年頃と考えてみたらそういった相手がいなくても限らないのではないだろうかそう考えてみるとさっきの質問もなかなか意味深に感じてしまうしかして姉さんにそういった相手がいるような雰囲気は今までに感じたことがないやいやまてまてそれは本題ではないかあくまで涼莉は喻え話としていただけで本当にそういう相手がいるとはヒトコトも言っていないじゃないかだからそうこれは例えだたとえの話だ。

うん。

「……涼莉」

「にゃ、にゃあっ?!」

ぴくーんと耳と尻尾が伸びる。はて、どうして涼莉はそんなに緊張しているんだろうか。

「そうだね、まあ、そういう相手がいるのなら、僕としても気にしないわけにはいかないかな。何しろ姉さんは唯一の姉弟なんだしね」

「そ、そうね、気になるのね！」
「で、も」

考える。考えて考えて。

「もし姉さんにそんな相手ができたら、きちんと、見定めて、考えないかね？」

「そ、そうね、考えないとね！！」

緊張しっぱなしの涼莉に苦笑して、僕は自室に戻った。

「怖かったの……空もママ離れしないとだめなの……人のこと言える立場じゃないの……にやあ。ていうか空、考えてなにをするの。何をするつもりなの」

何か涼莉がつぶやいていたけれど、小さくて聞き取れなかった。

僕と姉さんと青い吸血鬼（後書き）

まあ、個人的には妹萌え派なんですけれども

僕と子猫と二人の幼なじみ（前書き）

方針上仕方がないこととはいえ、増え続ける登場人物どうしよう

僕と子猫と二人の幼なじみ

僕には幼なじみが二人いる。

ひとりは、夕陽。同じ年の男。

そしてもう一人は、綺月。ひとつ年下の女のコ。

僕と彼と彼女の付き合いは、かれこれ幼稚園時代にまで遡り、その付き合いは長い。

そしてその関係は変わらず続いていて、きっとこれからもずっと変わらないままなのだろう。

七月頭の、夏の入り口の夕方。

夕焼けの空を見ながら、僕はそんなふうに思った。

と、そんな感じのことを口にしたら綺月にものすごい勢いで蹴られた。

まさか地面を三回転半することになるとは。しかも縦に。首が折れなかったのは奇跡というほかない。しかも巫女服で袴姿だというのにその奥を見せるようなサービスは一切なし。完全に蹴られ損だ。

「ふう……ああ、痛かった」

「いや痛かったで住むような転がり方じゃなかったぞ今のは……」

「まあでも結果的には無事だったわけで」

「結果的には、な」

夕陽が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。まあ、心配してくれるだけありがたい。

僕を豪快に蹴り飛ばした本人はというと、自分の仕事に戻ってしまっていた。とはいえ、その手つきは荒い。やれやれ。

僕は天地逆さまの状態の木を背中にしている状態だ。この木がなかったらもう何回転していたことやら。

ひよい、と両手で体を持ち上げて、逆立ち。ゆっくりと足を下ろす。

あたた、ちょっと腰に来てるなこれ。

結構な距離を飛ばされたようで、本殿の階段に座っていたのに社務所の奥の森の入り口まで飛ばされていた。相変わらず素敵な脚力の持ち主だ。

立ち上がって、神社の境内を掃除する綺月へ近寄る。

先程も言ったように彼女は巫女服を着ている。これはコスプレではなく、きちんとその役職を全うするための服装に過ぎない。

彼女の父親がこの神社の神主をしており、彼女はその手伝いをしているというわけだ。

腰まである栗色の髪を頭の後ろで赤い紐でまとめている。背丈は涼莉が人の形をとったときと同じくらいなので、同年代の中でもやや小柄といったところ。

神職としての自覚があるためか動きの一つ一つが洗練されているのが特徴だ。

とはいえ、その中身はあくまで歳相応の女のコ。男には決して理解出来ない感情が渦巻いているわけでした。

「ええと、綺月？ 一体何がそんなに気に触っ」

「あん？」

返ってきたのは鋭い眼光。

「なんでもないです……はい」

「お前、弱」

後ろから着いて来ていた夕陽が僕にだけ聞こえる声でささやいた。

「そう言うのなら夕陽が聞いてきてよ。綺月が怒った原因」

「バカ言え！ 今の綺月に俺が近づいてみる。これ幸いと地面に顔面から埋められるに決まってるじゃねーか！！」

ああ。あったね、そんなことも。

というか、僕よりも不思議だよ、なぜ君が未だに生きているのか。「さて。とはいえ綺月がなぜ怒っているのか、解明できないことは謝ることもできない」

「そうだなあ。あいつ、とりあえず謝ったらメチャクチャ怒るもんな。そりゃあしつかりしてる部分ではあるけどよ、こうなると厄介だよなあ」

「そうだね。その上、怒った事についてヒントもなしだし」

割と理不尽だけれどよくよく考えたら僕の周りにいる女性はほとんど例外なく理不尽な気がする。誰とは言わないけれど姉さんとか姉さんとか。姉さんとか。まあ姉さんは姉さんだからいいとして。

「いずれにせよ、あいつの機嫌をなおさん事にはこの神社を無事にすることもできねえか」

「だねえ。無視して帰るとのちのち怖いし」

女性を怒らせると怖い。そのルールを適用するのに、年下だとか幼なじみだとかは関係ない。むしろ幼なじみだからこそ容赦なく報復されることさえある。けれどちょっとまって欲しい。これは果たして報復と呼ぶべきなのだろうか。むしろ報復するは我にありなのでは。いえ、しませんよ。しませんけどね。別に綺月の持つ能力とか加護が怖いわけではなく。

まあ僕の思考の暴走はさて置いて、彼女の報復は地味に効く。報復は手早かつ的確に、さらに他人を巻き込まないあたり律儀で誠実だ。報復という行為の是非はさて置いて。置いてばかりだな僕。そのうち一時退避メモリがいっぱいになりそうだ。なのでさっさと問題を片付けるとしよう。

「ということだ」

場所を移して本殿の裏。時間と方角の関係で日は当たらないけれど、今日は少し暑めなので過ごしやすい方だ。

表は相変わらず綺月が掃除にならない掃除をしているし、何よりも秒速で駆け抜けるプレッシャーの肥大速度が止まらない。即ち僕らの胸のドキドキも止まらないああどうしてくれようこの胸の高鳴り。

命かかってるおふざけはこれくらいにしよう。綺月の気の高まりに呼応して回りの木々もざわついているし蟬の鳴き声も止まってしまっている。やべえ超ヤベエ。

「綺月が何に怒っているのか、それを突き止めて和解しようと思います」

「そうだな。謝罪するかどうかはまだわかんねえし」

謝罪を強要しないのは美点のはず인데けれど、考えを汲み取ることを強要するくせはいいい加減直して欲しいと思う。チャームポイントといえばそうなので、その部分が完全になくなると寂しい気もするけれど、命は賭けたくない。

「でも正直、僕としては彼女の気に触るようなことを言っただけじゃないんだよね」

「まあ俺もそう思うぜ。けどあいつがいきなり怒るのなんていつもの事じゃねえか。ほら、先週も俺、いきなりポストに頭突っ込まれたしさ」

「あれはどう曲解しても夕陽が悪いよ」

「えー」

えー、じゃねえよ。

好奇心で宝物庫の鍵をいじるとか馬鹿か。小便かけて錆びさせよとか阿呆か。しかもどう頑張っても開かない事を社務所の休憩所でお茶を飲んでいた僕と綺月相手に愚痴をこぼすとかもう言葉もない。

『あんたはせっかくいい雰囲気だったのにそうやってばかみたいな事をばかみたいにこのばかばかばかー!!』

確かにあの日は夕陽が和室を染めていい雰囲気になっていた。それをブチ壊しにされた怒りは僕も大変理解できる。

ちなみに逆上錯乱して結構いい具合に骨格歪めたオブジェを前に涙を浮かべる綺月は、僕の中のサディズムをいたく刺激した。

さてまた置くよー、僕の性癖とかどうでもいいものについてはとにかく遠くへ置いとくよー。

「とにかく、僕の発言の何かが、彼女の中の地雷を踏んづけた事は間違いないんだ。順番に考えていこう」

「ああ、そうだな。だけどな、順番つってもそのステップが少ないあたり俺は既に絶望してるぜ」

夕陽が遠い目をする。そんな表情もキマって見えるのはもはや嫌味かとさえ思ってしまう。

まあとにかく、最初から考えてみよう。

僕ら三人が集合するのに場所もルールも制限はない。時にはハイキングコースの頂上に自由な時間に集合、勝手に解散なんてこともした。

とはいえ、比較的多く使われる場所も当然あって、綺月の家であるここ、通津水城神社はそのひとつでもある。

集まった理由はなんとなくで、学校が終わってそのままの流れでなんとなく集合。綺月はさっさと着替えて家業の手伝いを始め、ふたりでそれを眺めながらなんとなく雑談をしていた。

巫女装束をまとい神社の参道を掃除する綺月は、なんというか、とても絵になる。似合っているというよりはハマっているという言葉で表すべきだろう。彼女が神社という空間に、すぱりと違和感なく一体化しているように感じるのだ。あるいはそれは、彼女を守護する神々がそう魅せているのかもしれない。

それは昔からずっと変わらない。出会った最初の最初から抱き続けた印象だ。ここにいて彼女が『本物』なんだと。

だからだろうか。なんとなく、僕の話題は昔の事、そして今の事へと流れていき、夕陽もそれに付き合っていた。綺月もたまに、僕らの会話に参加した。

そうして、あれである。

長距離の跳躍からのローリングソバット。巫女服でやる動きじゃねえ。さらにいうなら年頃の女の子の行動としても苦言を呈したい。

「会話の流れからして、昔の話が問題だったのかなあ」

「いや、それだったら最初に止めに入ってるだろ。大体、昔の話をしてぶっ飛ばされんならとくに俺たち揃って墓の下じゃね」

「そうだよねえ。昔の話なんて気が向いたら出てくるわけだし。となると、時間軸じゃなくて話の内容か」

「つつてもただの思い出話中心だよな。あとはそろそろ期末が近いこととか。ていうかお前最後何話してたっけ」

「なんで数分前の話題を既に忘れてるの……まあいいけど。ええと、最後は」

『なんていうか、十年以上もこうして変わらないんだから、十年二十年先も僕らずっとここに集まってこうして雑談してるのかもね。ずっと何も変わらずに友達同士のままごげぶはあっ!!』

最後の意味不明の言葉の羅列は無論首にいい蹴りを食らった衝撃によるものである。意味はない。

「……友達同士が否定されてたら、嫌だね……」

「……ああ、俺らなんざ友人という格付けさえつけられないと……俺なんか割と現実味のある話で結構落ち込むぞ」

夕刻なので日が落ち始めているけれどそれ以上に僕らの気分がずーんと落ち始めた。いや、やめよう。こんな暗い話は。

「とりあえずそこが問題だったという可能性は除外しよう」

「ああそうだな俺達の心のためにも」

男ふたりの友情を確かめ合う。うん、ここには何も問題はない。

何一つ。うん。これは確信を持って言えるね。

「じゃあ、何が問題だったのかな」

「十年一緒にーのはただの事実だもんない。となると、十年先二十年先……変わらず……ん？」

夕陽が何かに気づいたように、片方の眉をぴくりと動かした。

まさか。

「答えがわかったの、夕陽?!」

「ああ、理解したぜ! なるほどな、確かにこれは解釈によってはあいつの逆鱗に触れたとも言えるだろうぜ! よし行くぜ空、この場はこの俺が引き受けた!」

「おお、こんなに頼りになる夕陽はきつと前世でもいなかったに違いないよ!」

「ははははは! そんなに褒めるなよてれるじゃねえか」
相変わらず馬鹿だなこいつ。

「よし、待ってろよ綺月! そして空、こいつをさっぱり解決できたら翼さんとデートをさせ」

「埋めようか」

「親友だからな! 無償で当然だ!」

何故か夕陽が涙目に。どうしたんだろうか。

「目がマジだった目がマジだった目がマジだった目がマジだった」
小声でブツブツとなにやらつぶやいているけれど聞き取れなかった。

神社の裏手から表へと回り、綺月の前に立つ。

綺月はちらりとこちらを見たけれど、相変わらず掃除を続ける。続けるけれどそれ集めては散らかしての繰り返しで掃除にならない事にそろそろ気づいたらどうだろうか。

不機嫌オーラを撒き散らす綺月の背中に向かい、夕陽が歩く。

僕は少し離れたところからそれを見守っていた。

赤い陽射しに照らされた境内を、まっすぐに、綺月に向かう。

夕陽。その名前そのままの太陽の光を浴びて、月の名を持つ少女の背中に、両手を組んで両足で大地をしっかりと踏みしめて、仁王立ちの彼は。

「大丈夫だ綺月！ お前の身長も胸もまだまだせいちよおおおおお
おおおおお！……！」

引きずり倒されて襟首を掴まれて自分より頭二つ分以上小さな少女に引きずられて階段から突き落とされた。ちなみに神社の階段は百段以上ある。声は瞬く間に小さくなっていった。

あとに残されたのはより重くなった空気と僕と綺月のふたり。

ええと。

なんて事してくれやがったあの男。絶対に許さんぞ、生きていたらじわじわとなぶり殺しにしてくれる。

意外と余裕あるな僕。いやテンパッているだけか。

「ええとね綺月今のは別にふたりで出した答えとかじゃなくてね」
「空」

なんでしょうか。

「……やっぱり、小さいと、だめなのかなあ」

耳まで赤くしてこちらに背中を向けたまま座り込んだ綺月はそんな事を言った。

「……………」

ええええええええええええ……。

夕陽のヤツはまた随分と扱いの難しい爆弾を置いていってくれたな！ そのまま逝ってしまえばいいのに！

「……だめ？」

「ああいや、えっとね？」

反応のない僕に不安を覚えたのか、ほんの少しだけ顔をこちらにむけてきた。けども。

どうしよう。正解がわかんない。

「だからその、なんていうかなあ」

「……空あ」

「ぐ……」

年下の女の子。それも幼なじみが泣いているというのは色々とうにかしようという気持ちにさせるものがある。とはいえ女の子の慰め方なんて僕にはわからない。男子中学生にそんな事を求められても困るのだ。

けれど何も言わないというわけにもいかない状況。

「べ、別にそんな事気にすることないんじゃないかな。ほら綺月は綺月なんだし、別に無理に大きくならなくてもね？ いや別に大きくならないって言っているわけではなく。別にだめとかいいとかそういうことでもないんじゃないかなー、と」

ああ、なんだろ。

自分でも何言ってるんだかわからなくなってきたんですけど。

あれ？

えっと？

「……空は」

「うん」

「おっきい方が、好きなの？」

……おい。

なぜそこで僕の性癖の話になる。

というか何がだ。身長か、胸か、両方か。

「どうなの？」

涙目と赤い顔のコンボはなかなか破壊力が高い。なにこの可愛い生き物。

整った顔立ちは美人になるだろうと思わせるけれどやはり幼さが先に立ち可愛い印象だ。

なんて現実逃避している場合じゃないよな！。

「ええと……まあ、大きいなら大きいなりに小さいなら小さいなりに？」

なぜ疑問形だ僕。

当然綺月も訝しげ。

しばらく視線をぶつけ合っていたが、やがて綺月は立ち上がる。どこか切羽詰まった表情のまま、まっすぐに僕を見て目の前までやって来た。なぜか両手のひらを胸に当てているけれど理由はわからない。わからないと思ったらわからないのだ。

「ええと、空。それじゃあ、それじゃあね、その、なんていうか」

「う、うん？」

夕陽で瞳まで赤く染まった顔がめのまえに。息のかかるほどの近くに。

「空は、わたしを……」

深い色を宿した瞳に、飲み込まれそうになる。

その瞬間。

僕らはぱっとその場を飛び退いた。僕らが一瞬前まで立っていた

場所に、小さな黒い影が凄まじい勢いで着弾した。

どん、と土煙が上がる。

その土煙が晴れると、そこには。

「出たわね、化猫！」

「じゃあ」

後ろ足で耳の後ろを掻く涼莉がいた。

「……もう何が何だか」

「何のようかしら化猫。あなたにこの場所へ入る許可を与えたつもりなんてないわよ」

辛辣な言葉向けられた涼莉はふん、と荒い鼻息をひとつ吐いて、くるり、とその場で大きく宙へとジャンプ。

「涼莉がどこかへ行くのにあなたの許可なんていらないの、巫女娘」
いつものワンピースをまとった少女の姿へと変じた涼莉が反論した。

「そうね。でもここはわたしの領域だもん。あなたを入れる許可はわたしがだすわ」

「ぷいっ」

「ひ・と・の・は・な・し・を・き・き・な・さ・い！」

「じゃあああっ！！」

猫娘と巫女が取っ組み合いを始めた。

耳を引っ張ったり頬を引っ張ったりしっぱを引っ張ったり袴を引っ張ったり。

まあ。

結構和む。

たまにきわどい高さまでまくり上げられるスカートや袴からはちやんと視線を逸らした。いや、まあその。欲求はあるんですけどあ
とが怖いので。

とりあえず空気がぶち壊れたのは助かった。

なんというかよくわからないけれどあの空気はまずかった。何がどうまずかったのかはよくわからないけれど。

しかしなんというか、このふたりは相も変わらず仲が悪い。顔を合わせるたびにこんな感じだ。そのくせよく顔を合わせるといいうか相手がいるところに顔を出す機会が多い。

僕と涼莉が一緒に出かけていれば綺月とぼったり出会うし、僕と綺月がこうして一緒にいるとどこからともなく涼莉が突っ込んでくる。偶然とは恐ろしいものだ。

「この……いつもいつもいい加減にしなさいよね、この猫娘……！」

「いい加減にするのは巫女娘なの……！ ママの弟に変な虫は近づけにゃん……！」

「こっちはかれこれ十年以上幼なじみやってるのよ……、あなたにどうこう言われる筋合いはないもん！」

「ふ……ただの（・・・）幼なじみは黙っているのね。涼莉は家族として一緒にいるの」

いらっ。

「へえええええ。そうだよねえただの（・・・）家族だもんねええええええ！ どこからどうみても兄妹みたいだもんねえ！」

むかつ。

「このっ」

「くぬっ」

がしいっ。

一体何があのかふたりをあれほど駆り立てるのか。

世の中は不思議でいっぱいだ。

「ちびっ子は家に帰る時間でしょっ」

「むーっ！ あなただって涼莉とそんなに違わないのっ」

「あ、あなたよりはおつきいもん！」

「どこを見てるの？」

「そうよ、別に今はまだ……でもこれから先、もっと大きくなるもん……っ」

「み、巫女娘？」

「……」

二人の動きが止まった。

どうしたのだろうか、と見てみると、いきなり綺月がこつちを振り返って、涙目で。

「空のおっぱいマニアーーーー！！」

うわああああああん……。

叫びを残して社務所の向こうへ消えていく。自宅へ戻ったのだろう。

いや。

ていうか。

[illegible]

なんか不名誉な称号を送りつけられた！

「な、何、どういう変化球?!」

意味が分からない。状況が理解出来ない!　そして涼莉がすごい冷たい目でこっち見てる!!

やめて、そんな目で僕を見ないで!!

「……空」

「涼莉、違う!　なんかよくわからないけれど、途轍もない、途方も無い誤解が生じている可能性がある!　だからその蔑みの瞳をやめて!!」

と言っても涼莉の視線は冷たいまま。

混乱する僕の肩を、だれかがぽん、と叩いた。振り返ると、ボロボロになった夕陽が立っていた。そういえば居たなこいつ。

夕陽はびしっと親指を立てて、きらんと白い歯を輝かせて。

「おっぱい……最っ高おおおおおおおおおお」

僕は突き出した両手を下ろした。

夕陽はもういない。階段の下の方からなにやら声が聞こえるけれどもここからは見えないので正体はわからない。

「……空」

背中から届いた冷たい声に冷たい汗が流れる。

「今日は美味しいご飯が食べたいの」

「あ……うん、がんばります……」

しゅたっ、軽い足を蹴る音がした。

振り返ると僅かな土煙を残して涼莉の姿は消えていた。

この日僕はおっぱいマイスターの称号を得たけれど、返上するのはとても大変だったとだけ言っておく。

夕陽エ……。

おちというか、おまけなの。

「巫女娘、なにしてるの」

「う、猫娘。あなたいい加減に勝手に窓から顔を出すのをヤメなさいはしたない。下から見たらスカートの中丸見えよ」

「涼莉は猫娘だけど涼莉なの。ついでに猫娘じゃなくて猫又なの」

「どっちえも一緒だー。あー、もー。ていうか忠告無視かよー」

「いくら自分の部屋だからってだらしない姿なのね」

「自分の部屋でどんな格好しようが勝手でしょー」

「……空が一緒の時はそんな格好しないのに」

「空は関係ないもん!!」

「涼莉は人の嘘はわからないけど、巫女娘の嘘だけはすぐにわかるの……あなた、嘘がとっても下手なのね」

「分かってることをいちいち指摘しないでよう……ていうか何かようなの?」

「あなたの間違いをただしにきたの」

「間違い?」

「にゃ」

「なに、それ？」

「あなたが何を怒っていたのかはよくわからないけれど、空が何かにこだわるとしたら……そんなの、ママの事に決まってるの」

「……あー、そうねえ。空ってばシスコンだもんねー」

「つまり、にゃ」

「空はおねーちゃんマニアでことだよねー。……ていうか前から思ってたんだけど勝ち目あるのこれ？」

「にゃあ……」

翌日。

よくわからないけれど、綺月はいつもの調子に戻っていた。つい
でにいうと蹴ってごめん、と謝罪もしてきた。

涼莉とは相変わらずの調子だけれど、まあそれも含めていつもの
とおり。

結局よくわからなかったなあ。

僕と子猫と二人の幼なじみ（後書き）

空がどんどん変態になっていっている気がする。

あとこの話だとただの乱暴者ですが、綺月はいい子です。きっと。

僕と姉さんと異界の異界の魔王（前書き）

思ったよりも長くなってしまいました。

こざっぱりとした話が目標なので、精進したいと思います。

僕と姉さんと異界の異界の魔王

ばかり。

と、視界が黒に呑み込まれた。

何を考える暇もない。

ただ、今朝からやけにましゅまろが僕を見ていたのはこれが目的だったかー。と、冷静に納得したただけだった。

で、これかあ。

僕は眼前に広がる大パノラマを前に深い深いため息をついた。
明るい太陽の光溢れる大草原。その中に僕はいつの間にか尻餅をついたようにして座り込んでいた。服装は部屋着だけれど、外出にも耐えうる服装なのが救いといえれば救いかな。

足元にはましゅまろ。青空の下だと真っ白いそのボディも映える映える。ていうか反射が眩しいくらいだ。

真っ青な空の青は深く、緑の広がる大地は地平線まで見渡せる。
ふと右を向けば彼方には山の稜線が。左を見れば彼方に海の青がみえた。

もう一度空を見る。大きな大きな鳥が、僕に影を落とした。いやでか過ぎだろ。あれ僕を余裕でひと飲みできるサイズがあるぞ絶対。さて。

覚悟を決めて、後ろを振り返る。

「うわあ」

武装集団、及び、いかにもファンタジー世界な宗教っぽい服を着た人々がいた。

武装集団は軽装の鎧に洋剣を手を持った人たちが前に立ち、後ろには全身を鎧で覆った重武装の人たちがいる。という事は、その奥にはその上の人がいるのだろう。

宗教っぽい人たちは全身を厚手のローブで覆っており、ローブには幾何学模様が刺繍してある。淡い光を放っている事から、この世界にも常識の埒外力が存在しているのだろうと推測する。

やれやれ、僕も随分と慣れたものだね。

初めてこういった手合いに出会ったときは取り乱してそれこそ――大変なことになったものだ。

さて。

懸命な読者のみなさんなら、僕がどんな状況に追いやられたのか感づいた頃ではないだろうか。

そう。

いわゆる、異世界トリップとか言うやつだ。

最初に異世界に放り出されたのはもう五年も前になるだろうか。

邪悪な悪魔によって滅ぼされかけている世界を救う救世主として召喚された僕は、召喚した人たちから逃げまわること一週間、いつの間にか悪魔が討伐されるまで異世界を彷徨っていた。

姉さんが見つめてくれなかったら僕は一生あの世界で生きることになっていたのかも知れない。まあとある村で良くしてもらったのでそれはそれでありかもしれないけれど、さすがに姉さんを放ってはおけない。

……ちなみにその日の晩ご飯は見たことも食べたこともない不思議

議なお肉だった。よく食べたな僕。

それからというものの、その異世界には暇なときに顔を出しているし、それ以外の異世界にも突発的に喚び出されたり踏み行ってしまうといった事があった。

おかげでこういった事態に多少の耐性がついてしまっているのだ。自慢できることではない。

さて。

めのまえに現れた人たちが、状況からして僕を召喚した人と考えてよいだろう。

なぜましゅまろに食べられて異世界にやって来てしまうのかはわからないけれど。

ていうか食べられたはずなのに一緒にましゅまろもいるという事に疑問を禁じえない。けれど考えたところで答えなんか出ると思えないしなあ、このおぼけ。

僕をここへ寄越したのがましゅまろの意志なのかそうでないのか気になる所だけれど、まずは殺気立っている集団をどうにかするべきだろうね。

「さて、言葉は通じるのかな？　もしもし、みなさん、こんにちは「っ?!」

なるべくハッピーな、明るい笑顔で挨拶をしたら相手が引いた。なぜだ。

ふむ。

「クッククク、どうやら僕を召喚したのは君たちのようだね……」

ザザッ！ と草を踏んで兵士の方々が距離を詰めてきた。

「あちゃー方向性違ったかー」

ましゅまろ、そのどうしようもないものを見るような目をやめなさい。ていうか最初にキレた時から喋らないね君。

ふむ。

「ましゅまろ君が何を考えて僕をここへ寄越したのかなんてわからないけれど、僕としては彼らのためにも事を荒立てたくないんだ。どうにかならないかな？」

「……しゃーないな、もー」

喋った。

シャベツタアアアアアアアア！

「何驚いてんの。ほら、乗りな」

ふわり、とましゅまろの体が地面から離れた瞬間僕は突き出された剣をかわして、それに飛び乗った。なんとも表現し難く、心地良い包まれる感覚とともに僕の体はましゅまろにめり込み、僕らは一気にそらへと飛び上がった。そこにあって然るべき衝撃も反動もない。まるで映像を早送りで見るとような勢いで空へと登る。ぴたり、と止まったそこは地上の音の届かない、風の鳴き声だけの世界だ。

……あとすぐそこを小さなビル程のサイズの鳥が飛んでるんだけど。案の定でかい。でかすぎる。

「ふう……ありがとう、ましゅまろ」

「別にいいけどさあ……あんたなんでいきなり相手を威嚇するような真似するわけ？」

「いやあ相手が求めるリアクションがわからなかったからさ。普通に挨拶したら引かれたから、じゃあ別の方向性かと」

「あんたら姉弟は……」

なぜか呆れるような声だった。

試行錯誤するのは良いことだと思うのだけれど。

「ところで僕の記憶が正しければ、僕は君に食べられてこの世界に
来たような気がするんだよね。一体どうして？」

「ああ、昨日書斎にあったまんじゅう食べてからお腹の調子が悪く
てさ、それでなぜかあんたを食べたら大丈夫だって思ってたんだよ。
それで」

「このおぼけは……」

書斎ってつまり父さんの部屋だよね。あの部屋にあるものを口に
するとか核弾頭を食べるのと同レベルで危険だよ。

「まあ、そのまんじゅうが何故か異世界をつなぐキーアイテムだっ
たんだろうね。で、たまたま彼らが召喚の儀式を始めたせいで、僕
がこうして喚び出されたと」

どうにも運命というか流れというか、そういう物の強制っていう
のは強烈らしく、結構強引な手段を取ってくる。夕陽や綺月も聞い
た限りだとなかなかエキサイティングな体験をしているようだ。

……あのふたりみたいな特別な技能も能力も持っていない僕がな
ぜそんな強制力に引き寄せられるのかは謎だけれど。姉さんと間違
ってるのではなからうか。

「じゃあ、君に聞いても元の世界に帰れるかはわからないか」

「だね。ていうかあんた、慣れてるね対応」

「初めてじゃないからね。そういうましゅまろも慌てた様子はない
ね」

「ふわふわしてるとねえ、割といろんな目にあうのさ」

それはふらふらしているからじゃないのか。いや、ふわふわして

るのも間違いじゃないんだろうけど。あと最近はふわふわもせずにごろごろしてるよね。

「……なんかさっきから悪意のある思考をかんじるな。落とそうかクソガキ」

「やめてよね。君に何かされたら僕に勝ち目なんかないんだから」
「胸をはるなよ男の子」

事実だしなあ。

さて。

どうしたものか。

といっても。

「まあ下の人達に聞くしかないよね実際。僕らじゃどうしようもないし」

ま、事態を解決する——というか勝手に解決されてしまうだけなら待っていればどうにかはなるんだろうけど、さすがに何もせず、というのは格好悪い。

「てことでましゅまろ、悪いんだけど、声が届く程度の高さまで降りてもらえるかな」

「はいはい、人使いの荒いことで」

すいーっと滑るようにましゅまろが降りてゆく。結構な速度だ。

そして相変わらずあるべき現象はなにひとつない。落下の浮遊感も、風圧も。どうも、ただのおぼけというわけでもないようだ。

そうして、十メートルほどの上空で静止する。下の方々は僕らに気づいた様子で、じっとこちらを見ていた。

ざっと見回して——ああいたいた。重武装の兵士に囲まれた、明らかに身なりの整った人物。壮年の男性と僕と同年代位の男女。父親とその子供たち、といったところかな。

その人達に向かって、声をかけた。

「ええと……僕の言葉、通じるのかな？ 聞こえますか？」

「——ああ、聞こえている。言葉も通じている」

「そう、よかった」

ほっと胸をなで下ろす。正直言葉さえも通じない世界というのはいくらでもあった。どうにも世界がご都合主義的パワーを発揮してくれる場合とそうでない場合があって、前者の場合は言葉がまるつきり通じない。それどころか見た目完全にでかい昆虫の種族と意思の疎通を迫られたりもする。

あ……心の傷が痛い。

「僕を——僕らをこの世界へと喚んだのは、あなたたちということ
でよいでしょうか？」

「う——む、その通りだ。我々は目的をもって、その目的に必要な
存在を召喚した」

男性の声は深く、威厳を感じさせる。遠くはなれているというの
に、重いプレッシャーが僕の手のひらに汗をにじませたほどだ。

そして男性がいうにはなるほど。どうやらここまではテンプレ通
り、特にひねりも突飛でもない展開らしい。

「その目的とは？」

「うむ……実は数年前、この世界の占師たちがとある未来を見た。

それは、この世界に恐ろしいほどの力を持った魔王が訪れると。そ
の魔王は場合によってはこの世界を滅ぼしてしまう、と。

我々は一致団結した。十年以上続いていた戦争を止め、すべての
力をこの対処のために集結した。そうせねば全てが滅ぶとわかって
いたからだ。

そうして我ら人類、全ての力と知力を結集してなんとか期日にギ
リギリ間に合い、喚び出したのが——」

「―――僕、ねえ」

さて。

「思ったより事態が重いんだけどどうしようコレ」

「あたしに相談すんなっての。召喚されたのはあんただ、あんたが決めな」

おっと冷たいですよこのおばけ。相変わらずのレディースとか総長といった感じ。

まあ騙しても仕方はないし、素直に言うしかないだろう。

「と言っても、僕には何の力もないですよ。こっちのましゅまろはともかく」

おいこらあたしを巻き込むな。との抗議はひとまず無視させていただこう。

「そうは思わん。私も伊達に一国の王をしてきたわけではない。少年、君には何か可能性があるかと、そう感じる」

あはははあのおっさん人を見る目ねえな。うるさいよちょっと。

「はあ……と言っても、僕には何のメリットもないんですけれど。強制的に喚び出されてるんですよ、僕」

しかも身内に食われるというとてもねえ召喚方法。絵的にも結構ショッキング。

「うむ……見事驚異を払ってもらった暁には世界人類をあげて君の功績を讃え、可能なかぎりの望みを叶えさせてもらう」

うわぁ。下からの声と僕の心の声がそろった。

「それ、僕帰れないってことじゃないですか？」

「……………」

無言かよ。いやまあなんとなくそんな気はしてたけどね。ギリギリ間に合ったってそういう事でしょつまり。

やれやれと溜息をつく僕に対して、隣に立っていた女の子が一步步前に出た。いかにも温室育ちといった風だが可憐さだけではなく芯

の強さを感じさせるダークグリーンの瞳。王様との血のつながりを感じさせる。

「あ、あなたにとっては不満な事でしょう！　けれど、私たちにはもはや選択肢はなかったのです！　認めて欲しいとも納得して欲しいとも言いません！　ただ、理解はして頂けないでしょうか！」
あらあら真っ直ぐねえ可愛らしいじゃないの。君が言う和不穏だななんだか。

「どうかお願いします！　望みとあらば、わ、わ、私の身を差し出しましょう」

「いや別にそれは微塵も興味ないし必要もないし欲しいとも思わない」

「へあっ?!」

涙目で顔を真赤にして必至に訴える少女にさすがに哀れみを感じた僕は、そんなつもりはないときっぱりと否定してあげた。ここで僕が躊躇いを見せれば、後々の禍根になるかも知れないからね。

案の定、僕の言葉に彼女はぽかんと口を開けて呆けてしまっている。うんうん、僕は別に君に運命を強制しようなどというつもりはないのだから、自由で良いのだ。

「うん、今日も僕はいい選択をしたね」

アホだなこいつ。なぜかましゅまろに罵倒された。

ていうか約一名を除く下の人達全員の視線がぐんと下がった気がする。

なぜだ。

「ふ——む、なあ君。それはつまり、俺の妹は君の興味の対象にはならないと？　身内最親になるかも知れないが、妹はなかなか器量良しだと思うのだね。中身はまあこれから色々学ぶ必要はあると思うが」

「に、兄様！　何を!!」

苦笑する彼は、少女の隣に立っていた男性だ。こちらは、僕より

少々年上に見える。あるいは姉さんよりも年上かも知れない。

「いやあそりゃあ同意しますけどね。正直死人の目も醒めるくらいの美人だと思いますよ」

「ふへっ?!」

「……驚き方が独特であるとも思いますけどね」

さておき。

「まあ正直——あなたたちに僕を元の世界へ帰す力があるうとなかろうと。あるいはその気があるうとなかろうと、僕は元の世界へ帰るつもりですからねー。こちらで因縁を残すのは趣味でもないです」

「ほう……君は自力で世界を越えられるというのか?」

「いーえまさか。さっきも言ったように僕には何の力もないんですよ。まあそれはささいな事です。ところで」

あまり突っ込まれても答えにくい話なので、話題を変える。

男性も僕の意図を読んでくれたようでそれを遮りも止めもしなかった。

「その魔王っていうのはいつごろ、どこに出てくるかは分かってるんですか?」

僕のその言葉にさっと空気が変わる。冷たく思い、覚悟の定まった者のそれだ。それを、この場にいた全員が纏った。

嫌な予感が腹の底から湧き上がる。

ちよつと、もしかして。

「勘が良いな、我々の希望よ。そうだ。魔王が現れるのは——今日、今、この時だ」

ぐん、と空気が重みを増す。

空がグニヤリと歪み、色が滲み出す。深く暗い赤と青のマーブル模様。ウルトラマンのオープニングみたいにぐるぐるうずうず歪んでいく。

「ふうん、空、落ちる前に下ろすよ」

「このままどこかへ逃げたいところだけど、そうもいかないか」

命は惜しいけれど、彼らを見捨てるのは最悪に格好悪い。

姉さんの弟である以上、多少格好つけないと格好がつかないというものだ。

「さて。姉さんの弟として恥ずかしくないようにしないとね」

「……あんたって」

なぜかましゅまろに可哀想なものを見るような目をされた。なん
でさ。

そうこうしているうちに空はより深く混じり合っていた。降り注
ぐ光も心なしに粘性を帯びている気がする。

ふむ。

なんていうか。

「怖い、異界の少年」

「これ怖くない人は頭の中が最初から怖い人ですよ」

「ははは、愉快だな君は」

近寄ってきたのは青年だった。止めようとする周りを片手を上げて
制止し、ひとりで歩み寄ってくる。

なんていうか。

まさしく物語の王子様、といった印象を受ける。一度見てしまえば
目をそらすことも難しいオーラ。カリスマという言葉が具現化し
たかのようだ。

それは一つ一つの洗練され整った仕草、穏やかで力強い声、相手
を捉えて放さない瞳。そういった要素のひとつひとつを意図的かつ
無意識的に統合し総合的な要素として発揮しているからだろう。

「我々は君に期待しているのかな？」

「ご自由に。応えるのは僕の自由ですから」

「違う」

「にしても納得が行きました」

「うん？」

僕がここにいるのに。

ここにるのが、彼らだけだということが。

「異世界からやってくる破壊。おそらくそれに対抗出来るであろう戦力。それを出迎えるのに――手に入れられるチャンスなのに、明らかにひとつの勢力しかないのは、これが理由なんですね」

青年は小さく笑った。否定がないということは肯定なのだろう。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。彼らはそれを実践した。

なら、多少は応えてみたくなるのが人情というものだ。そこまで見越した上だったとしても、それはそれで、爽快だ。

「さ、て。ええと――」

ちよつとあたりを見回す。

「あっちか。行こうか、ましゅまろ」

「はいはい、と」

じゃあ、と王子様と別れる。

ふたりつれたって歩く。

他の人達にはわからないらしいけれど、なんとなく僕にはわかったしましゅまろにも判るらしく。

そこに魔王が現れると確信出来る場所へ向かって歩き出した。

「勝算はあるのかい？」

「僕が頼りにしてるのは君なんだけどね。なんとも言うけど、僕には何の力もないから」

「けど喚ばれたのはあんただろうに」

「うん。それはもしかしたら君という存在をこちらへつれてくるための鍵として、かもしれない」

「はあ、なんでさ？」

「うん。だってさ」

なぜかすこし、笑ってしまった。

「ましゅまろがこの世界に来たのは、僕を追いかけてきてくれたん

だよね」

「―――――気づいていたのかい」

「なんとなく、そんな気がしてただけだよ」

確信はなかったけれど。なんとなく、信じていた。だって。

「家族だからね」

自分のせいで家族が危険にさらされたのなら。どうにかしようって、僕なら思う。

ましゅまろにそれを期待するのは、迷惑かもしれないけれど。

「ふん。おめでたいヤツさまったく」

ましゅまろは、笑った。

まあ、顔はいつものあれだけでも。

「けど悪いね。あたしだってこんなのどうにか出来るとは思えないさ。天を作り替えて世界を滅ぼそうってヤツだ。いくらなんでもねえ」

「ふむう。そうか。となると……」

僕が考えをまとめ始めたところで、ずるりと水っぽいものを引きずるような音が響いた。

空間全体を包み込むように全方位から。あるいは、引きずるものの中に僕らがいるかのような。

腐臭が漂い始める。呼吸するだけで胃袋がひっくり返り吐き気をもよおす。鼻を押さえて口で呼吸をするけれど、今度は舌が痺れ始める。どんだけきつついんだこの空気。

やがてそれは目を刺激し始める。涙が浮かび、視界がゆがむ。

空気が肌を刺し、じりじりと静電気のような刺激が全身を撫でる。

「――近い」

「ああ。来るね」

鼻を抑えているためちゃんと声を出せない僕に対してましゅまろはいつも通り。おぼけには関係ないだろうけどずるいなおい。

視線が地上三メートル程度の高さの一点に集約する。

そこに得体の知れない力が集中している。

永遠の彼方。

絶対の至近。

彼岸の此方。

不定の断絶。

歪む全ての中央にあるがゆえに揺らぎのないその一点。

そこに、いる。そこから、来る。

さて。

それでは。

「お引き取り願おうか」

僕は。

「ましゅまろ、口を開いて」

「ええ？ まあいけど、さあ」

ぐばあ、と開けば、そこは絵の具で塗りつぶしたかのようなのっぺりとした黒で覆われていて。

手を、突っ込む。

イメージする。

まあ、順序立てて考えれば判ることなのだ。

僕には力がない。

ましゅまろにはきつと力はあるけれど、今めのまえに迫った脅威に抗する事はできないという。

それでもこの世界が望み、僕の世界が答えたのなら、僕がここへ

来た意味はあるのだろう。

それはさっきも言ったように、ましゅまろをこの世界へとつれてくること。

けれどやっぱりそれは正解だけれども、結論ではない。

ましゅまろ。

僕はその口に呑み込まれてこの世界へやって来た。

この口は、僕の世界のものをこの世界へとよびこむ境界線になっている。

とはいえその逆の働きをするかどうかは未知数なので僕が飛び込んでも元の世界へ辿りつけるかどうかは分からないし、今はそれを考えている場合ではない。

重要なのは僕の世界のものをこの世界へよびこむことができるということ。世界の強制力というヤツが働いているのなら僕を返しはしないだろうが、僕の意志を汲みとってくれるくらいのことはするだろう。

そう。

力がないのだから力があるものをよびだせばいい。

認めてもらえずとも納得してもらえずとも理解はしてもらおう。だって選択肢はないからね。

僕が呼ぶ存在。

姉さん——ではない。

これはゼロを一万に砕いてその時間の中で相手を叩き潰さなければならぬ精密作業だ。相手が僅かに顔を出した瞬間この世界は壊滅的な打撃を受ける。そんな相手だ。

姉さんにできないとは思わなければ、現実とは言えない。

綺月はこういった荒事に付き合わせたくはない。夕陽はパワーはあっても速さで劣る。

涼莉はスピードはあってもパワーがない。

当然だ。前ふたりは人間だし涼莉もまだまだ幼いのだから。だから無粋に無遠慮に。

人間ではない存在でさらに成熟した。

やってくるものと同じ存在をぶつけさせてもらおう。

「お願いしますよ、大魔王様」

引き摺り出す。腕を。その先で掴んだものを。

ず、る、う、り。

黒い闇が液体のように溢れでて、地面に落ちる前に霞のように消える。

そこから現れるのは、力強い腕。肩、頭、胸、腰、足。人の体。

「……あん？」

「どーもジュス様お元気ですか」

スラリとした体躯にぼさぼさの髪。黒縁メガネの奥の瞳は眠たげでやる気も気力も感じない。

服装はジャージ姿で世界観に違和感バリバリなのに、彼という存在には絶妙にマッチしているのだからまたタチが悪い。

ジュス様。

ジュスティード・ガルガンチュア。

棄剣パンタグリュエルを有する、この世界とも僕の世界とも違う

世界の住人で、その世界では魔王と呼ばれていた存在だ。

ジュス様は状況を知るためか少し辺りを見まわし、うん、とひとつ頷いて。

「呼ばれて飛び出てジャジャ痛ってえな脛をけるな！」

「出てきてすぐならまだしもいちいち状況を確認してからネタに走るテンポの悪さが腹立たしすぎます、ジュス様。ていうか引っ張ってきておいて何ですけど、よく起きてましたね」

この人は起床時間と睡眠の割合が三対七くらいの割合なんだけけど、一度寝始めると数日間寝続けるので起きているタイミミングが測りづらい。

「ああ。昨日からずっと起きてるよ。翼のヤツにたたき起こされてな。なんでもテメーの姿が見えねーとか何とかだよ」

「え？ ……昨日からって、まさか」

「時間軸がちがうってところでしょ。ありがちといえあればありがちじゃん」

むう、確かに。

しかしこの短時間で日付が変わってしまうとは。

「つうか空よお、その白い面白い生き物——生き物か？ まあいいや、それなんだよ。どうもそいつのおもしろ機能で俺を連れてきたみたいじゃねーか」

「ええまあ。それについては後々説明します。今は状況が差し迫ってるんで」

「確かにこのちっちゃえ世界にはでかすぎるヤツが顔を出そうとしてるな。なんだお前、ドラえもん役で喚び出されたのか」

「ま、そんな感じですよ。どうにかできます？」

「ふん。ま、やってみてやるよ。が、それにはテメーも手を貸せよ。俺にだけ働かせるってのは虫が良すぎるってもんだ」

「ええ、出来ることなら。ましゅまろ、下がってて」

ジュス様が拳を前に出す。きつく握り締められた拳に熱が集まっているのか、陽炎の様にゆらゆらと空間が歪む。

その力を感じたのか世界の壁の向こう側からこの世界を狙う存在が、こちらへと興味を持った。今までの数十倍の不快感が全身を這い回る。

「へ、まあ悪くない力だ。けどまあ、駄目だな。失格だ。テメエ、つまんねえよ」

ほらよ、とジュス様が白い結晶を僕に投げた。それを受け取った僕は――ああ、うん。そうか。これはつまり。

「『一回分。空の望む物ならなんでも』だそうだ。止めるのは俺がやる。あとはてめえがやれ」

「了解、魔王様」

悪寒を飲み込み抑えこみそれでも足りないから精一杯に虚勢を張って。

「じゃあ姉さん、ちょっと使うよ」

ジュス様の横に立つ。

握った拳の中で結晶を砕く。飴細工のように壊れて欠片がこぼれて宙を舞い、キラキラとした光りが一筋の杖のように伸びる。それを掴んで腰を落とし、肩越しに大きく杖を振りかぶる。

ぴたりと杖を背中に付ける。こいつの『刃』を振り切るには中途半端は似合わない。

さすがに今の僕ではこいつの全てを具現化することはできないけれど、効果を再現する程度のことならば可能だ。なにより、姉さんがそう設定してくれている。やれやれ、最後はやはり姉さん頼りというのは締まらないけれど。現状、これが僕の精一杯だ。なら認めようじゃないか。

ふう、吐き出す呼吸は熱く、心のたぎりがそのまま現れたかのよう
うで。

さあ。

「お願いします」

「ああ。それじゃあ行こうぜパンタグリユエル」

きいん、と金属がぶつかり合うような響きと共に、ジュス様の手
の中の熱が一本の琥珀色の光の剣になる。光は天使の階段のよう
にうつすらとした物だけれど、とても美しく目と心を引きつけた。

無言で剣が振り抜かれ。

無音で空が引き裂かれ。

無色の光が濁流となり。

無数に時間が碎かれる。

無限の距離が零になり。

この一瞬が永遠となる。

世界が凍る。時間が死ぬ。

空間の一点には、僅かに歪みの奥から顔を出した来訪者。そのほ
んの僅かの現出が、僕の足元三ミリ先までを一瞬で腐敗させていた。
けれど、そこまで。ジュス様の力によって時間も存在も全てが停
止したこの世界では、これが限界だ。

これより早ければ僕の力は届かず、遅ければ僕は為す術も無くこ
の存在の前に屈していただろう。

世界を砕いた本人は相変わらず半分眠ったような瞳で僕を見てい
た。さっさとやれ。

僕は頷いて力を振るう。

大きく構えた光の欠片の杖を、全力で振り抜く。そこにある刃を夢想しながら。

「はああああああっ!!!!!!」

景気の良い音を立てて。

世界の終わりを真っ二つに斬り裂いた。

今回のおまけというかその後。

「もう空ってば。いつも言っているでしょう？ 遠くへ行くときは、ちゃんとおねーちゃんに言わないと。ね？」

「あー、うん。ごめん姉さん。ちよつといきなりだったからさ」

「いきなりでも連絡はしないと。おねーちゃん心配したんだから」

「ごめん、姉さん」

言い訳はいろいろあるけれど、心配かけたことは事実。そこは素直に謝ろう。

「じゃあ、俺はかえってねるから」

「あージュス様もありがとうねー」

「礼を言うなら脅すのはやめてくれ。さすがに俺でもお前の刃で首をはねられたら終わりだからな」

どうも姉さんは物騒な手段に訴えていたらしい。ううむ。

すでに眠気に襲われているらしいジュス様はふらふらと自分の部屋へともどっていった。ジュス様も僕らと同じマンションの住人な

のだ。

「それで空、今度いった場所は、楽しかった？」

「うーん……」

あの世界を思い出す。結局あの世界から返ってきたのはあの後報告をしてすぐのことだった。ジュス様に急かされたためろくに挨拶もできなかったけれど、王子様とはまた話をしてみたいと思う。

お姫様は……なぜか分からないけれどちよっぴり嫌われたらしい。おかしい。あんなに気を利かせたというのに。

王様は相変わらずのいかつい表情で感情が読めなかったけれど、まあ嫌われていないといいかなと思う。

異界の魔王には悪いけれど。

僕の都合で退場いただいて、本当に悪いと思うけれど。

彼を登場人物から排除したことを、僕は素直に喜んでいる。

うん。

「楽しかったよ、姉さん」

そしてこれからもきつと、楽しくやっていけるような気がする。

僕の顔を見てそれを感じてくれたのか。姉さんは優しく微笑んで、少し背伸びをして僕の頭を撫でてくれた。

暖かくて柔らかい感覚。

そうして、僕のいつもと違う休日はいつもの休日に戻ったのでした。

僕と姉さんと異界の異界の魔王（後書き）

マイリストしてくれている方々、ありがとうございます。

正直それだけで非常に励みになります。

もつと無茶でもつと滅茶な話をお届けできるよう頑張っていきます。

僕と姉さんと夏の水着

夏休み直前の、土曜日。

「水着を、買いに行きます!」

姉さんの宣言により僕らは電車に乗ってショッピングモールへとやってきていた。

それも結構な大人数だ。

まずは僕ら家族。

姉さん、涼莉、ましゅまろ、そして僕。

幼なじみズ。

綺月と夕陽。

そしてよくわからないけれど知り合いの人達。

シスターマリジョア。エッジ神父。吸血鬼リアさん。未来人大地。超能力者ヒカリさん。魔法少女リリカルリス。魔王ジュス様。

……一体モールをどうするつもりなんだろうこの面子は。

というかジュス様はまたよく起きていましたね。この前の日曜日にわざわざ異世界まで来てくれたのに。と思ったら、歩きながら寝ていた。

まあジュス様はいいや。どうせ買うとしても新しいジャージしか買わないに決まっているし。

問題は。

「……あの、リアさん? それ、そろそろツツコミ入れていいんでしょうか」

「えー、何、気に入らないの?」

「気に入らないというかドン引きですよさすがにそれは」

リアさんは夏だというのにマントで体を覆っている。それはまだいい。問題は頭だ。

「なぜプロレスマスクをかぶっているんですか。しかも明らかな悪役顔」

「日光苦手なのよ」

わあ、吸血鬼っぽい。けれどもかし。

「僕らが日の下を歩けなくなるのでやめて下さい」

「あははは、そんなときは血い吸ってやるから安心していいよ」

「今の会話のどこかに安心する要素がありましたか？」

きちんと会話のキャッチボールをしましょうよなんていきなりボレーシュートから入るんですか。

「はあ……あー、乾いてきたな……」

「ちょっとリアさ……うわあなんかマントの下に見える腕がカッサカッサですけど!!」

枯れ木みたい!!

モールまであと百メートル少々なのに、辿りつけるのだろうか。

ううむ、コレは背中を貸すべきかな。

と思ったところで。

「はいはい、空。病弱だかなんだか知らないけれど無理してきたほうが悪いんだから。コレに座らせなさい」

綺月が差し出したのは。

「……え、と。いいの？」

ましゅまろだった。いつもの顔の向こうから不満の気配が漂ってきている。

……………。

まあ、いいか。

モールにたどり着いたとたんジュス様がベンチで横になった。エッジ神父が動かそうとするけれどあの人が動くわけもなく、結局放置する事に。なぜ来たジュス様。何故呼んだ姉さん。

と、思ったらヒカリさんがジュス様の横にちょこんと腰を下ろした。

「わたくしが付き添いますから、みなさんで見てください」

「ええと、いいんですか？」

「構いません。実は明日、うちに仕立て屋が来ることになっているんです。夏の新作の為に、と」

さすがに大富豪のひとり娘は言うことが豪気だ。

というかそうか、このために姉さんはジュス様を呼んだのか。姉さんを見ると、いい笑顔でぐっと親指を立てていた。ヒカリさんも照れてはにかんでいた。ううむ、姉さんファインプレーだ。

「……しかしヒカリさんも大変な人を好きになったね。いやこの場合はヒカリさんに目をつけられたジュス様を憐れむべきかな？」

「ジュス様じゃあ悪いが、ヒカリさんにはこのまま落ち着いて欲しいって気持ちはあるかな俺は」

「まあそうだね僕もそう思うよ。このまま、あの性格が落ち着いてくれたらね……」

夕陽の言葉に同意した。隣の綺月も同じくうんうんと頷いている。「にゃ？ ヒカリがどうかしたの？」

「いやなんていうかね、ヒカリさんはこう、ヤンデレな所があるからさ」

うにゃ？ と人間形態の涼莉が首としっぽをかしげる。

「惚れ込んだ人を、離さないし逃がさないし放さないんだよ。精神

的にも物理的にもさ」

自慢話のようだが。

僕も一時期、彼女に惚れられていたことがある。

そして失礼ながら僕にとってその記憶は、可能なかぎり思い出したくない類のものだ。

中学一年生の男子が涙と鼻水にまみれた顔で山道をボロボロになりながら走って逃げるという経験は、正直精神に耐え難い傷を残した。

まったくもって恐ろしい。自分の意志とは関係なく、彼女のことしか考えられなくなっていくのは。姉さんの事を考える時間がどんどん減っていくのだ。いやまったく恐ろしい体験だ。

とはいえ。

そんな彼女をしても、あのジュス様相手ではまっとうに勝負をせざるを得ないだろう。

「麻雀だろうがなんだろうが、本気になった翼ねーさんとまっとうに戦える人だものね。小細工なんてなぎ倒されるに決まっているわ」
綺月の言葉のとおり、小細工も力技も通用しない圧倒的な存在なのだ。

つまるところ、あの人は高校二年生になってようやく、ちゃんと初恋ができる様になったのだと思う。

姉さんは幼なじみとして、なによりも親友として、彼女のそんなところを心苦しく思っていたらしい。だからこれは姉さんにとっても嬉しい兆候ということなのだろう。よかったね、姉さん。

とまあ、ヒカリさんについてはこのくらいにしておこう。いずれ、彼女のことを語る機会もあるはずだ。

残った面子はまっすぐに目的の水着売り場へ向か——わずに、先に早めの昼食をとることにしてファミレスに入った。

早めとはいっても人の多い土曜日のショッピングモールこれだけの人数がまとめて座れるファミレスを探すのも一苦労だ。

ようやく見つけたファミレスは、その名のとおり家族連れが多く見受けられた。メニューはイタリアンが中心のようで、店内にはトマトやチーズの香りがほのかに感じられる。

六人がけのテーブル二つを占拠して、僕ら家族と幼なじみズ。知り合い組にわかれて席をとった。のは、いいんだけど。

「「「「……………」」」」」

「想像以上に気まずいですねそっちのテーブル！」

こちらは慣れ親しんだ顔ぶれのこちらに対して、あちらは基本的に初対面だしね！

「姉さん、ちょっと節操なしに呼び過ぎたんじゃ……？」

「そうかな？ 大丈夫だよ空、ほら、よく言うじゃない。人類皆兄弟って」

数名人類以外が混ざってるんだけど。

「空殿、さすがにこの場は拙者耐え難いで御座る……！！」

そんなとなりのテーブルから必至の形相で助けを求めてきたのは未来人大地。

過去の日本が好き過ぎてかぶれて親と喧嘩して家出。勢いでタイムリープしたもののちょっと間違っって百年程移動する時間を間違えた色々とアレなクラスメイトだ。自称、過去に生きる未来人。

服装は普通の恰好なのだが、アクセサリーやボタン、シャツの柄など随所に和の心意気を感じさせる。

肝心なところでとんでもない失敗をしでかす以外は基本的にイヤッだ。ただ本当に失敗したときのダメージがでかいので扱いには注意が必要。僕と夕陽は我慢のきかないダイナマイトと呼んでいる。

「そうは言ってもほら、こっちのテーブルはもういっぱいなんだ」

「いやいや、ひとり分開いているではないで御座るか」

「ひとり分？ ああ……」

視線を追った先には白いクッションもといましゅまろが鎮座していた。

……一般人には見えないこれを椅子に乘せる意味はあるのか疑問は尽きないけれど、姉さんが指定したので僕が口をはさむのは野暮というものだろう。

「大地、君には見えないかも知れないけど、ここにはきちんといふんだよ」

「……拙者たまに空殿が何を言っているのかわからないで御座る」
まあ大地の反応が普通だよなあ。
というか。

冷静に考えて大地を除く全員がましゅまろを認識できているこの状態が異常なのである。

その証拠に、僕の言葉にみなうんうんと頷いている。大地もそれに気づいて周りを見回してもう一度席を凝視。しかし見えない。しかし周りは見えている。

ニヤニヤ、キョドキョド、ニヤニヤ、キョドキョド。

「い、一体その席には何があるというので御座るか！」

「とりあえず白いかな」「あと丸い」「キュートね」「甘いの」「よく跳ねるんだよ」「ちょっと邪悪な気配を感じますねー」「まあ扱いに気をつければ死にはしないでしょう」「……面白い」

「貴殿らのそのヒントはむしろ拙者を混乱させるだけで御座るよ？！」

そうは言うけれど誰ひとりとして嘘は言っていない。
ん？

「あれ、ましゅまろって邪悪なんですか？」

「あらー、空くん気づいていなかったんですかー？」

「ははははは、まあ、ね。大丈夫ですよ、ええ。ほら、家に対戦車地雷が埋まっていると思っていれば」

我が家がいつのまにか紛争地域になっていた。

せいぜいスケバンくらいの脅威だと思っていたのに。

「そんなに不安なら、今度対戦車地雷の対処法を教えましょうか？」
なぜそんなことを知っているんだろう、この神父さまは。

「あんたはそれよりもっと広げることがあるでしょうに」

教義とかさ。仕事しましょうよ神父さん。ほら不用意なことを言うから隣の席のシスターから真っ黒い波動が出てますよ。いやその人黒以外の波動出さないタイプの人ですけど。

「まあそちらの方よりもこちらの方が、より邪悪？　な気配はしていますけれどもね」

そんなシスターの照準はリアさんに向いた。ちなみにリアさんはモールに入るなり五百ミリリットルのペットボトルの水を十三本程補給して復活していた。吸血鬼最大の弱点も結構あっさり克服できるらしい。

リアさんはシスターの視線を苦笑で出迎えた。

「はあん、まあ確かにあんたからしちやああたしは邪悪扱いだろ
うねえ。あたしからすればあんたらふたりの方がやたら暴力的
だけどね」

「あらあらあらー、どうして私たちがそんな評価を受けるんでしょうか、ねえ、神父様？」

「そうですねえ。なぜわたしまで入っているのか、それはたしかに疑問でごふう」

どこからともなく飛び出したボールのようなものがエッジ神父のこめかみを襲う！

笑顔のまま倒れる神父！ 慌てる大地！ 苦笑したままのリアさん！ ほっこり何食わぬ顔でハニートーストをかじるシスター！ 本を読み続けるリリス！ ましゅまろで遊ぶので忙しい姉さんと涼莉！ 抗議の視線をなぜか僕に向けるましゅまろ！ 不用意なことを言って綺月のアイアンクローを受ける夕陽！ それでいて笑顔でジュースを楽しむ綺月！

……………誰か助けて！！

当然助けなんか入るわけもなく。それでもいつもどおりーそう、いつもどおりに、昼食をたべた僕らは、こんどこそ水着売り場へ来ていた。

「はあ……………」

ため息をつく僕をリリスが怪訝な表情で見ていた。

いや、うん、大丈夫。店内での騒ぎをちょっと思い出して憂鬱になっただけだから。

これが一日続くとなると、僕の体力は底をつくのではなからうか。そして恐ろしいのは、僕の体力の有無に関係なくこの集団に付き合わないという選択肢はあり得ないということだ。

第一、姉さんを放っておけるわけもない。

「とはいえ」

「それじゃあ、一旦ここでわかれようか」

姉さんがくると回って高らかに宣言する。

ふわりと浮き上がるスカートが健康的な太ももを外気に晒す。

「おお——うぐおおあああっ！ 目が、目がああああっ！！」

「夕陽殿っ？ い、いきなり目を押さえてどうしたので御座るか？
！」

「目にゴミでも入ったんじゃないかな。大きく見開いたりなんかするから」

「それどころではないリアクションで御座るよ?!」

不届き者を成敗した僕ら男性陣は男性向け水着売り場へ。

女性は女性で固まって女性向け水着売り場へ。

当然の流れである。

「……………なっとくいかねえ」

「夕陽、露骨にガツカリしないのみっともない」

「えー、だって楽しんじゃん。なあ大地」

「楽しみは楽しみで御座るがいざ本番で見たいという気持ちもまた持っているで御座る」

「へえ、大地にしては落ち着いた意見だね」

「まあぶっちゃけ拙者一度全員の水着姿見てるで御座るからな」

おい。

「……………またタイムリープしてきたわけ？ 一体何で？」

「夏休み開けたら空殿が写真だけ見せてきたからで御座るよ！ なぜ声もかけなかったのに写真だけ見せるので御座るか思いつく限り最大限の嫌がらせで御座るよアレ！！」

「いやマジ泣きで迫らないでよ……大体、未来の僕の考えなんて今の僕にわかる訳ないじゃない……」

「まったく今回は事前にこうして根回ししたから付いて来られたようなもの……」

……なんでこんなに必死なんだろう。大地は。

ああ水着姿がみたいだけか。なんか未来は色々規制が大変らしいし。やれやれ……。

「そんな理由で貴重なタイムリープを使っているの？」

「今使わずにいつ使うで御座るか！！」

こいつ江戸時代にいかなくて本当によかったな。岡っ引きにしょっぴかれて酌量の余地なく打首だ。

まあ。

青少年らしく煩惱を行動に移せないあたり大地らしいといえれば大地らしいけれども。

そう。

「どこへ行くつもりですかこの神父さま」

「え、あは、いやあちよっと、お手洗いにでも、と」

「トイレはすぐそちにありますよほら、行って来い」

こいつに比べたらはるかに健全だね。

背後でこそそしていた神父に対して正しい道を示してあげる。

「ほらさっさと行ったらどうです？ 別に止はしないどころか歓迎して送り出しますよ。ほら、血が出るまで出してきたらどうですか」
「いつも思うのですが空くんはわたしに対して少々辛辣ではありませんか？」

「出会いがわるかったんじゃないですかね」

むう、と押し黙る神父さま。この人との出会いはゴタゴタしていたのであまりいい印象を持っていない。それにこの人、姉さんの胸触ったし。無論姉さんが許したことで僕が何時までも責めたてるのは間違いなので僕もそれはすでに気にしていない。だからこの人について辛辣になってしまう原因はそれとは全く別のところにあるのだと思う。そして思い至った結論が今言った言葉だ。
それ以上も以下もあるわけがない。

「ほ、ほらどんどん眼つきが恐ろしいことに！ 一応聞いておきたいのですがわたしに対して明確な殺意を持っていたり、しませんよね？」

「特にありませんし殺しても死なない人に対して殺意を持っても仕方ないじゃないですか」

あはは、と笑う神父さま。

この人はゾンビなのでなにをどうしても復活するのだ。

黒くて生命力が高いつかゴキブリだなまるで。

「いやあほら、なんといえますか。そう！ サンドバッグだっていくら殴っても変わらないのに殴る人はいるでしょう、ストレス解消に」

「それは刻んでいいってことですか？」

「土下座をしたら許してもらえますか？」

「え？ 許すも何も悪いことを何もしていないのに土下座をしたって何も解決しないじゃないですか。僕が刻みたいと思うのはなんというか、生理的なもので」

「もしかしてわたしは今ものすごいことをいわれているのでしょうか」

ええまあ。

しかし相変わらずの困ったような半笑い。半笑いというあたりがまた微妙に神経を逆なでするなこの人。

「空殿がそれほど攻撃性をむき出しにするのは珍しうで御座るな」

「まあこれもひとつの信頼の形だよ。な、空」

「うん。そうだね。信頼してますよ神父さま。だから余計なことしないでくださいね？　あまりはしゃぐと十字架に貼り付けますからね？」

「あまりにも禍々しい信頼の形に拙者言葉もないで御座るよ……」

さて。

馬鹿な事をしていないで水着を選ばないとね。

「つていっても、水着にこだわりとか、みんな、ある？」

「ねえなー」

「ふんどしで来ると思ふから、という理由で未来ではハブラれたで御座るからな。普通の水着であればなんでもいいで御座る」

ああ、それは僕も全力でハブるかな。

ちよつと精神的に、そういうのを連れていくのはキツツい。

……ていうかふんどしならこだわりの、大地？　まずい、ちよつと興味が出てきてしまった。

「それで神父さまは……もうその格好でいいんじゃないですか山も海も川もプールも」

「せめてもう一滴だけでよいので、わたしにも優しさというものを

向けていただけませんかっ!!」

さすがにそれは辛いらしい。
はあ。

「仕方ないですね。じゃあ普通のなら許可しますから、選んでいいですよ」

「ありがとうございますっ! ……おや? なぜ当たり前のことなのに感謝しているんでしょう、わたしは?」

なにかブツブツつぶやいていた神父さまを残して、僕らはさっさと水着の選定に入った。

四人でふざけたりはしたものの、形のバリエーションが豊富なわけでもなく、結局のところ気に入った柄を選ぶくらい。

なのでものの三十分程度で僕らの水着選びは終わった。の、だけれども。

「……遅いねえ」

「だな。ま、予想できたことではあるけどよ」

「拙者はこうして女性用水着コーナーを見ているだけで想像力フルパワー活動中に御座るが」

「わたしは水着も好きですけどやはりその下の方が——いえ、なんでもありません」

未来人と神父さまは本当、もう……はあ。

僕らは女性水着売り場の近くのベンチに並んで座って自動販売機

で買ったジュースを飲んでいた。たまにちらちらと、ならんだ水着の無効に女性陣の姿が見える。

あっちへ行ったりこっちへ行ったり。なかなか忙しそうだ。という、か、ですね。

「……水着をきたまま更衣室の外まで出てくるのは、どうなの」

ああ、恥ずかしさで顔が熱を持っているのがわかる。

「にゃあああああっ!!」

たぶん涼莉を着せ替えていて、それに嫌気がさしたんだろう。更衣室から飛び出した涼莉が、水着姿のまま売り場を逃げ出したのだ。涼莉のがいま着ている水着はオーソドックスなセパレートタイプ。オレンジベースの鮮やかな花柄で可愛らしいフリルが映える。子どもっぽい、と本人に言ったら引かかれるだろうけれど、見た目としては本人にマッチしていた。

「うむ。ロリカワイイは正義で御座るなああああああああああっ!!」

目にサイダーを流しこんでふしだらな思考を死滅する。

のたうちまわる未来人。夕陽も神父さまもノーリアクション。

大分息があってきたなこの面子。

「あーあ……って姉さんまで水着で走りまわるのはやめて!!」

逃げる涼莉を追いかけるために姉さんが全力疾走。しかも水着。姉さんの水着はビキニタイプ。白を基調として羽の柄があしらわれている。名前とかけたのだろう。似合っているのはいいのだけれど

紐をきちんと止めてるんだろうね。僕の心臓がヤバい速度で鼓動を打ってるんだけど、走って大丈夫なんだよね、姉さん！！

「う、うおおお翼さあああああああああああああああ
あっ！！」

学習しない男の鼻にタブクリアをなみなみと注いで煩惱退散。

神父さまはもうむしろ穏やかに笑っていた。相変わらず半笑いだけど。

「はあ、心臓に悪い」

「……とか言いながら止めにはいかないのね」

「そりゃあね……ってリリス、君まで……」

なぜに水着姿。

「……せっかくだから」

「はあ、そう。せっかくだから、ね」

魔法少女マジカルリリス。

この街で話題の正義の味方。正義をなすためなら多少の犠牲は厭わない苛烈な活動から、警察とかそのへんからは結構な勢いで嫌われている。と同時に鉢合わせする機会も多く、ファンの割合も高いとか何とか。

リリスは僕よりひとつ年上で姉さんの後輩にあたる。高校でも姉さんと同じ部に入っているらしい。何部かは聞いても教えてくれないけれど。

その名のとおり日本人ではないため、肌の色は白く鼻も高い。くりっとした藍色の瞳はどこか眠たげに見える。本人のテンションもローギアだ。ちょっと癖のある金髪は腰に届くほど長い。

そんな彼女はピンク色のセパレートタイプの水着姿。下はスカートのようになっている。可愛い水着なのだけれど、彼女が着ると可愛いというよりも綺麗という印象になる。

「……なに、あれ」

「ああ……煩惱が溢れ出していたから中につめ戻したところ」
「……？」

ぴくんぴくんと床で痙攣する夕陽をつん、つん、と指でつつくりリス。

「うう……はっ、お、俺は一体?!」

「……はろー」

「おう、リスさん。あれ? 水着? ここは海か? プールか?」

「……水着売り場」

「ですよねえ……あ、水着にあってますね」

「………………。……」

耳まで赤く染まったリスさん。ううむ、さすが夕陽、やることは基本的にイケメンだ。

「……はっ! そ、そんなことより翼さん、翼さんは一体どこ……ぎゃあああああっ!!」

「……っ! ……っ!! ……っ!!」

リス怒りのツボマッサージ。

夕陽、君は姉さんのことを考え出すと途端にダメ人間になるな。やれやれ。

僕が床に向かってため息をこぼすと、ふ、と足元に人の影が現れた。

うん、まあ、ね。この流れで出てこない訳は無いと思っていたけど。

「……綺月」

「う、うん」

顔を赤く染めた綺月がそこに立っていた。

恥ずかしいのなら無理して出てこなくてもいいのに。思わず苦笑してしまう。

「う……似合ってる？」

「あ、違う違う。別に似合ってなくて笑ったわけじゃないから」

綺月の水着は赤いアクセントが映える白いワンピースタイプで腰にパレオを巻いている。

彼女の白い肌と黒い艶のある髪と相まって、とても絵になる見えていて落ち着く組み合わせだ。

「うん、とても似合ってるよ。むしろはまりすぎてるくらいだ」

「そ、そうかな。うん、ありがとう」

水着を褒められて照れる綺月。まあ、普段はあまり露出のない服装を好むから、余計に恥ずかしいのだと思う。このタイプの水着を選んだのもきつとそういう部分があるからだろうし。

「はっはっは。ま、当然だよなあ。それで可愛くない、なんて言うやつは目が腐ってんのさ」

「リアさん」

リアさんはスポーツタイプの水着を着ていた。引き締まった体に

赤いスポーツ水着は納得なんだけけど。ええと。

「……リアさん、泳げるんですか？」

「？ 当然だろう？」

「……ビーチとかプールとか、平気なんですか？」

「ああ。嫌いじゃないね」

……さっき入り口で死にかけていた吸血鬼がなんか変なこと
言ってる気がするんだけど。

「ああ、今日は先日ちょっと体力使ったからきつただけで、普段は平気なんだよ。何しろ、焼けるよりも先に再生するからね」

「ゴリ押しですか」

「世の中力の強いヤツが無理を通すもんだろう」

無理通し過ぎだろうに。

それじゃ吸血鬼という設定のいいところだけをとっているようなものじゃないか……。

「気にしなさんな。悩みすぎるとハゲるよ？」

「悩みの原因が至る所にありすぎて、その点については諦めていますよ」

はあ。

というか、周囲の視線が痛いのでそろそろ着替えませんか、みなさん。

と口にした瞬間。

「あらー、みなさん、元気でですねえ」

それが、襲来した。

圧倒的質量！ 圧倒的物量！！

揺れ動く巨大な二つの山を搭載して、黒いシスターがやってきた
！！

黒船じゃあ！ 黒船の襲来じゃあ！！

「ぐ、ごふうっ！！」

ようやくサイダーの衝撃から復活してきていた大地が鼻から血を吹いて倒れた。エロい割に耐性は低い。耐性が低い故にエロいというべきか。哀れな。

しかし、なんとまあ。

「……………空？」

「はっ！ いや、な、何かな綺月！」

「むう」

「あはははっ！ しゃーないしゃーないって綺月。ありゃあ男どころか、女のアタシでさえつい目がいつちまうからね」

リアさんがそう言って綺月を抱き寄せるが。

「背中に当たる感触が、柔らかい…………っ！！」

胸を抑えつけるはずの水着を来ているのにその感触が伝わってきているのだろう。どこことなく悔しそうだった。

「で、シスター」

「ふふふ、顔が赤いですよう、空くん？」

「さすがに、シゲキが強すぎますってば、それは」

シスターの水着は、布面積の小さい黒い水着で。

それだけでもなかなか刺激が強いというのに、シスターのあまりにも女性を強調した肉体と組み合わせることで破壊力がとんでもないことになっている。

うわあ。なんていうか、うわあ。

直視できなくて思わず視線を横に逸らした。そのさきには不満いっぱいの綺月がいてなんとなく気まずくてさらに視線をそらす。

と、そこにはフツーにシスターを見ている夕陽がいた。

「夕陽、平気なの？」

「ああ？ 何がだよ」

フツーに返された。ああそうか、コイツ姉さん以外は特に反応しないのか。それはそれでどうなんだと微妙にフクザツな気分。

ていうかりリスはいつまで夕陽をつんつんしているんだろう。そして夕陽もいつまで床に転がっているんだろう。

「ふふふ、予想通りの反応、ありがとうございます」

「はあ、どういたしまして」

「くすくす、かわいいですねえ。ほら、どうですか、神父さま」

未だに言葉を発さない神父さまに問いかけるシスター。神父さまは、いつもどおりの半笑いで。

「ええまあ。その。」

「―――歳、考えませんか？」

その日。

ひとりの修羅が生まれた。

出入口の傍のベンチ。

ヒカリさんとジュス様が並んで座ってジェラートを食べていた。
て。

「ジュス様、起きていたんですか」

「ああ……いくらなんでも女の膝を枕にしたまま寝てられっかよ」
「わたくしは、気にしないんですけれどね」

薄く頬を染めて笑うヒカリさんは、残念そうだけれど同時に幸せ
そうでもあった。

「ところで……神父さんは、どうされたのですか？」

「ああ、気にしないでいいですよ。どうせいつものことですから」

ボロ雑巾のようにくしゃくしゃになった黒い物体をみて、きょと
ん、と首をかしげた。

オマケというか今回の結末。

「で、結局今日僕らが見た水着になったの、みんな？」
「そんなわけではないじゃない」

夕食時の質問。姉さんはあっさりと答えを返してきた。

「……違うの？」
「そりゃそうよ。もう見られちゃったら、本番の時のお楽しみがなくなっちゃうでしょう」
「……………そういうものかな？」
「そういうものよ」

涼莉の方を見る。

ぷい、と視線を逸らされた。
うむう。

「念のために聞くけれど、涼莉の水着、さすがにスク水じゃないよね」

「……………え？」

何その反応。

「いや、さすがに海に行くのにスク水はないでしょう」

「でも似合ってるよ？」

いや似合ってるけども。

「でも可愛いよ」

可愛いけどそれは別の水着でも問題ないと思う。

「……せっかく今度は白を用意したのに」

「すでに用意済みだと……」

言ってよかった。この人は本気で実行する。

大体。

見た目で目立ってしまえばそれだけ面倒な輩に目をつけられる可能性があるということ。僕としては、人なれしていない涼莉がそういう悪い輩の毒牙にかかるのは芽の部分で処理したいのだ。ふう。

ていうか僕としては。

「あれが一番、気になるんだけど」

「いいじゃない。面白くて」

……………いや、どっちかというとシユールの部類じゃないかなあ。

ましゅまろが水着を着ていた。着ているというか巻いているというか。ううむ。

なんかもう表現しがたい気持ちと一緒に、僕は味噌汁を飲み込んだ。

さあ。

もうすぐ、夏休みだ。

僕と姉さんと夏の水着（後書き）

水着の通販サイトを見てあーでもないこーでもない、と女性ものの水着を選ぶ男って……。

というわけで（エセ）水着回でしたが、最後のオチのせいでそれぞれ別の水着を選ばないといけなくなりました。何してるんでしょう馬鹿なんでしょうか。

大体メンバー出揃ったので、そのうちキャラクター紹介とかも載せたほうがいいのかなーとか考え中。

問題は設定イラストまでのせるかどうかですかねー。どうしたもんか。

次回より、夏休み突入です。結局学校での話を書けなかった！

閑話：僕と僕らの終業日（前書き）

ちよつと番外編。

閑話：僕と僕らの終業日

僕の通う学校は昔ながらの三学期制だ。だから一学期は七月で終わり。あとは一ヶ月少々の夏休へと突入する。

そんな七月。一学期の終わり。

そんな、僅かな高揚感に学校全体がうつすらと包まれた中。

僕らは教室で自分の席に座っていた。

夏休みにはいる前にならず通る試験。

学生ならば当然わかるだろうけれど、つまりは通知表わたしである。

僕の成績は自分で言うのもなんだけれど悪くはない。特別良いというわけでもないけれど、ひとまず目標の進学先への成績なら足りているだろう。

とはいえ普段から自分でもよくわからない理由で欠席を繰り返せざるを得ない生活を送っているので、内申まで考えると微妙。

まあつまり僕にとってはさして手ごわい試験というわけではない。今この時も、次々に先生から通知表を渡されて、みんな一喜一憂。教室はなかなか賑やかだ。

さて問題は、僕の前で真っ白になって燃え尽きて閉まっているイケメン、夕陽だ。

「なーつがすーぎー、かぜあざみー」

「今まさに少年時代まっさかりだろ、夕陽」

思い出に浸るには早過ぎる。

「だってよし。この成績はさすがに……あれ、俺今日命日じゃね？」
「どんな成績をとったのさ……」

夕陽の母親はまさしく『おっかさん』といった感じで、昔ながらの母親像――を三十人分くらい濃縮還元したような強烈な人物だ。
『英田坂の雲割る女傑』とはまさしく彼女のことだ。

基本的に、容赦はない。

僕も下手な成績をとってしまっただけで叱られたことが何度かあるくらいだ。実の息子の夕陽には僕に対して存在する手加減が一切ない。

「そっか……今日はおばさん秘技ちゃぶ台飛ばしが出るのかな……」
「あれ痛ってえんだよねー……」

厚さ十センチの鉄板をぶち抜く威力だもんね。なぜに痛いって済むのか理解に苦しむよ。

近所に現れた三つ首の猛犬を撃退したその一撃は近所でも語り草。それをぶち込まれ慣れた夕陽もまたご近所の少年たちの間では伝説の存在である。扱いはツチノコとかと大して変わらない気もするけど。

「夕陽は進学先決めたの？」

「そんなの聞くまでもねえだろ」

確かに愚問だった。

「灘か」

「爆死しろってのか!!」

ひとり納得する僕に対して机を叩いて反論する夕陽。
灘高校。言わずと知れた国内トップクラスの進学校である。

特別の努力も目標も持たずに入学できるような学校ではないだろう。たぶん。調べたこともないので知らないけれど。

「夕陽が体張ってウケ狙いに行くんじゃないの？」

「そんな被虐趣味を持ったつもりはねえ……ていうか、俺の進学先

なんて考えるまでもねえだろ」

「まあね」

ただ夕陽のリアクションからするにそれも難しいのではないだろうか。

夕陽の狙う進学先——つまりは僕の目標進学先なわけだけれど、さすがに有名進学校、とはいかないものの周辺地域じゃあそれなりに人気のある学園だ。

そこへ行くというのなら、ある程度の学力はあるべきだろう。

「……まあ赤点周辺をふらふらする科目が幾つかあるんじゃ、ねえ」「だって苦手なんだよ英語！俺日本人だぜ？」

「日本人だからって誰もが夕陽みたいに英語の読み書きができないわけじゃないからね」

リスニングは別問題。あれは慣れと、僕の場合勘の割合がかなり大きい。口を大にしては言えないけれど。

そんなわけで僕も点数はかなり上下が激しいけれど、赤点の心配をするほどではない。

「夏休みは勉強、がんばらないとねえ。ていうか赤点は補習もあるんじゃないかったっけ？」

「ああ……赤点をとった科目だけな……。あーもーめんどくせえ」

「そんなにきついなら進学先のランクを落とせばいいのに」

「やだよ翼さんがいねーじゃん」

……この男案の定それだけを理由に進学先を選んでいたのか。やれやれまったく、仕方ない。

まあ学校の選び方なんて個人の自由だし、それで失敗するとしても自己責任だと言えない。冷たいようだけれど夕陽はなかなか頑固なところもあるので、これはもう本人の努力に期待するしかないだろう。

おばさんとしても息子が少しでもいい学校へ行こうとするのは喜ばしいことのはずだからね。……当然、失敗したときはそれ相応の対応が待っているのは明白だけれど。

そうしてホームルームも終わり、昼の少し前には僕らは自由になる。

日程的には夏休みは明日からだけど、気分は既に夏休みに突入済みだ。この開放感はなんとも言えないものがある。

さて。

「じゃあ行こうか夕陽」

「そうだな。じゃあまた出校日になー」

夕陽が手を振ってクラスに向かって挨拶すると、ほとんどクラスの全員が振り返って笑顔で挨拶を返した。

特に女子の反応は素早い。さすがだ。

教室を出て廊下へ。僕らの教室は三階にあるので、帰るためには階段を降りる必要がある――のだけれど、僕らは下ではなく上へと階段を登っていく。四階には特別教室がいくつかと、生徒会室がある。

目的は後者だ。

「それにしても、夕陽は相変わらず人気があるねえ」

窓の外の白い山のような雲を眺めながら、なんとなしに言葉が漏れた。

「あん？　そうか？」

「そうだよ。声をかけてみんなわれ先に、楽しそうに返してくれるなんてなかなかないと思うよ、きつと」

「そうかなー。お前だってやりゃあ同じような反応になるんじゃないかな」

いやあ、ないないそれはない。

僕はおとなしいというか引っ込み思案というか、とにかくクラスでは一步引いているような立ち位置にいるし。いきなりそんな事をしたらむしろみんなビックリするんじゃないだろうか。

ああ、それはそれで面白そうではある、かな？

「僕にはそんな度胸はないよ」

「度胸の問題だとはおもわねーけど……」

度胸の問題だと感じる人もいるっていうことだよ。

そんな無駄話をしている間に、生徒会室へと着いた。

創立当時から三十年間、この部屋が別の場所へと移ったことはないらしい。

また扉や札も、校内のほかのものは新しいものになっているというのにこの部屋はどちらも木製で時代と歴史を感じさせる。

「何度来ても、入りづらいものがあるね」

「まあ俺は成績が悪いしお前は出席が悪いし、あんまり模範的ってわけでもねえからなあ」

苦笑。

さて。

こんこん。

こんこん。

二回を二回。計四回扉をリズムカルに叩く。

しばらく待っていると、かちやり、と鍵の開く音が聞こえて扉が開いた。

「空！ ……あと夕陽も。いらっしやい」

「……相変わらず笑えるくらいのテンションの落差だな。もう腹を立てる気力もねえよ」

扉を開いたのは綺月だ。

ちなみにわが校の制服は女子は赤いラインの入った純白のブラウスにチェック柄のプリーツスカート。男子は白いワイシャツにスラックスと、スタンダードなものだ。

導かれるままに室内へ。

室内は木の香りが漂い、冷房器具などないはずなのにどこかひんやりとした空気を漂わせていた。

カーテンレースがふわりと風に舞い、光がちらちらと壁に反射する。

風鈴がからりと音を立てた。

廊下では聞こえなかった生徒たちの遠いざわめきが環境音の様に壁に染みこむ。

夏の日差しと、それゆえに深く濃い影。

人工の光がないがゆえに強く生まれる陰影。過去と今という時間が凝縮された空間。

いろいろな意味で強くコントラストを印象づける部屋だけれど、それが不快を感じさせないのはこの部屋がこの学校に馴染んでいる証拠なのだろう。

「やあ問題児たち。よく来たね」

「生徒会長がその発言はどーなんですかね」

部屋には綺月を除いて三人の人物がいた。

この夏が終わればその任期を終える生徒会長。三年生の村渕和也。メガネの奥の細い瞳は見た目以上に物事の真贋を見抜く力にたけている。僕の事情もいくつか勘づかれていそうなあたり、結構怖い。同じく副会長。静乃悠。行動言動どちらをとっても大和撫子という言葉を連想させる少女。

綺月と同学年の会計。二年生の千鶴峰啓二。小柄な体躯に活発な

表情の、いかにもな体育会系のキャパシティを秘めた少年。

綺月は副会長。次の生徒会長の最有力候補だ。

何人か姿が見えないけれど、わが校の生徒会の運営をしている面々である。

「いらっしやいませ、おふたりとも」

「ありがとう、悠さん」

「静乃の入れる茶は相変わらずうめえな。馬鹿舌の俺でもこいつは楽しみにしてるんだぜ」

「まあ、ありがとうございます」

くすくす、と笑う悠さんはそのまますうつと影のように会長のそばの席に腰掛ける。

「今日はどうしたんスカ先輩」

「いや特に用事があったわけじゃないよ。どうせ家に帰っても暇だから綺月が終わるまで待ってようと思ってね。何か手伝えることがあるなら手伝うけど」

「あ、マジすか？　じゃあいくつか手伝ってほしいことが……」

さっそく書類を漁る啓二くんだが、それを会長が静止する。

「はいはい、そこまでだ。啓二はいい加減自分の分量を手早く終わらせる事を身につけさせたいのだね。ありがたい申し出だが、そいつの手伝いは今日は無しにしてくれ」

「えー、いいじゃないスカ。先輩早いし正確だし俺滅茶苦茶助かるんスけど」

「言っておくが、僕や彼が何時までも手伝えるわけではないんだぞ？　君たちにはこのまま生徒会に残ってもらうのだから、後身を頼りにするような情けない先輩にはなってほしくないのだがね」

「う、ぐぐぐ……」

会長の言葉にはいつもながら説得力がある。

やれやれ、まあ、仕方が無いか。彼の言う事は正しいし間違っていない。僕がここで彼の仕事を終わらせるのは今後の彼を思えば余

計なお世話甚だしい、といったところだろうね。

情けない顔を擦る啓二くんは僕は苦笑して首を横に振るしかない。

「そんなぁ……」

がつくりと肩を落とす啓二くん。上級生は苦笑し、綺月は呆れたような視線を投げた。

「ところで」

と、会長が話題を変える。

「成績の方はどうだったかな？ いや朝瀬はそんな悲壮な顔をしながらも分かっている。だから泣きそうな顔をしないでくれいまさらないか」

「相変わらず会長はフオーするようではない言動が目立つね」
「私はもう慣れたけど、それまでは心労が溜まって大変だったわ……」

一年間を共に過ごした綺月の言葉には実感がこもっている。

夕陽は変わらず言葉責めを受けてビクンビクンと痙攣しているけれど、ここで口をはさむと僕にまで飛び火しかねないのであえて見守る。頑張れ夕陽。滅びろイケメン。

「僕が尋ねたのは――」

「つまりは僕の方、と。そんなに信用ないのかな僕？」

「少し前に翼ねーさんが探しまわってたけど？ 普段からそんな事ばかりしてるからじゃないかしら」

む。痛いところを。

しかしあれは完全に僕の不可抗力だったことを主張したい。主張したところで病院に入れられることうけあいなので言葉にできないのが痛いけれど。

いやまあ言いたいことは理解できるというのも当然あるけれども。異世界なんてとんでも話姉さん信じてくれないから説明の仕様がなの。おかげで僕はどこかへふらりと一人旅へ行っていたという

ことになってしまう。

「空？」

「ごめん、ちょっと意識飛んでた」

首を傾げる綺月をごまかすように頭を撫でた。

口をパクパクと、なにか言おうとするような仕草をしたけれど、そのまま言葉を飲み込んでしまう。なんだろう。

「ふむ……幼なじみだけに大変なこともある、か。どこもかしこも事情は似たようなものか」

「会長？」

会長のひとり言が耳に入り、今度は僕が首をかしげた。会長の傍に座る悠さんも同じように首をかしげていた。

そういえば、あのふたりは幼なじみだと以前に聞いた。それ関係だろうか。よくわからないけれど。

「と。それで君の成績だが、結局どうだったのかな？ 無論これは個人的興味に過ぎないので、答えたくなければそれで構わないが」

「や、別にかまいませんよ。今回の成績はそれほど悪いものでもなかったですし」

はい、と通知表を手渡す。

会長がそれを広げ、横にいた悠さんが軽く首を伸ばして横からそれを覗く――だけでは飽きたらず、なんと夕陽に綺月、果ては啓二くんまで人の通知表を見に行く。

ちよっとちよっとヘイヘイヘーイ、見ていいと言ったけれどさすがに無遠慮に過ぎないのではないのかと。

「ふむ……課題提出やテストの点は申し分ないが、やはり出席で点数を減らされていると。ああ、実習に休んだのか。それは君、大きな減点だよ」

「あらあら、お料理が得意なんですか。興味が有りますね、あつかましいお願いですが、機会がありましたらぜひ、拝見させて頂き

たいです」

「先輩職員室で問題になるほど悪い点数じゃないっスね。ていうかこれもしかして俺のほうが点数悪い気が……」

「あんたはもう少しテストを真面目に受けなさいよ。わからないところにテキトーに答え書いてるって、先生呆れてたわよ」

成績と担任からの指摘事項を見て、勝手な感想を述べる面々。
なんだろう。釈然としないものを感じる……。

と。

僕のそんな小さな悩みを吹き飛ばす爆弾が次の瞬間に投下された。

「え……？ この学校って五段階評価じゃなかったのか？」

ぴきり、と。

全員が動きを止めた。

今、何か。

受験生の発言としてはとんでもないレベルの失言を耳にした気がしたのだけれど。はたしてそれは、気のせいだろうか。

……そんなわけなかった。

全員の視線が発言の主へ——夕陽へと集まる。

夕陽はやつちまったというふうな表情で、頭をぽりぽりと掻いていた。

いや。

「……………朝瀬すまない僕らは少々君を見誤っていたらしい。今、

何と言った」

僕らを代表してそう言ったのは、さすが生徒代表生徒会長。
夕陽は、バツが悪そうに。

「いやあ。すっかり五段階評価だと思ってたわ、俺」

アッハッハと笑う男。

「いや夕陽笑い事じゃないよ……笑い事じゃないよ?!」

事態は深刻だ。

何しろわが校の成績は十段階評価によってなされるのだから。

だというのに、最大値を五と思っていた?

なんだそれはどんな状況ならばそんな勘違いが起こせるんだ?
いや、わかる。わかってしまう。それ以外にあり得ない。

つまり。

「夕陽……あんた、五までしかとったこと、ないの……っ?!」

夕陽の希望進学先を知っている綺月が絶望を声ににじませた。それは叫ぶような声だった。

ああ、気持ちがよくわかるよ。

他のみんなもさすがにこれはひどいと表情を硬くして――

「ていうか五とかとったことねーからてっきりそうなんだろうと」

「「うわああああああああああああっ！！！！！！」」

僕と綺月と啓二くんの悲鳴が重なった。

ちよつと想像以上過ぎた。

え、なに、ちよつと待って。それ普通に目標進学先がどうこうとかいうレベルじゃないよ！

「……まさかそれほどとは」

「これは……ええ、まあ」

会長は頭を抱え、悠さんに至っては何を言えば良いのかも分からなくなっているようだった。この人にフォローを放棄させるって相当だぞ。

「夕陽、成績見せて。イヤじゃないさっきはさっき今は今——抵抗すると姉さんに切り落とさせるよ」

爆弾を出し洩る夕陽だったが、説得を繰り返すことでようやくその通知表を提出させることに成功した。

全く、あまり苦勞をかけさせないで欲しい。

そうして受け取ったそれを、僕はゆっくりと開いて——すぐにとじた。

……目がどうにかなりそうだった。

それ以上に、心がどうにかなりそうだった。

ていうかどうにかなる。今にも。

「……夕陽は僕をどうしたいの？」

「空が泣いてるっ?! 夕陽、あんたどんな成績をとったの?!」

「いや……割といつもどおりの成績だぞ」

いつもか。

いつもがこれか。

今回が悪いとかではなく、いつもがこれなのか！

そりゃあちやぶ台も飛んで来るわ！！

みんなに通知表を渡す。

開く。

閉じた。

ある者はうつむき、ある者は天を仰ぐ。その表現方法は人それぞれだけれど、知りたくなかった現実を嘆いていた。

重苦しい沈黙が部屋を包む。

そして。

「そういえば君たちの進路はどうなっているんだ」

現実を忘れることにした。

とりあえず帰ったら僕は僕で課題を定めてあげよう。夏休みに休めると思うな夕陽。

「うおっ！ な、何だ、今なにか寒気が……」

「俺たちそれ以上の寒気を味わったんスから、そのくらい甘んじて受けて欲しいっスよ」

そんなやり取りを横に聞きながら、僕は会長の質問に答えた。

「僕は滝空高校を志望してます。一応それと同じだったんですけど、

まあ、うん。夢は寝てからいって感じで、ええ」

「おいおい何だ今日は俺を虐める会が発足してんのか？　ずいぶん風当たりが強いじゃねえか」

悪いけど最大瞬間風速をたたき出す前にこっちの心が折れただけだから。本来の風当たりは嵐の勢いだから。

「夕陽、今日のアなたには何ひとつ発言権はないわよ。おとなしくしてなさい……空の逆鱗に触れる前に」

僕は苦笑した。逆鱗で。さすがにそれほど逆上はしていないよ、綺月。

「ふむ。とりあえず笑顔で湯のみにひびを入れるのはやめてくれるかな。備品だったただではないのだから」

「あれ？　ごめんごめん。脆かったのかなこれ」

「……純然たる陶器なんだがな……まあいい。それで進路だが滝空か。自由な校風と自律を掲げた方針が人気らしいね」

「あととはうちの距離も丁度いいしね」

こういうのは、近すぎ遠すぎの距離がちょうどいいと感じる。近いとどうしても気が抜けてしまう自分の性分を理解しているので、寝坊したらアウト、程度の距離感で、なおかつ通学時間も手頃なくらいがちょうどいいのだ。

進学率もそれなりのものだし、自由な校風は、僕やその周囲のちよつとした違いをごまかすにはちょうどいい環境だろう。

考えて見れば僕にとっては諸々を鑑みて好条件なのだ。

ある意味、僕の進路がその学園になるのは当たり前の流れといえた。

「ふむ……朝瀬はしかし、なぜこの成績で滝空を目指そうなどと無謀なことを考えたんだろうね」

「夕陽は姉さんのおっかけだからね。高校も基準といえはそのくら

いしかないんですよ」

「ほんと、夕陽の翼ねーさん熱は年を追うごとにひどくなっていくものね。その割に何ひとつ行動は実を結んでいないけど」

「……うるせー」

ふてくされる夕陽。

「姉、か。君のお姉さんも、滝空なのか」

「ええまあ」

「なるほど話には聞いていたが……君が滝空へ行く理由は、姉がいるということも含まれているわけだ。テストの点数だけを見れば、もう少し上を目指せるわけだしな」

「あはは、それは買いかぶりですよ。あと、姉さんがいるっていうのは選択理由にはならないですよ。そりゃあ、滝空の話は姉さんに聞いて、それなりに以前から興味を持ってましたけど」

「「……え？」」

なぜか綺月と夕陽が疑問の声を上げた。

「……翼ねーさんがいるから行くんじゃないの？」

「綺月、君まで僕をそういうふうに見ていたの？　なんだか誤解があるみたいだけど、別に僕と姉さんはいつも一緒にいないと気が済まないってわけじゃないんだよ？」

「でも、一緒にいられるときは一緒にいるよね、だいたい」

「そりゃあ家族なんだもん。一緒にいるのが普通じゃないかな」

「ええと……」

綺月は何かを整理するように一旦言葉を切った。

悩む綺月が続いたのは、夕陽だった。

「いやけどよ、例えばお前静蘭とか平田台とか、その辺も条件としちゃああんまり変わんねーだろ？　そこで翼さんがいるからってのは理由になるんじゃないのか？」

「いやいや夕陽それは早計つてものだよ。静蘭と平田台はそれぞれ理系と文系どちらが強いかはっきりしているからね。そのへん、将来が曖昧な僕にはどちらもそこその水準の滝空のほうが都合がいいのさ」

「だがしかし」

ここで会長が会話に割り込んでくる。

一体どうしたんだろう、みんな。

やれやれ、そんなに僕をからかいたいのかな。

「それはあくまで程度問題。それこそ決定打としては薄いように僕は感じるがね。そもそも、その程度の差は個人の努力で覆せるものだと思うが」

「いや人間だれもがあなたみたいに勤勉じゃないんですよ。ほら実例がここに」

「……ああ、そうだな。僕が悪かった」

「あれ攻撃対象がいつの間にか俺になってね？」

会長が薄く笑い、悠さんがくすくすと口元を押さえて肩を震わせる。

笑い方まで優雅な人っていうのはいるものだね。

和の空気という意味では綺月も同じものだけけど、それでもふたりの雰囲気は似ているようで違うものだ。

悠さんを森にたとえるなら綺月は溪谷の空気をまよっている。

柔らかく包みこむような空気と、静謐で気高い空気。そんな違いだ。

……だって言うのになんで綺月の体つきは……いや、よそう。なんだか良くない気配を感じる。

「……？ おかしいわね。なんだか不穏な思考を感じたのに」

心を読まれている……。

「まあまあ綺月ちゃん、男性が不埒な事を考えるのはいつものことですから」

うえっ？！ と男四人が顔を見合わせる。

誰だ、お前か、僕じゃない、じゃあ誰だ。

ごめん僕です。

視線だけで会話を交わす。

「それにしてもなんとなくわかりました。つまり、空さんはシスコンなんですね」

「「そうそう」」

「いやそれ違う」

なぜかふたりの幼なじみから盛大な勘違いを受けていた。

「ふう……やれやれまったく、僕に関する間違った評価がまかり通るのはどういう事なんだろうね、これは」

「むしろあなた自身が自分自身に正しい自己評価をいつ下せるようになるのかわたしは気にしてるよ空」

ううむ、どうにも綺月の勘違いは根が深そうだ。

「じゃあどうです、ちょっと検証してみましようよ。先輩がシスコなのかそうじゃないのか」

面白そうっス、とかいうスポーツ少年君ちよつといいかげんにしなさい。

「ふむ、それは面白そうだ」

まず会長が乗った。このひと結構その場のノリにガンガン乗ってくるタイプなのだ。

「そうね。空に自分の事を知ってもらういい機会かも」

綺月はノリノリだ。というか視線がガラガラしててちよつと怖い。なんでちよつと切実なのさ。

「あっはっは、こいつぁ面白そうだな」

お前は僕の事情で笑う前に自分の笑える今後をどうにかしろ。
「くすくす」

そして悠さんは笑うだけ、と。

とりあえず軒並み敵しかいないことは理解した。とんでもないアウェーだここ。

まあいいさ。どうせ結果は見えているわけだし。ありもしないものを証明するという彼らの行いに、少し付き合ってあげるのも悪くはないだろう。

「つつても、どうやって証明するんだ、そんな事」

「ふむ……まあ、そうだね。ひとまず君に今日一日のこれまでを語ってもらおう、というのはどうかな」

会長が僕の間を見てそういった。

はて、それだけでいいのだろうか。もっと引っ掛け問題みたいな物でも出されるとばかり思っていたので拍子抜けした。

「まあそのくらいなら。今日一日でいいですね」

頷く会長に疑問は尽きないけれど、それでいいというのならまあいいか。

ひとまず、今朝からの自分の行動を思い出してみる。

「ええと……まず朝起きたのが六時の少し前だったかな。それで姉さんの様子を見て、起きるまでにまだかかりそうだったから朝食の準備。それがある程度できたらもう一度姉さんを起こしに行つたけれど、なかなか起きないからもう少し待つことにして、こういう日はいつもより四度熱いコーヒーの方が姉さんのコンディションにちよいどいいからそれを準備してたんだ。そうしているうちに時間がなくなってきたから、姉さんをもう一度起こしに行つて三回ゆすつて四回ほつぺた叩いて五回額をつついたら目が覚めて、それでも起床までに時間がかかるようだったからリビングまで背負って行つたよ。で、ご飯をたべさせているうちに目が覚めて来たからあとは僕も出かける準備をして、姉さんの出かける準備も整えて、一緒に出てきたんだ。

あとは学校に来て色々あったかな。

ああそれから終業式が終わった後くらいに姉さんからメールが着てたんだ。今日の晩ご飯について。姉さんも今日は終業式だから豪華なものにしようってことで、とりあえず材料は姉さんが買ってきてくれるらしいんだ。もしかしたら一品くらいは姉さんの手料理が出るかもしれないってことで、ちよつと楽しみなんだよね。

で、ホームルームがあつて今に至るよ」

と、とりあえず簡潔に今日の出来事を語る。

なぜかみんな白けていた。

悠さんでさえ森は森でも枯れ果てた森みたいな荒廃した気配を漂わせていた。

はて。

どうしたんだろう。

「翼ねーさんが関わってるところとそうでないところで、情報量に圧倒的な差がありすぎるでしょう……」

「そう？ ……フツーじゃないかな」

「なんかもう、俺お前に色々と敵う気がしねえよ……」
夕陽が青ざめていた。何がさ。

「ふむ……まあ、結論はでたということでもいいかな」

そう言って会長がこの場を締めた。

「ですか。これで疑惑は払拭されたわけですね」

——何だその目は。

今日のおまけというか日常のヒトコマ。

「にゃー」

「……まぶしいねえ」

今涼莉はましゅまろにのってふわふわ空を飛んでいるの。

普段より高い場所に登るから、太陽の光がいつもより熱いのね。
でも風が冷たくて気持ちいいの。

「そういえば、あのガキどもも明日から夏休みかあ……なんか、すんごく騒がしそうなんだけど、実際どうなのよ」
「にゃー？」

ましゅまろはうちに来てまだ日が浅いからそう思うのも仕方ないけれど、それほど騒がしくなることなんてそうそう多くはないの。
それに楽しいことはいっぱいだから、ママと空が夏休みになるのは涼莉もうれしいの。

「そうかい。まあ、あたしは自分に面倒がかからなけりやどうだっ
ていいさ」
「にゃあ」

ましゅまろはそんな風に言うけれど、きっとわかっているはずなの。
楽しいことから逃げられないってこと。

にひ。

しっぽを振って風をかき混ぜる。

空の高いところの冷たい空気が熱くなったしっぱをひんやりと冷やす。

すこしましゅまろをかじってみるの。

あまーいの、ね。

閑話：僕と僕らの終業日（後書き）

手の付けがたいシスコンをどうやって描けばいいのか。この主人公は本当、毎度毎度面倒臭いったりやありやしない！ 悩みの種です。そのあたりをもっとうまく周りと描けるようになったら、周りとの絡みももっとうまいこと描けるのかなあと思いつつ。

夏休みに入る前にひとつ挟みました。

次は涼莉の話にしたいです。ネコミミスク水口リで読者の胸を熱くさせる。そんな書き手にわたしはなりたい。

僕と姉さんと子猫の水浴び（前書き）

というわけでネコミミ少女メインの話。

書き手の意図するところより登場回数が増えてるな、この娘。

僕と姉さんと子猫の水浴び

ギンギラギンにさりげなくない強烈な直射日光が僕の体を焼き尽くす。

体が夏になる。過激なのはよろしくない。

……うん、いい具合に頭が茹だっているね。

「あ~~~~あ~~~~あ~~~~」

口から漏れる声が歪んで聞こえるのはそんな声が実際に出ているからかそれとも僕の耳か頭がおかしくなっているのか、さてどちらだろう。

「にやああああ……」

となりでへばっている涼莉は普段の猫の姿ではない。しかし漏れてくる声は猫のそれに似ていた。

いつもは元気にピンと立っている耳もへたりと垂れてしまっている。毛に包まれている事もあって暑さは僕の比ではないだろう。

本日夏休み初日。

時刻は午後一時過ぎ。

場所は自宅のリビング。

蒸し暑い空気を追い出すために窓は全開。差し込む日光が床を強烈に熱する。

救世主たるクーラーは……恐ろしいことに故障中だ。
これには深い深いわけがある。

?? 回想。

「むう、朝は、眠いよそらあ」

「はいはい、姉さんとにかく座って」

「むうううう……う。た……た……た……」

「た？」

「太陽が眩しい!!」

スッパアアアアンツッ!!!!!!

??回想終わり。

といったようなやりとりがあつて、姉さんの無意識発動の斬撃により我が家のクーラーは真つ二つだ。寝ぼけた姉さんがモノを斬るのは初めてのことなので、今後は何かしら対策を講じないといけないだろう。

クーラーを新調しようにも、それだけの出費を子供の僕らだけで判断することはできないということで、今姉さんに連絡をとつてもらっている。

ちなみに、父さんとそれに付いて行っている母さんは基本的に電話を通じる場合の方が少ないので、姉さん独自の方法で連絡をとっているらしい。らしい、というのはその方法を今までに見たことがないからだ。

そんなわけで姉さんは外に出ているわけだけど、僕らはその間待つしかない。気分転換をするようなテンションでもないし、外を散歩しようという気も起きない。

暑い。

めっちゃ、暑い。

「そらあゝ、あーつーいーのー」

「僕も暑いよ涼莉。そして僕にはどうしようもないんだ涼莉」

「うにゃあ……」

床に寝そべったまま汗をひたすら流し続ける僕と涼莉。ましゅまろ？ いつもどおりの顔でそのへんコロコロ転がってるよ。お化けだけに暑さ寒さは関係ないんだそうだ。もう逆恨みしそう。

いっそ友達の家に行けばいい、とも思うのだけれど、それも今日に限っては難しい状況だ。

まず夕陽だけれど、アレは昨日の晩から始まった母子大戦が未だに集結してないらしい。ローカルニュースでは今日の夕方には決着がつきそうだと言っていたので、それまでは近づかないほうが無難だろう。

……あの成績をたたき出した夕陽が圧倒的に立場弱いはずなんだけれどねえ。

そして綺月だけれど、こちらは今日明日は生徒会の仕事があるらしい。というのも、夏休みが明けるとすぐに生徒会選挙、体育祭、文化祭と業務が続くので、今の時期にまとめて仕事を片付けなくてはならないのだとか。

特に綺月は次期会長候補ということもあって、現会長から色々と引き継ぎ作業で忙しいようだ。

大地は？？ないな。うん、ない。

それ以外の学校の知り合いとなると、こちらの事情を知らせていない人ばかり。ヘタった涼莉はうっかり人化したり猫化したりするので、今のこの娘を背負って歩くのは結構リスクが高い。

ということで友達を訪ねるというのは詰んでいた。

いつまでこの灼熱地獄を味わえばいいのか。

そんな事を考えていると、玄関の扉んの開く音が聞こえた。

ばっ！ と、今までのだらけ具合が嘘のような俊敏さで僕と涼莉は起き上がり、玄関へとかける。

「姉さん！」

「ママっ！」

僕は走った。

これでこの世界が変わるのだと、そう信じて。
そして。

？？何がどうなってこうなったのか。

「空ー、なにぼーっとしてるのー？」

「いやなんていうかこう、色々と釈然としないものが」

「いいじゃないの。青い空、白い雲」

「にやははははっ！ つめたーいの！」

「そしてネコミミ白スク水ロリ少女」

「姉さん笑顔はいいけどヨダレはしまってくださいかな」

おととと、と口元を拭う姉さん。

最近、姉さんが涼莉を拾ってきたのは邪な感情が目的だったのではないかと邪推するようになってきた。女どうしても光源氏計画って成立するんだろうか。

まあさすがに姉さんが衝動と感情で舗装された人生を全速力で駆け抜けていると言ってもそれはないか。うん。僕としたことが変な想像をしてしまったねまったく。

いやはや恥ずかしい限りさ。

「そういえば空、また身長が伸びたみたいだね」

「あ、気づいた？ そろそろ伸びが悪くなってきたから夕陽にはさすがに届きそうにないけど、もう少し伸びそうだよ」

「そっかそっかー。うんうん。………：ゆうちゃんくらいの高さだとバランス悪いし、このくらいがちょうどいいよね。うん、計画通り計画通り」

「……？ 姉さん、どうかしたの？」

「なんでもないよーう。ほら涼莉ー、涼しいねー」

はてなんだったのだろうか。まあいいか。

それにしても。

良くこんな場所を使えたものだとつくづく関心する。

僕らが今いるのは住んでいるマンション？の、屋上の一角だ。

本来ならば屋上は鍵がかかっていて使うことのできないはずのスペースなのだが、一体どうしたのか僕らは現にここにいる。

そしてそこに大きめのビニールプールを広げ、中に水をめいっぱい注いでいる。スクール水着姿？？正確には白いスクール水着姿の涼莉は水を浴びてご機嫌だ。

なぜこんなところでビニールプールを広げているのか、正確な物事の流れは僕も知らない。

というのも、帰ってきた姉さんが『プールで遊ぼう！』と連れてこられた場所がここだったということなのだ。

ちなみにクーラーに関しては、父さんが目を付けていたものを買うとのこと。通販で設置まで頼んでしまうそうで、なんと明日の午前には届くらしい。

夕方を過ぎれば暑さも和らぐのでそれまでの数時間をしのげば僕らは暑さから解放されるわけだ。それを乗り切るための案としてプ

ールというのは至極まっとうだと思う。

ちなみに、市民プールという選択肢は涼莉がいるということで却下だ。

どうしても人目を引いてしまう容姿に加えてネコミミにしつぽだ。プール中の視線を集めることは想像に難くない。人見知りする所のある涼莉には見ず知らずの他人の無数の視線、というのは耐え難いものがあるだろう。

それに一緒に行くことになる姉さんというダブルパンチ。一緒にいる僕がどんな視線で見られることになるかと想像するだけで疲労感が……。

それらもろを考慮してビニールプールということだ。

ちなみに、別に家の風呂場でよかったんじゃないの、といったら姉さんに真顔で。

『空、昼間からネコミミ白スク水ロリ美少女とお風呂場で戯れる自分を想像しなさい。できた？ 感想は？』

『犯罪者がここにいて通報したくなった』

ということでは却下だけれど、よくよく考えたら別に一緒に入る必要はないよね。

あと白スク水ってのがポイント大幅加算してるよね。

よくよく考えなくても姉さんが白スク水着せたかっただけだよね涼莉に。

「……………やっぱり僕ハメられてないかなあ？」

なんだか色々納得がいかない。

「まあいいじゃない空。楽しいし涼しいでしょ」

そこに否定すべき要素は何ひとつとして存在しないので、素直に頷いた。

「それに涼莉も可愛らしいし。うん、かわいいかわいい」
「まあ……」

やっぱり否定要素がないので同意しておいた。

ちなみにこの場で水着を着ているのは涼莉だけだ。僕は短パンとタンクトップ。姉さんも白のシャツとスパッツという姿だ。

この前の買い物で買った水着を着るのかと思いきや、ふたりの答えは『もったいない』だった。

だから本当なら涼莉も濡れても構わない格好で遊ぶハズだったのだが、姉さんがこの格好を押し通した。

真っ白なスクール水着。姉さんが言うには旧スク水という種類らしい。スクール水着に新旧があったとはついぞ知らなかった。そう言ったら姉さんにすごい目で見られた。なぜだ。

ちなみに、なぜかしっぽに鈴をつけられていた。赤いリボンのついた大きな鈴。

なぜそんなモノを、と尋ねた僕と涼莉に対して姉さんは自然の摂理を語るような顔をして言った。

『様式美でしょ？』

相変わらずこの世界は僕の知らないルールに満ち溢れているらしい。

ぷかぷかぷかと水面に白い球体が浮かぶ。ましゅまろだ。

ましゅまろの物理法則の適用ルールがいまいちわからないな。壁にめり込む時もあるれば反射するときもある。こうして水に浮かべばその分の波紋が浮かぶこともあれば、降りかかる雨は全てスルーしたりもする。

基本人の目に見えないことは常に変わらないみたいだけれど。

そんなましゅまろに寄りかかって水に浮かぶ涼莉。

白いスクール水着が似合い過ぎていてなんというか言葉に出来ない。

ゆらりとしっぱが揺れてちりんと鈴が鳴る。青空に浮かぶ白い雲。それと同じ白い肌。青みがかった灰色の髪と耳、しっぱは水にしっとりと濡れて水滴が輝く。

きらきらと陽の光を反射した水面に照らされて、ほやっと柔らかな表情を浮かべている。見ている方の心までほっこり暖かくなる。まあ現在進行形で全身がじりじりと焼かれているわけだけでも。

「そーらー。空は入らないのー？」

「あー……」

僕は最初に適当に入って、あとは水をかけられたりした程度であとは涼莉をながめていた。

姉さんは下にジュースを取りに行っている。

「まあ」

ビニールプールにしては大きめのサイズとはいえ、僕と涼莉が入ると少々手狭だ。

まあ、いつぞやのお風呂ほどではないが。

……うんまあ。

ぶっちゃけ気恥ずかしいのだ。

いやいや、別に僕にやましい気持ちがあるわけではない。ただ年頃の青少年としてはどうしても気後れを感じてしまうのは致し方ないのではないだろうかと言言する次第。

何がいいんだ僕あ。

「僕のことは気にせずブッフオオッ!!」

むせた。

「げっほ! ごほ、げほ、ごほ、がはっ!!」

痛い痛い! 顔面がすごい痛い!!

なんかこう、顔面全体を一気にビンタされたようなそんな痛み。かつ、鼻と口に大量に侵入してきた水が呼吸器を責め立てる。

「な……けほっ! い、一体何が……」

しばらくむせて、ようやく収まった。

一体何が起こったんだ? 唐突で訳がわからなかった。と。

我が身を見下ろす。

ビッショビッショに濡れていた。

「……ふむ」

涼莉を見やる。

プールの水が半分くらいに減っていた。

うん。

「……あのう、涼莉さん？　なぜ突然このような凶行に？」
「っーん」

拗ねていやがる。

僕が遊びに入ってこないのだから拗ねていやがるこの猫娘。

というか分かってているのかな。君の本気を食らえば僕なんて障子紙の如く一瞬でボロボロになるんだけど。

事実、今水をぶっかけられたという事は理解できたけれど、モーションはまったく見えなかった。衝撃なんて水面にダイブした時のような衝撃を受けたんだよ？

「……涼莉。あのねえ、さすがに僕もこれはちよつと許しがたいというか」

ため息をついて、涼莉をみる。

……ネコミミがぴたりと頭にはりついていて。

一応人型の時は横にも人間の耳が付いていて、そちらも機能しているらしい。どちらを使うかはオンオフで切り替えられるそうだ。つまりまあ、ネコミミをペタリとやっても本人的には特に影響はないわけだ。

つまりは『聞いていませんアピール』でしかないわけだ。
うん。

「涼莉さん。涼莉？　ねえ涼莉ってば」
「っーん、っーん、っーん」

ぷちっと。

僕の中で何かが切れた。

「涼莉こら人の話を聞きなさい！　聞き分けのない子どもじゃないんだから！！」

「に、にゃああああっ！！」

とびかかる。

耳を無理矢理立てようとすると逃げるので足を捕まえた。

あ、痛、痛い痛い。ちよっと、顔面は無し顔面蹴るのは無しだつてばー！！

思わず手を放す。

すると涼莉、ネコミミを寝かせるだけでなく両手の平を頭の横につけてこっちでも話し聞きませんアピールを開始。

オーケイ、よっぽど僕と戦いたいようだな。

いいだろう僕の本気を見せてやる！

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！！！」

二秒で負けた。

足の指先でみぞおちを踏みしかれて。

いやこれ本当に痛いから。シャレになってないから。しかも涼莉が慎重に手加減をしているのが表情でわかってプライド辺りも現在進行形で同時に踏み潰されている。なにこれ敵に氣遣われるってすげえ落ち込むね。マンガとかで手加減された人が滅茶苦茶怒る理由がわかったよ。

しかし。

僕もただでやられるわけにはいかない。

ふふふ、これでも、中学校の技術科目の先生から別方面の技術も教えてもらっているのだ。

あ、ダメ、そんな自慢話考えてたら意識超ヤベェ急いで対処しないーとっ！！

「に、にゃっ?!」

ぐりん、と。

手と足でそれぞれ涼莉の両足に力を加え、体軸をずらし、教わった要領で涼莉の力を振じ曲げる。

丁寧で、それでいて、恐れず、大胆に。下手にためらうと逆に涼莉の足を傷つけてしまいかねない。

「よい——しょ……つと!!」

「うにゃー!!」

ぱしゃあっ!! と音を立ててその体を引き倒す。

ふははははどうだ見たかかよわい人間のかよわい男でもこうして圧倒的強者である少女に打ち勝つことができるのだ!!

……なんだろう、凄まじく情けない気分になってきた。
ともあれ。

「どうだ見たか涼莉! さあおとなしく僕の話の話を聞くんだ!!」

「にゃあー! もう、空のばかあー!!」

てんやわんや。

やんややんや。

びしゃびしゃ。

ばたんばたん。

ビニールプールの中で水をバシャバシャと弾かせながらああでもないこうでもないかと暴れ回る。

あれ、なんだか楽しくなってきた。

「ふははははは! もう諦めろ涼莉!!」

「に、にゃああああっ!!」

「—————楽しそうね、空」

声に温度があるのなら。

それはきつと絶対零度の声だった。

姉さんだ。

姉さんですよ。

姉さんに決まっています。

僕の耳が姉さんの声を間違うはずも聞き逃すはずもないし、僕の目が姉さんを見間違うはずも見逃すはずもない。

だから、そこにいるのは姉さんなんです。

ええと。

その背後に魔王もかくやというオーラが漂っていることを除けば。

屋上の入り口。

ごうん、と音を立てて閉まる扉の前に。姉さんが直立不動で立っていた。

「ねえ、空」

ずん、と足が踏み出される。

びくり、と僕の両肩が震えた。汗がドバッと飛び出す。

「何を、しているの、かな？」

「え？ ええと何ってその、涼莉があまりにも言うことを聞かないから、これはもう力づくしかないかなあと思——ひいつ？！」

ぎらん。と姉さんの瞳が光る。え、なにそれ人間にできるエフェクトなの。

「そう。言う事を力づくで。ふうん……どんな事をさせようとしていたのかしら、そんな格好をして」

「そんなって……え？」

今になって自分がどんな体勢になっているのか自覚した。

さあて解説いたしましょう。

さっきまで自分たちでもわけのわからない状態になって騒いでいたわけだけど、僕の目的は涼莉の両手を頭から離してネコミミもしっかりと立てることだ。要は両手を拘束して頭を掴まなくてはいけない。

そうして冷静になって今の僕の状態を確認してみようじゃないか。まず事を優勢に運ぶためにはポジションが重要なのは諸君も理解してくれると思う。相手より優位な立ち位置——それも圧倒的優位性を手に入れることができるポジションはどこか判るかな？

そう。マウントポジションだ。

僕のおしりの下には涼莉の胸が当たっている。

まあ待って。待って。

既にアウトの雰囲気だけれどまだ話は続くから。お願い聞いて。次に、僕はその状態で右ひざと左手を使って涼莉の両腕を固定し

ている。そして今まさに、右手で涼莉のネコミミを立てようとしていたわけだ。さて、こんな体勢になると、どうしてもお互いの距離が近くなる。ぶっちゃけ涼莉の顔がすぐそこにあった。

ちなみに涼莉さん、ちよつと涙目である。

待ってってば。まだ続きがあるんだから。だから最後まで聞いて。

とっくにメーターはレッドを振りきってアウトどころかコールドゲームの様相を呈しているけど、とにかく聞いて。

極めつけは、暴れていた事による二次災害だ。

みんなも良く知っているように水着というのは柔らかい素材で出来ている。そして動きを阻害しない様になっているけれど、それは反面、迂闊なことをすると着衣がずれてしまう事があるということでもあるわけだ。

うん、大体わかったよね。

そして僕の絶望もだいたい分かって欲しいかな。

涼莉のスクール水着の肩紐がずれていた。

二の腕の半ばでひっかかっている、胸元がかるうじてR-18タグを回避するように隠れていた。

白い肌が顔になり、なんというか、年齢以上の色気を感じさせる。涙を浮かべて赤く染まった顔が、それをまた助長していた。

さあ皆さん考えて欲しい。

スク水少女を組み敷き。

顔をぎりぎりまで近づけ。

あまつさえ水着をはだけさせる。

無論、その被害にあった少女は涙目だ。

こんな事をしている人間を、一般的になんて呼ぶのか、知っているかな？

そう。

「待って姉さんちょっと待って僕もねこれはわざとじゃなくてそう偶然って言うかだからそのね」

「犯罪、厳禁——っ！！」

スパカアアアンッ！！！！！！と。

どこからどう見ても犯罪者な僕は、姉さんの一撃によって意識をぶった切られた。

今回のオチというか反省というか自己嫌悪というかもうね

新調されたクーラーの前でぼーっとする。

あれ以来、涼莉は微妙に距離をとっている。ご飯を上げる時もち

よつと距離がある。悲しい。

姉さんはいつも通り。いつも通りだけれど、僕が涼莉に近づくとじっと見ている。明らかに警戒監視している。怖い。事情は話して分かってくれたと思っていたのに。

まあ、仕方ない。

一度失った信頼を取り戻すにはもう努力しかないのだ。うん、頑張ろう。頑張ります。

ころころころ、とましゅまろが転がってきた。

ああ、僕を慰めてくれるのか、君は。

ううううう、ありがと――、

「……へっ」

ころころころ。

転がって視界からフェードアウトするニヒルに笑った白い球体。

……。

泣いた。

僕は泣いた。

僕と姉さんと子猫の水浴び（後書き）

出てくる割に大抵被害者じゃないかと、投稿直前に気づきました。
次出すときはもっと活躍させよう……。

ちなみに今回書いていて一番楽しかったのは主人公が追い詰められているシーンです。

本当は本当に何事も無く終わるだけの話にするつもりだったのに。

僕と姉さんと金色の魔法少女（前書き）

最近の魔法少女は、バリエーション豊かですね。

僕と姉さんと金色の魔法少女

うわあ。ハメられた。完全にやられたよこれは。

僕はロッカーの中で頭を抱えた。

最初から嫌な予感是一直にたじやすまないだろうとは思っていた。だから覚悟はしていたし油断もしていなかった。けれどそれでも状況の全てを予測し予見し対応し対処するなんてこと出来るわけがない。中学三年生にそんな事を求められても困るのだ。けれど、そうできなかったから今という状況があるわけで。

ああもう、叫びたい。

そう思うけれどそんな事出来るはずもない。
だって。

「ちくしょう、あのガキどもどこへ消えやがった!!」
「探せっ! 何としても見つけろ!!」

荒々しい男達の声が外から聞こえてくる。

唯一の光源はロッカーの扉の薄い切れ込み。そこから外を覗くことはできないから想像しかできないけれど、きっと大慌てだろう。どたどた、がたがたと落ち着かない音が響き、声は一秒ごとに熱が上がってゆく。

彼らの標的は、僕ら(・・)だ。

そうしてしばらく待っていると、この部屋の人たちは全てどこか

へ行ってしまったのか、静かになる。

まあ、さほど大人数ではない上に広い施設だからねえ。ひとつの部屋をしらみ潰しに見ていくと、必然的にひとつの部屋に割く時間は短くならざるを得ない、ってところかな。

実際ロッカーの中を探られてたら危なかった。まあ、それは万が一にでもないことは分かっていたのだけれど。

「空、もういいよ」

「うん……ふう、空気が美味しいや」

彼女の声に導かれるように外に出る。視界が急に広がって光に目が灼かれる。その視界の真ん中に、彼女が立っていた。

アリア・イリス・リリス・パンドラ。

巷では魔法少女マジカルリリスとか呼ばれている。

日本人ではなく異世界人でもないが、かと言ってこの世界の人間かという若干の修正が必要な、そんな出自を持つ彼女はそれにふさわしい能力を有していた。いやまあ、魔法少女的な力なんですけど。

年齢は僕よりひとつ歳上で姉さんと同じ滝空高校の一年生。さらには姉さんと同じ部活である。

肌は白く髪は金髪というべきなのだろうがむしろ黄色に近い。軽くウェーブのかかった髪は腰に届くほど長く、ところどころに枝毛が目立つ。

身長は女子の平均よりやや高めでスタイルも良い。モデル体型といえは分かりやすいだろうか。

そんなはつとするような彼女だがいかんせん表情と感情の起伏がとにかく小さい。

藍色の瞳はいつだって眠たげで、質問をすれば若干の間が開くどころかそのまま寝てしまうことさえある。

そんな彼女だが魔法少女としての活動の際はとにかく容赦がないことで有名で正義の味方であると同時に破壊の権化とさえ言われている。

幸いにしてその正体は知られていないけれど知られたら感謝状より逮捕状が先に出るだろう。

リリスは地味な私服姿。そして僕も私服姿。夏休みなのだから当然だ。

で。

なぜ夏休みに僕らが揃ってロッカーに隠れなければならないのかというと、実に単純明快な理由がある。

「しかし、夏休みそうそう銀行強盗に出くわすなんて、なんて運の悪さだ」

「……きつと、空のせい」

「僕のせいにされても困るよっ」

まあ、そういう事だ。

夏休みに入って、いつもより家にいる時間も長いしどこかに出かける機会も多いだろうと、今後の予定を立てるためにもと残高を調べたりその他色々の処理のために銀行に来ていたのだ。

ちなみに姉さんはさらに面倒な両親への夏の予定の聞き出しなどを行っている。いやほんと、世界のどこにいてもわからない通信手段さえ持ち歩いていない相手とどうやって相談してるのか。

で、だ。

銀行へ来ていた僕は、そこでリリスと出会った。彼女もひとり暮らし。実家から振り込まれた生活費を引き出したりと色々あるらし

い。

ああ、そうそう。昔ながらの魔法少女的にありがちだが、彼女はひとり暮らしをしている。短期バイトも暇なときにこなしているように、生活はそれなりに安定しているらしい。

そこで夏の予定や他愛ない世間話をしていると、突然待合室の席にすわっている人たちが数人立ち上がり、銃を手にして言った。

『騒ぐな！ 今すぐその場に伏せろ！！』

と。

まあ、映画などでよく見るパターンだ。

で。

比較的階段の傍にいた僕らだけれど、指示に従おうとする僕をリスはいきなり引っ張って二階へと連れてきて、職員用の部屋——おそらく更衣室らしい——に押し入り僕をロッカーにぶち込んで自分もその隣のロッカーに隠れて魔法を使って見つからなくして隠れた、というわけだ。

ちなみにロッカーにぶち込まれた際に鼻をしたたか打ち付けたけれど命に代えられないので怒ってなどいない。決して。

そもそもリスがいきなり走りだしたりしなければ逃げる必要もなかったハズだけれど、今更なので怒らない。怒らないってば。

さて。それにしても銀行強盗か。

「さすがに銀行強盗の現場に遭遇するのは初めてだなあ。ていうかこの街でそんな物騒な事件あまりないよね」

「うん。わたしも、初めて」

「……で。なんでいきなりこんなところに連れてきたのさ」

職員用の更衣室は狭い。

けれどそれ以上に息苦しいのはこの建物の雰囲気ですでに日常から乖離してしまっているせいだろう。

「うん。さすがにちよつと、驚いて、つい」

「ついでメチャクチャ目をつけられてるよ僕らいきなり命の危機だよ?！」

「てへ」

「可愛らしく舌を出さないで！」

つい、であんな行動されてはたまらない。

「とにかく、お仕事。空も手伝って」

「ええ……? 仕事って、アレだよね、マジカルリリース」

こくこく、と相変わらず眠たい表情で頷くリリース。

「いやいやいやいや。相手は銃を持ってるガタイのいい大人の人達だよ? 僕なんか機関銃を持ってもまともに立ち向かえないよ」

「……そうかな」

「そんな心底疑問みたいな顔をされても」

僕は生来喧嘩ごととかは苦手なんですよ、リリース。

それなのにしょっちゅう命をかけたやりとりに巻き込まれるのだから僕の運命は呪われているのではなかろうかとさえ思う。

「……………またまた。空すごく楽しそう。いつも。よく泣くほど笑ってる」

「泣くほど笑うことと泣き笑いを一緒にされたら困るんですけど」

成分が同じでも意味が全く違う。O2とO3みたいな。
というかね。

「というか相手の銃火器以上にリリースから身を守れる気がしない」

「……？ 空は、味方」

「うん、そうだね」

「……味方には、攻撃しない」

「そうだね、直撃はしないよね」

余波がとんでもねえんですけどね。しかもリリースの攻撃はなんというか、エゲツナイものが多い。

単にそういった攻撃手段しかないのかと聞いたことがあるけれど『そんな事はない』と天に向かって直径十メートルほどの砲撃を放ったので、まあそういう事も出来るらしい。やめてくれと土下座して頼んだけど。

ちなみにその砲撃を地上に向かって放った場合、最初の一秒で半径三十メートルが原子レベルで分解し次の四秒で音速の二十倍の爆風が広がり始め最後の三秒で破壊範囲を収束、空間を削り取るという悪夢のような結果を生み出すらしい。

試しにでもそんな物騒な攻撃を放たないで欲しい。

ちなみに、その日某国の軍事衛星が謎の攻撃を受けて完全消滅したらしい。

未だに原因不明である。

「で」

「……うん」

「リリースはあいつらをぶちのめすの？」

「ぶちのめす、だなんて……。ただ、こぶしでわかりあう、だけ」

彼女の魔法少女スタイルはとても少年漫画的だ。

「それに、急いだほうが、いい」

「え、なんで？ ああ、まあそりゃあ、用事を終えた犯人たちがなにするかわからないしね」

そういった僕に、リリースはふるふると首を横にふった。

そうじゃない？

ではどういう事だろうか。

「翼が、来る」

「――――、そう、か」

そうだ。それはそうだ、当然だ。

今日僕がここに来ていることは姉さんも当然知っている。姉さんに言われてやってきたのだから。

だから。

もしこのことがニュースになって……いや、もうなっているだろう。

だからタイムリミットは、姉さんがテレビなりラジオなりで、この事件を知るまで。それまでに片付けないと。

「何がどうなるか、わからないよね」

「うん」

なるほど。なるほど。

これはたしかにまずい。

相手の言うとおりになんてしている場合ではなかった。リリースの判断は正しかった。

姉さんが、僕がこんな危険なことに巻き込まれていると知ったときは何をするのか。

正直に言おう。

僕にも、わからない。

何が起こるのか、起きてしまうのか。何ひとつ、予想ができない。ただわかるのは。

ただでは、終わらないということだ。

と、いうわけで。

僕はその場でリリースに背中を向けた。
すると。

「……チェンジ・スタイル・オグジュアリー」

その声と同時に、きいいいん、という効果音。黄金の光が溢れる。
そして。

ちゃちゃらっちゃたゝ、ちゃちゃちゃちゃゝん、ちゃーちゃーち
やーちゃー

だららら、だらっ、だらったたらー

でーでーでー、ででー

きゅいーん、ででっ

じゃんっ

というミュージックがどこからともなく流れて、消えた。

……毎度ながらどこから流れてくるんだろう、あの音楽と効果音。謎だ。

そうして、振り返る。

「魔法少女リリカルリス参上ー」

相変わらずのローテンションのまま、リリスが両手を上げる。

しかしながらその姿は先程までとはまるで違っていた。

全身にまとう衣装は先程までの地味な私服姿から一変、フリルと宝石をふんだんに使った華美なものへと変わっていた。

メインカラーは髪の色を意識した黄色。白と赤がところどころにアクセントで入っている。

胸元を大きなリボンが飾り、不思議な輝きを宿す藍色の宝石が中央に嵌っている。

髪型は宝石のついた髪留めで後ろで左右に分けており、ウェーブはより大きく、紙の枝毛も消え去り艶やかな光を放っていた。

また、杖ほどの長さの柄を持った宝飾の長剣を両手に抱えている。相変わらず眠たそうな表情のままだけれど、先程までとは全く印象が変わっていた。

これぞアリア・イリス・リリス・パンドラのもうひとつの姿。魔法少女マジカルリリスである。

そして先程の光と音楽は変身シーンというわけだ。

今まで見たことはないけれど、やっぱり裸になるらしい。まあその裸も光に包まれて見えはしないというけれど。

一応。ね？

「さあ、行こう、空」

「……ああ、うん、そうだね」

毎度釈然としない魔法少女の生体に首をかしげながらも、その意見に賛成し部屋を出よう——とする前に、扉が外から開かれた。

「つたく、何だってんだ今の馬鹿みたいに明……る、い、音楽……は……」

「あ」

「え？」

いかにもガラの悪そうな男が、長大な銃を肩に担いで入ってきた。その眼の前にはリリスと、後ろに僕。

突然の事にお互いに黙りこんで——しかし最も早く復活したのは、入ってきた男だった。

「て、てめえらさっきのガキ——」

「あ、だ、駄目だ!!」

僕は制止した。

まずい、刺激してはいけない。

僕は声をあげようとした彼を助けようとして——届かなかった。

「マジカルスプラッター」

きゅぴゅん

リリスが腰に手を当て。
可愛らしい音が響いて。
どかん、と轟音が響き。

扉の周囲の空間ごと、入ってきた男が吹き飛ばされて反対側の壁を突き抜けた。

あとには、星型の光と花のエフェクトが弾け。
びしゃあつ、と赤い液体と赤い物体が飛び散る。

あ。

やべ。

もう吐きそう。

口元をおさえる僕。

一瞬でホラー映画も真っ青の光景をつくりだしたりリスは、ちょっと首をかしげて。

「……これは予想外」

「ぼくはもう限界だよ」

「仕方ない。さっさと次行こう」

「……………うん、そうだね」

まあ、愚痴っても仕方がない。最初から覚悟は出来ていたし。
すたすたと歩くりリス。足元の色々な物も気にしない。

僕はため息を付いて、なるべくモノは踏みつけないように注意しながらその後ろを付いて行った。

まあ。

あのくらいなら、二十分程度で復活するだろう。

次の強盗犯はすぐにやってきた。

当然だ。爆発音を聞けば何かが起こったのだとすぐに分かる。

「おい、今の音は一体……て、てめえら?!」
「マジカルトラウマボックスー」

可愛らしいポーズとともに剣がくるくると回転。そのまま床に突き立てられる。

同時に、ファンシーな柄をした箱が唐突に現れ、強盗犯を閉じ込めた。

「お、おいコイツは一体なに……う、うわあああああつ! や、やめろ、なんだこれ! ち、ちくしょう!! うわああああん! かあちゃん、かあちゃああああん! もう悪いことしねえよお、許してくれよお! うわあああああああああああああああつ! !!!!!!!」

「……………だいのおとなが悲痛な泣き声を」

「ん」

リリスは満足そうだった。

その後もリリスは順調だった。

「マジカルワームプーラー」

「マジカルブレインクラッカー」

「マジカルボルケーノー」

「マジカルボードスクラッチー」

等々。

どれもこれも受けた相手の反応はだいたい同じだ。

「な、なんだこれ！　なんだよこれえええ、ちくしょおおお、うわあああああ！！！」

「お、おおおおおあああっげげげえおおおうぶぶうつぶぶぶぶぶ！！！！」

「あああ、誰か、だれか助けてくれ！　いやだ、こんなのいやだああああ！！！」

「耳が、耳が、頭が、嫌だよお、誰かあああああああ、ちくしょおおおお！！！！」

……………、毎度、思うのだけれど。

「あの、さ、リリース」

「……なあに？」

「もうちょっと、こう……なんか優しい対処法は、ないの？」

「……？　どれも優しい。命にべつじょうはないし、後遺症も残らない」

そうかもだけど。

どちらかというと見ている方の精神にとんでもない負担がかかる。いや、どれもこれも見た目はファンシーかつリリカルでとても魔法少女っぽいのだ。星の光が舞ったり、花びらの渦が踊ったり。

ただいけません、どれもこれも効果が泣ける。いちいち説明するのははばかれるけれど魔法の名前から想像できる通りだ。

ただ、それでいてある程度時間が経つと全て元通りになるので、なるほどたしかにかけられたほうは安全だろう。

今も背後から悲鳴が聞こえているわけだけれど、魔法の効果時間中はファンシーな音楽が流れているのでなんとかシニールだ。

「……空がどうしても、というのなら、ちょっと趣向を変えてみる」
「本当？　ありがとう、助かるよ。あ、でもこの前みたいな魔砲はなしね」

「大丈夫。あれは戦略級」

分類に戦略級とかあるんだ。
一気に殺伐とし始めたな。

「……ちなみに、今まで使ってるアレは、何級？」
「あれは遊技用」

……どんな死亡遊戯がなされているんだろう、魔法少女の世界は。

そうして、二階から一階へと降りる。
二階からは相変わらず悲鳴が聞こえてきていた。
そのせいか、一階は妙にしんと静まり返っていた。

そして、僕らが姿を表す。

強盗の男たちがさっと銃を向けてきた。

「くっ……ガキどもだと？！　一体どんなヤツが出てくるかと思っ
たら、どうなっていやがる！　しかも、こんなワケのわからない格
好をしたガキだなんて」

おそらく中心核の男なのだろう。ひとときわガタイのいい男が忌々

しげに僕とリリスを見ていた。

と、そこで、人質になっていたらしくひとかたまりに壁際に並べられていた客、及び職員がざわつきだした。

「ね、ねえ、ちょっとあの女のコ、もしかして……」 「ああ、そうだ、間違いない」 「嘘、俺実物なんて初めて見るぜ」 「やっぱり」 「じゃあ」 「そんな」 「ああ」 「でも」 「まさか」 「やっぱり」

「ああん？ おい、こいつらが何だって言うんだ！」

男が初老の男性に銃を突きつける。

男性はひたいに汗を浮かべて、それでも僕らの方を——正確にはリリスをチラチラと見て、答えた。

「あ、い、いえ。わたしも初めて見たので、確かなことはわからないのですが、もしかしたら」

口をつぐみ、声を震わせて。

「魔法少女、リリカルリリス、ではないかと」

「魔法少女だあ」

胡乱な表情を見せる男に向かって、リリスが三步、前に出た。

「……そう」

くるくると、剣を回す。

「わたしこそ、魔法少女リリカルリリス」

ずざ、と、床に突き立てる。

「邪悪にふさわしい鉄槌を下すために今こそ——惨状」

ちょっと待て今何か字がおかしくなかったか。
と、ツツコミを入れるまもなく。

「う、うわあああああつ!」「そんなつ!」「誰か、誰かここから
出してくれええ!」「最悪だちくしょう!」「うわあああん」「
いやあああ!」「ち、ちくしょうつ、今日は厄日か!」

等々。

うん、まあ。

「……大歓迎」

「いやリリス違うよあれ怯えてるんだよ!」

照れてる場合じゃないよ! もうどっちかっていうと敵側のポジ
ションの反応受けてるからね?!

「それじゃあ、みんなの期待に応えて」

「いやだから……うわあ人質のみなさんの悲鳴がアップしましたよ
!」

と。

あぶないな。

僕は足を踏み出して、リリスの襟首を掴んでこちらへ引き寄せた。

ぱん、と乾いた音が響いてリリスの前髪がいくらか弾ける。

「ちっ!」

三人のうち、左にいた男がリリスを狙ったのだ。

「空、ありがとう」

「まあリリスがいなくてこの場がどうしようもないのは事実だからね」

リリスひとりなら、警察が来るまで待つという選択もあったのだからけど。

あいにくとこの場には僕がいるのだ。僕という時限爆弾が。そうそう悠長な真似はしてられない。

「それではまず、あなたから」

リリスは剣を……投げ捨てたっ?!

そのまま目にも留まらぬ速さで、今リリスを狙った男の懐へ飛び込む。

男が驚愕の表情を見せた、次の瞬間。

「マジカルドラゴンスープレックス」

ゆるい声と同時に男の背後に回り胴に腕を回してつかみ。

——ぶんなげたああああっ!!!!!!

どごおおおおんっ!!!!!!

と、音と衝撃波が走り、天井と床に蜘蛛の巣状のヒビが入る。

肩まで床に埋まった男は直立の姿勢のまま硬直していた。

それを一瞥もせず、リリスは両手でぱんぱんと服についた埃をはらった。

カンカンカアアアン！

どこからともなくゴングが鳴った。ぐっとリリースが拳を突き上げる。

「あ、あああ」「おおお」「うお——」

うおおおおおおお。

僕が。

人質が。

そして強盗犯が。

その劇的な勝利に湧き上がる。

歓声上がり、みなが両手をふりあげ、拍手の雨を降らせる。

そう。

スポットライトを浴びて、その中央に立つ少女こそ、伝説の勝利を飾った魔法少女マジカルリリース——！！

「つて、違ええええええっ！ え、なにいまの、なに、わけわからねえぞゴラァッ?!」

強盗犯が叫んだ。

僕らもはっと正氣に戻る。

「……マジカルドラゴンスープレックス。相手をプロレスの雰囲気
に引き込む魔法」

「な……に……」

「この技に魅せられたモノはその雰囲気には抗えない。どんな状況で

もその勝利を祝うという魔法」

「く、くそっ！ な、なんて魔法だ……」

強盗犯があごまで流れた汗を拭う。

人質たちもその恐ろしい効果に言葉を失い、対峙するふたりの強盗とリリースを凝視していた。

僕もその光景に魅入られ、言葉を失い……いやまてなんかおかしいだろこの光景。

たしかに今までの魔法とは毛色が違うけれどめっちゃくちやあほっぽいぞ。

ノリよすぎだろみんな。

そうこうしているうちにリリースは剣を拾って、構える。

「さあ、あなたたちの悪もここまでよ」

「ちっ！ だが……」

男達がさっと銃を向けたのは、人質たちの方だった。

銃の標的にされた人たちはさっと顔色を青ざめさせる。

「……これでどうだ、魔法少女」

「やめたほうがいい。そんな事をして、時間が過ぎるだけだから」
「……うるせえっ！ てめえみたいなふざけたヤツに、邪魔されてたまるか！！」

リリースはやれやれとため息をもらす。

剣を投げると、床にあたったそれは黄色い光の泡になって消えた。

そして。

「……翼、やりすぎないで」

「うん、わかってるよ」

斬撃の雨。

言葉にすると陳腐だけれど、目の前にそれが現れるともはや言葉も出ない。

音もなく降り注いだそれが男ふた리를通りすぎると、次の瞬間。

「う——」

「——な」

肉体以外の全てが微塵に切り裂かれていた。

銃も服も靴も全て。

必然。

「き、きゃあああっ!!!!」 「ちょっと、汚っ!」 「あら小さい」

女性の悲鳴。しかしこれはまあなんというか、みたくないものを見てしまったがゆえのそれ。

「う、うおおおっ?! なんていきなり服が、銃がああああっ?! はっ?!」

「マジカルー」

完全に状況を喪失したふたりに、リリスの拳が迫り。

「雲を突き抜けフライアウェイ」

アッパー気味の拳がふたりの腹に。

それを受けてまるで花火のような勢いで天井を突き破って空へ昇る強盗犯たち。

そして衝撃でガラスが割れて机がひっくり返り看板が落ちる。

悲鳴。ああ無情。

やがてすべてが収まって。

天井を見上げていたリリスがこちらを向いた。

相変わらず眠たげな藍色の瞳が、どこか自慢気に。

「ぴーす」

「まわりの惨状を見ろっ！！」

リリスの評価は今後も変わらないだろう。

今度のオチというか後始末的な何か

「まったく、大変だったねー、空」

自宅にかえって、せっかくだからとリリースを晩ご飯に招待した。
食卓で姉さんがおもむろにそんな事を言ったのは、今日の強盗事件がニュースで流れた時だ。

「まあリリースが一緒だったから助かったよ」

正直、彼らが人質をどう扱うかはわからなかったわけで。
しかし。

「あの銀行、再開できるのかな」

「……大丈夫、マジカルボンドで直してきた」

「まあずいぶんと地味な作業をしていたけどさ」

あの後。

破片を適当に集めて謎の液体をふりかけて、穴の開いた天井やら
ヒビの入った床やらを直して帰ってきた。

犯人も無事警察に引き渡されたしとりあえず一件落着だろう。

まあ。

「犯人、大丈夫かなあ」

「問題ない」

そうかな。

捕まえに來た警察官に泣きついてすがりついていたけど。

ああ。

バラバラになった人は無事復活したらしい。

マジカルスプラッター。スプラッターな目に会うだけで、あとできちんとどんなケガも回復する。

まあその間ずっと意識があるらしく。

「リリースはなんて言うか、本当、もうちょっと魔法少女っぽいやり方を勉強したほうがいいよ」

「……？　とっても、魔法少女」

いやまあ。

見た目はそうだしエフェクトも小道具も基本的にそれっぽいけど。

「魔法少女はプロレス技をかけたたりしない」

「……でも、関節技はかけてた」

リリースが何を参考にしているのかはわからないけれど、それは多分一般的な魔法少女ではない。

「もっとこう、一般的なやつがいいと思う。まあ、僕もどんなのがあるのかはあまり知らないけどさ」

「そうだねー、わたしも魔法少女のマンガはみないからわからないけど、手品の幅を拡げるのは面白そうだねっ」

姉さんはリリスの魔法少女を手品だと認識している。光璃さんの超能力も同じく。

……どっからどうみてもその解釈は無理があるだろ。

「……………。考えてみる」

こくこく、と頷くリリス。

これで少しでも魔法少女チックな魔法少女になってくれれば。

……………そう思っていた僕が馬鹿だった知るのは、まだ先の話。

僕と姉さんと金色の魔法少女（後書き）

思ったよりも書きやすかった魔法少女マジカルリス。

僕と姉さんと聖魔の大いなる戦い（笑）（前書き）

ロクデナシの大人たちに絡まれた子どもはたいいてい苦労する。

僕と姉さんと聖魔の大いなる戦い（笑）

夏の夕方。

酷い夕立がバケツをひっくり返したような雨をもたらしている。けれど教会の中はそれでも静かで。

それよりも静かで深く激しい意志の攻防が、全身を叩きのめしていく。

「感情でも理性でも、特にあなたを否定するつもりはないんですよ」

「はぁん、なかなか面白い冗談じゃない。なら、その手に持っている物騒な匂いのするゲテモノをさっさと捨てて欲しいところだね」

「そうは言いますがけれども、私の魂に刻まれた役目といえますか。ええ、不本意ながら」

「とか言いつつ、楽しそうだけど」

向い合うふたり。

ぎしぎしと空気が悲鳴をあげる。ふたりの放つ圧が物理現象さえ引き起こしている証拠だ。

僕らは教会の前から三番目の椅子に並んで座り、その威圧感をうけて動けずにいた。

なぜちよっと荷物を届けに来ただけでこんな目にあっているんだろうね僕。

さて。

「……何がどうなって、こうなっているんですか？」

「いやははは、それがもう、僕にもなにとも」

まあ性質が正反対だしそれが原因なのかなあ。

……ていうかこのふたりが正面からぶつかった場合半径数十キロがヤバい気がするんだけど大丈夫なのかなその辺。

と、聞いたら。

「気をつけますよー」

「ま、気にしてあげるよ」

とまあ実に頼りがいのある返事をいただいて胃がキリキリと痛み出した。

「というかですね、原因は何ですか原因は」

正直この人らが正面衝突したらその瞬間僕は粉微塵に砕ける自信がある。それはとなりの神父さまも同じだろう。この人防御力紙だし。

「ああ、ほら、あれですよ、あれ」

「あれ？」

神父さまの指差す先。

説教台の上。

そこに、小さな箱がちよこんとのっていた。

それは派手すぎず地味すぎず暖かさを感じさせるデザインの箱だった。

ええと、なんだか見たことがあるぞあの箱。

そうだ、あれは確か……。

「金翅堂ですか？」

「ええ。それもオリジナルシュークリームがふたつ」

おお、それはすごい。

金翹堂とは小さい店構えながらも確かな味と豊かなメニューで人気を集める洋菓子店だ。

店長はなんと中学卒業後海を渡り、ヨーロッパ各地を洋菓子武者修行してきた猛者だという。一時期マフィアもしていたらしく腕の銃創が痛々しいものの、その指先は繊細かつ大胆な味を生み出し続けている。

そんな金翹堂の中でも特に人気なのが、オリジナルシュークリームだ。独特の製法の生地は柔らかさと軽い歯ごたえが同居しており、なおかつ降りかけられたクッキー生地が仄かな甘味を与えている。クリームもまた弾力がありつつも舌の上に載せればとろける柔らかさとなっており、甘すぎずそれでいて深い味わいが感じられる。

……僕は別にフードレポーターではないんだけどな。

そんなわけで大人気だが一日に作ることの出来る量が限られているオリジナルシュークリーム。それが二つとはどれだけの競争を勝ち抜かなければならないのか、僕はちょっと想像もできない。

僕が一度だけ食べたあの時だって、たまたま店長を助ける事になったことに対するお礼だったわけで。普通に手に入れようと思うのなら努力と運が必要になる。

なるほど。

それを賭けてあのふたりはあんなに険悪に……いやまておかしい。

「ふたつあるんですね？　だったら分ければいいじゃないですか」「ええ、私もそう言いましたが、どうもあのふたり気が合わないようです。自分がふたつ食べたいというより、相手にひとつもあげたくない、らしいのですよ」

「うわぁ」

ガキか。

リアさんはそれなりに歳生きているだろうに。

「気に入らないヤツは気に入らないんだよ。年齢なんか関係あるか」
「心を読まないでくださいっ!! ……というか、あのシュークリーム、誰が買ってきたんですか?」

「私が。リアさんがシスターにおはなしがあるとのことで、私がお茶請けにと買いに行ったのですよ。運のよいことにふたつだけ余っていました、それで買ってきたのですが……」

まさか気を利かせた心遣いが自分の教会の最大の危機になるとは彼も思っていなかっただろう。

「喧嘩をするのなら、せめて服は破けて欲しいところですが……」
「あんたなんで神職やってんだ、なあ」

存在自体からして歯向かってるんだからせめて中身ぐらいしっかりしようとか思わないんですか。

思わないんでしょうね。懲りてませんもんね。

「……けれど空君、考えても見てください。あのふたりがぶつかり合えば教会の壊滅的被害はまず確実。私自身もただではすまないでしょう。まあすぐに復活するので別にいいのですが、痛いものは痛いですし。」

だったら約得のひとつくらいあってもいいと思いませんか?」

「それで本音は?」

「パツキンねーちゃんの下着凄くみたいですはい」

「……だめだこいつ、はやくなんとかしないと……」

海原エツジ。

この街唯一の教会で神父をやっていて、ゾンビで、色欲に忠実で、正直で誠実な人。

もうちょっと属性を統一してくれないと対応しづらいんですけど。ちなみに名前からも判るように、ハーフらしい。とはいえ髪も瞳も言われてみれば、という程度にうつすらと茶色がかっているだけなので見た目はほとんど日本人だ。ただ身長は二メートル近い巨体。けれど彼の最大の特徴は、前にも述べたゾンビである、という点だろう。ゾンビで神父。いいのだろうか。

「というか止めないとシュークリーム事態が無事ではすまないでしょう」

「いえいえ、そうでもないですよ。ほら、よく見てください」

言われるままに目を凝らすと……おや、なんだろうか。青い光の粒子が箱を包んでいるのが見えた。

「光のつぶが見えますけど……」

「ええ、あれはお二人で共同で製作した結界だそうでした。隕石の直接衝突にも耐える強度だそうですよ」

「随分仲いいあのふたり！」

「はじめての共同作業というわけですね」

「上手くない上手くないですから!!」

「入刀……まあ斬りつけるのはお互い本体なんですけど」

「みたくないみたくないみたくない」

というか相変わらず余裕の半笑いですね神父さま。

受け入れているのか諦めているのかよくわからない顔。今でもよくわからないしこれから先もずっとわからないんだろう。

彼の何かを理解できると思ってはいけないし、理解したらだめだからね、空。

最初に彼に出会った瞬間、姉さんはそういった。そんな事を言う姉さんは彼のことを理解したのかと聞くと、笑ってそんな事無理に決まっているじゃない、と答えた。

まあ、深くは考えまい。

彼の重ねた時間に呑み込まれてしまえば二十を重ねていない僕の存在なんてほんの小さなものだ。大きなものに巻かれすぎるのも考えものなのである。

そんな彼の頬を、ずばっと、黒い影が流れて、ぱっくりと傷口が開いた。

……………。

「つて、うおおおおおいっ!!」

現実思考を戻してみると、ふたりは既に一合撃ちあった後らしく。

リアさんは右腕を、シスターは十字架を、大きく体ごと仰け反らせて距離をとっているところだった。

ごうん、と音が今更響き、衝突の余波が暴風となり全身にたたきつけられた。ぐ、と胸を抑えつけられるような感覚に襲われ、全身の骨がぎしぎしと音を立てる。

うん。

いきなりクライマックスキタコレ。

あんたら、お互いより先に僕を黄泉路に追い込む気ですね。

「ストップ、ストロープ!!」

急いで席を立ち必至にアピール。

「ああん?」

「あらあ、なんですか、空君」

ふたり揃って視線を向けてきた。リアさんは分かりやすくガンつけてきたけれど、シスターはまたねばりつくような重苦しい視線を向けてきて正直どっちも辛いんですが。

しかし命には代えられない！

「あのですね、ここでおふたりが戦うと、ちょっとシャレにならないんですよ」

主に僕の生命的な部分が。

「だあーいじょうぶだって。なにかあってもちゃんと生き返らせてやるから」

「その時僕人間やめてますよね」

「わたしは、たとえ潰れた姿の空君でも素敵だと思いますよう」

「その愛情は重すぎる上に歪みすぎていて受け入れられません」

というか引く。

そんなハードな人生望んでいない。

もっとソフトでいい。

というかこの場で無事で済まないのが教会と僕だけって神様の家が随分と人外魔境だけどいいんですかね。

「とにかく平和的に！ 平和的な解決方法を求めます！！」

「敵がいなくなりゃあとは平和だろ」

「その末期的かつ終末的な平和思想はちょっと捨ててください」

「神の御許に召されることで判る平和もあるんですよ、きつと」

「その発言は既に諦めてますよね色々」

僕はひとつ息を付いた。

「いいですか？ 後のことがどうこうなんて言いません。とにかく、今、ここで、平和的な状況を作ってくださいと言っているんです！」

「やれやれ、将来を考えられない子供か。お前みたいなのがこの世界を背負っていくのかと思うとあたしも心が痛むよ」

「空君。今を追い求めることは大事ですが、それは未来を蔑ろにしていることではないのですよ？」

「あんたら実は仲いいでしょう、なあ？！」

訴えるも、彼女らは互いに視線を合わせるとけっとそっぽを向いた。嘘だ……。

どうしようもうこれなんかこれ色々と納得がいかなさすぎて頭おかしくなりそうなんですけど。

そんな僕を、神父さまがまあまあ、となだめる。

立ち上がって、訴えるような声で語りかけた。

「まあ、あれです。おふたりとも、お互いに勝敗をつけたいだけで命を奪いたいわけではないんでしょう？」

「「獲れるに越したことはないかと」」

ふふ、と少し笑って、そのまま座る神父さま。

諦めがいいにも程がある。

「いやいやいやいや！とにかく勘弁して下さい。本当に」

「まったく。それでは空君は、どうすれば満足なんですか？」

「いやだから、もっと穏便に解決を」

「わがままだなあ」

……そろそろ僕怒っていい頃だと思うんだけど。

「はあ……もう、あれですよ。勝敗を決めるだけならじゃんけんでもいいじゃないですか」

「じゃんけん、ねえ？」

「まあ、わかりやすい手段ではありますねえ」

ふたりは揃って頷いた。

あれ？ 思ったより簡単に説得できるじゃないか。

拍子抜けしてしまう。

なんだ、難しく考える必要なんてなかったな。そうだそうだ。いくら吸血鬼とあのまっくろシスターとはいえ、こうして話している以上言葉は通じるのだ。

こうしてしっかりと話しをすれば通じるのは道理。最初から半ば諦めていた僕にも責任はあるだろう。

やれやれ、恥ずかしい限りだね。

ふたりはゆっくりと歩み寄る。

ゆっくり。

ゆっくり。

じりじりじりと。

……いや。

「あの……なにしてるんですか」

「だってさあ、こいつから殺気が消えないんだもん」

「あらあらあ。そちらだってやる気まんまですよねえ」

マントが刃物の鋭さをもってゆらぎ。

十字架が低く駆動し重い音を立てる。

「ストップストップストップ！ ストオオオオオッストップ！！！！」

案の定人の話なんか聞いちゃいねえもんな！

これだから吸血鬼とまっくろシスターは言葉が通じねえってんだよ！！

その口から吐いてるのは人間の言葉の音をした別次元の言語か何かDeathか？！

はあああああああ……。

深く深く息を吐いてクールダウン。OK。僕冷静。ヒートアップなどしていない。OK。

「あのですね、もうちょっとお互いに歩み寄って、信用をしましょうよ」

「ああ、ムリムリ」

「ですよねえ」

「だからあんたら実は仲いいでしょう！！」

なんでいらんところでツーカーなんですか。

「とにかく！ 普通に！ じゃんけんしてください！！」

あなたたちの所業に耐えられるタフガイはこの場にはいません。僕も神父さまも強度は並の人間なんです勘弁して下さい。しろ。

「わかったわかった。あたしも悪ふざけが過ぎたよ。ってことでほら、ジャンケンで決着だ」

「ですねえ。空くんがそこまでいうのなら譲歩しましょう」

最初に出てくる発想だと思うんですけど。やはり精神的に人外魔境に住んでいる人たちの思考は僕ら一般人のそれから大幅にそれて新しい世界を築いているらしい。

「ほんとうにもう……じゃあ僕、審判しますから。後出しとかやめてくださいよ」

「任せなつて。そんな不利な真似しないよ」
「そうですよう」

……ん？　なんだかまたよくわからない理屈が飛び出したような気がするんだけど。

と言つてもすでにふたりはやる気満々。ここで水をさして気分を変えられても困るのは僕だ。

いささか不安はあるけれど、ここはこのまま進めてしまふしかないだろう。

「はい、それじゃあいきますよ。
さいしよは、ぐー、じゃんけん——」

リアさんが大きく右腕を引いて。
シスターが左手を高く振りかぶり。

「ぽんっ!!」

「ぐううううううあああああっ!!……!!」
「ばああああああああああっ!!……!!」

リアさんのグーと。
シスターのパーが。

正面から激突した。

何か音がなったような気がするけど、大きすぎて逆に聞き取れなかった。ただ、あたまがぐわんぐわんと揺れている。視界も揺れている。

じゃんけんの結果はというと、拳をつきだしたままの姿勢のリアさんと、その拳の延長線上には壁に埋まるシスター。シスターは左手を真っ直ぐにつきだして手のひらを見せたまままだ。

……ええと。

「……何してんの。……何してんのっ?!」

「何って。じゃんけん」

「いやいやいやいや、普通に殴り合ってるじゃないですかっ!!」

リアさんはきょとんと首を傾げる。

「え? じゃんけんってほらアレだろ。グー・チョキ・パーの三つの手を出しあって……」

うんうん、そうそう。

「その出した手で攻撃して相手を倒したほうが勝ち」
「なにそれ怖い」

僕の知ってるじゃんけんと違う。具体的には勝利条件が。

「っていうかシスター! シスターも大丈夫なんですか?!」

声をかけると、壁にめり込んだシスターがぴくりと反応し、ゆっくりと体を起こした。

……自分で声かけておいてなんですが、生きてるもんなんですね。正直コマ落ちで見ても凄まじい速度で飛んでいったと思うんですね。

「う、ふ、ふふふ。さすが最強の神話体。絶対に殺せないだけでなく絶対に勝ち目のない超越者とはよく言ったものですねえ」

ぱらり、と壁の破片を払いながら、ゆっくりと歩み寄ってくるシスター。

ごり、ごり、と引きずる十字架が床を削る音が静かに響く。雨はいつの間にか止んでいた。

薄く差し込んだ太陽の光が、さらにステンドグラスの向こうから天使の階段となって降り注ぐ。

そのなかで。

血を流しながら。

凄惨に笑う聖職者。

「……………神父さま大変ですよ！　もうこの場所完全にホラーに侵食されています！！」

「ええ、ずいぶん前から」

どうやらとつくの昔に手遅れだったらしい。

「って、シスター！　本当に大丈夫なんですか？」

「ええ。大丈夫ですよ」

にこり、とほえむシスター。
足取りもしっかりしているし、多少の血は流れているが視線もま
っすぐだ。

本当に、大丈夫らしい。信じられないが。

「ふう……」

シスターは深く息をついた。

「って、ああそうだ。シスター、今のじゃんけんは」

さすがにもうやめだろう。

と言おうとしたら。

「ええ。あいこですね！」

ぐっと。

ぐっと握りこぶしを握って。

何この人。

超やる気。

「……………あの、シスター。シスター的に今のじゃんけんルール、
ありませんか？」

「え？　ありもなにも普通にじゃんけんですよね」

「じゃんけんの定義さえ通じないのかよこのふたりには！！」

どうしようもないな。

本当にどうしようもないな！！

「ふん。いい根性だね。じゃあ、続きを始めようかあ!!」
「ええ望むところですよ!!」

マントが唸り形を変え、巨大な鋏の形を得る。

十字架が割れ、人間の腕程の太さもある釘が溢れ出す。

ああ。

こんどはチョキどうしかな。

ここにいたり、僕はようやく気づいた。

ろくでもない上にどうしようもないけれど。

もはやこの場は諦めるしかないということに。

というわけでオチというか後始末。

「あのふたり、仲いいんだか悪いんだか」

雨は上がり、雲の隙間からところどころ、夕陽が差し込んでいる。そんななか、僕と姉さんは並んで家への道を歩いていた。

「うーん、言うほど悪くはないんじゃないかな」

「まあ……」

少なくとも感性とかは似てるよね。似てるって言うか、同じ方向にブツ飛んでるよね。

おかげで服が一着駄目になった。いや、形は保っているよ？ 保っているけど、洗濯機に入れたら間違いないバラバラの布切れになるレベルなもの、今の僕の服。

「なにはともあれ、姉さんが来てくれて助かったよ」

「ふふん、空のピンチにお姉ちゃんあり、だよ」

「さすが姉さん」

あの後。

彼女らの言うところのじゃんけんの余波でボロボロになったところで、姉さんが迎えに来てくれた。

姉さんはやれやれといった具合に一発、左手をかざすと、銀閃を

縦横に走らせふたりの動きを止めた。

『もう。ふたりともだめだよ。空が困っているじゃない』

そうしてふたりの喧嘩を止めてしまった。

喧嘩の原因となったシュークリームは、姉さんの口に加えられている。

「うん。金翅堂のシュークリームはおいしいねっ」

姉さんはくりとこちらに顔を向けた。

ん。と、顔を突き出す。

目の前に、啜えられたままのシュークリーム。
分けてくれるらしい。

「それじゃあ、いただきます」

ぱくりと噛み付いた。

少しちぎって飲み込む。うん。いつかのあの味に衰えはない。相
変わらずの人気も納得の味だ。

「おいしいねえ」

「うん、そうだね」

そうやって、ひとつのシュークリームをふたりで反対側から食べ
ながら家に帰った。

もうひとつのシュークリームは涼莉のおみやげにしたところ、初

めて金翅堂のシュークリームを食べた涼莉は大騒ぎだった。

僕と姉さんと聖魔の大いなる戦い（笑）（後書き）

姉さんが無敵すぎて出番を作れない……。。

僕と姉さんと姉さんの幼なじみ（前書き）

作中は夏真っ盛り。現実もそろそろ暑さがいい具合になってきました。

僕と姉さんと姉さんの幼なじみ

どーん。

マンガならばそんな擬音がついてしかるべき家。家というよりお屋敷、という言葉が似合うだろう。

日ノ影邸は有り体に言って、そんな家だ。

夏休みに入って一週間。

『さあ、宿題をやっつけるよ！』

という姉さんの提案により僕らは光璃さんの家へやって来た。

メンバーは僕と姉さん。それに加えて、綺月と夕陽。そしてなぜか涼莉も。

この街どころか日本でも有数の大富豪である彼女の家は、まあでかい。

塀や門扉がすでに僕の背丈の倍以上の高さがあるし、本宅意外にも敷地内に複数の離れが存在しており、そこでは普通に二世帯が生活できるだけの広さと設備が整っている。

本宅にしたって二階建てだけれど一階の高さは僕が姉さんを肩車しても天井に手が届かない程というのだから、その巨大さ、広大さは推して知るべしといったところか。

というか、門をくぐったところにセグウェイが置いてあって移動にそれを使わないとやたらと時間がかかるというのだからもう。

車で迎えをよこしてくれるという話だったけれど『友達の家遊びにいくのに、そんな大げさな』という姉さんの主張から、雨でも降っていない限りはそういうのはお願いしていない。

まあ、綺麗に手入れをされた庭を見ながらの移動というものもなかなか心が落ち着くものはある。

……むっちゃくちゃ、暑いですけどね。

真夏ですから。

まあ、リゾート島やプライベートビーチを持っているというだけで僕らとは住む世界が違うということはあっさり理解してもらえないだろうか。

そう。プライベートビーチ。

今回の勉強会には、そのビーチへ遊びにいく予定を立てる、というのも目的に含まれている。

十分ほどで、本宅についた。

「あいかわらず、光璃さんちは大きいわねえ」

「いつ見ても圧倒されるよね」

口を開いて玄関の扉を見上げる綺月に同意する。

日ノ影邸は西洋風のお屋敷で正面からみるとシンメトリーのデザインをしている。色はクリーム色で太陽の光を浴びて燦然と輝く姿は威容を感じさせた。

初めて来たときは扉をあけて良いものか真剣に悩んだものだ。

「さて、それじゃあはいろいろか」

「そうね。こんこんこーん、と」

姉さんが扉を叩く。

するとすぐさま、内向きに扉が開かれた。

大きな扉だというのに音はわずかにしか響かない。手入れが行き届いている何よりの証拠だろう。

そして、扉が開いた先には。

「お待ちしておりました、響様、水津弥様、朝瀬様」

「お、お待ちしておりましたっ」

「すずちゃん、お久しぶりですっ」

恭しく頭をさげるメイドさんがふたりと、元気に手を振るメイドさんがひとり。

日ノ影ではなく光璃さんが個人的に雇っている三人のメイドさんだ。

「お世話になるね、千影、百羽、十乃」

姉さんが声をかける。

三人は左からそれぞれ小、中、大という背丈。

ちなみに歳は左から高二、中三、小六となっている。

「あっはっは！ いやあ、いつ見ても見事な階段具合ですな！」

「相変わらず命が惜しくないのかな夕陽は……」

ぎろり、と千影さんが夕陽を睨んでいるけれど、夕陽は姉さんを見てだらしなく顔を緩めるのに忙しくて気づいていない。

……うん、本当、早いところこの男のこういう部分はどうかしないよね。本人以前に僕や綺月の気苦労がとんでもないことになる。

三人のメイドさんは渚姉妹。

長女、渚千影。次女、渚百羽。三女、渚十乃。

渚家は昔から日ノ影に仕えてきた一族だそうで、彼女たち三人はとくに光璃さんと個人的にも親しいらしい。それで、家ではなく個人で契約をしているのだそうだ。

千影さんは三人の中で最も背丈が低く、綺月よりやや高いくらい。前髪はパツンと揃っており髪も肩口で綺麗に揃えている。ノンフレームのメガネをかけており、その奥の視線はやや鋭い。姉さんと同じく滝空高校に通っており、光璃さんと同じクラスらしい。というか、したらしい。どうやってかは知らないが。

次女の百羽さんは姉さんと同じくらいの背丈で、前髪は千影さんと同じだけれど後ろは長く首の後でまとめている。千影さんが見かけに対して顔が大人びているのに対して、こちらは歳から比べるとやや童顔。あと特筆する部分でもないけれど胸が大きい。とにかく大きい。性格はおとなしいというより引っ込み思案で、僕らが視線を向けている現状、どんどん顔が赤くなっている。こう言うてはなんだが、面白い。

最後に三女の十乃ちゃん。こちらはまだまだ見習いも見習いといった所らしい。涼莉ととても仲が良く、平日の昼間なんかは涼莉が遊びに来ているらしい。今も僕の肩から降りて人形になった涼莉を高い高いしている。そう。彼女はとても背が高く、ぶっちゃけ僕よりも高い。胸もお前本当に小学生かよ、とツツコミを入れたくなる。というかすでに仕事を放棄している気がする。いいのだろうか。いいんだろうな。

ちなみに、映画館に大人ふたり子供ひとりではいろうとすると大人料金を請求されるのは次女と三女である。だから何というわけでもないが。

千影さんが三人を代表してもう一度頭を下げた。

「今日は勉強会と夏の予定だとか。すでに準備は出来ていますので、ご案内いたします」

「うん、ありがとうね。でも千影ちゃん、そんなに固くならなくていいのに」

「仕事中ですので」

「むーん。んー」

姉さんは不満げだ。だけど僕は彼女の言うことはもっともだと思う。あれだよ、ほら、コンビニでもバイト先に知り合いが来たからって雑談するわけにはいけないのと同じだ。いや、コンビニのバイトとかしたこともないけれど。

と、姉さんがなにか思いついたらしい。
ピコン、と指を立てる。

「空、ゆうちゃん、ちょっと後ろを向いて？」

「……またいきなりだね、姉さん。念の為に聞くけど、なん」

なんでそんな事を、と聞こうとしたら、いきなり夕陽に腕を引張られた。

「理由なんかどうだっていいじゃねえか！ 翼さんがそう言ってるんだからよ！！」

……駄目だこの男、完全に頭の中身が茹だっている。

いくら姉さんの言う事だからといって全てをほいほいと受け入れたら生命がいくつあっても足りないんだけだなー。

けれどこうなったら抵抗するだけ無駄と、後ろを向く。
ちょうど綺月と向かい合う形になった。

「姉さん、何するつもりだと思う？」

「翼ねーさんのやることでしょう？ あなたにわからないのにわたしがわかるわけじゃないじゃない」

「いやほらでも女の子同士ということで何かさ」

「うーん、とはいっても、ねえ」

さすがに綺月にもどうなるかわからないらしく、首を傾げると。

「……………って、翼ねーさんいったいなに——ぶっ?!」

僕らの後ろを見ている綺月がいきなり顔を真赤にして吹き出した。

「ちょっと翼さん一体何……きゃあああああつ?!」

「つ、翼さん!　さすがにそれはああああお姉ちゃん動かないで!　見えちゃ、見えちゃうよっ!!」

同時に響く千影さんと百羽さんの悲鳴。

え?　何?　何したの姉さん?!

思わず振り返った。
と。

「—————は」

「だめえええええっ!!!!!!!!!!」

ぐぎよ。

「あががががががががっ!!!!!!!!!!」

振り返った僕の視界が一瞬で暗闇に覆われ、同時に眼球に凄まじ

い圧力が加わる。

ちょ、痛、シャレにならないよこれ!!

「痛い痛い痛い! 眼が痛いけど同時に首が!! ぎゃあああああ
っ!!」

首がぐいぐいと後ろに引かれる!

「空、だだだだだだだだだめだよ! ダメだから! だめなんだ
からね!!!!!!」

「ちょ、綺月、痛、なにこれなにこれ首、眼おごおおおっ?!」

「おお、千影ちゃんこれは、思ったよりも……」

「や、やめなさい翼さん! 百羽、ちよつと助け……」

「お、お姉ちゃん、うわあ、うわあ……」

「駄目だこの子使い物にならない……! 十乃! 十乃ってば!!」

「わーい、相変わらずすすちゃんの耳は気持ちいいですー!」

「とーのは相変わらずなの。ほっぺたふにふにしてるの」

「あなたたちふたりだけでほのぼのしないでこっちも助けなさい
!!」

「く……、いったい後ろでは何が……しかし、翼さんの命令に逆ら
うわけには……うごごご!!」

「あんな、あんな……ふわああああっ!!」

「あ、あれちよつと綺月さん、なんか指が、指が食い込んできてえ
ええええええええっ?!」

「ほらほら千影ちゃん、もっと柔らかく笑顔で、ね?」

「誰のせいだと思ってるんですか?」

「おね、おね、おねええええ」

「……………なにしてるんですか?」

その声と同時。

ばちん、と何かがはじけて、僕らは互いに引き剥がされた。ぱっと明るくなる視界。

同時に、上を向いていた視線に、その人物の姿が飛び込んでくる。

日ノ影光璃。光璃さん。

彼女を表すのに必要な言葉はおそらく無限に並べても足りないし、一言で済ませることもできる。だから楽に済ませよう。

日ノ影光璃は綺麗な人だ。

白い肌とか、ぱっちりした瞳とか、銀色の髪とか、すらりとした体軀だとか、ほっそりした指先とか、そういうひとつひとつのパーツが圧倒的な調和をもって彼女という存在を形成している。

初めてあった頃から身長も伸びて表情からは幼さも消え、髪型も容姿もずいぶん変わったというのに、印象だけは変わらない。

日ノ影光璃は綺麗な人だ。

その光璃さんはシャツとスパッツという、この屋敷には似つかわしくない庶民的な格好をして現れた。

唯一、髪留めをアクセサリーとして身につけていた。

「ふう……翼ちゃん、だめですよ。あまり千影さんをいじめては」
「えへへ、ごめんごめん。あんまり千影ちゃんがかわいいから」
「千影さんがかわいいのには同意ですけど、ほら、おかげで空くんが大変なことに」

え、僕ですか？

「……………そら、なんかパンダみたいになってるけど、どうしたの？」

「……………」

さあ、なんでしょうね。

ちらりと葉月を見る。

綺月はさっと視線を逸らした。

「まあ、うん、なんでもないよ、姉さん……」

ひどい目にあったというだけで。まあ、いつものことだ。

「それにしても」

あたまをかきながら周りを見回す。

光璃さんはホールの階段を、たおやかに笑顔を浮かべて降りてきている。

姉さんはいつものハツラツとした笑顔でそれに話しかけていて。

十乃ちゃんは涼莉に後ろから抱きついている。涼莉もなされるがまだ。

で。

僕はなんか目の周りが痛くて。

綺月はこちらと視線を合わせようとせず。

夕陽は変わらず後ろを向いてぶつぶつと悩んでおり。

百羽さんはあうあうあうあうと真っ赤な顔で右往左往。

最後に千影さんは。

「きっ」

「ひっ?!」

真っ赤な顔で涙目で睨まれた。……メイド服のスカートの前後を両手で抑えながら。

「……見ましたか？」

「え？」

「見ましたかと聞いているんです！」

「え、いや！ な、何も見ていません！ ほら、綺月がすぐに僕が目というか眼球を押さえにかかりましたから！」

千影さんはしばらく僕をじーっと見ていたけれど、やがて光璃さんに声をかけられて居住まいを正すと。

「……もうしわけありませんでした。それでは、こちらへ」

と、案内してくれた。

……ところで。

すでに僕の体力ゲージがレッドゾーンに入ってるんだけど、そうですよね関係ないですよ。はあ。

勉強会は大部屋で行われた。

部屋には大きな机がひとつ。歴史を感じさせる調度品が並ぶ部屋だが、威圧感よりも安心感を感じさせる雰囲気がある。

大窓は庭に繋がっており、流れる小川がきらきらと陽光を反射していた。

「……ねえ、空、この英文なんだけど」

「う、僕も英語は苦手分野なんだけど……あ、これはなんとか分かるよ。ええとこれは――」

綺月の教科書を覗き込みながらプリントの問題を読み進める。

彼女はとても優秀な成績を納めているので、こうして僕が教えることができるのはあくまでも一年のアドバンテージがあるからではない。もし同じ年だったら、僕が教えることなんて何ひとつなかっただろう。

そう考えると、格好がつくので助かった、ということかな。

というようなことを以前言ったらすんっごいムスっとした顔をされたけれど。なぜだ。

ちなみに。

「お、おおおお、おおおお……？」

奇妙な声をあげて目を回しているのは夕陽である。

どうも勉強がわからなさ過ぎて頭の中身が変なことになってきているらしい。そのうち耳からてろりと謎の物体が顔を出してきそう
だ。

ちなみにちなみに、彼が今手を付けているのは夏休みの宿題……ではない。そんなもん解けるわけがないので僕が持ってきた一年の頃のテキストを解いてもらっているところだ。

それでこの結果っていうのは、本当、先が思いやられるなあ……。

そして僕。僕の成績は悪くはない、というより、まあそれなりに良い方だと思う。思うけれど綺月のように学年一桁に迫る成績はない。

滝空への入学を考えるのなら、そのレベルとまではいかないまでも現状維持か、安全を考慮に入れるとやや上を狙いたいところではある。

内申点が芳しくないのも、地の成績で補っておくのがいいだろう。いや、内申点を上げるのがベストなんだけどね。ほら、人生何があ

るかわかないし。

最近は異世界に召喚される頻度が上がってきたからなあ……。

そんなこんなで二時間ほど経って。

「少し、休憩にしましょうか」

「ん、そーだね。勉強ばかりしていてもきついし。それに、海の相談だってまだしていないしね」

「うふふ、そうですね。それでは……千影さん、みなさんにお茶とお菓子を願います」

「かしこまりました」

うお。

いつの間にか千影さんが部屋に入ってきていた。おかしい。先程まではたしかにいなかったはず……。

「千影さんのスニーキングスキルは完璧ですから」

胸をはる光璃さん。ええと、それは褒めるべきところなんでしょうか。そして千影さん、うっすらとドヤ顔するのやめてください。

……そういえば、涼莉はどうしているんだろうか。最初に十乃ちゃんと一緒にこの部屋をでてから姿を見かけないけれど。

ちょっと聞いてみようかな。

「あのう、千影さん。涼莉って今、どうしていますか？」

「涼莉ちゃんですか？ ああ、それでしたらほら、あそこに」

「え？」

千影さんが窓の外を手のひらで指し示した。その先には。

「……………えええええ？」

猫の姿で噴水で遊びまわる涼莉と、いつの間にか水着に着替えた十乃ちゃんの姿が。

涼莉、完全に遊びに来ただけになっているな。

「え、ええと。十乃ちゃんの邪魔になっていませんか？」

「……………まあせっかくの夏休みに仕事詰めというのも可哀想ですのでそれに仕事を教えるだけならあとからいくらでも出来ますから」

「そう言ってもらえると助かります」

「しかし……………」

千影さんは複雑な表情で窓の外を見やる。やはり口ではそう言っても、内心では色々思うことがあるのだろうか……………。

「……………あの娘はいつたどこまで成長するつもりなのよ……………」

「え？」

「いえ別に。お気になさらず」

はあ。

なんだか若干怨念を感じるつぶやきが聞こえた気がするのだけけれど。気のせいだろうか。気のせいだろう。そうしておいた方がいい。なぜかそんな確信を抱いた。

「それではお嬢様。準備してまいります」

静かに退出する千影さんを笑顔で見送る光璃さん。
そして。

「……ちよつと姉さん、なにしてるの？」

「あらら、見つかったちゃった。ちよつとお手伝いしようかと思って」

こつそり後をつけようとしていた姉さんに声をかける。

僕が声をかけたことでようやく気づいた他のみんなが驚いていた。
うんまあ。

姉さんが気配を殺す——というか、気配をぶった切ったら大抵の人は気付けないよね。

いや。

つまりまあ、その大抵の範疇にない、たとえば光璃さんは気づいていて止めなかったことになるわけで。

「……ふう。翼ちゃん、あんまり千影さんをいじめないでくださいね」

「まっかせてよ！ 光璃の顔に泥を塗るような真似はしないよ！！」

じゃ！ と元気よく部屋をあとにする姉さん。その際も、扉も足音も一切立てないあたりからやる気を伺える。

うん、やる気出す場所が違うとおもうんだ。

「いいんですか？」

「いいんですよ。翼ちゃんも本当に千影が嫌がることは……いえ、しますが、限度は……まあ、たまに超えますけど、注意したので平気でしょう」

さすが幼なじみにして親友。姉さんの事をよく理解している。

まあ先ほど一度怒らせているし、さすがにさっきみたいなことは……ああ、うん。まあ。

「……空？」

「う、ん？ 何、綺月」

勉強の手をとめてすでに休憩モードに入っていた綺月が、こちらをちらりと見た。

「さっき、ほんっとーに、何も見てないの？ わたしが隠すタイミ

ング、結構微妙だったと思うんだけど」

「見てませんよ？」

「……あやしい」

「いやいや」

そんな。

ほら。

ねえ。

……なぜバレている。

とはいえこの場でアレを見たことを肯定するのはさすがにちよつと。どこで千影さんに届くかわかったものではないし。それに本当に一瞬、ほんの一瞬の話だ。それをわざわざ追い打ちをかけるのはむしろ千影さんに苦を与えることになるだろう。

決して。決して僕がやましい気持ちがあるからではない。ではないのだ。うん。

だから綺月さん。そんな超絶微妙な表情で僕を見ないで。

「そ、それにしてもあのふたりは元気だね！ いくら水を浴びているからって、この日差しの中あんなに元気に走りまわって」

「うふふ、そうですね。涼莉ちゃんが来たときの十乃はとても元気ですから。私としても感謝しているんですよ」

それはきつと、先ほど僕が迷惑になっていないか、と気にかけて
ことに対するフォロー。

こんな何気ないところまで気を利かせる光璃さんには、なんと
うか頭がさがる思いだ。

「あーあめーい、じーいいんぐれーいす」

そしてそんな和やかな空気の中、夕陽は口からエクトプラズムを
垂れ流していた。

十分ほど経って、千影さんと姉さんが帰ってきた。

私服に着替えて勉強道具を持った百羽さんも一緒だ。

「私も、急ぎの仕事が終わったので、一緒にいいですか？」

「大丈夫ですよ」

ほ、と顔を綻ばせる百羽さん。

百羽さんは僕の隣の席に座った。反対側には綺月が座っている。

席はたくさん余っているのに。

まあどうせ同じ範囲を勉強するわけだし、席は近いほうが楽か。
考えて見れば合理的かつ当然の選択肢でもある。

「むう」

「綺月どうかした？」

「別になんでも」

そうは言うけれど、明らかに不機嫌というか不満がにじみ出てい

る。はて、どうしたのだろう。

ぶつぶつと何かをひとりでつぶやいている。ライバルが、とか、自覚が、とか、ところどころそんな言葉が混ざっているけれど、はて。

そうしているうちに、姉さんと千影さんが全員に紅茶を配ってくれた。いくつかのお皿に分けてクッキーも一緒に。クッキーを食べてみると、なるほど、紅茶とよく合う。

ところで。

「姉さん、何したの？」

「ん？ なあに？」

「いやだってさ」

ちらり、とそちらに視線を向ける。

「千影さん、明らかに疲れて、顔を赤くしてるんだけど……」

「何ありませんでした」

「え？」

会話に割り込んできたのは、その当人千影さん。

「いや、でも……」

「何ありませんでした」

「……………」

「何ありませんでしたから」

「……そ。そうですよね！ 何ありませんでしたよね！ そうに決まっていますよね！！」

絶対何かあったなこれ！ 雰囲気的に絶対に聞けないけどさ！！
そのまま千影さんは壁に控える。じろりと姉さんを見るのはまあ

監視目的なんだろうけど、なぜ僕までその対象に入っているのか。問いつめたいところではあるけれど、それもちよつと。ううう、仕方ない。ここは我慢しよう。

「さて、それじゃあお勉強の再開の前に少し、海の予定の相談でもしましょうか」

「だね。いつもありがとうね、光璃」

「気にしないでください。」

それで我が家のプライベートビーチですけど、今年の参加者はどのくらいになりそうかしら」

「ええと……」

僕は頭の中で数える。

僕と姉さん、涼莉は人数に数える。ましゅまろは……荷物扱いでいいだろ、あれは。

で、今ここにいる夕陽と綺月。それから……まあ、大地は誘わないと後々面倒だろうね。

リリースは誘えば来るだろう。割とこう言うノリは好きなハズだし。シスターと神父さまとリアさんは……だろう。リアさんは誘えば来る気はする。シスターと神父さまはさすがに教会を何日も開けて問題ないのだろうか。そこは聞かないとわからない。

で。一番の問題はジュス様だけど……あのひとだけはその日の気分が変わりかねないから予定の立てようもない。

「七人は確定。不明四人、つてところですね」

「そうですか。ではうちからは私たち四人、と。最低でも十一名です。ふふ、これだけの人数はさすがに初めてです」

「う。なんかすみません」

「あら。気にしないでいいですよ。私たちも楽しみなんですから」

ね、という光璃さんの言葉に、となりの百羽さんと壁の千影さんがそろって頷いた。

窓の外の十乃ちゃんは相変わらず涼莉と楽しそうに戯れて……んん？

「……あの、すみません。話の腰を折る用で恐縮なのですが」「はい？」

「窓の外、あの……気のせいではなければ、十乃ちゃんの水着、なんか紐、ほどけてませんか？」

「――え？」

全員の視線が外に向かう。

よく見る。よく見ると。

たしかに、セパレートの上の水着の、左の肩の紐がほどけていた。それだけで胸が顕になるようなこともないけれど、さすがに放つてはおけない。

「ありやりや。涼莉が外しちゃったのかな。ちよつと注意しないとね」

姉さんが立ち上がった瞬間。

十乃ちゃんと戯れる涼莉の爪が引つかかったのか、残る右の肩紐がはらりとほどけて、背中を向けたままだけれど、その上の水着が。

[illegible]

「おごふあつ?!」

タツクル。

そして暗転。

え、何、何事?!

「つつつつつ翼ねーさんはははは早くあの猫娘にひひ紐を結ばせてください!!」

「涼莉ー! 涼莉ってば! 急いで十乃ちゃんの肩の紐を結んで…ってあなたまで水浸しになってどうするのー!!」

「だだだだだめですよだめですからね空さん! ああああああ見ちゃ見ちゃだだだだめですからね!!」

いやあの見えない。見えないっつーか息が苦しい。

目の前を完全に何かに覆われて、両手で頭を抱きしめられている。体はかがめられている姿勢になっていて、さらに横からも抱きしめられている感覚。というか、その、感触、というか、ですね。

柔らかいんですけどっ!!

ていうか、なんかこう、頭がくらくらするようなそれでいて落ちて着くような香りが呼吸のたびに!

ええと。

これは。

その。

まさか?

いや、落ち着こう。例えばだ、可能性の一つとしてだ。

僕の頭が今、綺月に抱きしめられているとして。そして横から百羽さんに抱きつかれているとして。

まあ可能性の問題だ。大いに勘違いということもありうる。

だがそうだった場合、果たして、僕の顔を覆うこの柔らかい感触と、肘にぶつかる抵抗し難いぬくもりは、果たして一体何がもたらしているのだろうか。

いやいやいやいや。

落ち着こう。クールになるんだ僕。

未だに周りは騒がしいけれど、とりあえず流されずに考えよう。
ええと。

うん。

無理無理無理無理！！

だってこんなに柔らかいいい香りがするし、ええと、何、そう、
未知との遭遇？

あ、未知ってほどでもないか。姉さんが抱きついてきた時は気に
ならないけどそれなりに――。

「ってだからそこで確信を抱くソースを思い出すちゃダメだろ僕！
」

「空、どうしたの？」

ナンデモアリマセンヨー。

まさか口に出せるわけもなく。

綺月も百羽さんも、自分がどんな体勢になっているかなんて気づ
いていないんだろーな。気づいてたら僕この時点で脳みそてろり
って出るくらい頭絞めつけられてるだろうし。

……ていうかこれ、どちらにしろヤバイよね僕。

すでに聞こえてくる喧騒も落ち着いてきてるし。

どうやら十乃ちゃんの肩紐は無事結ばれたらしい。まあそのかわ
り、人型をとった涼莉がびしょ濡れになったらしいけど。

で。

「ふいー、空が教えてくれたおかげでなんとか間に合ったねー……

なにしてるのあなたたち」

「「え？」」

姉さんに指摘されて、頭を締め付ける力が弱まった。
恐る恐る。顔を上げる。

綺月と視線がぶつかった。

横を見ると、百羽さんが硬直していた。

「「き」」

ああうんまあ、予定調和っていうか予想通りっていうか。

「「きゃあああああっ?!?!」」

あははははおごぶつ。

一時間後。

なぜか額とほほに痛みを抱えながら宿題を再開した。

両隣の綺月と百羽さんはどこことなく顔が赤いけれどさっぱり理由はわからないねあはははは!!

「あー。空、大丈夫か、色々と」

「ナニガ?!」

「ああうん大体わかった。まあお前結構不測の事態に弱いしな……」

「ダカラ、ナニガ?!」

「いや、もういいよ、俺が悪かったよ……」

なぜか夕陽が沈鬱な表情になった。
と、表情をいきなり輝かせて。

「あ。翼さん！ ちょっとここ教えてもらっていいですか?!」
「はいはい、なにかなゆうちゃん」

……どうやら小賢しい手段を覚えたらしい。まあ、本人のやる気がそれで出てくるっていうのなら問題ないか。

「……あのう、空さん？ どうしたんですか」
「え、何がですか？」

百羽さんが謎の問いかけをしてきたのでそちらを振り返ると、なぜか泣きそうな顔をされた。なにゆえ。

すると、反対側で綺月が深い溜息をついていた。

「どうしたの、綺月？」
「いやなんて言ったらいいの。あなたも大概だなあと。そして相変わらずだなあと」

ううん、何を言っているのかわからないけれど、とりあえず呆れているらしい事だけは理解できた。

はて、そんな要素がいまのやりとりのどこにあったのだろうか。

「……あの不機嫌な顔、初めて見ました」
「え？」

「いいいいいいえなんでもありません！」

慌てる百羽さんとさらにため息を重ねる綺月。一体なんだというのだろうか。

と。

「あ、すみません翼さん、ここも教えてもらっていいですか?!」

「はいはい何かなゆうちゃん」

……………野郎。

「あああああ空さん! ほら、勉強! 勉強しましょう、ね!!」

「え、ああそうですね。今日できるだけ進めてしまったほうが楽ですし」

百羽さんの成績は僕と同じくらいだけれど、お互いに得意分野が違っているので、そのあたりを教えあうことでずいぶんスムーズに宿題を片付けることが出来ている。

綺月に対しても、僕が教えられないところを教えてもらっているので、効率は先程までより大幅に上がっていた。

「あ、翼さんまたお願いなんですけど」

ばきい。

「あれ、シャーペンが折れた」

「シャーペンって折れるものなんですか?!」

「うーん、僕もあまりこういうのは見たことがないですね」

そんなに力は込めていなかったんだけどな。

とりあえず、筆箱から新しいシャーペンを取り出して。

「あ、翼さんそれとですね」

ぐしゃあつ。

「ひいつ?!」

「おやまあ」

「空……あなた……」

今度は筆箱がひしゃげてしまった。中に入っていたシャーペンやボールペンなどもまとめて碎けてしまっている。

やれやれ、いっせいにボロが来ていたということだろうか。これは完全に油断したね。

「ふう、仕方ないな」

僕は席を立つ。

「あ、あの、空さん？」

「百羽先輩、気にしないほうがいいですよ」

そんなやり取りを置き去りに、だらしなく顔を緩めた夕陽の所へ。

「夕陽、夕陽、ちょっとお願いがあるんだけど」

「おうおう、一体なん……だ……っ?!」

なぜかこちらを見た夕陽が顔をひきつらせた。

隣で勉強を教える姉さんがこちらに視線を向けた。どうしたのー、と視線だけで聞いてきた。

「いやあ、ちょっと僕の筆箱が壊れてさ」

手のひらを開く。

ボロボロの筆記用具ががしゃがしゃと机の上に散らばった。

「悪いんだけど、夕陽の筆記用具を貸してもらえないかな」

「え……あ、うん！ いいよ！ 全然いいよ！！」

なんか夕陽のテンションがおかしい。

なんだろうと思うけれど、まあ貸してくれるというのだし借りておこう。

シャーペンとボールペンを一本ずつ借りる。

「ありがとう夕陽。あ、そうだ。それと、ついでなんだけれど」

「お、おう！ なんだよどうした？」

夕陽の肩に手を置く。

あまり威圧的にならないように、諭すように。

座る夕陽の視線の高さに合わせて、言った。

「あまり姉さんを頼りすぎずにさ、もうちょっと自分で色々調べたりとかさ、考えようね？ ただでさえ夕陽は勉強が遅れてるんだから、少し遠回りしてでも実力をつけないといけないんだからさ」

「ああああああわかった！ わかったから肩！ 肩が壊れる、抜ける、砕けるううううっ！！！」

ははは、そんな大げさな。

「ま、気をつけてね」

「はい！ 気をつけます！！」

「あはは、空に注意されちゃったね。それじゃあわたしが教えるのはここまでだよ。空も、もっとおねーちゃんを頼っていいからね」

「うん、ありがとう姉さん。でも今は大丈夫だよ」

「そう、いい子だねー空は」

姉さんが僕の頭を撫でる。苦笑してそれを受け入れた。夕陽は何故か震えていた。冷房が強すぎたのだろうか。

そうして、勉強会と海の予定についての相談は終わった。夕方、僕は屋敷の玄関の前にいた。

「あー！ さすがにちょっと疲れたねえ」

「ええ……まあ、精神的な疲労の原因はいくらかあなたにもあったのだけどね」

「ええ？ 僕何かしたっけ」

自覚がないならいいわ。と綺月は手をひらひらと振った。

「みなさま本日はご苦労さまでした」

「うん。千影ちゃんもありがとうね」

「それが私の役目ですの」

「うー。でもたまには千影ちゃんも遊ぼうよー」

「機会がございましたら」

「約束だよー、絶対だよー」

「……わかった。わかりました。だから抱きつかないで」

姉さんは相変わらず千影さんを困らせていたけれど、千影さんも本気で避けているわけではないようだ。あれもひとつのコミュニケーションの形、といったところだろう。

「それではみなさん、本日はありがとうございました」

「うん。それじゃあ光璃、海はよろしくねっ！ 楽しみにしているから！」

「ええ、任せてください」

ほかのみんなも、口々に、光璃さんと渚姉妹にお礼を口にした。涼莉はすでに僕の方の上で寝息を立てている。十乃ちゃんとずっと遊んでいたからね。

「十乃ちゃんも、今日は——というか、いつもありがとう」

「いいですよー。十乃もすずちゃんと遊ぶのはたのしみなのです」

そう言ってもらえるとありがたい。

「じゃ、帰りましょうか」

姉さんが声をかけて、みんなぞろぞろと帰路に着く。というか、セグウェイに乗る。

なかなかシユールな光景だよな、こうしてみると。

と。

「響様」

声がかかる。

姉さんはすでに出発してしまったので、この場にいる響きは僕一人だ。

響。

響空。

声をかけたのは、千影さん。

「どうかしましたか？」

「ええ、少し確認したいことが」

はて、なんだろうか。

千影さんは百羽さんと十乃ちゃんから少し離れたところに僕を引っ張ってきて。

ちょいちょい、と手を振った。

？ ああ、腰を下げろと。

腰を下げると、耳に手のひらを当てて、つぶやいた。

「……………黒のレース」

「ぶふうっ！！！！」

その言葉に。

思わず連想してしまったのは。

今日、ここについたときの光景。

具体的には。

姉さんが、千影さんのメイド服のスカートを捲り上げていた、あの時の――。

「はあ」

「はっ！！」

しまった！

今のはどう考えても、見ていた人間の反応だっ!!

「いや、ええと、これはですね」

「はいストップ」

ぴたり、と。

人差し指が唇に当てられた。ひやりとした、優しい感触。

「あれはあなたに責任があることでもないので、別に責めたりはしません。ただ、確認しておきたかったですから」

とかいいつつ、一言重ねるごとにどんよりと千影さんの纏う空気が重くなっていく。うん、まあ、ショックですよね。

「忘れてください」

「え？」

「別に責めはしませんが！ とにかく忘れてください!!」

「はいわかりました忘れます!!」

涙目の必死の形相で訴えられて、反射的に宣誓。いやまあ、うん。忘れよう。少なくとも努力はしよう。

そうして、追い立てられるようにして僕も屋敷をあとにしようとして。

「空くん」

「……今度は光璃さんですか。いえ、別にいいんですけど」

思わず胡乱な視線を向けてしまう僕に、それでも笑顔で光璃さんは言った。

「翼ちゃんなんですけど」

「姉さんがなにか？」

「はい。あの、翼ちゃんが、あまり無理しないように、気をつけてあげてください。空くんは今更だとは思うんですけれどね」

ええと。

「どういう事ですか？」

「翼ちゃんの事だから、私に気を遣ってあの人を海に連れてこようとすると思うんです。でも、そんな無理をしなくてもいいですから」

ああ、そうか。この人は。

「私は、翼ちゃんにも、ただ楽しんで欲しいですから。だから、無理をしなくても……」

「はいストップ」

僕は光璃さんの言葉を遮った。

「空くん？」

目を丸くする光璃さん。

ちよつと強引だったけれど、でもその言葉、最後まで聞く必要はない。だって。

「光璃さん、そんなに気を使わないでください。こう言っちゃなんですけど、姉さんが無茶をするのなんて僕に止められるわけがないし」

それに。

「姉さん、光璃さんのために無茶するの、多分好きですよ。だから、姉さんの楽しみ、奪わないであげてください」

「そう、ですか」

「それに光璃さん。せっかくの海なんですから、もっと積極的に行きましようよ。もっと欲張りになっていいと思います」

というか、それぐらいしないとジュス様相手に勝負にならない。たぶん。

しばらく悩むような表情をしていた光璃さんは、それでも。

「……ええ、そう、ですね」

と、迷いを見せながらも、そう言ってくれた。

「それじゃあ、僕は帰ります」

「ええ。今日は楽しかったです。空くん——」

「——私も、楽しみにしています」と。翼ちゃんに、そう伝えてください」

ええ、わかりました。

ということで今回のオチというかその後

セグウェイに乗っていると、ぴくぴく、と涼莉の耳が揺れた。

「……にあ？」

「ああ、涼莉起きたんだ。まだちょっとそのままできてね」

周りにはだれもない。まあ、屋敷の入口で結構会話してたしね。とはいえ門の近くではみんな待っているだろうけれど。

待ってるよね。置いてかれてたりしないよね。そういうの、地味にクルものがあるからやめてほしい。

「涼莉は十乃ちゃんと遊んでたねえ。楽しかった？」

「にゃー」

「うん、そっか」

さすがに猫の状態の涼莉の言葉はわからない。

けれどニュアンスとか、そう言うのは伝わる。それに水遊びをしているときもあんなに楽しそうだったし。

水遊び。

……………。いかん。いつぞやの屋上の件を一瞬思い出してしまった。

「に？」

「ああいや、なんでもない。なんでもないよ」

うーん、どうにも夏ということで今日といいこの前といい、変なアクシデントが増えてきたな。

女性の知り合いもそれなりにいることだし、今後はもう少し気を使うようにしよう。

折しももうすぐ海に遊びに行くんだ。あんまり変なことをして不快感を与えたりしたらせつかくの楽しい旅行が台無しだ。

「うん。気をつけよう」

「にゃ？」

「ああいや。海が楽しみだねって」

「にゃっ！」

夏の代名詞、と言ってもいい存在の、海。

やっぱり楽しみではある。

涼莉も十乃ちゃんという友達ができてからは初めての遠出になるし、それも含めて楽しみといったところだろう。

「あ、門が見えてきた。ああ、みんないるね」

まだまだ夏休みは始まったばかり。

白い日差しも空の青さも、まだまだ深くなっていく。

その楽しみを胸に抱いて、夕陽の中を走っていく。

そして。

先程の僕の誓いは、わりとどうしようもないくらいに無駄なものになるんだけど、まあそれはおいおい。

僕と姉さんと姉さんの幼なじみ（後書き）

想像以上に長くなりすぎた……。

いつの間にか光璃ではなくメイド三姉妹の話になったような気がするの
のは気のせいだと信じます。

僕と姉さんと海へ至る道（前書き）

これからしばらく、海での話が続きます。

今回はサーブシーンや水着とかはなしですけど。

僕と姉さんと海へ至る道

結局参加者はかなりの大所帯となった。

みんなで海へ小旅行へいくまさにその日の朝。

結果として参加になったのは以下の面々である。

まず発案者である姉さんに、涼莉、僕、ましゅまろ。

続いてスポンサーである光璃さんとメイド三姉妹。

夕陽と綺月の幼なじみふたりに、クラスメイトの大地。

そして姉さんの友人リリスとリアさん。

最後にジュス様と、総勢十四名にもなる大所帯となった。これでも部屋に余裕があるのだから、日ノ影の家の豪勢っぷりがわかうというものだ。ほぼ学生という面子を受け入れてくれた日ノ影の人たちにも感謝である。

一応引率責任者はリアさんとジュス様のふたりだ。既に僕が苦勞する事が確定している組み合わせな気がしないでもない。

がたんがたん規則的にもたらされる揺れのリズムはどことなく心地良く、適度に頼まれた気温と湿度の車内の空気と相まって眠りを誘うものだ。

本来なら。本来ならね。

「まあプチ修学旅行みたいになってるこの状況じゃあ、ねえ……」

苦笑交じりに言葉を漏らす。まあ、他の乗客に迷惑がかからない程度ならば騒ぐのは僕も好きだし、賑やかな方が楽しいのは多分誰だって同じだと思う。

ただそう。

なんというべきだろうか。

モノには色々やり方があると思うんだよね。

「ねえ、姉さん」

「うん、なあに？」

僕の声に姉さんの返事が返る。正面から。姉さんの背中越しに。至近で。

「……………姉さんのチケット、ちゃんととってたと思うんだけど」

「うん、そうだね。空の隣なもの」

そして今、僕の隣の席には大量のおかしや遊びの小道具が散乱していた。明らかに人が座ることが出来る状態にはない。

では姉さんは今、どこに座っているのか。

「……………僕の膝の上に座るのは、どうなの？」

「問題、あるかな？」

うーん。

「まあ別に問題って訳でもないけど」

後ろから「え、あれ、ないので御座るか?!」と大地の声が聞こえたけれどまあ気にする必要はないだろう。

けどねえ。

「……涼莉も真似してるんだけど」

「ママは良くて涼莉はだめなの？」

「……いやダメじゃないけどさ」

後ろで大地がボタンボタンとのたうちまわる音が聞こえる。

黙れロリコン。そう思った二秒後、急に静かになった。

そういえば大地の隣はリアさんが座って電車に乗った二秒後には寝ていたっけ。眠るの邪魔されるの、嫌いそうだね、あのひと。

というわけで、電車だ。

僕らは駅で集合して、そのまま電車に乗り込んだ。

十四人だけでもましゅまろに関しては荷物扱いで問題ないということでもチケットも取っていない。今彼女は眠りこけるジュス様の枕がわりになっている。

ちなみにそのましゅまろをチラチラとやや剣呑な眼つきで気にしている光璃さんがいたけれど、うん、とりあえず放置しよう。

一体どれだけ嫉妬の範囲がでかいんだろうか。昔は僕の血を吸った蚊相手に阿修羅の如き怒りを見せていたけれど。

席割は、ジュス様が一人前の席に座り、残りは四人ひと組で集まっている。

まず僕とその隣に姉さん、葉月と涼莉。

その後ろに、大地と夕陽、リアさんとリリス。

最後の四人の席に光璃さんとメイドさん達。

だったんだけど。

電車が出発していきなり、姉さんは荷物を全部椅子の上において僕の膝の上に座った。

すると涼莉も姉さんの真似をしたくなったらしく、僕の膝の左右にはそれぞれ姉と妹みたいな猫娘が座ることになった。

そうしていると今度は十乃ちゃんがやってきて、涼莉の座っていた席に座ってしまった。

千影さんはみんなのお世話で席に座っている時間の方が長いし、リリースはあっちをうろうろこっちをうろうろ。夕陽と大地は馬鹿話をしつつ、たまにリアさんにツツコミという名の折檻を受ける。

光璃さんはたまに念動力でましゅまろにちよっかいをかけ、百羽さんはそれに遅れて気づきわたわた慌てて胸を揺らす。いや胸関係ないけど。

とまあ。

旅行開始一時間も経っていないのに、割といい具合に収集がついていない。

「光璃さん、目的地まではどのくらいかかるんでした——いやいや社内で火はマズいですって」

いつの間にか嫉妬の感情がそのまま炎として彼女の回りをゆらゆらと回っていた。

「あら、ごめんなさい。漏れてしまっていました。恥ずかしいですね」

うつすらと頬を染める光璃さんはやはり綺麗だ。綺麗だが、それはなんというか美しい刃物に目を奪われるような感覚である。油断すると刺される。

ていうか発言内容がなんかアレなんですがこの人意図的なのか天然なのか。

そんな光璃さんを見て、姉さんがこらえきれないといった風にわらった。

「む。翼ちゃん、人の失敗をそんなふうに笑うのは行儀が悪いですよ」

「あははは。ごめんごめん！ でもね、これでもあたしは嬉しいんだよ。ずいぶん自分に素直になったよね、光璃は。」

うん、うれしいよ光璃」

「……翼ちゃんはいつもまっすぐですね」

呆れたように言うけれどきつと照れ隠しだったんだろう。頬を少し染めてはにかんでいた。

「そういえば……昔は空くんにも、ずいぶんと迷惑をかけましたね。まだきちんと謝っていなかったでしょう？」

あの時は本当に、ごめんなさいね」

「ああいえ……まあうん、そのことはもういいですよ……というかなるべく話題に出さない方向でお願いします」

思い出すと。

傷口が開くので。

「そういえば光璃さんが空に何をしたのかって、わたし聞いたことがなかったわ」

しかしそんな僕の心の声は綺月には届かなかったらしい。

やめてくれ、と視線で訴えるけれど、どうやら彼女は興味のほうが勝ったようだ。あと、なぜかこちらを見る視線に剣呑なものを感じる。

おかしい、何かしたのか僕は。

「あら、そうでしたか？ ……まあそうですね、あえて言い触らす

ことでもないですし。

あの頃は私も自分に抑えが効いていなかった頃ですから色んなことをしてしまいました」

本当にね。

ずっしりと胃の中に重いものが沈んでいく。膝の上の涼莉がきよとんとこちらを振り返った。ゆらゆら揺れるしっぽの向こうで首をかしている。

なんとなくその頭を撫でた。涼莉は訳がわからないといった様子だけれど、目を細めて耳をぴこぴこと揺らしながらそれを受け入れていた。

ああ、癒され——なぜか姉さんの視線にまで剣呑なものが。おかしい、一体この世界に何が起きているんだ。

あの頃。

確か、小学校六年生の、冬だったか。

光璃さんの家の地下に監禁されていたのは。

顔を合わせるたびに催眠、洗脳。

両手は縛られ食事はすべてなされるがままに『あーん』。

お風呂に入るのも一緒。背中の洗いっこをしないと脳に直接電流を流すペナルティが発生した。

お世話をしてくれた千影さんや百羽さんと、最低限以上の話をしようものなら、嫉妬とともに放たれる念力が壁をねじ曲げ、歪ませる。

部屋に現れた季節外れの蚊が僕の血を吸えば怒り狂って蚊をオーバークルした上、負け時と僕の血を吸う。さらには僕に血を吸わせようとする。

エンドレスで光璃さんのプロモーションムービーがテレビで流れていて、それに関する問題を出される。間違うとペナルティなので

完全に覚えなないといけない。

一日一回四百字詰め原稿用紙三枚分の愛の言葉を提出。
監禁されてやることないのに交換日記とか嫌がらせか。

とまあ。

あいにくと、中学生ということを考慮に入れても救いようがなかった。真剣に訴えに出るかを姉さんと相談したね。

しかも姉さんの行動パターンを完全に読んでいるもんだから、さすがの姉さんでも僕を見つけるのに一週間かった。

そして、僕を見つけた姉さんは――キレた。

姉さんと光璃さんのマジ喧嘩は、アレが最初で最後だ。

いや驚いた。まさか怒った姉さんに光璃さんが付いてこられるとは。

あれ以来、姉さんは光璃さんの矯正に着手したんだけど……。

『まあ結局なるようにしかならないわけよね。ジュス様が来てくれなかったら、本当、最悪諦めざるをえないかなって思ってたんだよね、色々』

幼なじみとして親友として、姉さんは光璃さんの事を危惧していた。だから、光璃さんの変化に心底安堵していた。

いくら姉さんの本気についてきた光璃さんでも、姉さんの全力には到底耐え切れるものではないだろう。だから、それを振るわずに済んだことを誰よりも安心したのは姉さんだった。

僕も過去の事は忘れられないしなかなか割り切ることはできないけれど、今彼女が変わったことについては心から祝福している。

だから頼む。お願いだから、ましゅまろに対する嫉妬をもっと抑

えてくれ。椅子の肘掛けが今にも壊れそうなんです。我慢してください。

「……………ええと、なんて言うのか」

綺月も困った顔だ。

「想像以上というか想像の外の出来事過ぎてコメント出来ないんだけど。空よく生きてたね」

「体が平気ならいいって考え方は悪だと思っただよね僕」

「そっか。それであの年は初詣に来てなかったのね」

いつも初詣は綺月の神社に行っているので、おかしいことには気づいていたらしい。

「ていうか新年早々死んだ魚のような目をしてたのはそれが理由だったのね……」

「まあ冬休みはあれで潰れたようなものだからね」

ところで。

僕の街には数年前に大きめの公園ができた。

綴喜ヶ原公園というその場所は、ある日唐突に森の一部が完全に更地になった場所に作られた公園である。

更地になったのは僕が小学六年生の冬だ。
だから何というわけでもないが。

目的地まであと一時間ほど。
ということで、電車の中でできるゲームをすることになった。

「……………いや、それはいいんですけど」

「どうしたんですか空さん！」

「はい元気いいね十乃ちゃん。それはいいんだけど、僕としてはこの状況にあえて疑問を投げかけたい」

僕の膝の上には、相変わらず姉さんと涼莉。

十乃ちゃんは今は光璃さんの膝の上に座っている。つまり光璃さんがこちらの席に移ってきた形だ。
で。

「……………納得がいかないわ」

「ごっこ、ごめんなさい綺月ちゃん!!」

「いえ、別に先輩が悪いわけではありませんから……」

百羽さんの上に、綺月が座っていた。
とりあえず。

「綺月さん、前見えないでしょうそれ」

「ええ、困りましたね」

声から察するに言うほど困っている様子はない。

十乃ちゃんは小学生とは思えないほど全身の発育が進んでいるので、一般的な背丈の光璃さんの膝の上に座ってしまうと、完全に視界を覆い隠してしまうのである。

そしてその隣りは、むすっとした顔の綺月に百羽さんが気を使う、という構図になっている。

こちらは綺月の身長が低いおかげで、視界を覆い隠すようなこと

に放っていないものの……どうも綺月は、頭の後ろに当たる柔らかな感触二つが気になっているというか気に入らないというか。

うんまあ。

「じゃあババ抜きにしようか」

「姉さん僕の疑問は全力でスルーされる運命でなきゃいけないの？」

「この状況いやなの？」

「そんな事はないけど」

「だよな？ はい、これ、空のカードね」

手札を姉さんから配られる。

ちなみにこれはチーム戦だ。姉さんと涼莉、綺月と百羽さん、光璃さんと十乃ちゃん、そして僕。

以上五チームによるチーム戦となっている。

うん？ なぜ僕がひとりかって？

……女のコの集団に男がひとり混ざったら大体こんな扱いだよ。

「空殿、不満なら拙者が！ 拙者がその場所を代わるで御座るよ！ ネコミミロリを膝の上に、膝の上にいいいいいいいいああああああああああああっ！！！！！！」

ちらりと後ろを見ると、大地が座っていた場所には青色のマントでぐるぐる巻きにされた何かがおいてあった。さらにそのマントには魔法少女チックなステッキが無数に突き刺さっていた。

その物体の正面に座っていた夕陽はあくびを一つして。

「食うか？」

と、スナック菓子をさし出してきた。
ありがたくいただくことにした。

「じゃあ始めましょうか」

「うん……うん？ あれ？」

なにかがおかしい気がしたけれどそれが何かがわからない。

ううむ……謎だ。

「……おまえ、本当、翼さんが絡むと……」

夕陽が後ろでなにかつぶやいていたけれど、よく聞き取れなかった。

ぐるぐる巻きにされたものがうーうー唸っていたから。

すい、と缶ジュースが差し出された。

缶から手を辿った視線の先は、千影さんだった。

ああちなみにさすがに今日はメイド三姉妹は私服だ。それでも『別に服が仕事をするわけでもありませんから』という理由でメイドとしての役割を果たそうとする彼女は、尊敬できると同時に頑固だとも思う。

「ありがとうございます」

「いえ、お気になさらず。正直に言えば、こうしていいと逆に気疲れを起こしますから」

そういうものか、と思う。

まあ僕も姉さんがいないからと家事に手を抜くきにはならないし、それと同じことだろう。

もう一度感謝の気持ちを視線で示しつつ、もらった缶を見る。

吐露非狩古鬱

……実は僕はみんなに嫌われてるんじゃないかと。
なんか本気でそんな心配がさ。
ね？

「空、ほら、空の番だよ」

「え？ あ、ああうん」

姉さんに急かされる。

僕は十乃ちゃんの手札からひとつトランプを引く。スペードのジヤック。捨てるペアはなし。

ちなみに現状はすでに三戦目。勝負はポイント制で、一位から順に三、二、一の点数が入る。そして現状、僕の点数は、四点。

他のみんなは三点なので、一步リードしている形だ。

とはいえこれはもう運ゲーなので油断はできない。いや神経衰弱やブラックジャックなら勝てるのかといえればそれも難しいだろうけど。

とはいえ勝負事で簡単に負けてしまうのも悔しい。

なんだかんだで僕も勝負事には熱くなるタイプだ。負けず嫌いというべきかも知れない。

最低限、相手の表情を読んだりはしているんだけど……ううん、十乃ちゃんは表情が読みきれないんだよね、いつもニコニコしているから。

もっと追い詰めてくればそのへんも分かりやすいのだけれど、単純にこうして遊んでいることが『楽しい』というのが彼女の一番の感情らしく、表情に一番強く出るのがその部分なのだと。

「ふむむむ。うん、じゃあ涼莉、それ、取って」
「はいなの」

僕の手札から、涼莉が一枚カードを引く。
すると。

「はい、上がり」

「わー！ ママすごいの！」

「ふふん、褒めて褒めて。もっと褒めて」

姉さんペアがこれで上がり。ポイントは六点。これで一気にトツ
プに躍り出た。

「あらあら、翼ちゃん、順調ですね」

「翼ねーさんの事だからなにか変なコツでもつかんだのかしら」

「へへん、ないしょだよー」

胸をはる姉さん。あまり人の膝の上で動くのはどうかと思う。色
々と。

のけぞったせいで頭が僕の顎に当たる。柔らかい香りが漂ってき
た。

「にひひひ、空、涼莉の勝ちだよ！」

涼莉が僕に体をあずけるようにして見上げてくる。その表情は自
慢気だ。

揺れるしっぽが僕の頬をペシペシと叩く。それはいいけれど、う
れしいからって跳ねるのはやめようね、涼莉。腰の上でぴょんぴょ
ん上下にはねられると、周りからすごい目で見られるんですよ何故
か。ええ、何故か。

「まだまだ、勝負は途中だよ」

勝負は五番勝負。最後にもっとも取得点の高かった人の勝利だ。
姉さんも頷いて。

「そうだね！ 罰ゲームを受けないためにも、油断はできないよ、
涼莉」

なんか変なことを言い出した。

「……姉さん、気のせいかな、やたらと物騒な単語が聞こえた気がするんだけど」

「ほえ？」

「そうですね……なにやら初めて耳にする単語でしたけれど」

「あ、ああああの、わ、わたしも初めて、です……」

ですよ。

言ってなかったですよ、それ。

「姉さん、僕ら罰ゲームがあるなんて聞いてないよ？」

「あれ、そうだった。あははは、忘れてたよ、ごめんごめん。でもさ、やっぱり罰ゲームとご褒美がある方が、面白くない？」

や、それは賛成するけれど。

みんなの顔を見る。年少ふたりを除いて、不安がみえた。いや、
光璃さんの顔は十乃ちゃんに隠れて見えないけど、気配でなんとなく。

「翼ねーさん、そういうのは今回、なしにしましょう。さすがにいきなりで、心の準備ができてないもの」

「そそそ、そうですよ。そんないきなり罰ゲームだなんて、いきなり過ぎます」

「翼ちゃんの言いたいことはわかりますけれど、やはりルールは最初に周知しておくべきですし」

「んとね、十乃はどっちでもいいけど、お嬢様が反対してるからやっぱり駄目でした」

「……だってよ、姉さん」

僕らの総意は大体揃っているらしい。

姉さんもがっくりと肩を落とした。

「そっかー、まあみんながそう言うんじゃ仕方ないよね。

罰ゲームとご褒美はセットで一位の人が最下位の人に何でも命令できる、って言うのだったんだけど」

瞬間。

ゆらり、と綺月の髪が揺れた。

ぴたり、と百羽さんの震えが止まった。

きし、と光璃さん周りの空気が固まった。

うん？

あれ？

なんだ、これ。いきなり空気が。

重。ていうか、重。

なんだこれ。

みんなうつむいて、じっと固まってしまつて。

そうして、しばらくして顔を上げたみんなは……笑っていた。

「ま、でもそういう要素がゲームを盛り上げるのは確かだよね空！」

「リスクを背負うことでゲームの要素も高まりますし！」

「それにやる気を促すことにもなりますしね」

「十乃はどっちでもいいけど、お嬢様がノリノリなのでいっちゃい
ましよう！」

「だってよ、空」

「あれなんかいきなりアウエーなんだけどおかしくない?!」

知らないうちに世界の法則が逆転していた気分だ。

「でもよくあることでしょう？」

「そうだねよくあるよねでもだからって慣れるわけじゃないんだよ
?!」

しかし慌てる僕をよそに綺月たちと光璃さんたちはさっさとカードの交換を済ませてしまう。

綺月の手札から十乃ちゃんがカードを引く。捨てる。僕の前に差し出される三昧のランプ。僕の手元には四枚。綺月たちは二枚。

……まずい、分が悪い。

しかしここでポイントがゼロという事態だけは避けなくてはならない。

くそ、まさか勝負が後半戦に差し掛かった状態からいきなり爆弾を投下されるとは。

カードを引く。ハートの四。手元にはクローバーの四。捨てる。カードを差し出す。引くのは綺月だ。

その視線は真剣そのもの。それは、葉月を膝の上に載せている百羽さんも同様だ。普段の気弱な様子が消え、張り詰めた空気をまとっている。

みんなスイッチの切替早くないですか。
そうして。

涼莉が狙いすましたかのようにカードを引いて……それを確認もせず、自分の手札の一枚を引いて、合わせて場に捨てた。

ハートとスペードのエース。

……いやあの。

「綺月、なんで僕の手札がわかったの？」

「そんなの、教えてあげるはずがないじゃない」

当然だった。

そうして。

「それじゃあ、私たちも上がりですね」

光璃さんは綺月の手元に残ったカードも引かずに断言した。
いやあの。だからですね。

「はい、おーしまいです」

十乃ちゃんが手元から一枚捨てる。それを確認した綺月は、ため息を付いて自分の手元に残ったカードを捨てた。

ダイヤとハートの八。

「いやいやいやいや！　なんですか今の最後の流れ！　ていうか光璃さんはどう考えても最後透視使ってましたよね？！」

「はいそれじゃあ次のゲームいくよー」

「やっぱり僕の疑問には誰も答えてくれないんだね！！」

それでもはや僕の叫びに答えてくれる人さえこの場にはいなかった

た。

戦場だ。いつの間にかこの場所は戦場になっている……！！

「かわいいそうに……」

夕陽の言葉はもはや諦めさえもっていた。

結果？

うん、惨敗ですよ？

だっておかしいんですよ、聞いてくださいよ。なぜか分からないけれど、僕の手元にはとことん揃わないカードばかりが集まって、他の人は捨てるのが当たり前、みたいな空気なんですよ。

不正だとかルール違反だとかそういうものを超越した、もう何かしらやりとりがあると思えない流れで。

もうね、あれ三組が戦ってる横に僕がいるって言う、そういういたたまれない感じ。何なんでしょうねあれ。

僕もね、必死で抵抗はしたんですよ。

「はあ……」

ため息。

「空ってば、ゲームに負けたのがそんなに悔しかったの？」

「で、ですが勝負の世界は非常なので、はい、その」

うんそーだね。一位になった君たちはいいだろうけどね。

明らかに僕の知らないところで異能が飛び交っていたババ抜きを

制したのは、綺月と百羽さんのペアだった。

最下位は僕。

今日か明日にでも、彼女たちは僕に対する命令権を行使するらしい。

このふたりが一体僕にどんな命令をするんだか、ちょっと読めないあたりが怖い。どうか無理難題が降ってこないことを願うしかない。

と。

「さて、それではそろそろですから降りる準備をしましょうか」

光璃さんの言葉で、僕は動き出す。

窓の外には夏の空と、緑と、遠くには光を受けて輝く海。

空の蒼と海の碧。そのどこか曖昧な境界線を見ていると、憂鬱な気分も吹き飛ぶというものだ。

さて。

旅行はまだまだ、始まったばかりだ。

オチではなくて次回に向けて。

駅を降りた僕らを待ち受けていたのは、一台のマイクロバス。
この人数を載せるために千影さんが手配してくれていたらしい。
ありがたい限りである。ありがたい限りなのだが。

「なぜ、リアさんが運転席に？」

「なんでって、あの男が寝てるんだから仕方ないじゃん」

ジユス様は電車を降りる時も半分寝てた。バスに乗ったらいきなり寝た。まあ、いつもどおりである。

隣に座る光璃さんが嬉しそうだからまあいいとする。

「……免許、持っているように見えませんが」

正確には日本の免許を。

すると彼女はあっはっはと軽く笑って。

「さ、乗りなよ」

「たまには僕の質問に答える人がいてもいいと思うんですよ!」

「そんな事で泣くなよ男の子……」

だって誰も人の話聞いてくれないし!!

「はあ。」

やれやれ。

あのねえ、免許免許っていうけれど、じゃあその免許を持った人間が一年の間にどれだけの事故を起こしてるとおもってるのさ。

免許があるから大丈夫、だなんていうのは危機管理の意識が弱いヤツの言葉だよ。むしろ扱えるからこそ事故を起こす訳なんだしね」

「はあ、なるほど」

「とういわけで、はよ乗れ」

「はい……ってだから質問に」

「はいはいはいはい！ わーかーりーまーしーたー！！ 持ってないわよこれでいい？ はいじゃあ乗れ！」

「逆ギレ？！ ていうかだめですよ！ 免許のない人間に運転させられるわけ無いでしょ？！」

「残念でしたー！ アタシは人間じゃありませんー！！」

「ガキかあんた？！」

「ああもう面倒だなあ！ あんまりグダグダ言っているとアンタも荷物として荷台に積むよ！！」

うぐ。

ちなみに、電車でぐるぐる巻きにされたモノは相変わらずぐるぐる巻のまま、荷物として扱われている。

誰も何も触れない。ちよっと哀れだ。

「……わかりました。わかりましたよ。ただし、絶対に安全運転でお願いしますよ」

「任せなつて。例えばトラックに追突しても追突したトラックをぶち抜く位の保護をしてやるからさ」

「事故を起こすなつて言ってるんですけど」

リアさんはきょとんとして。

破顔した。

「まあ寝てなよ。すぐ終わるから」

質問に答えてくれる人が、そろそろ欲しいと思う今日この頃だった。

僕と姉さんと海へ至る道（後書き）

ちなみに。

バスは千影さんが運転するつもりで用意したものでした。おい未成年。

それにしても光璃の本性は自分で書いていてやべえですね。これでも相当マイルドにしたんですけど。

さて、これから海の話をとんとんと続けたいところですが、先日夏の祭典に当選していたのでちよつと更新速度落ちていきます。ご容赦を。

僕と姉さんと夏の日差し

およそ一時間にわたる恐怖のデッドコースターを乗り越えた先に、それは現れた。

僕らを出迎えたもの。

照りつく太陽。

青い空。

白い雲。

香る潮風。

そしてでっかい、ダイオウイカ。

「なんでだああああああっ?!」

思わず帽子を叩きつけてしまった。陽射しが肌を焼く。暑い。と
いうか熱い。

いや、落ち着いてもう一度確認してみよう。

肌を焼く陽射し。

抜けるような空。

そびえ立つような雲。

頬を撫でる海風。

そしてでっかい、ダイオウイカ。

「だからなんつつつつつでだあああああっ?!」

最後の一文だけは動かし難かったらしい。おのれ。

海は目の前。砂浜に降りる堤防の上に並んで立った僕らの前の海には、見上げるほどに巨大なイカがぬーん、と存在していた。

というかダイオウイカでさえないよねあれは。海からビルがそびえ立っているみたいなのサイズがあるんだけど。なにあれ。

「と、言う事で……」

絶句する僕らに、柔らかな声。振り返る。

光璃さんが、頬に右手をあてて、可愛らしく首をかしげてみせた。いちいち絵になるな、この人。

千影さんは寄り添うように日傘を差している。こうしているとお嬢様とその従者、という関係性に凄まじい説得力が出るのは僕が単純だからだろうか。

「海で遊ぶ前に、イカ退治、宜しくお願いしますね」

「なん……だと……」

なんでも。

夏の始まりの時期からこの海岸に住み着いてしまったらしい。

邪魔ではあるものの、普段から人がいるわけでもない別荘。特に困る人もいないからと放置していたのだが、ずっと放っておく理由もない。

そこで渡りに船とばかりに、うってつけの連中が海を所望したというこで。

「交換条件だったのですけれど……翼ちゃん？」

「だって言ったらこなさそうな人が何人かいたんだもん」

姉さんの不満いっぱい視線は主に僕とリアさんとジュス様に向けられていた。すい、視線を横にスライドしてそらす。リアさんは苦手なはずの太陽を見上げ、ジュス様は寝ていた。

僕が言うのもなんだけど、本当に駄目だな、この集団。

「まあそんなわけだから、みんなお願いね」

「え、姉さんは？」

「やんないよ？」

やんねえのか。

「んじゃあ、あたしもパス。日中に激しい運動とか趣味じゃないし」
続いてリアさんが一抜け。

「俺もねみいからやんねーぞ」

続いてジュス様が抜けた。こんな時だけ目を覚ますんですか、あなたは。

「あ、わたしもパス。あれ、一応このあたりの神様でもあるみたいだから。わたしがでちゃうとちょっと大事になりすぎそう」

ああうん、綺月のその事情なら仕方が無いね。

こんなところで神話大戦開かれたらたまったもんじゃない。

とうか、ことごとく主力級の人たちから抜けていくなど思ったけど三人のうち人間ひとりしかないや。これはメンバーがすごいと思うべきなのか綺月がすごいと思うべきなのか。両方か。

「あ、拙者もここは辞退させて頂きたく」

「え？ なにいつてんの、ダメに決まってるじゃない、そんなの」

「当然の如く却下されたでござる？！ な、何故で御座るか？！」

正直拙者未来のびっくりアイテムもないしぶっちゃけ参加しても役

立たないでござるよ!!」

「僕が参加するんだから参加しないと。いや、イヤじゃない。無理じゃないってば。いいから。いいから。最初だけ、最初だけだから」
「それ最後まで参加するフラグで御座る!!」

いや。

途中退場の可能性も大いにあるよ、君と僕の場合。

「とにかく無理でござる! 大体あのイカ、足を除いて見える部分だけで優に五メートル以上で御座るよ? 自衛隊とかそう言うの呼ぶレベルだと思うのでござるが!!」

「あんまり騒ぐとみんなで海に行っている間君だけ別荘の中で待機させとくよ」

「さあ何をグズグズしているで御座るか! さっさとあのイカ野郎を片付けるで御座るよ!!」

見事なまでの手のひら返しだった。なんかもうここまで欲望に忠実だと逆に感心する。と同時に、イカ関係なく閉じ込めておいたほうがいい気がしてきた。

さて。

ということ。

僕らVS巨大イカ(推定二十メートル以上)とのマッチが決まったわけだが。

戦闘メンバーは僕、夕陽、大地、リリス、涼莉、千影さん。

「え、千影さん?!」

「はい……」

どんよりとした空気を漂わせて、メイド三姉妹の長女が立っていた。

「え、アレ退治に参加するんですか？　だって、どう考えても無理だと思っんですけど」

千影さんはメイドさんだ。それ以上でもそれいかでもない。なので超能力も魔法もなければ重火器を扱えたりもしない。……しませんよね？

そんな彼女が、なぜ？

「お嬢様が、お昼にバーベキューでイカを食いたい、と」

ざざーん。

潮騒が優しく僕らを包む。

きらきらひかる海は宝石のようで。

僕らは揃って、イカを見た。

「そうか……もう、お昼の時間か」

「まあ確かに、あんだけの量なら腹一杯になってもまだ余るよなあ」

「いくらでも食べられるで御座るな」

「……食欲、旺盛」

「にやっ。お昼なの？」

「……まあ、そういう事でして。戦力にならないとは思ったのですが、せめて足の一本だけでも、と」

千影さんは両手にナタを構える。いや、今どこから出した。僕が目が確かならスカートの中から出てきたぞ。

「あら、女のコのスカートの中に興味があるんですか？」

「その発言は誤解を招きますよね!!」

あとナタをぶらぶらしないで。怖いです。

「はいはい、それじゃあみんな、こっちは荷物を片付けておくから頑張ってねー」

「はい。姉さんもお昼の用意お願いね」

お互いに手を振る。みんなは歩いて数分の所にある別荘へと行っ
てしまった。

……さて。

どうも、マジで僕らでこの巨大イカをどうにかしろ、ということらしい。正気かい。

「……まあ、飯が豪華になると思えばいいだろ」

「そんな軽い考え方でいいのかな、この巨大生物は……」

だって、ぬーん、って感じだし。

とてもじゃないけど石を投げてどうにかなるようなものじゃねえ。

「まあとりあえず……ちよっかいかけてみっか」

どこか投げやりな様子で。

夕陽が手のひらをかざす。すると、手のひらからバチバチイツ！と光が走る。

青白い光はそのままイカに着弾。青い燐光を放って弾けた。

「んぎょおおおおおおおっ!!」

イカが叫んだ。

「え？ イカってあんな声で鳴くの？」

「さあ……鳴いたんだからなくんじゃねーの？」

どう対処したらいいのか、いまいわからない。が、戸惑っている暇はなかった。

「まずいで御座るよ、今の雷撃でイカがこっちを完全に狙っているで御座る！！」

「とにかく、砂浜に降りよう！」

いざ、イカを倒すべく、僕らは砂浜に降りる。

ざく、と靴の裏で砂浜の柔らかい砂を踏む感触。僅かな高さを降りただけで、一気に夏の匂いが強くなる。

感傷的なきぶんに浸れそうなどころだけれど、目の前にはでかいイカ。うん超絶ぶち壊しだね！

「あぶないっ！」

イカの触手が振り上げられ——ずどん、と音を立てて振り下ろされた。

標的になったのは夕陽。おもいつきたたきつぶされてる。

いや、大丈夫？

「ちつくしょう、イッテェ！！」

自分に打ち付けられた触手を蹴り飛ばして、半分砂にうまりながら夕陽が出てきた。さすが、ちゃぶ台飛ばしに耐える鋼鉄ボディ。あの程度の質量速度ではびくともしないのか。

「夕陽、毎度思うけど君本当に人間？」

「お前に言われるのだけは心外だっの！」

「いや僕は大概普通に人間やってるよ。ザ・一般人」

「いやいやいやいや、正直どっちもどっちでござらんか」

未来人にツッコまれた。なぜだ。

「ってそんな事をしている場合でもない、か！」

横薙ぎに振るわれる触手をしゃがんでかわす。

ぶうん、と後頭部を防風がなで、心臓がひやりと縮こまる。

「やばい、マジで死ぬかも……！」

「おいおい弱気なこと言うなよ。マジで不吉だから！」

「……大丈夫、任せて」

ビビる男ふたりの前に立ったのは、いつの間にか水着姿になっていたりリスだった。

リスの水着は黄色いワンピースタイプで、ところどころに花柄のフリルが飾り付けられていた。

腰には長いリボンがついており、動きたんびにひらひらと揺れる。

で。

手には巨大な、チェーンソー。

「……………え？」

「……とう」

紐を引っ張ると、きゅいん、ときらびやかな効果音と共にブルル

ンと豪快な音をエンジンが奏で始めた。

「あー……と、あの、リリースさん？」

「なあに、夕陽」

「もしかして、すでに変身済み？」

リリースさんはコクリと頷いた。いつの間にか変身してたらしい。
いや、というかですね。

「変身フォームに水着なんて、あったっけ？」

「用意した」

「用意できるんだ……」

僕の疑問に返ってきたのは非常に分かりやすい答だった。

リリースはチェーンソーを大きく振り上げ、歌うような声で言った。

「魔法少女リリカルリリース。成長期の胃袋を満たすために、参上」

「ずいぶん個人的な目的のために現れたなまた」

「……おなかすいた」

相変わらず燃費悪いな君は。

呆れる僕だったが、夕陽は違う反応。

「おう！　ですよね！　さあ行きましようリリースさん！　今日の昼
飯を豪華にするために！！」

「……らじゃー」

夕陽は風に乗って。リリースはポップなBGMを引き連れて、空へと舞い上がる。

「いっくぜえええ！」

「いっくよー」

夕陽の拳とリリスのチェーンソーが、左右から同時に放たれた。

「暴風、パンチイイイ！！」

「マジカル十三日の金曜日ー」

うねる風の拳と、ホッケーマスクをかぶったリリスの斬撃。
同時に放たれたそれは大きくイカの頭を歪め――。

「おぎよぎよぎよぎよっ?! ぶペーっ!!」

「う、おわああああっ?!」

耐え切れなかったのか、なんか墨が吐き出されてきたんですけど
!!

慌てて避ける。砂浜にヘッドスライディング。ああ、びっくりし
た。

振り返ってみてみると、さっきまで僕のいたあたりはべっとりと
墨が溜まっていた。

……いや、ていうか。

「うわあ……みんな、気をつけて! こいつの墨、まるでコールタ
ールみたいにでろってしてるから、捕まると面倒くさそうだよ!!」

「なんと、面妖な！」

なぜかいつの間にかすごい距離をとっている大地が遠くで驚い
ていた。あいつ本当どうしてくれようか。

「空、へいきなの？」

「涼莉……涼莉はいい子だなあ」

どこかの未来人とは違い、素直で他人を思いやる心がある。うん、本当にいい子だ。

思わず頭をなでなで。なでなで。なでなで。

涼莉も、うにゃ、と一声鳴いてされるがまだ。

「さてと、どうしたもんかな」

海を見ると、夕陽とリリスは繰り返しイカに対して攻撃を仕掛けている。しかしどうも、一撃が決定打になっていないようだ。どうにも、攻撃力を吸収されているように見える。

ふむ。打撃や斬撃はききにくい、か。

となると別のアプローチが必要になるんだけど……この場において空を飛べるのはあのふたり。僕も涼莉もそんな技能は持っていないし、すぐ傍で海を観ている千影さんも同様だ。大地？ いたね、そんなの。

「あのあたりだと、足は付きそうにありませんね。となると、向こうからこちらに来ていただかなくてはならないわけですが……」

「それも難しそうですし。うーん」

困ったな。

「では」

ひょい、と。

視界に横から手が伸びてきた。

その手は、円にまとめられた糸を持っている。

「……………千影さん？」

「来てくれないのであれば、釣り上げるしかないかと」

……………ですよねー。

糸を――釣り糸と、続いて差し出された針を受け取る。

「……………あの、」

「どうしましたか、そんなにじっと見つめて？」

「いやあ、こんなでつつつかい釣り針、いったいどこから取り出したのかと思って」

「女のコには秘密が多いのですよ」

素敵な笑顔でおじぎする千影さん。

この人、なんだかんだで謎が多いな。苦労人だけど。や、本当に苦労人なんだよこの人。

「……………なぜこの状況で空さんの視線に多分の同情成分が見え隠れするのでしょうか」

「いえなんでもありません……………頑張りましょう、お互いに！」

「え、あ、はあ」

戸惑う千影さん。まあいいや。

「で、これだけど……………」

釣り糸に針を結びつける。

手元を見る。

海を見る。

遠い。

海岸から現場までおよそ五十メートル弱といった所か。

引っ掛けるにはいささか心もとない距離である。

「うーん、涼莉、手伝ってくれる？」
「にゃっ！」

ぴん、と立てた涼莉に釣り糸を手渡す。
ぶんぶんぐると振り回したそれを――涼莉投手投げたアー！！
真っ直ぐにぶっ飛んでいく釣り針は。

ズドオオオオオオオオンツツツ！！！！

「……あれ？」

イカにぶち当たって突き刺さって、ちょっぴりその巨体を海面から浮き上げた。

どばああああん、と巨体が海水に沈む。

しいいいん、と静まり返る。波が寄せて返す音が静かに満ちる。
イカがゆつくりとこちらを向いた。

……あははー、気のせいかな？　なんかメチャクチャ、怒ってる
とか、まさかそういう。

「ズモオオオオオオオオオオオツツ！！」
「ですよねええええっ？！」

明らかに怒った様子でいかがこちらに向かってきた。
ていうか、速ッ？！　メチャクチャ速いよっ？！　怖っ！！

「千影さんここはまずい早く逃げ」

いない。

こつ然と姿を消していた。

「空、千影、あっち」

見れば、すでに百メートル以上離れた場所にその姿が見えた。

「いくらなんでも手際が良すぎませんかねえっ?!」

などと文句を垂れている場合じゃない。僕らも早く逃げないと!

「涼莉、逃げるよ!」

「にゃあっ!」

全力で逃げる。念のため、千影さんとは反対方向に。視線の先では大地が背中を見せて逃走していた。巻き込んでやる。何な何でもあいつだけは巻き込んでやる!!

当然僕らにイカが向かってきた。その巨体が迫るせいで、軽く津波じみた波まで生まれていた。

「うおおおあああああっ?!」

押し寄せる波に足をとられる。離れないように涼莉を抱き寄せた。引く波に引きずられないように足を踏ん張る。靴の裏の砂が一斉に波に持って行かれ、足首まで砂に埋まる。

イカは直ぐ目の前まで迫っていた。

「……ぐっ!」

どうする、このままじゃあつ?!

その時、僕らをかばうように人影が滑りこんできた。それは……。

「大地っ?!」

「ふっ、空殿だけならともかく、幼女が一緒とあらばかばわねばならぬというもの!」

何この言い草、超殴りてえ。

「さあふたりとも、ここは拙者に任せて逃げるで御座る——って言い終わる前に全力逃走で御座るか?! せめて最後までカッコつけてほしうで御座うごあつ?!」

背後で悲鳴が聞こえたかと思うと、逃げる僕の横を大地がバウンドしながら転がっていった。まるでゴミのようだ。

壁役にすらなつてねえ。あたりまえだけど。

「くう、ギャグキャラ出なかったら間違いなく今の攻撃で死んでいゝるで御座るっ!」

……無限に立たせ続けたら壁になりそうなことを言い出した。

「つて、馬鹿な事を考えている場合じゃない!」

すぐ後ろに迫っていたイカの触手を左右にかわす。砂や海水が舞い散り、顔に振りかかる。

「涼莉大丈夫?!」

「大丈夫——空後ろにっ!」

「え? ——げっ?!」

二本の触手が同時に振り下ろされようとしていた。
さすがにこいつは、ヤバイ！

すると、僕の腕の中の涼莉が素早く飛び上がり、一本の触手に噛み付いた。

「ズ、ズモオオオオッ！」

暴れるイカ。食い下がる涼莉。

と、ひととき大きくイカが暴れて、涼莉が放り出された。

危ない危ない危ない危ない！ 放物線を描く涼莉を追いかけて――

間に合……ったあああっ！

なんとか広げた両手で涼莉をキャッチする。

「ふう、危ない。涼莉、無茶しちゃダメだよ？」

「ふ……にゃあ？」

……なぜか涼莉が顔を赤くして表情をとろんと蕩けさせていた。
何事か。

「そういえば」

「うおあ、千影さんっ?!」

いつの間に背後に。

小さいから気付かなかった。

「何か不穏な思考を感じますね……それはともかく」

千影さんはちらりと涼莉を見た。

「猫は生のイカを食べると腰を抜かすとか」

「……ああ、そういえばそんな事も」

涼莉をうちに置いた当初は猫の飼い方の本をよく読んだものだ。確かに、焼けばいいけど生のイカはよろしくないとか。脚気みたいな症状がでるらしい。とはいえ。

「……これ、なんかちよつと違いますん？」

涼莉の様子はビタミン不足による腰砕けというより、熱に浮かされるような様子だ。

「まあ涼莉さんは少々変わった存在ですし、猫のルールがそのまま適用されるわけでもないのではないでしょうか」

「はあ」

まあ、妖怪だし。

「は……あ、うん……。空あ……」

腕の中で涼莉が息苦しそうに、瞳を濡らしてどこか艶のある声であえぐ。

ううむ。どうしたものか。

「そ、そそ空殿幼女の状態がすぐれないというのなら拙者が！拙者が今すぐに面倒を」

「とりあえず壁になってこいよ君が面倒だから」

「あんまりでござるよ空殿！」

だって。

気を遣う要素がもはやどこにもないんだもの。この状況でも欲望に忠実というのはある意味尊敬できる。

「グ、ズウウウツ!!」

「っと、さすがに何時までもコイツを無視はできないか」

ずんぐりと目の前にそびえ立つイカを見上げる。さて、どうしたもんか。

と思った瞬間。

「どっせええええいっ!!」

横から飛んできた夕陽が、イカを蹴り飛ばした。

「よう、空、大変だな」

「見ての通りだよ」

肩をすくめる。

「いきなりイカがぶっ飛ぶからびっくりしたぜ。にしてもあいつ、全然攻撃が効いてねえんだよ。どうすりゃいいと思う？」

「どうって。うーん」

姉さんがいれば問答無用で真っ二つにできただろうし、リアさんやジユス様なら力押しでどうにでもできただろう。

とはいえこの場にいる面々と少々難しい注文であると言える。けれど姉さんがこうして送り出した以上、やりようはあるんだろう。

なら答えは。

千影さんを見る。

「? どうかしましたか」
「いえ」

光璃さんが彼女をここへ寄越したと理由は、昼ごはんにはイカを追加したいからだ。

ということとは。
つまりそういう事か。

「リリース、火は用意できる?」
「用意できる。けどあれをすぐに焼くのは無理」

ふむ。

「じゃあ火をかけるんじゃない、火の中に飛び込んでもらおう」

幸い、条件は揃っている。揃わされた、と思わなくてもいいけれど。

「大地は釣り糸を持って。リリースは火の用意。夕陽はイカが来たら
うまいこと空に放り投げて」

「承知」

「……ん」

「了解っと」

「よし、じゃあ」

イカが起き上がってこっちを向く。

「そろそろランチと行こうか」

「「おう!」「おー」」

「ズモオオオオッ!!」

掛け声とイカの絶叫が重なる。

凄まじい勢いで砂煙をあげながら突進してくるイカを。

「よ、い、しょおおつとおお!!」

滑り込んだ夕陽が風で空に舞い上げる。

大地の握る釣り糸が勢い良く引きずられるけれど。

「ふん! 甘いで御座る!!」

ぴいん! と糸が張り、上昇の勢いが止まる。

そのままイカは自由落下を始め。

「……マジカル」

リリスがチェーンソーを消し、代わりに巨大な鉄板を砂浜の上に生み出した。

「地獄のホットプレート」

ごおん、とどこからともなく取り出した杖を叩いたとたん。

星のエフェクトが舞い散り、光が溢れ、鉄板から凄まじい熱気が吹き出した。

その上に。

「ゲキヨオオオオオオッ!!」

落下するイカ。衝撃で鉄板がやや歪む。

熱気で暴れるイカの足がブンブン振り回される。

「危ないなあ……すみません千影さん。ナタ一本もらえますか」
「ええ、かまいませんけれど」

涼莉を片手で抱えなおし、ナタを受け取る。
暴れる足の一本に狙いをつけ。

「――せいっ！」

投げた。

くると回転するナタは、見事足の根元に突き刺さり、長い足の一本切断した。

切断された足は勢いのままに空へ飛んでいった。

「あらお見事。しかし、リリース様でも切断できなかったものをよく切ることができましたね」

「熱で固まり始めてますからね。あれならなんとか」

「ああ、なるほど」

すでにイカは暴れることもなくなり、じつくりと焼け始めていた。
いい具合に空腹を刺激する香りが広がっていく。

「ともあれ、これでひとまず片付いた、ってところですかね」

空のふたりを見上げながら息をついた。

「ええ、そうです――いえ、最後にもうひとさうどうあるようです」
「は？」

千影さんの言葉に疑問を覚え、そちらを見ると、すたこらさつさと逃げている最中だった。その場に残される僕と大地。

その上に、影が落ちた。

……うーん、なんだろうね。なんだかすんごい嫌な予感が。

見上げると。

細長い物体が。

……………。

「さっき切り落としたあしかあああああつ!!」

どんな偶然だ! 完全に油断してた!!

気づいたときにはもう遅い。足はそのまま落下し——直撃はしないけれど、砂と海水を大量に巻き上げ波を起こした。

大量の海水に飲まれる。

「う、わ——ぷ」

ぐるん、と視界が回転する。砂利と海水に揉まれて、自分がどうなっているのかも理解出来ない。

気づくと、僕は空を見上げていた。

「——は、あ。い、生きてる?」

死んでない。背中にはしっかりとした砂浜の感触。どうやらきちんと生きているらしい。

よ、よかった……。

隣に視線を向けると大地が上半身を砂浜に埋めていた。名前のとおり大地に還っている。そっとしておこう。

ふと、影がさした。

見上げると、視界の中に逆さまになっ千影さんが映る。

「……………せめて教えてくださいよ」

「すみません。私もひっしでしたので」

そうか？

甚だ疑問だった。おもいっきり疑念を視線に込めてみたけれど千影さんはどこ吹く風だ。

「あっはっは！　おーい、平気か空ー」

「……………びしょぬれなう」

夕陽とリリースは相変わらず空だけれど、あっちはあっちで水浸しになっていた。リリースの髪も完全に水に濡れてしまって、体に張り付いてしまっていた。

はあ。リリースはともかく、いきなり着替える必要がありそうだ。

「さて。お嬢様たちを呼んできましたのでそろそろやってくる頃か
と思います。

ということで、その刺激の強い格好をいつまでも続けているのは
いかがかと」

……………え？

千影さんの言葉が理解出来ない。しかしそのまま千影さんはその
場を立ち去ってしまった。

はて。どういう事だろうか。
体を起こす。

と、何かが僕の体に乗っかっていた。

「……………は」

涼莉だった。

それはいい。

それはいいのだが。

水に濡れたワンピースはべったりとその体に張り付き、肌色が透けて見える。

相変わらず息はどこか深く熱く、たまに喘ぐ声は熱っぽい。

スカートは太ももまで捲れ上がり、どこをどうまちがったのか肩がはだけていた。

そこでそのはだけた肩を僕の左手はしっかりと抱いていた。

ふむ。

これは。

「何、してるのかな、空」

そう。

こんな、幼なじみの少女の怒りの誤解を招く程度には、なかなか
によろしくない光景ですよね。ええ。まあ。

その。
うん。

後ろを振り向かない。振り向いたらなんかこう、多分一生心に残る傷を負うような気がする。

だからとりあえず、この姿勢のまま言うべきことを言った。

「……………ちやうねん」

ふう、とため息が聞こえた。
ああうんまあその。

「天罰、靦面」

次の瞬間。

目の前が真っ暗になった。

まだまだ海は始まったばかりなのに、そろそろ僕の心は折れそうなのに、まだ次に続くから

イカはなかなか美味しかった。

みんなにも好評だ。

僕は若干味がわからないけれど。こう。口の中が痛くて。

「……だから事情も聞かなかったのは悪かったって言っているじゃない」

「別に怒ってるわけじゃないよ。あの状況じゃあ誤解を招くのも仕方はないしね」

そもそも猫にイカを食べさせてはいけない、ということを失念していた僕の責任だ。

まあその涼莉はすっかり元気になって熱の通ったイカを元気よく頬張っているわけだが。

「それにしても、みんな水着じゃないんだね」

「うん。先にご飯を食べてからにしようってことで」

集団の中、僕と夕陽と大地は水に濡れた上着を脱いでいる。水着はリリースただ一人だ。そのリリースはといえば、イカをすごい勢いで胃袋に収めていつている。どう考えても自分の体積よりもたくさん
のイカを食べている。

「それにしても、このイカ、さすがに全部は食べきれないよね。残ったのはどうするんだろう」

「ああ、それなら海に流せばいいわ。勝手に海に還るから」

「……そういうもののなの？」

「そういうものよ、神様だもの」

ふうん。

まあ綺月がそういうのならそうなんだろう。なんて言っただけで専門家なわけで。

「なんにせよ、始まったばかりなのにいきなり疲れたよ」

「お疲れ様」

いやもう、本当に。

「でも本番はこれからなんだから、しっかりね？」

「はいはい」

僕は苦笑した。

本番はこれから。確かにそのとおりだ。

海にはまだ来たばかりだし、海水にどっぷりつかったりもしたけれど、堪能したのは太陽の日差しと砂浜の暑さくらいだ。

まだまだ楽しむことは山とある。

「うん——そうだね」

夏も僕らも、まだまだこれからだ。

やけくそのように降り注ぐ陽の光のなか。

僕らは顔を合わせて、なんとなく笑いあった。

僕と姉さんと夏の日差し（後書き）

涼莉の立ち位置は癒し系マスコット。
のつもりだったのだけれど。あれえ？

僕と姉さんと雨の海（前書き）

過去最長。コンセプトさえ守れない書き手って。

僕と姉さんと雨の海

じつとりと汗が背中を流れていく。

これが自宅ならばうだるような暑さに耐えかねていただろう。

だけど今はこの汗さえも気分を高揚させるスパイスのひとつにしかない。

「いやあ、爽快だね」

そこかしこに漂う焼きイカの香りは、まあ別荘という雰囲気盛大に粉碎してくれているけれど、馴染んだそれはかえって小市民な僕にとっては楽しみさえ覚えるものだ。

「うむ、やはり海はよいで御座るな！ ああ、夢にまで見た生水着……生きていてよかったで御座る」

「大地は本当、欲望に忠実だよね」

「欲望に不実な人間はいずれ身を滅ぼすでござるよ？」

忠実過ぎるのはいかなものだろうね。

ちなみに。

今浜辺にいるのは男性組のみ。女性組は十分ほど前に更衣室にいったきりだ。

やはりというかなんというか、着替えに時間がかかるものらしい。なぜカリリスも付いて行っていたけど、まあその場のノリだろう。彼女はテンション低い割にノリはいいから。

「しかしまあ拙者、テンションうなぎのぼりで天を衝く勢いで御座るが、はて、皆はそうでもないで御座るな」

大地が僕らを見る。

いや、そりゃあ内心楽しみにはしているけど、君がやたらとテンションが高いせいで醒めてしまってるんだよ。

ジュス様は既にパラソルの下で居眠りに入ってるけど。本当、どこでも寝るなこの人。

「ジュス様、暑くないですか？」

「問題ねえ。適度に熱量遮断してるから」

「え……ああ、本当だ。よく見たら琥珀の光が……」

パンタグリユエルを使っているらしい。世界さえ砕く力の結晶がクーラー代わりだった。

ジュス様は单身でも最強だけれど、棄剣パンタグリユエルを使うと真剣に手のつけようがなくなる。のだけれど、どうもそのパンタグリユエル。何でもできるがゆえにろくなことに使われないという悲しい宿命を背負ってしまっている。

「ジュスティード殿は枯れているでござる」

「これでも老人なんぞな」

実年齢だと確か二千歳前後だったっけ。それでも元いた世界では大分若いらしいけど。

「相変わらずジュス様は生きてるスケールが無駄にでけえな」

「でかいといえばシスターマリジョア殿がないのは悲しいで御座るな。あの水着姿は壮観で御座ったが」

「……君は」

話を一瞬でそっちの方面に戻された。
もう頭の中が完全に茹で上がってる。

「というか大地、君いっつも幼女幼女言ってるような気がするんだけど」

「ははは、空殿それは早計というもの。拙者ロリコンで御座るが上は四十代下は一桁からオールラウンドに網羅している生粋の紳士で御座るよ？」

大きいのも小さいのも平等に愛する。これぞ正しく男の器量というもので御座ろう。

そう。

翼殿のような均整のとれた胸も水津弥殿のような清純さ溢れるちっぱいのも日ノ影殿のようなふくよかなのも涼莉殿のようなロリコン御用達のもリア殿のような美乳もパンドラ殿のような成長期真っ只中のも十乃殿のような見た目は合法手えだしや違法も百羽殿のような正しくおっぱいも千影殿のような我らが希望合法ロリも、そして、いかにも外国産なあの巨大なシスターマリジョア殿のも！！

全て！

いいでござるか？

全・て！

全てを受け入れずして何が男と言えようか？！ 言えるわけがない！ 在り得ないのでござる！！

夢と希望と愛とロマンが詰まった、胸！ そのすべてを受け入れてこそまさに紳士、漢！！

それで御座ろう、皆の者？！！

「「死ねばいいのに」」

いい事語ってる風だけど生粋の変態じゃねえか！
できればもう口を閉じてくれないかな！

あまりの酷さにジュス様まで声を合わせてたよびっくりだよ！！

とかなんとか馬鹿げた事をやっていると、ずばばばば！ と謎の音が猛スピードで近づいてきた。

おやなんだろう、と振り返った僕の目に。

大量の砂をまきあげて全力ダッシュしてくる涼莉の姿が映っ

「そー（→）らーっ（←）！！！」

「おごぼはあっ！！」

たと思ったら某ゲームハード機の発音よろしい声と共にすげえタックルぶちかまされて砂の上を転がった。それこそ、もうもうと砂を巻きあげて。

なんとか受身はとったけれど背中で砂浜を滑ったせいですっごい肌がひりひりする。

思わず、お腹の上に馬乗りになっている涼莉に怒鳴りつけた。

「って、涼莉なにをするのさ！ 危ないじゃないか！！」

「にゃあっ！！」

叱ったけれどなんのその。太陽よりも明るい笑顔が返ってきた。ああだめだこの娘。完全にテンション振り切ってる。先程までの大地なんて比じゃない。

ネコミミは頭の上で忙しく動き回っているししっぱは落ち着きなく左右をふりふり。

体は謎のリズムで左右に小刻みにゆれている。

そう。涼莉、性格も習性も完全に猫のくせに、水も海も嫌いではないし積極的に入る。ていうか普通に潜水までこなす。

色々突っ込みたいところはあるけれど、遠くで大爆笑している吸血鬼が普通に太陽の下で水着姿になっている事を考えるとなんかもうどうでもいいや。

ちなみに、涼莉の水着は白だった。白と言っても、いつぞやの白

スク水……ああうん、ちよつとこれを思い出すのは一旦タイムで。
とにかくアレではない。さすがに姉さんもそこまで悪ふざけはし
なかったらしい。

涼莉が身につけているのは白地に小さく薄いプルーの模様が入っ
た水着。上下に分かれていて、スカートのようにひらひらとした布
が可愛らしい。

よほど全力で走ってきたのだろう。よくみると全身にうっすらと
汗をかいていて、髪の毛が頬にはりついていていた。

しっぽにはやっぱり赤いリボンと鈴。どうも姉さん、これはゆず
る気はないようだ。

「とにかく涼莉、さすがに暑いよ」

「空は暑がりなのねっ」

いやその評価は如何なものか。ともあれ、腰の上から涼莉を退か
す。

「あはは！ 空、だらしないわよー」

「いや姉さんさすがに全力疾走の涼莉は受け止めきれないって」

やって来た姉さんの手を借りて起き上がる。

「少しくらいは勢いを殺せるでしょ？」

「油断してなければね……さすがに不意打ちであの速度に対応する
のは無理だよ」

さらに言えば、これで後身長や体重が成長すると、待ち構えてい
ても耐えられそうにない。

正直一年前より威力の上がり方が半端ないのだ。いつか轢き殺さ
れやしないかと内心では戦々恐々としていたりする。

「頑張りなさい、男の子なんだから。弱音は吐かないの」

「姉さんの男の子像はきつついなあ。でもまあ、頑張るよ」

「うんうん、それでいいよ」

満足そうに笑う姉さんの水着は、スポーティなセパレートタイプだった。色は明るいオレンジで、白い肌によく映える。

姉さんが着ると色っぽいというより動きやすそう、という印象をうけるのは果たして僕が弟だからだろうか。いや、似合っていることは確実なだけけれど。

大地と夕陽の反応は……ああ、大地は既に鼻を抑えてるし夕陽は興奮して海に向かってなにやら雄叫びを上げている。なんかもう逆に清々しいなああの連中は。

髪を後ろでアップにまとめた姉さんは、なんとなく新鮮だ。

「さあ空！ お姉ちゃんの水着姿はどう？」

「当然、よく似合ってるよ。ちょっとびっくりした。姉さん、あんまり肌出すの好きじゃないし」

「日焼けが苦手なだけだよ。まあ、その辺は斬っちゃえばいいんだけどね」

姉さんの斬撃は基本的に斬れないものはないので。

紫外線とかも無条件にカットできる。

「斬ってるの？」

「やだなあ空、そんな事するわけがないじゃない。だってこう言うことも含めて、想い出でしょ？」

「……そうだね。うん、そう思う」

姉さんは自分の技能をフル活用する事に一切の躊躇いはないけれ

ど、何にでもそれを持ち出す事はあまり好きではない。

そんな姉さんを見習って、僕も涼莉やジュス様の力に安易に頼らないように気を付けているけれど……まあ、今後とも精進って所だろう。

「さあ空。もうお昼も過ぎちゃったし、あんまり楽しめないんだから、早く海であそびましょう」

「なのっ！」

「とわっ?!」

腕にしがみついた姉さんと、背中に乗っかってきた涼莉。バランスを崩すけれど、今度はどうにか耐え切った。

「……暑いってば、ふたりとも」

そう言ってみるけれど。

「空は暑がりなのね」

思ったとおりの、答えが返ってきた。

時刻は既に午後二時を回っている。

夕方には引き上げる事を考えると、そうたっぷり遊ぶ時間は取れないだろう。

とはいえ、明日は丸一日たっぷり時間があるのだ。無理になにもかもをやり尽くすこともないだろう。

そう考えて、泳ぐのは後回し。ひとまず、浜辺を探索してみることにした。

「おや、ひとりでふらふら、どこいくんだい？」

「リアさん」

サングラスをかけたリアさんに声をかけられる。

リアさんは赤いビキニの水着を身につけている。

その上から薄手のパーカーを羽織り、サングラスもかけている。

背丈は姉さんと同じくらいだけれど、姉さんよりもいくらか女性的やわらかさを感じさせる肢体をチェアに寝かせて日光浴。もう吸血鬼って設定忘れてなくなってきた本気で。

飲んでいるドリンクがトマトジュースって辺りで辛うじて設定に気を使っている気がしなくもないけど、逆にあざとすぎてもうなんとも。

組んだ足を崩して、リアさんが起き上がる。

「ネコミミとメイドっ子と魔女っ娘は砂遊び。翼は鬼人と未来人を引き連れて沖の島まで遠泳か。あんたは参加しなくていいのかい？」

「砂遊びで天守閣なんて高度な技能僕にはありませんし、体力馬鹿に今から付き合っていたら明日まで持ちませんので」

違う、と笑いあう。

「ちびメイドとでかメイドは？」

「……千影さんと百羽さんですか？ さあ、僕もみかけていませんが」

一度全員砂浜に集まったのは見ているんだけれど。

「ふーん。ま、お嬢様が何かしら企んでるのかもね。あの娘はあの娘で、中々に攻撃的な魂の持ち主みたいだし」

そりゃあもう。

僕の知る限り最上級のドSですからね。

その光璃さんかというと、完全に眠ってしまっているジュス様の隣で本を呼んでいる。

ちなみに光璃さんは水着ではない。

薄手のワンピースに着替えた彼女は、静かな瞳で海を見つめていた。どことなく頬が上気しているように見えるのは、気のせいではないだろう。

なぜ彼女がそうしているのかというと、そもそも彼女は日光が得意ではないのだ。お嬢様というキャラに最大限配慮している辺りこの吸血鬼よりよっぽど親切だと思う。

「……なに？　言いたいことがあるなら聞くけど？」

「や、別に」

言っただうなることでもないし、そもそも設定に忠実だったなら一緒にこうしてでかけたりなんて出来ていないわけで。文句など、あろうはずもない。

「……って、綺月の姿が見えませんか」

「ああ、神域の娘か。そういや、いないね」

パツと見える範囲、彼女の姿はなかった。
ふむ。

「まあ、綺月の事だから心配はないでしょう」
「そうかい」

ひとまず、その場を離れるために歩き出した。
と。

「ああ。そうそう」

背中越しに声がかかった。

顔だけ振り返る。リアさんはまた寝そべって、腕を組んで空を見上げていた。

「これでもあんたらの保護者としてここにいるからね。どっか行くときは声を掛けるように伝えといてね」

「……綺月を探しに行く、なんて、一言も言っていないませんが」
「なら偶然あったときで構わないよ」

ひらひら、と手を振るリアさん。

……むう。

釈然としないものを感じながら、僕は前を向きなおした。

岩場をひよいひよいと渡っていると、打ちつけられ千切れた波が全身を少しずつ濡らしていく。

どうせすぐに乾いてしまう程度だけれど、次から次に降りかかる霧雨のような飛沫で、僕の体はしっとりと水気を帯びていた。

波の音だけが支配する空間。

日ノ影の私有地だから、雑多なざわめきの欠片もない。
そんな中。

「綺月」

「ひうつ?! あ、あれ、空? いつからそこにいたの?!」

岩場のすき間に、見慣れた少女がいた。

気配を消していたからか、僕の接近には気づかなかっただけらしい。

大袈裟な反応で、綺月は振り返った。

その調子に、ふわりと髪をまとめるリボンが揺れた。

綺月の水着は赤と白を基調にした水着で、下がプリーツスカートみたいな感じになっている。派手な色合いだと思ったけれど、いつもの巫女服を連想させるせいか違和感はまったく感じない。

肌が白くてきめ細かく、水が滑るように落ちていつている。

まとめた髪は濡れて艶やかに輝く。

小柄な体を驚きに縮めて、大きな瞳をさらに大きく開いていた。思ったより。驚かせていたらしい。

「や、偶然」

「ぐ、偶然ね！ ……え、偶然？」

偶然でしょ。

「……砂浜から軽く三百メートルは離れてて岩場の奥で影になって外からはまず見えるはずのないここに来たのが、偶然？」

「僕が探検を割と好きなのは綺月も知ってるでしょ？」

「うん、まあ……」

知らないところ程、好奇心を刺激される。僕でなくても大抵の男子はそんなもんじゃなからうか。

「うーん……」

「……ええと、綺月？」

「あ……うん。人払いの結界とか認識逸らしの守護とか色々してたはずなんだけど……まあ空だし……いいか」

なにやらぶつぶつとつぶやいているけれど、最後には僕を見て、何かを諦めたような苦笑を浮かべた。

一体何なんだろうか。

「で、綺月は何をしてたの？」

「……………え？ あはは、そんな、別に何もしていないわ」

うん。そうかそうか。

ちなみに。

綺月は何にしても真っ直ぐな気性なので、はっきり言って嘘が下手だ。気付くなという方が無理なレベルで。

というか。

「隠したいものを両手で抱えて振り返るのは、もう語るに落ちるとかそういうレベルを通り越してるよ綺月」

「え？ あ！」

急いで隠そうとするものの、既に手遅れ極まりないのだけれど。

綺月の抱えるそれは、亀だった。ウミガメ。しっぽがヒゲのような白い毛になっている。

とはいえ。

綺月がわざわざこっそりとやって来たのだから、ただのウミガメではないのだろう。

つまり。

「まったく……………またひとりで抱え込んで」

「うう……………ごめんなさい……………」

「神様だよね、その亀」

問う僕に、綺月はこくりと、首だけで肯いた。

水津弥綺月について、そういうえば詳しく語ったことはないと思う。

僕のひとつ下の幼馴染み。姉さんを除くと誰よりも長い付き合いになる。それこそ夕陽よりも、だ。

性格は真面目で真っ直ぐ。それも、我を通すのではなく、人と折り合いをつけられる真っ直ぐさを持ち合わせている。まあ、時に頑固だけれど。

体格は年下ということを考慮に入れても小柄。たぶん学年でも下から数えたほうが早いだろう。ぶっちゃけ涼莉と張り合うレベル。身長とかまあその他もろもろ。

家業の影響か肌の手入れは入念にしているとのことで、シミひとつないきれいな肌をしている。

腰まである艶のある長い黒髪も、風にサラサラと融けるように柔らかい。

そんな彼女の家は神社で、彼女も巫女をしている。

単に家の手伝いという訳ではない。彼女は正真正銘、巫女をしている。巫女としての資質を有している。

彼女は神を愛し、神に愛される。そういう魂の持ち主らしく、彼女の周りにはいつだって何かしらの神様が存在しているのだそうだとはいえ、僕に見えるのはごく一部だけれど。

綺月はその自分の資質について、色々な経験を通して折り合いをつけながら生きている。

それは役目である以上に、彼女の望みとなり、その原動力でもある。

だから、と言うべきか。

彼女はそちら側の事情に、僕らを巻き込むことに消極的だ。

まあ、色々あるのだろう。思うところが。

神域に下手に関わると大抵の人間は人生が歪められるそうだと。それもあり、悪い方向に。

だからまあ彼女が僕らがそういった事に関わることに懸念を示す事は判るのだけれど……。

僕らが彼女がひとりですという事に関わるのに、同様の懸念を持つていることを、何で理解しないのか。

若干、不機嫌になるのを自覚し、抑える。

綺月は勘が良いので、こちらの感情の変化を敏感に捉えるからだ。彼女の性格は分かっているのだし、ことさら萎縮させては申し訳がない。

しかしまあ、随分と。

「亀だね」

「うん亀」

「浦島太郎とかに出てきそう」

「本人じゃないけど、何人かは載せて連れてったらしいよ。海底世界に」

あるんだ海底世界それにまず驚きだよ。

「ほ、ほ、ほ。驚いたかの、少年」

「うわあ」

亀が喋った。普通に。

……いやまてよ、よく考えなくても涼莉も猫で普通に喋ってるな。

「……まあよくある事か。ふう、一瞬驚いたけど、うん。大丈夫」

「よくある事かなあ？」

綺月が首をかしげていた。実際によくあるのだから仕方ない。

猫にましゅまろによくわからないものまでまあしゃべるしゃべる。

「ほ、ほ、ほ。随分と変わった運命に恵まれておるようだの、少年？」

「恵まれてるのかなあ……まあ退屈しないのは確かかな」

「退屈は人を殺すでの。良き哉、良き哉」

深い温かみを感じさせる老人の声。

僕の周囲にはいないタイプの性格だ。

「それで綺月。この神様は一体どうしたの？」

「ああ、うん。」

ほら、さっきイカがいたでしょう？ あのおっきいの」

「うん。見た目だけじゃなくて味もなかなかに大味だったね」

「で、あのイカがこの辺りを占領していたせいで、本来この辺りを管理しているこの神様は、ここに追い込まれてたらしいの。」

それで、本来の場所に戻そうと思ったんだけど」

「本来の管理者？　じゃあ、あのイカは外来種かなんかだったの？」

「ふむ。まあ、説明すると少々、長くなるのう。」

簡単に言うと、縄張りを持たぬはぐれもの、と考えればよい。この辺りの水質が気に入ったのじゃろうな」

なるほど。

そこに僕らがやって来て、図らずもあのイカを倒し、挙句に食べてしまった、と。

「おかげで僕らが苦労するはめになったんですが。自分でどうにかしようと思わなかったの？」

「ほ、ほ、ほ。手厳しい。ま、居つくと言ってもせいぜい数年から数十年。その程度、隠居しているのも悪くないかと、思うての」

数年から数十年を、その程度、ですか。

ううん、夕陽じゃないけれど、生きているスケールが違いすぎる。

「ところで、その管理って言うのはなにをするの」

「うん。それなんだけど、たぶんそろそろ影響が出てくると思う」

と、綺月が言ったところで。

急に風が強くなり、黒い雲がかかり、波が大きくなってきて。

はい、急な雨が降ってきました。

土砂降りです。

雨粒はビー玉サイズかとも思うほどの大きさで、肌に当たればバチバチと景気のいい音を立てて弾ける。

バケツをひっくり返したかのような猛烈な雨は数メートル先の綺麗な姿を雨のカーテンで遮り、その表情を隠してしまうほど。

周囲が岩場ということもあってか、雨粒が弾ける音が全方位から脳みそを揺さぶるような勢いでたたきつけられる。

端的に言って。

とんでもない豪雨がやって来た。

「あのイカが自分好みの環境にしてたせいで、ぶり返しが一気に来たみたいなの」

「あんのイカめ……」

焼いて食べるとか、生ぬるいやり方だったかちくしょう。

「……で、これ放っておくとまずいの？」

「うーん。この神様が管理してくれていれば、このくらいの雨でも土砂崩れ、なんてことにはならないんだけど、あのイカ、結構テキトウな管理しかしてなかったから、何処にどんな影響が出るのかわからないみたいで。」

なるべく早いほうがいいと思う」

「あんの、イカめえええ……」

まったく。

まあ仕方ない。

「それで、その神様をどこに戻せばいいの」

「え、ええとね、それが、その……」

綺月が海を指さす。正しくはその先にある物。
雨の幕に覆われて見える黒いシルエット。
あれは。

「……姉さん達が遠泳してた島か」

とんだ伏線だなおい。雑にもほどがある。

まさか砂遊び組にも何か伏線があったりしないよね。ないか、さすがに。

……ないよね？ 顔ぶれが顔ぶれだけにいちいち心配だ。

ともあれ。

「この天気の中、あの島まで行くのはちよつとオススメできないんだけど。ていうか亀なんだし、自力で泳いで行けないの、神様？」

「そうしたいのはやまやまなのじゃが、ここしばらくまったく運動しておらんかったからのう。正直、島まで泳ぐ体力もないのじゃよ」

ほ、ほ、ほ、と笑う海亀。

いや結構笑い事じゃないと思うんだけど。海亀が海で泳げないって何の冗談だろうか。

……例えば数十年後、あのイカが自然とどこかに行っていたとして、果たして彼はどうやって島まで戻るつもりだったのだろうか。

というか、いくら岩場にいて言っても乾くんじゃなかるうか。

考えれば考えるほど、この亀、耄碌してるんじゃないかと言う疑念が。大丈夫なのか、こんなのに管理任せて。さらに言えば、そんなところでみんなで遊んでて。

「空、どうしたの？」

きよと、と首を傾げる綺月。

まあ綺月が問題視していないからいいか。こと神様関連で彼女の

感覚に勝るリーダーは存在しない。

「まあ、君がやりたいことは理解したよ。けどそれこそ僕らに早く相談するべきだったよ。

この雨じゃあ、泳いで渡るなんて言語道断だし、船を出しても似たり寄ったりじゃないかな」

「う……ん……」

浜辺で集合後、解散してから綺月をずっと見なかった。

それこそ一時間以上だ。

きっと、この場所へすぐにやってきて、ずっと考えていたのだろう。どうすれば、この神様を『僕らの手を借りずに』島へ戻せるのか。

綺月は見たとおり、体力がある方ではない。いくら神様の守護に恵まれていると言っても、そこには自ずと限界が生じるし、神様を助けるために別の神様の力を使うと余計な干渉が起きるので、彼女は好まない。

悩んだ結果がこれ。では、まあ綺月が落ち込むのも判る。

それでも僕らを巻き込みたくないという考えも理解はできるけれど、さすがに寂しい。

さて。

うじうじするのはやめにしよう。

ぽんぽん、と、うつむく綺月の頭を軽くたたく。

雨に濡れた髪の毛のしっとりとした感触。

はっとみ上げられた瞳は夜のように深い。

雨に遮られた程度で見えなくなるような、そんな儚い光じゃない。

「ともかく、こうしていても風邪を引きそうだし、何か方策を考え

ようか」

「うん……ありがとう。空」

「いいよ別に。それに、こんな雨が何時までも続いてちゃあ、せっかくの海が台無しだからね。」

あなたを戻したら、この雨も止むんですか？」

「ほ、ほ、ほ。そうじゃの、せっかくじゃし、主らがここにおる間は良い陽気としておくのもよからうの」

「お、言質いただき、と。じゃあひとまず綺月、神様は僕が抱えるよ。」

一旦浜辺まで戻ろう。ここだと、いつ高波にさらわれるかもわからないしね」

岩場とあって少々水の流が入り組んでいる。予想外の水の流は、思いがけない事故につながりかねない。

危ないので、綺月には僕の腕にしっかりと捕まってもらうことにして。

僕と綺月はゆっくりと浜辺まで戻った。

さすがに、別荘まで引き上げたのだろう。

浜辺には誰も残っていなかった。

ひとまず、神様を下ろす。

「ふむ、久しぶりの砂の感触は、やはり良いの」

ほ、ほ、ほ、と笑う亀。だから笑い事じゃないって。

「さて、問題はこれからどうするかだけ……」

小舟で出るのは無理だろうけど、それなりに丈夫そうな船でもあ

れば。
と。

「あれ、空。あれは……」

綺月が何かに気づいた。
そちらを見ると。

「……………なんでだ」

頭をかかえる。

「ほ、ほ、ほ。見事なものじゃのう」

神様は感心していた。

「うわあ、すごい。いや本当にすごいわよこれ」

綺月は感心を通り越して若干引いていた。
底には、砂で作られた船があった。

豪華客船。高さは僕の身長以上。

うん、ちょっとね、意味分かんないよね。

そっかあ、天守閣じゃ物足りなくなったかあ、あの連中。

ちなみに天守閣の砂の城はというと、この雨と風の中しっかりと
耐え、さらには押し寄せる波さえもきっちり受け止めていた。

うん、どう考えても砂の強度じゃない。

「……………リリースか」

どうせ、またわけのわからない魔法でも使ったのだろう。

あるいは光璃さんだろうか。あの人ならテレキネシスで構造強化ぐらいやりそうな気がする。

「この船なら、なんとか乗れないこともない……か？」

「勝手に使っちゃっていいのかなあ」

ううん、まあ確かに。

あの三人の事だからきつとすごい楽しいノリで作ったに違いない。そう考えると、心が痛むけれど。

背に腹は代えられないだろう。

そうだ。あれだ。明日の天気を手に入れるためだ。うん。

そんな言い訳と理論武装をして、決断する。

「よしじゃあ、この船で島まで向かおう！」

「そう、ね。たしかに、悩んでいる場合じゃないよね」

「ほ、ほ、ほ。かたじけないのう、ふたりとも。ほ、なにやら船の名前が書いてあるようだの。ええと」

あ、ちょ、ま、せっかくふたりで無視したのに。

「てい、たにく？　ふむ、異邦の言葉はよくわからぬ……ん、なんじゃふたりとも？」

「いえ、別に……」

綺月が小さくため息を付いた。気持ちはよくわかる。

これから海へ出ようというのに、その名前はいささか、縁起が悪すぎる。

で。

ね。

ちょ、いや。

あの。

船には、乗れた。

なんと上の部分が蓋になっていて、それを外すと中に乗り込むスペースがしっかりと出来ていたのだ。

もう何かの大会に出たらいと思う。

で、それはいいんだけど。

「きゃああああああああああああっ！！」

「揺れる揺れる揺れる揺れる！！ 綺月しっかりと掴ま……あのちよつとつかまり過ぎ……ってあまた揺れる揺れる揺れる揺れる！！」

「ほ、ほ、ほ。さすがに、老体にこの揺れはきつい……うぷっ」

「え、何ちよつと待ってよ神様。亀ってそれありなの、えずくの？

やめてよちよつと落ち着い……ああ綺月横から波が着てる波が

あああああ！！」

「空空空空あー！！」

ぎゅうううううう。

ふに。

やだ何この娘、すっごい柔らかい。

いや。

それどころじゃねえって。

「前に、前に進めええええええ！！」

ちなみにこの砂の船。足でこぐとスクリューが回る仕組みになっている。本当、芸が細かいなおい。

必死になって足を回す。背中に抱きつく綺月が離れないように、回された腕をしっかりと掴む。

前に乗った神様は、うん、ちよつと。出すな出さないでリバーはやめて！！
って。

一際高い波が、船を高く押し上げ――着水。
がくんと、全身が揺れる。
数度の上下の揺れが続き、一瞬、回された腕の力が緩んだ。

「――っ、綺月!!」

後ろを振り返り、とっさに腕をつかむ。
と、その小柄な体がわずかに浮かんだ――瞬間、今度は横からの波に襲われる。目をして、耐える。
ぐるりと頭の中身をかき混ぜられるような感覚に襲われ、それでも、手だけは離さない。

「く……はあっ!!」

強く閉じていた目を開く。

「へあ？」

「う……その……」

なぜか。

後ろにいた綺月が、目の前にいた。

今にも触れそうな距離に、濡れた瞳が。

雨に冷えた体が密着し、ほてるような熱さを感じさせる。

今の衝撃で何かがどうにかなったのだろう。

綺月と僕は向かい合う形になっていた。

僕の膝の上に綺月が腰掛ける形になり、その両手は僕の胸に添えられている。

しつとりと広がる長い髪がお互いに絡みついていた。

なんでだ。

「え、え、何こ、え、その……え、ええええええええええ?!」

「は、綺月落ち着いて、いいから! とにかく一旦落ち着こう、ね?」

「だ、だってあれ。なんで、だって。さっきまでわたし、空の背中で、でも、手を掴んでて、だから、あれ? なんで、わたし空に抱かれ……? ええ?」

「いやほら、大丈夫。冷静に考えよう。きっと何も問題ないはずだ。うん」

一つ一つ状況を整理する。

お互いに水着姿。

体は完全に濡れて。

顔は直ぐ目の前。

さらけ出した肌は密着し、互いの熱を交換する。

僕の膝には、その柔らかな感触がのっついて。

全身に絡みつく黒髪からほのかに漂う甘い香り。

しなだれかかる姿がやけに艶めかしい。

「……ふう」

おかしい。

問題しかない。

「……………ふえ」

あ、やべえなんか綺月が泣きそうなんです。

タイムタイムタイムタイム！ やり直しを、やり直しを！！
お客様！ お客様の中にセーブポイントに引き返せる方は！！

「うえっぷ。

ふう。

うん？ なんじゃお主らそういう仲じゃったのか」

「そそそそそそそういっ！ そういっ！ そういう仲って何ですか
っ！！」

「ほ、ほ、ほ。じゃから、いわゆる、すてでいな仲、というヤツじ
やな」

「異邦の言葉苦手って言ってたじゃない！！」

あー。

綺月が完全に涙目だ。

……どうしよう、なんか胸がドキドキしてきた。

「……ふむ。このくらいまで来れば大丈夫かの」

と。そこで神様が顔を外に向けた。

「大丈夫って……何が？」

「うむ。ここまで来れば、あとは自力で戻れそうじゃ」

「え……でも、危なくは？」

「まあ多少疲れはするじゃろうが、戻れぬ距離でもない。それに、
あの島は海が荒れるほど船が近寄れぬ波が生じる。これ以上は、主
らが危険じゃよ」

そういう事は先に言えよ。

普通に島にツッコむ所だったよ。

「というわけで、わしはそろそろ行くよ。

久方ぶりに、人間との語らいができた。ありがとう、ふたりとも」
「……ううん。あなたが、自分の居場所に戻れて、よかった」

「僕は本当にただの偶然だから。それに、僕も楽しかったし」
現在進行形で脳みそどうにかなりそうだけど。

と。

「ほ

――ふいんふいんふいんふいんふいん。

「……は？」

ふいんふいんふいんふいんふいんふいんふいん
ふいんふいん！

手足を引つ込めた亀が。

島へと、飛んでいく。

ぽかーん。

互いに、開いた口が塞がらない。

とりあえず。

それは、海亀じゃない。

それからその後とその後へと

浜へ戻る頃には、波はすっかり穏やかになっていた。

厚い雲はまだ空を漂っているけれど、雲の隙間からは夏の熱い陽射しが差し込んでいた。

海の上に、幾筋もの光の柱がたっている。
きこきここと、船をこぐ。

浜まであと数十メートル。さほど時間はかからないだろう。

「……………」

「……………」

船内は、無言。

お互いに密着している状態では、正直会話しづらくて仕方ない。
体勢の問題ではなく。

「……………空」

そんな沈黙を破ったのは、綺月だった。

「今日は、ありがとう。きっと、空がいなかったらわたし、どうしていいかわからなかったわ」

「僕だってどうしたらいいかなんてわかんなかったよ。運が良かっただけさ」

とは言ったものの。さて。どうだろう。

この船を作ったのは、果たして偶然かそれとも、誰かの提案があったのか。

「でも、空がいてくれてよかったわ。

正直言うよね、雨がふりだしたとき、もう海は楽しめないんじゃないかって、そんなふうに思ったから」

「そう。なら良かったよ」

君の期待を裏切ることがなくて。

「うん」

静かに笑う綺月。

と、急にうつむく。

前髪で表情が隠れてしまう。

「あの、あのね……空がそんなだからね、わたし、空の――」

そして。

ひゅかつ。

と、乾いた音が響き。

船が真っ二つに割れた。

「は」

「ふえ」

間抜けな二人の声が生まれて。

ぼすん、と海に沈んだ。

慌てて海上に顔を出す。

「え、なにになになに？　今なにが起きたの？」

「……………翼姉さん」

「え、姉さん？　あー、確かに姉さんっぽい切れ味が」

海の表面に、きれいに筋が入っていた。
その筋もすぐに消える。

浜辺から、姉さんが歩いてきていた。海の上を。

足元には琥珀色の光。またジュス様をこき使っているようだ。

「おかえり、ふたりとも。おねーちゃん提案の不沈船はどうだった？」

「ああ、やっぱり姉さんだったのね」

「疲れたでしょうふたりとも。ジュス様に道を作ってもらったから、これで帰りなさい」

そう言って、姉さんがくると優雅に振り返り、浜辺に向かって戻り始めて。

「……………翼姉さん」

「なあに、綺月ちゃん」

「ちょっと強引すぎませんか？」

「そのシュチュエーションが強引だったんだから、幕引きが強引でも文句を言わないの。」

相応しいシーンは、きちんと自分で用意しなさい。それなら邪魔はしないであげる」

背中を向けたままの姉さんと海面を見つめたままの綺月の会話は、よくわからないものだった。

ただ、互いの表情が見えないことが、何故かやたら怖いのですが。

「……頑張ります」

「うん、頑張ってね」

姉さんが歩きを再開して。

綺月も、こちらを見ないまま光の道に登った。

「……………ええと？」

女の子って、難しい。

僕と姉さんと雨の海（後書き）

正直、前半分の馬鹿部分と後半の神様部分って別々にふくらませて
も良かったのですが、馬鹿をやり続けるには力が足りませんでした。
あと大地の発言はもっと露骨だったのですが、この作品はマイルド
とかヌルゲーとかを売りにしているので、全体的に表現は控えめに
しました。

御座るは何でこんなに馬鹿になったんだろう。

次回。夏らしく、肝試しです。

僕と姉さんと迫り来る白い影（前書き）

おっさん群生。

僕と姉さんと迫り来る白い影

日ノ影の別荘地はいくつかあるそうで、今回やって来た海辺の他にも山や雪山、農場や溪流などにもあるそうで、それぞれ絶好のロケーションなんだとか。

姉さんは雪山には行ったことがあるそうだけれど、僕は今回のこの海辺の別荘が初めてだ。

さて、この別荘だけれど、海辺ということもあり潮の香りを常に感じる事が出来る。

今僕が歩いている道は別荘から離れた森の中なんだけれど、それでも潮風と波の音は遠く近く響いてくる。少し不思議な感覚だ。

海風が流れこんできているので、この時期の夜でも多少の蒸し暑さは感じるものの風を常を感じる事が出来るため、体感温度はやや低くなるのも、過ごしやすさの理由の一つなんだろう。

やや強めの海風が吹く。

木々がざわめき、波音のような、それでもたしかに違う調べを奏でた。

「……それにしても、さすがに夜の森は方向感覚が狂うね」

一本道でなければとつくに迷っていただろう。

それにしても。

「いきなり肝試しだなんて、姉さんらしいといつかなんといつか：

…ねえ、ましゅまろ？」

ましゅまろは特に反応無く、僕の後ろをふよふよと浮きながら付いて来ていた。

……というか。

「なんでお化けを引き連れて肝試ししてるんだろう僕は」
色々とおかしい気がする。

おかしいといえば涼莉がやたらとお化け妖怪の類を怖がっているのもおかしいと思う。ちよっと鏡見てこい。

さて。

肝試しです。

『夏と言え！』

という姉さんの言により二人一組で始まったこの肝試し。くじびきで僕のパートナーになったのはましゆまるだった。

別荘からやや離れたところにある森の入り口に集まって、千影さんお手製のクジでグループ分けをしたのだ。

まあ男と組まされるよりはマシだろう。

森に入るのは僕らが最後。それぞれの組はそれはもう賑やかな様子で森に入っていくた。

……ひどい光景だった。

さてせっかくなのでその光景をダイジェストでお送りしよう。

一組目は大地とリアさんのコンビ。必死で逃げようとする大地がマントでぐるぐるに巻かれて引きずられていった。こんな感じで。

「おおっとお！ 暗くて足が滑って意図しながらもおっぱいダイブで御座——おおあああああつ！ マントが、マントがああああ——」

「はいはい静かにしな。いい子にしてりゃあ呼吸くらいはさせてやるからさ」

「いやそれ禁止されたら生物としてもはや終わりってなんか本当に

呼吸が苦しくなってきたで御座るよ?!」

「ほれいくぞー。やれいくぞー」

「おふ、あふ、のふう! あ、あれ。なにやらちよっぴり気持ちよくなってきたで御座る」

「……………」

「あ、あれ? リア殿? ちょ、な、お」

おあああああああ……………。

悲鳴が森の奥へと吸い込まれていった。

続いて出たのは姉さんと千影さんペア。いや、千影さんは仕事があるからと全力で拒否した上にくじにも入っていなかったのに何故か姉さんが引き当てるという、なんかこう、時空が歪む事態が発生した。結局抵抗する千影さんは姉さんに引きずられていった。ドナドナ。

「いえ、おかしいですよ。なぜ入っていないはずの私のクジが入っているのですか」

「さー、なんでだろうーねー。ほらほら千影ちゃん、いくよーん」

「いえ、ですから私は今から別荘にもっどってみなさんのベッドの準備をですね」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ほら、ちよっとだけちよっとだけ、先っぽだけだから」

「何がですか何をですかどうするんですかっ?!」

「そんな疑問にお答えするためにさあ千影ちゃんいざ出発!!」

「ちよっと、待っ! お、お嬢様、お嬢様ー!!」

必死に手を伸ばすけれどだっこされた千影さんは抵抗むなく森の奥へと消えていった。

ちなみにお嬢様こと光璃さんは苦笑を浮かべて手を降っていた。

夕陽はリリスと一緒に、やたら賑やかな様子で森に入っていく――二秒後に謎の音が聞こえて唐突に無音になった。何があったのか、誰にもわからない。

「よっしゃありリスさん行きましょう！」

「おっけーまかせて。たとえどんな魑魅魍魎が出てこようとマジカル倒す」

「おっとそいつは俺も負けてらんねえぜ！　じゃあな空、お先に行くぜっ！！」

「ああ、うん。なんかもう肝試しのテンションじゃないよね」

「はっはっは！　任せとけてんだ！」
何をだ。

「よっしゃあ、行つくぜええええ！」

「やー」

ずどどどどど、と森へと突進して暗がりには消えたふたりは。

「え」

「あ」

と、声を残していきなり静かになった。

見ていた僕らが絶句した。

何があったんだろう。何かあったんだろう。

その状況に怯える涼莉ときよとした様子の十乃ちゃんが、ふらふらと森に入っていくって、今度は何もなかった。いや、いちいち虫や葉擦れの音に怯える涼莉の声が響いていたけど。君、猫だよね一応。

「にやっ?!　え、行くの、これで涼莉たち行くの?!」

「うんまあ。姉さんの事だから本当にまずい事はないと。うん。まあ。思うよ?」

「空がとっても自信なさげなのっ!!」

「すーずちゃん。ほら、行くよー」

「う、にゃあああ……」

「あははー。すずちゃんお耳がペタってしてるのです。かわゆいですねー」

にははー、と笑いながら涼莉なでくりまわす十乃ちゃん。ほんわかしした顔は幸せいっぱいだった。

「ほらすずちゃん、手をつなげば怖くないのです」

「う、うにゃあ」

片や普通に、片や怯えながら。森への道を入れてく。

「……に、にゃあっ?!」

「すずちゃんすずちゃん、それは虫がはねただけなのですよ」

「ふ、ふう。びっくりしたの……にゃああああんっ?!」

「ちよっぴり風でゆれただけですよー」

そんなやり取りをがずっと聞こえていた。うん。どっちが歳上だか分かんねえなもう。

そして続いたのはジュス様と光璃さん。誰がやるか俺はもう寝るんだと言っていたけれど結局参加。それでも歩きながら寝る辺りあの魔王様はもう処置なしだと思う。

「それでは参りましょうか」

「……つうか、俺は置いてけよ。もうここで寝てるからよ」

「そういうわけにも行きませんから」

じ、と光璃さんが真っ直ぐにジュス様を見やる。

「……はあ。わかった。わーかったよ。しゃあねえ行くよ………くかー」

「あらあら」

深い溜息をついたジュス様はそのまま寝てしまい、それを見た光璃さんは苦笑する。しかしジュス様。そのまま前進し、森へと入っ

ていった。

光璃さんはそれに苦笑を深くすると、後ろをついて行った。
なんだかなあ。

と、思っている。

「ぐわははははは！　ここがジュスティードのいる世界か！！」

「うわあなんか空間の裂け目からいかにも悪っぽい筋骨隆々とした黒ずくめ黒マントのオッサンが出てきた！！」

「……空、どうしたの、その説明口調」

いやなんとなくそうしたほうがいいような気がして。

「くくく、感じる、感じるぞジュスティード貴様の力をな！　ふははは！　お前の命運もここまでよ！」

「あー、すごい勢いで森の中に。ジュス様を追っかけてきたのか。ふーん」

「ねえ空。わたし、あの光璃さんが二人つきりを邪魔されて黙っていると思えないんだけど」

そうだね。

僕もそう思うよ。

それを裏付けるように。

「ひ、ぎゃあああああっ！！　き、貴様この私に何を――あ、ちょ、痛、痛い、痛いってば。あ、いやマジでそれ洒落に――無理無理無理！　さすがにそれは無理があるだろ殺す気か貴さ――あ、いやすみません調子のつてましたまじすみません土下座します。え？　焼き土下座？　いやさすがにそれは本当勘弁、あ、いや、やめ、無理。人間の体はそっちには曲がらないしそんなところにそれは入らないって！　あああああやめていやだあああああ！！！！」

そんな声が聞こえて。

「……………」

「……………」

僕と綺月は名も知らぬおっさんに黙祷を捧げた。

そして綺月と百羽さんペア。本来なら前に立つべき綺月なんだろうけど、こういう雰囲気は苦手で。なので百羽さんが前に立って森に入ってしまった。割と意気揚々と入ってしまった百羽さんの悲鳴が聞こえたのは、十三秒後だった。

「ああもう、本当に苦手なのよね、こういう雰囲気」

「で、では僭越ながらこのわたしが前をいかせていただきます!」

「え、大丈夫ですか百羽先輩」

「任せてください! たまには先輩らしいところも見せないで、ですから!」

「うーん……まあ、そう言うのならお願いしていいですか?」

「はい! それじゃあ、行きましょうか。空さん、お先に失礼しますね」

「ええ、お気をつけて。綺月も気をつけてね」

「ええ……本当に、ね」

ぽつりと、綺月は疲れたような顔で呟いて。

ふたりは森へと入っていった。

「ふへ? へひゃっ! ふあああああああああああああああああ
あああっ?!?!」

気の抜けた悲鳴が聞こえてそれっきり。

とまあそんなゴタゴタしつつ僕らの番。

ルールは簡単。森の奥にある神社の境内に『宝』が置いてあるの
でそれを取ってこい、というわけだ。お昼の間にメイド三姉妹の長
女と次女の姿が見えなかったのは、どうやらこれの準備をしていた
らしい。

ついでに、いくつかビクリ系トラップも仕掛けたとの事。

準備側の百羽さんがなぜ悲鳴をあげるのかは謎だが。

道は一本道で、出口は別荘の裏側に出るらしい。

森に入っておよそ十分。道行は昼間に三十分掛からない程度、ということだった。彼女たちの歩幅と僕の歩幅の差、夜という時間を考えても、まだ半分も行っていないだろう。

「……しかし、やっぱり何か仕掛けられてたのかな、あのくじ」

ましゅまろを振り返る。相変わらずふよふよと付いて来ていた。こちらをみようとするとする気配さえない。うんまあ。

さておいて、僕がそう思ったのは単純に組み合わせが『いかにも』過ぎたからだ。姉さん、あれで他人の色恋にお節介を焼きたがる節があるし。とはいえ、お膳立てをするだけで自分から積極的にけしかけたり、という事はむしろ嫌いらしく。

勝手に状況を用意するくせに踏み出すのも結論をだすのも自分でやれ、という割と投げやりなスタンスだったりする。

大地は単に一番扱いが適切な人に任せただけみたいだけど、それにしても巻き込まれるみんなはまあ、大変だなあ、と。

「ま、僕は平和だからいいけど……なにましゅまろその目は」

ありえないものを見るような目をされた。表情の変化が非常に分かりづらいましゅまろだけど、最近はその違いも判るようになってきた。口を聞かなくせ漫才について視線だけで語り合う（しかも合間合間に大爆笑する）姉さんには及ばないけれどコミュニケーションは取れていると思う。

「にしても、前の人たちはあんなに賑やかだったのに僕らは何も無いねえ。正直何かはあるだろうって覚悟はしてたんだけど」

「……………みえないだけじゃね」

「え？」

一瞬間こえた声に振り返るけれど、ましゅまろはあさっての方向を見ていた。けれど確かに今のはましゅまろの声だった。

ふむ。

彼女（？）は少なくとも僕よりも長生きしているようだし、何かしら勘に触れた部分があるのかも知れない。

となると油断はできない、か。いや、もとより油断をするつもりはないのだけれど。一番目だったら間違いないく油断していただろう、ってことはさて置いて。

軽く耳を澄ましてみる。

聞こえてくるのは波の音、風の音、木々の音。そればかり。

……いや、これは？

しくしく、しくしく、と。

泣き声……だろうか。すすり泣くような音が。

「……え、嘘、まさか」

リアル心霊現象っ？！

「う、ううむ。確かに綺月は何か警戒している様子だったし……何がいてもおかしくはない、か……」

しかし心霊現象。心霊現象かぁ。

あんまりいい思い出はないんだよなあ。ましゅまろみたいな意味不明のお化けならまだしも、実際問題地縛霊とか怨霊とか、そういう物に関わってろくな目に遭ったことはない。そういうものなのだから当然といえば当然なんだけど。

「うん。ひとまず気を付けようかましゅまろ」

「はいよー」

声に振り向く。

やっぱりそっぽを向かれていた。

なんというか。

あんまり喋りたくないタイプらしい。となると、この間の異世界

の時は例外だったんだろう。

うーん、そう考えると彼女の性格というかメンタルというか、そういう部分はさっぱり把握できてないな僕。

というか人語を操る彼女は人間の靈魂なのか別の何かなのかもよくわかっていないし。

むう。

と、考えていると、だんだんと泣き声をはっきりと聞こえてくるようになってきた。

「……近い」

ごくり、と息を飲む。

気のせいかな、空気も生温かい、湿り気のあるものになっていた。

夏や海のせいではない。生理的に受け付けない熱さ、とでも言うべきだろうか。まるで全身に汗をびっしょりとかいて、クーラーの付いていない蒸した部屋にいるときのような、厄介な熱気。

そんな感覚を覚える。

慎重に足をすすめる。

コース上から外れたとろにいてくれれば無視できる。けれどそうでない場合は――最悪、コースを外れて草を掻き分けることになるかも知れない。夜中に道を失うようなマネは避けたいけれど。

「――っ!!」

息を飲む。

暗い木々の影の中。何かがいた。すすり泣く声は、どうやらそれから聞こえてきているらしい。

くぐもった、太い声。

シルエットは、大きめ。

あれは一体、なんだ？

木の影に隠れ様子を伺う。こちらに気づいた様子はない。

その時、月が雲から顔を出したのか。月光がそのシルエットに降り注いだ。

「……………っ!!」

僕は息を飲んだ。

「……………なんてこと」

ましゅまろは嘆くような声を上げた。

そこには、あまりにも惨たらしいものがあつた。正直、視界に入ってしまったことを後悔するような。

ぎしり、と全身が恐怖と絶望で軋みを上げた。ああ、僕はまだ過去を捨て切れていないのだと実感する。

僕は。俯いて。

そっと、それを見なかったことにして、道の先を進む。

大丈夫。あれに害はない。けれど、あれに関わることもできない。

ましゅまろもそれを理解しているのだろう。先程までとは違い、僕の隣に並んでいた。

ぼくらがみたもの。

それは。

「う……………ううっ。ふぐっ。ぐすっ！　うああああ……………」

両目から大粒の涙を流し。髪にパーマをかけられ。ほっぺたは赤

く塗りつぶされ。鼻には割り箸をつめ込まれ。

全身の服をずたずたに引き裂かれて辛うじて大事なところは掻く
せていたけれどそれだけでパンツ丸出しで全身を荒縄で縛られてセ
クシーポーズで固定され頭に風林火山のちっこい旗を立てられおま
るの上に配置されて啞えさせられたおしゃぶりからシャボン玉を延
々と吐き出しスクワットをし続ける、ジュス様を追っかけていたオ
ッサンだった。

漂ってきた熱気はオッサンから発せられていたのだ。

「ひどいよ……こんなのってないよ……っ!!」

「ああ……あいつは存在の全てを陵辱されたんだ……」

僕は涙をのんだ。

そして誓う。

あのDSだけは絶対に怒らせないようにしよう、と。

ていうか僕を監禁してたときから大分悪趣味になりやがりました
ねお嬢様っ!!

それから十分ほどで神社に出た。

森の中にポツカリと開いた穴。月明かりを遮るものはなにもない。
その中心に、小さな社が立っていた。

そして、目立つ場所にRPGにでも出てきそうな、いかにもな宝
箱が。

なるほど、これが宝ってことかな。

「……何か仕込まれてないだろうね」

主催が渚姉妹から姉さんに変わった時点で何があってもおかしくないイベントに成り代わっているのだ。注意してし過ぎるという事はないだろう。

念の為にましゅまろには離れてもらう。

僕は宝箱の蓋に手をかけた。ぐ、と力をいれるけれど動かない。なかなか硬い、重いものようだ。

ふむ。

少し気合を入れて、もう一度フタを開ける。ぎし、と古臭い音を立てて僅かに蓋が開いた。そのまま開いていき、そろそろ月光で中が見えるようになる、といったところで。

「あ」

「え？」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャ」

ごっつ。

ごしゅっ。

「……あれ？」

ええと。

ちよつと今の三分の一秒間の間の出来事を説明させてください。

僕が蓋を開けていると、ましゅまろが声を上げる。僕が振り返り、ついでに蓋から手を放す。謎の音が聞こえたかと思うと、何かぶつかるような音と共にそれが途切れる。蓋が嫌な音を立てて閉まる。

だいたいそんな感じで。

視線を宝箱に戻す。

「……………どうしようか、これ」

指が。

指が、宝箱から出ていた。ただし蓋にはさまっている。しっかりと。あの重い蓋に。

「……………これ僕が悪いつてことになるのかなあ？」

ましゅまろに尋ねてみるけれど素知らぬ顔をされた。半分は君が原因でもあると思うんだけど。

開けたほうがいいんだろうか。

いやまあ開けたほうがいいんだろうけど、ものすごい抵抗が。だって今出てこようとした声、なんか無闇にテンション高そうだったし。呼んでないっての。

「つうかさ」

「あれ、どうしたの、ましゅまろ」

「いやふつーに疑問に思うんだけど、メンバーの大半が女の子なのにそんなクソ重い蓋の宝箱を用意するの、あんたの姉は？」

「…………ああ、そういえばそうだね。あれ、じゃああれなんだろう？」

「さあ。まあ、あんまりいい気配はしねえし。ミミックっぽい感じはするけど」

ミミック。

ゲームなんかでは宝箱や壺なんかに化けたモンスターとして描かれることが多いけれど、本来的には擬態の意味、だったわけ。

擬態、擬態、ねえ。

「…………ねえましゅまろ。つてことは今僕、凄く嫌な予感がするんだよね」

「残念ね、あたしもよ」

あーだりいちよーだりい、といった雰囲気のましゅまろ。

そんな僕らが見ている先で。

「あああああんっ！ んもう、なにするよのおおおおおっ！
」

宝箱がばかりと開き、ぐにやりと形を変え、人の姿をとった。

その人型は右手を押さえて胸に抱え込んだ。

それを見る僕らの心境は『さっさと逃げてりや良かった』である。
だって。

「んもうっ！ 人がこんなに痛い目を見ているのに放っておくなんて、なんてコたちなのかしらっ！！」

妙にしなのある仕草。くねくねと腰を動かすミミックは、完全にオッサンだった。先ほどから続いてまたオッサンである。オッサン祭らしい。これがまたやけにガタイがよくて、ボディビルダーにか見えない。なんだろう、せっかく昼に水着で目の保養をしたのに決りたくなってくるこの衝動。誰か助けて。結構切実に。

しかも一番酷いのは、このオッサンよりもよって全身タイツ姿だった。真っ白な全身タイツのオッサンがオネエ言葉でくねくねしてる。

角刈りの頭と彫りの深い顔には違和感がないのに。もみあげとヒゲが繋がってちよつとダンディな雰囲気なのに。

全身に視野を合わせると、うん。地獄。

なんだろう、さっきから試される肝がちよつと違う気がするんだけど。どうするのこれ。どう收拾つけてくれるの。

ミミックはこっちを見て片目を瞑り、腰と片手を付き出して。

「うふふ、そんな悪いコたちには、お・し・お・き・よ☆」

なんて、指を振りながら言いやがった。
あ。

無理。ちょっとこれ無理。色々と精神的な限界がどんぶらことやってきてるんですけど。

「ままままましゅまろさん、こここれどどうにかななりませんんか？」

「いいから目を合わせるのをやめなさい。ある意味児童ポルノよりも先に取り締まるべきものだからあれは」

うん、そうだね。ぶっちゃけ現行法で十分にとっ捕まえられる種類の生き物だ。

その白い生き物はくねくねしながらゆっくりすり足でこっちに來ていた。

来るな。頼むから。土下座してもいいから。行くなら都庁とかにしてください。きっと知事と仲良くなれるから君なら。

心底関わり合いになりたくない存在っていうのは結構久しぶりだなあ。逃避する思考の片隅でそんな事を考える。

「ふふん。そんなに緊張しなくてもいいのよ、優しくしてア・ゲ・ル」

ぞわっ。と。全身がね。うん。

「ああああああもう無理色々無理だってこれ！！肝じゃなくて何か別の覚悟を試されてるもん絶対そうだよこれ！！」

「全面的に同意するけど泣くなっのあたしだって泣けりゃ泣いてるわよこんなの！！」

「おちつきなさい。順番に相手してあげるからん」

「「帰れえええええっ！！」」

変態と僕らの距離が近づく毎に僕らのSUN値がいい具合に下が

っていつている。ボールのようなものでもあれば僕は既に暴挙に出
ていただろう。

「え、何、なんなんですかあなた。宝箱の擬態をしたのに何でそ
んな格好になるんですか？ 何でそんな言葉遣いになるんですか？
ちよっと僕の理解を超えるって言うか理解したくないんですけど」
「え？ だって素敵じゃない、この格好にこの喋り方」

ああ。

根本的根源的に分かり合えないものなんだな、と。
うん。理解できた。

「……………じゃあ、どうやったら帰ってくれるのかだけ教えてくれ
ませんか」

「えええ？ もう帰らなきゃだめなのお？ せえつつかく時空の狭
間を越えてきたのに」

うん。帰ってください。

帰れ。マジで。

「ついでいうと二度と出てきてほしくないです。二度と僕らに絡ん
でこないでください。正直何であなたが出てきたのか誰にも理解出
来ないんですよ」

はつきり言って姉さんの趣味じゃない。何かしらの事故で巻き込
まれて出てきた…………ああうん、さっきのオッサンか。たぶんそうだ
ろう。

余計な物引き連れてきやがって。

「ふう。ま、仕方ないわ。急がないと元の世界にも帰れないし。あ、

もちろんあなたが残って欲しいって言うのなら」

「すぐ帰れ」

「あらやだ、つれないのね」

うふ、とウインク。

ふらついて、隣に浮かぶましゅまろに寄りかかる。

「タスケテ」

「無理っていうか嫌だ」

ですよね。

僕も逆の立場ならそうする。

「んでも、すぐに帰るのも面白く無いわ。それに、絶対に帰らなきゃならない、というわけでもないんだもの。だからちよっと、遊びましょうよ」

「……遊ぶ、ねえ」

いやな予感しかしないけれど、しかしてこいつがこの世界に残り続ける事のほうが絶望的に嫌すぎる。

「あんまり遅くなるとみんなが心配するから、すぐに終わるものがいいんですけど」

「ええ。すぐ終わるわよ。」

——そう。それは漢と漢のプライドを賭けた真剣勝負。敗北は尊厳の死。勝利は新たな次元への階梯。

魂がぶつかり合い精神が競い合う。

心技体運己の全てを賭ける事のできる真の勇者のみが立つことのできる戦場。

その競技の名は！

「き、競技の名は?!」

両手を絡め手のひらを天に向け、両足を開き腰をくねくねと動かすミミック。

精神の昂りからか全身に汗が浮かび顔が赤く染まる。

そして、きつく閉じられた瞳がカツと見開かれ競技の名が告げられる。

「――野球拳!!!!!!」

「死ねええええええええ!!!!!!」

僕の蹴りとましゆまろの体当たりが同時に炸裂。ミミックが吹っ飛んで三回程バウンドした。まあ、特にダメージはないようですぐに立ち上がってきたけれど。

「驚いたじゃない。なにするのよ」

「お前が何を言ってるんだ」

もう口調がぞんざいになるのを止められない。止めたくない。

「え、何、競技名は？」

「野球拳」

「誰がするの」

「あたしとあなた」

「ばかじゃないの。」

「ばかじゃないの?!」

「意味が分からないよ！」

「いいじゃないのそれであれが帰るんなら。やりなさいよ」

「って後ろから刺されたー?! ちよっと、自分がやるんじゃないからって何言ってるのさ！」

「こんなの絶対おかしいよ!!」

はっ！

いや待てよ、まだ逆転の目は残されている！

いつぞやの吸血鬼とシスターのように、ルールが違っている可能性は捨てきれない！

「よし、まずはその野球拳のルールを説明して！」

「あらん、やるきなの？ 勇気のあるこは好みよ。」

野球拳のルールは簡単。まずはジャンケンをするの」

ふむ、ここまでのルールは同じだ。

「掛け声でね、ジャンケンをして、そうして、負けたほうは服を――」

う、ルールに差はないか。

さすがにあんな事はそうそうあるわけもないか。

「相手に脱がされて、スッポンポンにされた方が負けね」

.....。

虫の。

虫の音が、いやに喧しい。

「.....え？」

「あら、そんなに難しいことは言っていないわよ？ 掛け声でジャンケンをして」

うん。

その次は？

「勝ったほうが負けた方の服を一枚、無理矢理剥ぎ取る」

「余計悪質具合が上がったあああああっ?!」

つまり。

僕はじゃんけんに負ければ全身タイツのマツチヨに服を脱がされて。

僕はじゃんけんに勝てばこの全身タイツを剥ぎ取らなくてはならない、と。

なにそれ。

勝っても負けても地獄じゃん。不毛にもほどがある。そしてミミックさん、顔を赤らめないでください。

「……ああ、まあいいじゃん、もう、やっちゃいなよ」

「心底嫌だよ！ 大体そっちはいいの、一回負けたら終わりだよ?!」

「うふふ、心配は無用よ。これでも元の世界じゃあこの手の勝負では負け知らずなんだから。

そう、これは敢えて自らを追い込み背水の陣を背負う覚悟の装束。あたしの、魂の形よ!!」

「どんな魂だ……う、ううう……」

嫌だ。本当に嫌だ。でも、ここで勝負をしないとミミックは自分の世界に帰らないだろう。

やるしかない。やるしかないんだ。

「に、逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ……」

自分に言い聞かせるけど全然効果ない。正直誰かに変わってほし

いけどこの場にいるのはお化けのましゅまろ。脱ぐべき物なんかひとつもない。いやたとえそうじゃなくても女の子にそんなマネさせられないけどさ。

「……………受けて立つ」

「……………へえ、いいじゃないの坊や。その意気よ」

にやり、と顔の彫りをさらに深めて笑ったミミック。

ぐわんと両腕を広げてがに股になった彼は、気合充分といった様子。

「かかってきなさい!!」

気合はわかったから見た目をどうにかしろ。

五分後。

そこにはパンツ一枚で座り込む哀れな中学三年生の姿が。

「……………あんた、その」

「ましゅまろ。いいから。何も言わないで」

情け無さ過ぎて視線も合わせられない。

ていうかこのミミック、ジャンケン強すぎる。靴下と肌着とシャツとズボン。靴下は片足ずつだったから計五回の勝負だったのだけれど、あいこは一度足りともなく全てストレート負け。なにこれ意味分かんない。

あと一回。あと一回でスッポンポン。真剣にヤバい。歴戦の猛者だという彼の言葉には何一つ嘘はなかった。

「う、ふふふん。これであと一回であたしの勝ちよ」

ばちんと音を立てるようなウインクが炸裂する。うぐぐ、なんかもうここまで来ると生理的嫌悪より単純に悔しい。

けど、タネはもう分かった。

これは、単純に種族の差。いかんともしがたい互いの間に歴然と存在する隔絶。

要は動体視力と反射神経だろう。僕もそれなりに自信はあるものの、ミミックは次元が違う。おそらくというよりほぼ確実に、僕が出す手を、その動きをみてから出す手を変えている。

これが人間なら、開いたり閉じたり、という動きが必要な上に判断から変化までの時間がわずかなり必要になる。しかしミミックは擬態する存在。手の形を望むものに一瞬で変形させることなど造作も無いだろう。あとはその判断を素早く正確に行えるか否か。彼はそれを実践しているだけ。

勝ち目は、ない。

けれど負けたくないし、負けるわけにもいかない。

肝試しに行って森から出てきたらスッポンポンって軽く見積もっても露出狂の変態じゃないか。この歳でそんな業を背負えるか。

「……仕方ないわね」

「ましゅまろ？」

覚悟を決めたとき、ましゅまろが前に出た。

「めんどろだけど、あたしが相手してやんよ」

「あら可愛らしい物体なこと。だけれどあなた、脱がせるものがな

いじゃない」

脱ぐものって言えばせめて。

「そんなじゃあ、負けたときには食べちゃうくらいしかやることがないんだけど——いいのかしら？」

一瞬、ミミツクの瞳に嗜虐の色が光る。ぞくりと背中を恐怖が走った。

「脱ぐもの。脱ぐものねえ……じゃあ、こういうのでいいわけ？」

刹那。

ぐんによりとましゅまろの形が崩れて、次の瞬間そこには白い人が立っていた。

「……あらやだ。なんとなくそんな気はしていたけれど、あなた、同類だったのね」

「いやあたしは少なくともあんたみたいな変態じゃねーっての」

肌も髪も、そのすき間から覗く瞳の色さえも白い。

背丈は僕と同じほだろうか。気だるげな雰囲気は彼女の口調そのままだ。

その身に纏うのは重厚かつ荘厳、絢爛かつ華美な十二単。そう。十二単である。色のないその姿との対比で自分の視覚が壊れてしまったようにさえ感じる。

さらに手首やまとめた髪にも装飾具をちりばめており、その姿はとてもじゃないが、日頃のぐーたらお化けと同じものとは思えない。

「……はあ、重、だる」

まあ、中身はさすがにかわりやしないみたいだけど。

「……ってましゅまろ?! え、嘘、人間?!」

「そりゃあんだ、人語を使うんだから人間……ってわけでもないか、あんたらの場合は。まあそういう事。せーかくにゃ、元・人間だけどねー」

あくび混じりのましゅまろは、どうだと言わんばかりに胸を張り、ミミックに相対する。

「さて。このカッコって割と重いしだるいしいことねーから、さっさと終わらせようか」

「なるほど。あたしの宝箱の姿と同じで、低燃費仕様の姿がさっきまでのもの、というわけね。それにしても、随分と重装備ね」

「重くて面倒だけど困ったことに慣れてて愛着まであんのよ、厄介なこと」

肩をすくめるましゅまろ。動きに合わせて、しゃん、と髪飾りが幻想的な響きを奏でた。

「さて。二対一になったけど、当然文句はないでしょうね」

「それを当然、なんていう人は中々いないわよ。ふふふ、そういう人、すきよお。いいぜ、相手になってやりましょうか」

ミミックの声が一瞬低くなる。本気、ということだろう。

ああ、僕は今まで遊ばれていた。そりゃそうか、それだけの存在としての差が存在したのだから。

それはまあ、当然だし、仕方のないこと。

「ま、そういう事よ、空」

「……わかったよ、ましゅまろ」

そういう事だそうで。

僕は深々とため息を付いて。

「ま、一発で終わらせてやりましょうか」

ぐるりと、腕を回した。

存外腕力あるね、君。

そして。

そして結末とただの結果報告

結論から言えば。

決着だった。

僕らの勝ちだ。

手を出す直前でましゅまろが姿を戻し、僕が手を出した。

ましゅまろ相手に勝つ手を出していたミミックは、当然、ましゅ

まろ相手に負ける手を出していた僕に負けた。

一対一の、二対一。

直前のスイッチ。

相手が種族としての本能で勝負をするなら、こちらは家族としての技能で勝負するだけだ。まあ、卑怯だとは思っけれど。

「……にしても、助かってよかったよ。ありがとう、ましゅまろ」

「まーあんだみたいなお子どもには重い業だね」

なんだかんだで僕を心配してくれたらしい。有り難い。

そんなましゅまろは当然、いつもの風船みたいな姿に戻っている。口調もだんだん少なくなってきた。

「で。結局持ってきたそれはどーするの」

「いや本当、どうしようねこれ」

ましゅまろの視線は僕の手の中の物体に向いていた。白い物体。ほのかな温かみの残るそれは、言わずもがなミミックの身につけていた全身タイツである。

正直もってきたくなんてなかったんだけど。

『これがあたしたちの戦いの証。魂と魂、肉体と肉体、精神と精神がぶつかり合った証よ……あなたに、持っていて欲しいの』

なんていいセリフと共に手渡されたらさすがに捨てられない。

まあ言ってる本人は筋肉ムキムキの全裸のオッサンなんだけど。

森の中で身長二メートル近い巨体の全裸のオッサンと向い合って全身タイツを渡される中学三年生。

犯罪臭とんでもねえな。

「……まあ、うん。記念？　とか？」

自分でもよくわからないけど、まあ、うん。

「ま、好きにきなさいな。あんたの戦利品なんだから」

「それは違うよ。僕が勝てたのは君のおかげ。というか本当は君の

勝利なんだし。ま、さすがにだからと言ってこれを押し付けたりはしないよ」

白い全身タイツなんて、邪魔とかそう言うのではなく、単純に持っていたくない。

「まあよくも悪くも思い出ねー」

思い出、か。

先ほどのましゅまろの姿を思い出す。

見事な十二単だったけれど、さて。あんなものを日常的に着こなす時代はいつまであったのだろうか。

そんな彼女にとつての思い出というのは、果たしてどれだけの深さ重さを持ち得るのか。

そんな事を考えたりする。するけれど。

「ふわあ……ああ、ようやく出口ね。はあ、騒がしかった」

「だねえ」

まあ。

僕らがこうしている——こうしていられるのなら、今気にしなくてもいいんだと思う。

あるいは、甘いとか、後手に回りすぎだとか。夕陽なんかには呆れられる性質だとは思っけれど。

僕と姉さんと迫り来る白い影（後書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

お気に入りとか評価とか感想とか頂けると非常にありがたいです。

ひとまず、お気に入り数に追いつく話数まで早く書きあげたい所存。

僕と姉さんと夏の浜辺（前書き）

大変遅くなりました。

祭りも終わりましたし、通常更新速度に戻し……仕事が、修羅場、だと……。

僕と姉さんと夏の浜辺

旅行二日目。

今日は朝からみんなで海に繰り出して遊ぶと決めていた日だ。

で。全身を焼く熱気とは裏腹に、僕の場合は冷たい緊張に支配されていた。

それは大地と夕陽も同じことだ。

状況は不利。圧倒的不利。

絶対的な戦力差は覆しがたいものがあり、知恵や勇気でどうにかする範囲を軽く超越していた。

しかしそんな状況でも僕ら三人の間に諦めはない。

ただで負けてやるのはプライドが許さない。

安っぽかろうがなんだろうが、勝負に挑む理由としては十分だ。

「空あー！　いつくのー！！！」

「う、うん！　バッチコーイ！！！」

網目模様の向こう側でぶんぶんと手を振る涼莉に答える。

体を動かすことが好きな涼莉のことだ。こうしてみんなでスポーツをやるのが楽しくて仕方ないのだろう。実に微笑ましい。

凹凸の乏しい体は健康的かつ精神年齢に見合ったハツラツとしたしなやかさを印象づける。

尻尾の部分は姉さんがわざわざ加工してうまいこと外に出るようにしたのだそうだ。無駄に手が込んでいるが、それをするに価する程涼莉の水着姿は似合っており、可愛らしいものだった。

とはいえ。

「せえー、のおー」

ふわり、と手に抱えたビーチボールを放り投げる。真っ直ぐ上に飛んだそれを追って涼莉もまた跳ぶ。

化生のたぐいなかだけあってその跳躍力は人間離れしていた。ぶっちゃけ僕の身長の三倍くらいの高さまで跳んでいる。

野生を感じさせるしなやかな動きで胸を目一杯まで反らして。

ずどむっ！！！！！

頬をかすめた風。

はらりと舞う千切られた髪。

振り返れば砂浜深くに埋まったビーチボール。

うん。

可愛らしさと攻撃力は関係ないよね。

衝撃波により高く舞い上がった砂が僕ら三人に絶望の雨として降り注ぐ。

数秒間それに打たれて、頭に数センチの地層を作った僕ら三人――僕、夕陽、大地――はひとまずひとかたまりになって座る。座った場所はコートの中。ビーチバレーの僕らの側のコートの中、だ。

「……おいどうすんだよ、ビーチバレーで迫撃砲を迎え撃つなんて経験俺にはねえぞ」

「そんなの僕にだってないよ！ ああもう、姉さんが能力制限なし

のビーチバレー大会やるなんていうから」

案の定。

言いだしっぺは姉さんである。

よりにもよって能力に制限をつけないどころか全力で使うことを推奨しているのはどういうことだろうか。僕らを本気で抹殺しかかっていると言われても納得できるんだけど。

相手のチームは涼莉、十乃ちゃん、綺月と、戦力的に言えば極大、微、絶大、といった所。無論、ビーチバレーの戦力としてではなく、物理的破壊能力の意味で。

勝ち目がないというかそもそもビーチバレー、スポーツとして成立しない。直撃したら四肢が弾け飛ぶようなサーブをどうすればレシーブを返せるのか。

「夕陽でもむりなの？」

「涼莉ちゃんの全力があればならどうにかなるが、お前相手じゃないときって手加減のタガが緩むだろ、あのコ。正直本気の全力はポチとタマがいねえと触れることもできんぞ、俺は」

だよねえ。

涼莉、今は勝負というよりも楽しいという感情が優っているおかげで、僕相手にも手加減はできている。まあ、手加減してビーチボールが迫撃砲なんだけど。

が。彼女の負けん気強い性格のせい、僕ら家族以外を相手にすると途端に『マジ』になるのだ。まあ、それを越えてブチ切れするのは僕ら家族に対してのみという、なんというか、こう。

受け止めるボールがいちいち重い。別にいいけどさ。

「大地は？　ほら、涼莉の打ったボール出し、なんかこう、未来的

な煩惱のあれがこれでどうにかなれば？」

「最後投げやりにも程があるで御座るなっ?! だいたい拙者は、ああやってはしゃぐおなごを眺めていられるだけで昇天するような幸せに御座るから、煩惱は既に満たされておるが故」

……………、埋めようかな、この人。

なんかこう、色々と、うん。

腹の底がむかむかするなあ。

「……………ごほん。まあ、空殿の視線が本格的に怖いので自重はさせて頂くで御座る。

が、正直拙者にもどうしようもないで御座るよ。時間を止めようが巻き戻そうが、返すためにはあちらが与えたエネルギーをどうにかしなければならぬで御座るからなあ」

「そりゃそうか」

ううむ、しかしこれはどうしたものか。

「…………まあ言っても、あっちのコートに混ぜられるよりは数倍マシだけだよ」

そういう夕陽の視線の先では。

無数の斬撃が天を斬り刻み。

琥珀の光が時空を湾曲させ。

闇色の翼が世界を飲み込み。

数多の異能が理を蹂躪する。

そしてそしてコートの中を逃げ惑う、一般人のメイド姉妹。

いやあれいじめだろうすんだよ。もはやボールにも触れられずだからと言って生真面目な性格のせいでコートから逃げることも出来ず、ひたすらに翻弄されてるんだけど。

千影さんはそれでも主人たる光璃さんのサポートをしようと必死な辺り、ああ骨の髄までメイドなんだなあと尊敬すると同時、その目が遠くを見て現実逃避してるのを見るとそれで自己を保ってるんだなあとか思わなくもない。

百羽さんにいたってはガチ泣きである。それでも必死でボールを追いかけるけれど、周囲を荒れ狂う大規模な能力に怯えてまともに動けず。動いているのはむしろそっちがボールだろと言いたくなるような大きな、

「空ア？」

「はいなんでもありません！！」

向かいのコートの幼馴染みから凍てつく殺気が飛んできた。たまに思うんだけど綺月は絶対僕の思考を読んでいると思う。

「しかし百羽どののあの表情と胸はたまらんでござるな！！」

「君は本当空気読もうね？！」

泣くからね僕。

「まあ、あれはあれでちゃんと気を使ってるからいいんじゃないかな」

絶対に巻き込まれたくないビーチバレーだけど。

あれでお互いの能力が世界に悪影響を及ぼさないよう能力を干渉

させ合っているのだから、ある意味ハイレベルな戦いだ。どうせならビーチバレーでハイレベルを競えと思わなくもない。

「で。やっぱりかわってくれないの、リリース」

「んー。昨日の肝だめしで疲れた」

リリースは浜辺にぐでーっと突っ伏していた。その長い髪もだらしなく広がっている。なんというか、うん。勿体無くてなんとも言えない気分になる。

「……ねえ綺月、チーム編成しなおすっていうのは」

「翼姉さんの決定に真っ向からは向かう勇気があるんならいいわよ」

ですよねー。

チーム分けは姉さんが勝手かつ強引に決めた。なんかこだわりのあるらしく意見反論の類は聞き入れてもらえず、このような塩梅だ。

「正直涼莉が全力でサーブ打ってくるっていう事実で既に心が挫けそうなんだけど」

「じゃあ猫娘のサーブは諦めて、わたしや十乃ちゃんの時に点を取りに来なさいよ」

「いや涼莉以上の規格外だよね、君」

白い肩を軽くすくめて、端正な表情を皮肉さを感じさせず、それでも皮肉な笑顔を浮かべるという器用なマネをする綺月。

うん。ぶっちゃけ涼莉以上に手が付けられないのが綺月なわけで。

「別にさあ、理不尽だとは言わないよ。自分の生来持っているもの——言ってしまうば特技を存分に発揮しているだけなんだしさ」

加えて言えば、意識して過剰なまでに抑えつけなければならぬ力を持つ綺月は、他の人達より遥かに繊細なバランスによってその立ち位置を保っている。多少のガス抜きはむしろ僕のほうが望むところ。なのだけれど。

「だけどさ、こう。うん。ぶっちゃけ手加減して下さいお願いします。なんなら土下座でも何でもするから、大地が」

「空殿、飛び火！ 飛び火！！」

「そこはほら、何一つ疑われる事なく女子を下から見上げるアングルで観察できるチャンスだと思って」

「さあ土下座と言わず五体倒地あるいは砂にさえ埋まる覚悟は極まってる御座る！！」

「全力でいりませんから。だから穴を掘らないで下さい」

自分で言うっておいてなんだけど、実際に大地がそんな事始めたら誰でもなく僕が蹴り入れることになるんだろうな。僕も大概理不尽極まらない。

「まあ実際、勝負になってないんだから何かしら方策は取るべきだと思うぜ、俺は」

「そうねえ……猫娘は楽しそうだけど、それだけってのもね。あのコもいい加減、勝負の楽しさを覚えなきゃならないでしょうし……って何よ空、」

「……………いや別に」

「別について割にその気持ち悪い笑顔が無性に腹立たしいのだけれど」

気持ち悪い。ひどいな。

無邪気な妹を気にかける世話焼きなお姉さん、といった風に見えてなんとなくほっこりしたただけなのに。

「空ー、つづきはしないの？」
「ゲーム終わらないですよ？」

そうこうしているうちにゲームの中断に耐えられなくなったのか、涼莉と十乃ちゃんがやってきた。

年齢的にはほぼ同年代のはずなのに、こうして並ぶと十乃ちゃんの方がやや歳上に見える。まあ、中身というか性格は年相応なのだけれども。

三人並ぶと一番年下のハズの十乃ちゃんが一番年上に見えるというのは、なんと云えばいいのやら。

「……………てい」

「いたっ！ ちょっと綺月、いきなりグーパンはなしでしょ」

「だって空、今何か失礼なこと考えてたもん」

「……………」

だから。

君はなぜ、僕の思考を読むのかと。

「はぁ……ひとまずね、涼莉」

「うん」

「君のサーブ、受け止めたら僕、爆発するんだけど」

「うにゃ？」

なぜ首を傾げる。

「……でも空だよ？」

「いやうん、僕だから手加減してもらわないとそりゃあもう悲惨な事になるんだけど」

正真正銘、今の僕には何の力もないわけで。

「にゃ？ でも、空なの」

「いやだから」

って、え、ちょ。

「……そら、なのに……ふにゃ」

「えええええええ！ いやちょっと待って、今のやり取りの中になんかまづい所あったっけ?!」

なんと涼莉が両目に涙を浮かべ始めた。

ちょ、ま、あ、え？

「ああ、まあほら、あれよあれ」

綺月が呆れたという風に深く息をついた。

「つまりあんたに対しての絶大な信頼を無碍にされて悲しいんですよ、このコ」

「……………」

何その、何。

やけに重い上に応えてあげないと無駄に良心の呵責を感じる真相。

「えぐ……うぐ……ふにゃあ……」

「いや、あのね、だからね、涼莉」

さすがに泣くなんて思わないし泣かせたいわけでもない。

どうにかして涙を止めたいと思うけれど一体僕はどうしたらっ。

「あーあーあーあ。なーかしたなーかした、つーばささんにチクツたろー」

おいこら夕陽。

「幼女の期待に答えないとか存在として価値を捨てにかかって御座るな」

てめえ大地。

くそう。このふたりひとごとだからって勝手なことを！

「すずちゃん……だ、大丈夫ですっ！ そらおにーさんがすずちゃんのお願いを聞いてくれないわけがないですもの！ ねっ！！」

キラキラとした純粹な視線からサツと視線を逸らした。

ちよつとまぶしすぎて若干すさんだ僕には耐えられない輝きだった。

いや、なんていうか、ね。

純粹すぎんだろううちの年少組！！

ちらり、と視界の隅っこに二人を入れる。

俯いて雫をこぼし続ける涼莉と真っ直ぐな信頼を込めて僕を見る十乃ちゃん。

キラキラキラ。

「えぐっ、うぐっ……にゃう……」

うぐっ。

キラキラキラキラ。

「ひぐっ……にゃっ……」

キラキラキラキラキラキラキラキラ。

「ひっく……ふえ……ぐす……っ」

う。

ううう。

ううううううううううううううううううっ！！！！

「よ………よっしゃあ！ 全力でレシーブしてやらあサーブ打ってこいやあー！！」

ヤケになって叫んでみた。

「にゃあっ！ 空、空、本当なのっ」

ぱっと顔を上げた涼莉の両目から、雫がきらきらと光を弾いて散っていく。

笑顔が咲いて、喜びを全身からオーラのように発散させていた。

「ほら、ほら、すずちゃん、やっぱりですよ。さすがそらおにーさんなのです！！」

「お……おおおおおう、任せとけ！」

「にゃあっ！ ありがとうなの！ 空、大好きなの！！」

どふうっ！ と思ひ音と衝撃を伴い突進もとい抱きつく涼莉。今の時点で僕のライフは五割を割ったわけだが。

ぴったりと体の前面をくっつけて耳と尻尾をぴこぴこぶんぶんと揺らす姿は微笑ましい。のだけれど、衝撃で僕の意識は既に半分幽体離脱気味なんですよ。まあおかげで無防備に密着された肌や水着

の感触から意識が逸らされてるのですが。

ぐらぐらと揺れる視界の端っこで、綺月は頭を抱えていた。

「……………甘すぎ」

うん。そうだね。

僕もそう思うよ、大概。

と、言うことで。

「そーらー！　　いつくのー！ー！！」

「あ、あははははははっ！　　もうね、どんとこいやあ！！」

ええ、やけくそです。

ちなみに夕陽と大地は現時点すでにコートの外へと避難している。十乃ちゃんは元気なうでをぐるぐる回す涼莉をにこやかな笑顔で見やっており、綺月はいええばこちらでもコートの外から僕へと憐れみの視線を向けていた。

若干棘が含まれていない気はしなくもないけれど原因は不明である。

ともあれ。

「ふふふふふ……僕今日死ぬのかな」

いやもうね、既に無数の感情が極まって視界が滲み出しているのですよ。

今の涼莉に常識的範囲での手加減など求めるべくもなく。ぶっちゃけテンションのままに盛大なサーブを打ち込んでくることは想像に難くない。つうか想像したくない。

……あははは、走馬灯のように今までの楽しかった日々が……日々が……。

……………。

「う、うおおおおっ！　まだ死んでたまるかあああっ！！」

なんか色々思い出したら諸々納得できなくなった。

「おいなんかいきなりやる気出したぞあいつ」

「大方走馬灯の中身が納得いかないものだっただけでしょ。ほら、わたしたちのとぼっちりって大抵空に飛んでいくようにできてるじゃない。なんか世の中が」

「ああ、なんか世の中はそんな感じだよな」

「わたしたち的には楽だけど」

「ああ、俺達的には楽だな」

おい。

おい。

君ら幼馴染みで親友だろうに。

一番何が腹立つって、ふたりの言っていることに納得して反論ひとつできない自分だけでも。

危機回避能力の低さは本当、このメンバーの中では際立っていると思う。

「いやあ、この面々に普通に混じっている時点で回避は出来なくとも管理は相当できているかと」

さようか未来人。

ともあれ。

僕のやることはこれで決定した。

涼莉のサーブをいなし、さらには返す。これだ。

ただ受けるだけでは敗北主義者のそれにすぎない。その先を行ってこそ勝利への道筋に立てるのだ！

「……おい、あいつなんかヤベェ眼つきになってきてるけど」

「また変なトリップ入ってるんじゃないの」

「そらおにーさん、かっこいいですー!!」

「「ええっ?!」」

外野の会話をシャットアウト。ひたすらに涼莉の動きに全神経を向ける。それ以外の要素はすべて邪魔かつ不要なものとして切り捨てていく。

そう、今この世界にいるのは僕と涼莉のふたりだけなのだ。

「っ。何か今凄まじく気に入らない考えを受け取った気がしたわ」

ふう。

……いざっ！

「空、いくの!」

涼莉が、ビーチボールをほうり投げる。

その威力たるや、今までの比ではない。残像を残してロケットのように天高く突き進む。

「にゃへっ」

こちらを見て見惚れるような素敵なお顔を向けた涼莉は、四肢を砂浜につけてふっと息を吐き、軽く胸を震わせた。尻尾と耳がぴたりとその動きを止め、静止画のような一瞬の後。

「う、にゃあっ！」

ぼふっ！ と重い音を残してその姿が掻き消える。僅かに尻尾の残像を視界の上端に捉えた僕の視線は、それを追って天空へ吸い上げられた。

その先には、太陽を背負い深い影となって浮かぶ、小さな小さな少女の姿。

影の中にあってなお涼やかに輝く瞳は変わらず笑顔と信頼で塗りつぶされている。

では、応えるでしょう。

涼莉のさらに情報には、既に推力を失い落下するボールがあった。同様に推力を失いつつある涼莉の跳躍の頂点とふたつの影が重なるのは完全に同じタイミングだろう。

推定十三メートル二十八。これが、僕が受け止めるべきサーブの開始地点の高さだ。

なんだか色々とおかしい気はするけどよくよく考え無くてもおかしい事ばかり転がっているのが今のこのビーチなのだからこれはこれで正解なきがしてきた。僕ももうダメかもわからんね。

僕はその場から後ろに一步、左に三步場所を移す。

息を胸の中に取り込み、膝を軽く曲げ来るべき衝撃に備えた。

地上に風はない。が、上空にはそれなりの風が吹いているようだ。涼莉の跳躍点と、現在地、ボールの位置などから判断できる。また、彼女は僕を狙いまっすぐに打ってくるだろうことを考慮にいれれば、

自ずとサーブの着地点も見えてくるというものだ。

両手を前に突き出し、うでを合わせる。

そして。

影が、重なった。

瞬間。

あの瞬間の事はよく覚えていないから、これは後から思い出したことを、なるべく詳細に伝えているにすぎないことを、先に言うっておこう。

あの瞬間。

両うでが根っこからもげたと、そう思った。次に感じたのは、僕は場所選びに失敗したということだ。顔面か、胸か。とにかく腕ではない場所で受けたせいで、全身に衝撃が来たのだと。

まあそんな事は当然無くて、きちんと腕でサーブを受け止めていたわけだが。

涼莉のサーブを受けた両うでからの衝撃は全身を伝い、膝で受け止め、衝撃を受け流す。しかし限界はあり、どうしてもある程度の反動は覚悟していたのだが、それが予想以上だった。

しかしそれでも受け止めることはできた。僕が次にしたのは、ベクトルを変えることだ。

運動方向を変えなければ、この衝撃から逃れることはできない。僕が逃げては相手に返せない。故に、単にボールを受けるのではなく、その向きを逸らし、返す必要があるわけだ。

僕は左右の足を前後にし、体の軸を斜めに向ける。腕の衝撃に合わせるように体を回転させながら、僅かにボールにも回転を加えることで運動ベクトルを制御下に置く。その材質、質量、密度から、

そもそもビーチバレーは外的要因の影響を受けやすい。その性質のおこぼれに預かる事は悪くはないだろう。

そして。

その動きの全てを一点に集約させる。

即ち相手のコートへとボールを飛ばすこと。そう、レシーブである。

「おおおおおおおっっっ！！！」

ばちん、と両腕からゴムが弾けるような音をさせながら、ボールは離れていった。

「や、」

歓喜に、体が震える。

思わずこぼれた歓喜の声。

それよりも一瞬早く、僕ではない声が聞こえた。

「やったあ！！！」

その声は、空から落ちてきた。あるいは、僕以上の喜びに包まれて。

きらきらと。

光の粒子を纏いながら落ちてくる彼女は。

「ほら、空！ やっぱり空ならできるの！！ 言った通りなの！！」

加速度的に、近づいてくる。両腕を目一杯に広げて、体をまっすぐに、弾丸のようになって。

風にたなびく耳と尾と、暴れる髪をもともせず、落ちてくる。

「空！」

その軌道が、僕の打ち上げたボールとしっかりと重なることを、既に僕は理解していた。

「だーいすき、なの!!」

両腕は上がらない。力がでないとかそういう問題ではなく、腕へ信号を伝えるルートが既に全滅しているのだ。

故に。

レシーブを返した相手からの、強烈なスマッシュのお返し。それに対応する力は、僕にはなかった。

そして後片付けとかそんな感じで

砂浜に座って夕日の沈む海を、ボケーンと見ていた。

「大変ねえ、空」

「そう思うのならもう少ししたすけてくれても良かったと思うんだ」

「そんな事したら、またあの娘がへそ曲げちゃうじゃない」

いやまあ、そうだろうけどさ。

「隣、座るわよ？」

返事はしなかった。わざわざするようなことでもないし。というかそれ以前に、聞かなきゃならないことでもないんだけれど。

「今日もずいぶん遊んだわねえ」

「昨日はイカ、今日は水の上を水切りみたいに跳ねて、散々だけどね」

涼莉にスマッシュによって吹っ飛んだ僕は、海上を五、六度景気よく跳ねたらしい。らしい、というのは、涼莉のスマッシュを受ける前に目の前が真っ暗になったからである。

ちなみに、そのまま海に沈むところだった僕は、その後ぐるぐると回転しながら空中を帰ってきたらしい。亀に乗って。今後、あの神様には頭が上がりそうにない。

「まあ、それでも五体満足なだけ空もずいぶん常識はずれよね」

「大地の言うとおりののかもね、非常に納得の行かないところではあるけれど」

一応、今はなんとかうでは動かせるレベルまで回復してきたが。

「回避はできないけど管理はできるっていうの？　まあ、それも危なかった話よね」

まあ正確には回避できないというより、避け得ないというところか。僕の人生とか運命に置いて、そういったものを避けて通ることはできないのだろう。なにしろ。

「……？　な、なによ、いきなり人の顔なんかマジマジとみて」

「いや、ちよつとね」

綺月はある意味で僕らの中で誰よりも、人の常識から離れたところにいる。そんな彼女がいる以上——そんな彼女といたい以上、僕が何かを避け、逃げることはできないのだろうから。

そもそも今日のこれだって、僕の腕が無事だったりそもそもボー

ルを返せたことも、あるいは彼女の意識が無意識が関わっている可能性を考慮せずにはいられないだろう。

そんな。

そんな、不条理なものを、僕の大切な幼なじみは、抱えているのだ。

「なによ、もう、気になるわね……」

太陽が沈んでいく。

僕と綺月の顔を赤く染めながら。元々がとても白いせい、綺月の肌は夕陽に照らされて耳まで真っ赤に見えた。

遠くを見ると、白い月が見えた。薄く、半透明の月は、薄青紫の夜空の中で、ひどく儚く見えた。

僕と姉さんと夏の浜辺（後書き）

ということだ定番のビーチバレー。

スイカ割りでも良かったのですが（というか一度書いたのですが）、
いかんせんスイカと一緒に地球がやばいことになりすぎる。

最後不穏な空気を漂わせていますが、はてさて。

僕と姉さんと星の海（前書き）

いい加減陰が薄いので、話を書いてあげたくなって。

僕と姉さんと星の海

息苦しさを覚えて目を覚ました。

ぼうつとする頭で、視界に入るものが天井なのだと、三秒たって気づいた。

「……知らない天井だ」

なんとなくつぶやいてみた。

特に何も感じなかった。

うんまあ。

寝ぼけている自覚はある。

「この世界では巨大二足歩行ロボットは発生しない、だっけ」

確かジュス様あたりが言っていた。よほどの必要性と必然性、合理性がない限りは生まれ得ないと。

技術的に可能になっても開発するだけの理由がない、というのが、ジュス様の言だ。同時に、まあお前らの場合なんとなくで作りそうだが。とも言っていたけれど。

とはいえ、大地の時代になっても巨大二足歩行ロボットは出てきていないようだし、今後あまり期待はできそうにない。

まあ。

そもそも今のはロボットじゃなくて汎用人型決戦兵器で、割と人造人間というかそっち系列なんだっけか。

「異世界との親和性の問題とか言われてもよくわからないけど」

なんか、そういうものらしい。

どの世界にも似たよつたりの技術や神秘は存在していて、しかしながらその秘奥、あるいは根源、根幹部分は決定的に重ならないのだと。

だからこの世界の魔法では世界のルールは変えられないし、スーパーな技術が発生してロボットが大地に立つ、なんてこともないらしい。

そういうのは、よその世界の特許だそうだ。
よくわからない。

……寝ぼけてるな。

喉の渴きを自覚した。そういえばクーラーもつけ忘れていた。
全身を包む熱をようやく感じて、起きあが……起き……お……？

体が起き上がらない。

金縛りではない。しっかりと腕も足も感覚はある。

ただ起き上がろうとすると、全身が重いというか、引っ張られる
というか。

ていうか、暑いというか熱いのが体の左部分メインで、しかもこ
う、縛られるというかしがみつかれるというか。うんまあ。

その。

なんだ。

「……………おういえ」

謎の英語が飛び出した。いや英語でもねーよ。

なぜか涼莉がそこにいた。しがみつかれていた。

首を左に向けた僕の視界には涼莉の髪が。彼女は静かに寝息を立てて僕の肩に顔を埋めていた。暑くないのだろうか。ちなみに僕はめっちゃくちゃ暑い。

…………ええと。

「ああそうか、そういえば」

両腕ともに、一応動く程度には回復したけれど、やはり誰かの助けが必要ということで涼莉が僕の世話をしていたのだった。

どうせ明日帰るまで特に予定もないのだし必要ないと言ったけれど、言い出した姉さんは聞く耳を持たなかった。

ついで言うと、役目に任命された涼莉がヤル気を出しすぎて止まる気配もなかった。

さらについでいうと、その話が決定した瞬間室内温度が体感で十度近く下がった気がするけれど、冷気の発生源は明らかに綺月だった。なぜ僕を睨むのか。僕は悪くない。

もつとついでにいうと、この状況が綺月に知られたら僕は本格的に明日の朝日を拝めないのではなからうか。うん。なぜかそんな気がする。

ひとまず、喉が乾いていることだし。

キッチンへといきたいところなんだけど。

「ふにゃ……にゃふう……」

「うん……んぐっ……!!」

全身をがちりホールドされていて身動きとれないんですけど。

逆に腕が二度と使い物にならなくなるんじゃないのこれ。どうしてくれよう。どうしようもない。

ちよつと真剣な話、力を緩めてくれないだろうか。

無理かな。無理だな。

疑問が浮かんで答えが出るまで十分の一秒もいらなかった。どうにもしようがないなこの状況。

「……………はあ。君はもうちょっと、男の子女の子というものに頓着して欲しいところなんだけどなあ」

「くう……………にゃー……………」

ぴくぴくと猫耳が動く。

さらり、と、月の光を弾いて藍色に輝く髪が、静かに流れた。

そっと、頬にかかる髪を梳いた。ふわりとした柔らかな感触が指先に触れる。

髪の隙間から覗く肌がやけに白い。

いつも見ているその姿が、まるで神聖なものに触れているような、そんな気持ちになる。

起こすのが忍びない、というより起こすのがもったいない、とでも言うべきか。

「ううん……………困った……………」

「誰か困っていますか??」

はい?

微かな声。首を入り口のドアの方向へ向けると、そこには。

「……………百羽、さん?」

「あ、どうも。なんだか誰かが困っている気がしたのですが……………」
何その謎レーダー!。

「ええと、気のせいでしたら……………ってまさかの涼莉さんベッドイン?!
じじじじじ実はおじゃま虫でしたしょうか私申し訳ありませんでした空気のくせに空気読めなくてうわあああん!!」

「盛大な誤解とともに豪速球で自虐するのやめませんかさすがにリアクションに困るんで!」

ちなみに。

こんな状況にありながらふたりとも声の音量は最小限に抑えてい

るというか抑えてしまっていると言うか。まあ、そういう性格なのである。

そして何をどう勘違いしたのかは敢えて尋ねはしないけれど、ちよっとうん、僕に対する評価ってそんな感じなのかなあとか若干おちこんだりした。

で。

「あ、あはははは……ど、どうもすみませんでした……」

「いや、僕も助けてもらったほうだし」

僕と百羽さんはキッチンで並んでミネラルウォーターを飲んでいった。

なんとか誤解を解いた後、ベッドを出たいけれど涼莉にしがみつかれてどうしようもない、と伝えると。

『はあ……ええと、このような感じで?』

と、百羽さんはするりと涼莉の拘束をといってしまった。答えのわかってる知恵の輪を解くような鮮やかさで。

どうやったの、と尋ねると百羽さんのほうがきょんととして『まあ……メイドですから』と答えたけれど、メイドってなんでもできる人って意味じゃないと思うんですよ。

それでついでに一緒にキッチンに降りてきたわけだけだ。

「それにしても百羽さんはこんな時間にどうしたの?」

「あう、その、なんとなく誰かが困ってるなーと思って目がさめたので」

……マジなのだろうか。表情はマジだが。ふと彼女の姉と妹を思い浮かべる。うん、マジっぽい。なんというかアリだと思ってしまう点がすごい。

両手でグラスを持ってちびちびとした仕草で水を口に運ぶ仕草は小動物を連想させる。

パジャマは可愛いレースがそれを飾るワンピースで、色は薄いピンクがベースになっている。意識しないように気を付けないと、どうにも胸を押し上げるボリューム感を感じてしまう。特に胸元を強調するような服装でもないというのに。

あー、こんな事考えてるからさっきみたいな勘違いを受けるのか。うん、自重しよう。

「それにしても、昨日の肝試しの時もおもったけどさすがに静かだね」

「ええ。それでも、この別荘がこんなに賑やかになったのは、私の知る限り初めてですよ」

「あはは……騒がしくしちゃったね」

「え、と。はい、それはもう。でも、静かなのよりは、ずっといいと、思います」

彼女は。

ほっとするように息をついた。

瞳はじっとグラスの中の水面を見つめている。ゆらゆらと月の光を浮かべるそれにどんな景色を見ているのか、僕にはわからない。

過去を思い出しているのか、未来を思い描いているのか。

じっと、待つ。

しばらくして視線を少し上に向けた彼女は、僕に向かってためらいがちにこう言った。

「あのう……お願いしても、いいですか？」

星が見たい、と、彼女は言った。

昨晚肝試しをした森の別の道に入ると山へ通じる道があるらしい。山頂まではおよそ二十分ほどだという。確かに、女の子が夜中にひとりで入るには不安のある道のりだろう。

断る理由はないし興味もあった僕は、むしろ望んで同行を申し出た。

僕らは着替えて玄関の前で合流し、揃って歩き出した。

「とはいえ、さすがに星月の明かりだけだとしんどいねえ」

「す、すすす、すみません、なんだか無理を言ってしまったて!!」

「いやいや僕も見たかったんだし、そんな無理だなんて」

「そ、そうでしたか……よかったです……」

ほう、と胸を撫で下ろす仕草をする。

百羽さんはどこか気弱と言うよりは他人の意見、意志を気にしすぎるくらいがある。押しの強い僕らの中では珍しいタイプだと思う。そのぶん負担になっていないか気になる所でもあるんだけど。

「こうして、木の間から見える星空だけでも随分なものだね」

「そうですね……実は私も、この先の展望台に行くのは初めてなので楽しみです」

「あれ、そうなんだ？」

「はい。お嬢様が是非にと勧めてくださったので。なぜか、今日しか見られない、とかで。だから……その、お誘いしてみたり、して……その……」

「ごによごによ言葉の最後が小さく聞き取れなくなってしまった。俯いてスカートを握ったり開いたり。」

はて。

「百羽さん？」

「あう……いえ、なんでもないです。なんでも、はい」

明らかに何かある雰囲気だけれども、それ以上刺激する事をためらわせるものがあつた。いや何ていうかほら、隅っこで震えてる小動物的な。ね？

ねって何だよ。

自分で自分にツツコミを入れた。

そんな事していると彼女も調子を戻したらしい。

「え、と。まあその。いいところだと、いうことですから」

「ふうん。まあ光璃さんがそういうのなら期待はしてよさそうだね」

あの人、自然現象に対してもドがつくサディストだもんね。よっぽどの景色でもない人に勧めたりなんかしないだろう。

そもそも、木々の合間から見える星空からしてもう違う。

この辺りは都会の光もなければ空気も澄んでいて、浜辺から見上げた星空だけでも中々に爽快なものだった。満天の星空、という言葉

葉をこの目で見たのは初めてだ。

しかし山から見る星空は、また違うようだ。

……というか、気のせいか歩いて登ってきた高さよりと空気の冷たさ、清浄さの高まりが比例していない気がするんだけど。なんだろうねこれは。

なんというか。

空間、ゆがんでる気がするんですが。

「う？ん」

「ど、どうかしましたか？」

「いや……」

まあ。

害はないだろう。言っても空間がちよっとおかしいことになって

いる程度の話だろうし。変なことをしなければ神隠しとか時空の歪みに落っこちるとかいった事にはならないと思う。そもそも、その危険がないから光璃さんはこの道を百羽さんに伝えたんだろうし。しかしまあ、そうなるよ。

この先にあるものはもしかすると、期待以上のものになるのではないかと。

「うん。楽しみだと思って」

「ほ……そ、そうでしたか」

敢えて笑顔で答えると、彼女もまた花咲くような笑顔で応えてくれた。そういった仕草のひとつひとつに暖かさや思いやりを感じさせてくれる。

「百羽さんは、星を見たりするのは好きなの？」

「そうですねえ、嫌いではないですよ。単に星をみるだけでなく、星座を覚えたり、その神話を調べたり……」

「神話かぁ」

「はい……まあ、結構昼ドラみたいな話ばかりで、身近といいますが、神様も不完全なんだといえますか」

僕も詳しいわけではないけれど、ゼウスとかあれただのエロオヤジだった気がするし。女神は嫉妬とかで平気で災害起こしてる気がするし。

まだ溺愛する少女のためにポルターガイスト現象のカーニバルを発生させる神霊の方が相手にしやすい。どっちもどっちだけど。

「人間が想像したものだから人間らしくなっちゃうのかなぁ」

「そう……そうですね。例えば映画や物語で『恐ろしいもの』『綺麗なもの』を表現しようとしても、それは人の言葉や描けるものの中でになっちゃいますし」

それはその通り。

うん？ という事は真正正銘の魔王だったり吸血鬼だったりなら人間では見られないものが見えるのだろうか。見えるのかも知れな

い。

ああそうか、だから、あるいは。

「お嬢様は、ジュスティード様のそういったところに惹かれているのかも知れませんね」

「……僕も、今そう思ったところ」

彼女は一瞬、きょとんとしたけれど。

すぐに、柔らかな、春風のような暖かい笑顔を浮かべた。

そうして。

ようやく、展望台が見えてきた。

声を出そうと喉が震えて。

それなのに漏れてきたのは、ただの吐息だった。

目の前を白い靄が流れていく。吐息が白く染まっていた。

肌を撫でる風は冷たく、空気は澄み渡る。

そして。見上げるまでもない。

眼前に広がるのは、ただひたすらの、星の海。

言葉にならない、ということを実感として思い知る。まるで僕らの先ほどまで会話を誰かが聞いていたのかと疑ってしまうような光景。

まったく、目の前の景色をなんと表せばいいのか。

溢れる光。小さな、弱い輝きたち。

それでも無数に集まったそれは、まるで水面を煌く陽の光のように強く確かな存在を思わせる。

音を奏でるような瞬きに満ちた世界。

聞こえるのは風の音と互いの呼吸のみ。

なのに空間に満ちる無数の音色はなんと呼べばいいのか。

「な、なんて、いいですか……」

「うん……」

ふたりとも、続く言葉を失う。

呑み込まれるほどの星空。伸ばせば手が届くと錯覚しそうな、その世界。

圧巻とはまさにこの事。

僕らはしばし口を閉ざし、ただ目の前の景色を堪能した。

そうするしかなかった、とも言えるかもしれない。

「あんなに遠いのに、それでも、こんなに近く感じるのですが、できるのですね」

「うん。まるで星の海に沈んだみたいだね」

展望台は思ったよりも広く、木々によって頭上を遮られることもなかった。つき出すように作られているおかげで左右のパノラマも満遍なく見渡すことができる。

はたしてこの場所が地球上のどこに当たるのか僕にはわからないけれど、それでもいつも住んでいる街よりは遥かに標高は高いだろう。

それでも今、僕は海の底にいる。

果てない闇と限らない光の水底に。

「……………空さん。ありがとうございます」

唐突に、彼女は言った。

「え……………っと、何が？」

「今日、ここに付き合って下さいまして」

彼女の言葉に困惑する。だって、僕は何度も言ったのだ。

「でも、僕がここに来たのは結局興味があつたからで。百羽さんにお礼を言われるようなことでもないよ」

「そうでもないですよ」

彼女はイタズラを告白するように。

ちよっぴり舌を出した。

普段の彼女からは想像できない姿に息を呑む。

「だって空さん、本当は涼莉さんの腕から離れるつもりはなかったですから」

「―――、いや、それは」

「です、よね？」

ちよっぴり自信なさげに上目づかいに。それでも瞳の中には確信を宿して。

「……はあ。まあ、あんまり無理に出ると涼莉を起こしちゃうからね」

その視線に負けて、素直に答えた。

「それに、この景色が素晴らしいのは夜だけではないんです。日の高い時間でも、彼方まで広がる海が見えて、それはもう、素晴らしい眺めなのだそうです」

それは、容易に想像できた。そしてきつとその想像を遥かに超える景色が見えるであろうことも確信できた。

だってこれだけの景色。これだけの世界。これだけの色。

この夜空が、日が登ったから色褪せるなど、そんな事あるわけがない。

「それでも、この夜空を選ばせていただきました。この暗い道を進ませていただきました。だって、お昼にお誘いしたら、空さん、他の方が気になってしまいますから」

「それは、そうかもね」

お互いに苦笑を浮かべる。

結局。

彼女は周りの全部に気を使わずにはいられないのだろう。

そんな彼女が、こんな時間にここへ僕を誘ってくれたというのなら。

それはたぶんきつと、とても有り難いことなのだろう。

ああ。

そう。

だから。

「だから、ありがとうございます」

彼女のワガママに付き合って。

僕をこの場所に誘ってくれて。

そんな、奇跡に。

僕らは並んで山道を下っていた。

「けど」

と、思いつく。

「別に、みんなで行けばよかったんじゃないかな」

十乃ちゃんにはやや厳しい道かもしれないが、それでも無理、ということはないだろう。

展望台の気温はややきついものがあるが。

そんな僕の提案に、百羽さんはがっくりと肩を落とした。

「ううう……そう、ですよね。わかっていたんです。空さんですから。そう思っちゃいますよね……」

聞き取れないくらいの小さな声。はて。

彼女は横目で僕を見る。

「ううー……」

「え、と」

僕は何かやってしまったのだろうか。ううむ。
その時。

ガサガサ。

ガサガサ。

唐突に横手の草むらが揺れた。

「ひうつ?! ……ひうえあつ?!」

ビクリと体を震わせる百羽さんを抱き寄せ、大きく距離を取った。
揺れ方からして小型の動物ではない。

野犬か何かだろうか。

あるいは。

空間の歪みから出てきた、まったくの異形か。

ガサガサ。

ガサガサ。ガサガサ。

息を潜めて『それ』が何かを見極める。

「あ、あああああのあのあの、そ、空、空さ、ちか、あの、その」

「ごめん、百羽さん。嫌かもしれないけど、ちょっと我慢して」

緊急事態とはいえ、彼女を胸に抱きしめるような形になってしまっている。年頃の女の子としては苦言のひとつふたつはあるだろうけれど、この場は見逃してもらいたい。

「ひう……その……、別にいやだなんてことは、ぜんぜん……はい」

「え？」

「いいいいいいえええええ！　　ななななな、なんでも、ない、です！！」

ひどく狼狽していた。確かに真夜中に山道で謎の生き物と遭遇するなど、彼女は経験がないだろう。うん、ここは僕がしっかりしないと。

まあ僕もそんな経験は実際なかったりするけど、もっと厄介な生き物に襲われた経験が山ほどあるしね。うん。全然嬉しくねえ。

そんな事を考えていると。

ついに、それが姿を表した。

「つつつぷはーっ!! えーっと、ここはどこだろ」

出てきたのは。

「姉さん?!」

「翼さん?!」

「んー? あれ、空じゃない。どったの?」

いや、どうしたもこうしたも。

「姉さんこそどうしたのさ。こんな夜中に、山道から離れてそんな森の中を」

「んー、ちょっとね。この辺りだと思ったんだけど、どうも気のせいだったみたいだから」

いや、説明になってないから。ていうか相変わらず説明する気そのものがないな、この人。

「まああたしのことはいいよ。それよりも空、なに、こんな所で何してるの?」

瞬間。

「ひうつ?!」

百羽さんが顔を青ざめさせて息を飲んだ。

「ちよっと山を登って星を見てただけだよ。姉さんも、そんな怖い顔しちゃダメだよ。夜更かししたのは悪かったけどさ」

「え、そっち?! 今の表情はそっちなんですか?!」

え? だってそれ以外に姉さんが機嫌を悪くする理由なんてないし。

百羽さんはさっきと同じような表情を浮かべて、小さく「えー…」と言っていた。何やら納得が行かないらしい。

うつむ。

女心は複雑、ということだろうか。

そして終わ리と言うかまとめというか区切り

「え？ 例の電車での命令権ってこれだったの？！」

「ええまあ」

別荘に戻ってきた僕に告げられた言葉に、衝撃を受けた。

いや、僕としては無茶な命令を出されたわけでもなく願ったりな
んだけど。

「だめ、でしょうか……？」

「いやダメってことは。けど、ううん……」

いいのだろうか。なんか僕のほうが悪い気がしてきた。

ちらりと姉さんを見る。

微笑んで見ていた。

何を言うつもりもないようだけれど。

何をするかを決めさせるつमりのようだ。

僕は。

「……うん、わかった。それじゃあそういう事で」

「あ、はい。ありがとうございます。本当に」

彼女は深く頭を下げた。

そんな感謝をされるようなことでもないのだけれど。だって、僕

のほうがお礼を言うべきなのだし。
だから。

「うん。だから百羽さん。僕は君にお礼がしたいから。
今回の罰ゲームはこれで終わりだけれど、君の願いをひとつ、い
つか、僕に叶えさせて欲しいんだ」
「……ふえ？」

百羽さんはきょとん、と首を傾げる。

「お礼がしたいんだ。今日、あんなに素敵なものを見せてくれたん
だし。そのお礼くらい、させて欲しいと思うのはダメかな？」

百羽さんはしばらくぽかんとしていたけれど。
やがて、花開くように目を輝かせて。

「……………はい、お願いいたしますね」

そう言ってくれた。
僕はホッと胸をなでおろす。

「上出来じゃない。よくできました……………ふたりとも、ね」

「姉さん？」

姉さんが何かつぶやいたような気がしたけれど、そちらを見ても
姉さんは素知らぬ顔だった。
ふむ。

まあ、いいか。

「それじゃあ、もう遅いしいい加減寝ようか」

「はい。お二人とも、お部屋までご案内させていただきますね」

「むふー。ありがとね、百羽ちゃん」

こうして。

長いような短いような、そんな二日目は幕を閉じたのだった。

明日は昼間で片付けをして帰るのみ。

無論。

そんな簡単に終わるわけがなかったんだけどね。

僕と姉さんと星の海（後書き）

思ったのですが、もしかして姉さんが一番影薄くないですか。

閑話：魔王と少女と少女と魔王（前書き）

海旅行最終話の前に、ちょっとした箸休めのな。

閑話：魔王と少女と少女と魔王

「ああ、だめだよー」

あたしはその影に注意した。びっくりと震えた影は、ゆっくりとこちらを見た。

おじさんだった。すんごいまっちょの。黒ずくめでマントをしている。同じマントをしているのに、リアとは違ってこちらは暑苦しさがつごい。

まありアは美人だからね。美人は何着ててもばっちこいだよ、うん。

深夜。真夜中。丑の刻……ではないけれど。

おじさんは山道で、じっと、見ていた。

星月の光は遮られて薄暗い森の中で。怪しい事この上ない。

そんな人が。

弟を。

空を。

あたしのあたしの、大事な大事な、大切な大切な、かけがえのない。
い。

おじさんは、なんだかよくわからないけれど。空に……正確には空と一緒にいる百羽ちゃんに物騒な気配を向けていた。

ただけない。ただけないなあ。見えないけれど、こんなに綺麗な夜空なのに。

空が、綺麗なものを見に行こうとしているのに。

そんな気配は、ダメダメだよー。

それに気づいていない空も、随分気が抜けているわね。

「貴様、何者だ……」

「あたしは空のおねーちゃんだよ？」

当たり前のことを聞いてくるおじさん。不思議に思ったけれど、答えてあげる。

なのにおじさんはなぜかむっとした。失礼ね。

「名前を聞いているのだ」

「名前？ ああ、なんだ。だったら最初からそう言ってくればよかったのに。あたしの名前は翼。響翼だよ。そういうおじさんは？」
「フツ……我か？ 知りたければ教えてやろう……」

ククク、と怪しげに笑うおじさん。警察とかよんだほうがいいかしら。

おじさんはたっぷりもったいぶってから語りだした。

「我は魔王、それもかの」

その時、携帯が震えた。

「もしもし、光璃？」

とりあえず喋ったままのおじさんは放置して携帯に出る。

「こんばんわ翼ちゃん。家の中にいないようだから気になったのですけれど」

「あ、うんごめん。ちょっと空の様子を見ててね。あ、光璃でしよう、百羽ちゃんにこの道で行くのを勧めたのって」

「ええ。お節介かと思ったのですけれど。あら、その様子だと、あのコ、ちゃんと誘えたのね？」

「だねえ。それにしても不思議な手品だねー、道が途中で別の場所

に繋がるなんて」

あたしの言葉に、光璃が不意に沈黙した。

「……………あのですね、翼ちゃん。前々から気になっていたのですが、その、何でもかんでも手品とかトリックだと言うふうには片付けられるのは、マジなのですか？」

「うん？」

「ええ、よくわかりました今ので。マジなのですね……」

電話の向こうから盛大なため息が聞こえた。なんだかとてもつかれた様子。さて、我が親友は一体何をそんなに疲れているのか。

「……それはそうと翼ちゃん、誰かそこにいるのですか？　なにやらぶつぶつ声が聞こえますけれど」

「え？　ああ、うん」

ちらり、とおじさんを見る。

なんか悦に入っているのか大きな身振り手振りでなにか語っていた。聞く気はない。興味もない。

「変なおじさんがずっと自己紹介してる。誰も聞いてないから放送事故みたいになってるけど」

「自己と事故をかけましたね……？　って、大丈夫なんですか？　この辺りに人なんていませんから、ここにいますというだけでその方怪しい事この上ないのですけれど」

「うーん、まあなんだか空……っていうか百羽ちゃんにやーな視線向けてたからさ、一応注意しただけだよ」

それが危ないのでしょ、と光璃が深くため息を付き、言った。

「翼ちゃんならそうそう危ないことにはならないとはいえ、うちの

敷地内での出来事ですからね」

次の瞬間。

「私が出ていかなければならないでしょう？」

光璃が、そこにいた。

まるで風景に割り込みをかけたみたいに、唐突に。
うん、いつ見ても光璃の手品はすごい。まるでトリックが見えな
いんだもの。

「さて、私の従者と親友とその弟くんの不埒なことを使用としているのは一体……あら」

「そしてその時立ち上がったのが何を隠そうこの我ぎゃああああああああああああっ！！！！！！！！」

ばっちりポーズを決めてこちらに指を突き付けたおじさんがいきなり悲鳴を上げた上、両目からぶわっと滝のような涙を流した。あごが外れんばかりに開かれて目玉も飛び出しそうなくらい見開かれている。

人体ってこんな表情できるのね……。

「ふふ……もう元気になったんですね、貴方」

[illegible]

おじさん絶叫。光璃が右足を踏み出しただけでなんかもう必死の形相で大股で三歩下がった。三歩で止まったのは背中が氣に当たったせいで、それがなければもっと下がっていたかも。

ていうか多分逃げてるんじゃないかしら。

光璃は困ったようにほう、とため息をついて頬に手をあてる。

「もう……仮にも魔王を名乗るというのに悪魔だなんて……そんなに怯えてはいけませんよ？」

「光璃、このおじさんのこと知っているの？」

「ええ。昨晚の肝試しの際に、私とジュスティード様が歩いていたら下品な笑い声と共に上から落ちて来まして。なんとなく許しがたかったのでちよっぴりお仕置きを」

あー。

あーあーあー。

そりゃあ、うん。どちらに同情したらいいのかなあ。そりゃあ親友の恋路によけいなちよっかいを出してきた人なんだから、光璃の気持ちはよくわかる。よくわかるんだけど。

この娘がひとんちの弟にしでかしたことを考えるとちよっと、ねえ？ あの空の心を半ば折るところまで行くような行為は普通に、うん。えげつないもの。

そんなことをこのおじさんがされたのだとすると、うんまあ、多少は同情の余地も。

「おのれ小娘！ あのとたりを人質に取り我が尊厳を取り戻そうと思っていたが！ こうなっては仕方がない！！」

おや？

おやおや？

「ねえ光璃」

「……………、え、と。なんですか、翼ちゃん」

おじさんの言葉にひっかかりを覚えたので、ちよっと光璃に尋ねた。

「今あのおじさん、百羽ちゃんと空を、人質にとるとか、そんな事、いったの？」

「……………ええ、まあ、もしかしたら、そんなニュアンスの事を言った、かも、知れませんか」

遠大な沈黙の後に、光璃はそう言った。
ふうん。

へえ？

「あの翼ちゃ」

とりあえず。

なにやらまだ大声でがなり立てているおじさんをだまらせないと
ね？

ということで。

おじさんの周りにあるものを、とりあえず、意識の刃で見境なく
切断した。

「……………に……………？」

おじさんがどんな特技を持っているかはわからないけれど、とりあえず周りを素粒子レベルで切断してしまえば何かしようにもできないでしょう。

原子崩壊の衝撃諸々ふくめて切断して、森の中にぽっかりと穴が開く。

月光のスポットライトをあびるおじさんは、うーん、ちょっと、絵にならない。

「……………はあ、やっぱり」

呆氣にとられるおじさんと、肩を落とす光璃。
ごめんね？ あなたの立場をうばっちゃって。
でも。

うん。

おねーちゃんとしては、大切な弟に手をだそうとしている輩は。

事前にしっかりと教育しておかないと、ね？

さあ。

「おじさん。あのね、さっき見てたのは、弟とそのお友達なの」
「う……………うむ……………」

なぜかおじさんの顔色が青を通り越して土気色。どうしたのかしら。ちよっとお話をしているだけなのに。

「だから、ね？ ちよっとしたイタズラくらいならまだいいんだけど、さすがに人質っていうのは」

物騒。

だよね？

あたしは。
とりあえず。
おじさんの。

説得をはじめた。

私は深く深くため息を。
なんとなく、こうなることがわかっていたから、わざわざ出てきたのですけれど。

私はすでに森の中にひとり。
すでに翼ちゃんも黒いマッチョ魔王もどこかへ消えてしまいました。
た。

全力で逃げる魔王を弟思いのお姉さんが追い回しているのです。

「まあ、百羽の安全も確保できましたし、よしとしましょうか」

空君たちとは違って、私の従者たちには本当に何の力もないのです。空君が不用意に百羽を危険に晒すとは思えませんが万が一、ということもありますし。

それにしても。

「せめて翼ちゃんが暴走する前に出てきてくださってもよかったのでは？」

「それを言うなら、お前が出てすぐに野郎を潰しとけば問題なかったろ」

森の奥に投げかけた声には、すぐに答えが返ってきました。気だるさを隠そうともしない、けれど常に獣の荒々しさを内包した声。

ジュスティードさんです。

いつものジャージ姿で、はだしのまま現れました。

「サイオンの野郎も難儀だな。昨日はお前、今日はあいつとは。さすがにこれで尻尾巻いて帰るだろ」

「あら、ひどいですね。翼ちゃんに比べたら私の仕置きなんて軽いものですよ?」

「……………本気で言ってるのかお前」

私、基本的にあなたの前では嘘はつきませんよ?

「はあ……まあ、どっちがきついってのならどっちもどっちだろうけどよ。お前は自尊心を傷つけて、あいつは本能を殺しにかかるかな」

「翼ちゃんの逆鱗に触れたのはまずかったですね」

山の中は相変わらず静かだ。

いくら空間が錯綜しているとはいえ……昨日今日の騒ぎで歪めた張本人のひとりと言うのもあれですけど、まあその状態とはいえこうまで静かとなると。

「本格的に一方的な展開なんでしょうね」

「だろうな。何しろあいつの刃にかかる俺の首も落とされかねん。逃げて正解だろうぜ」

そうでしょうね。

私も、あの大げんかの時は覚悟を決めるところでしたし。

この惑星ごと翼ちゃんと相打ちするかどうか。

その選択を踏みとどまって敗北を選んだ自分を褒めてあげたいですね。そうでなくては今日という日を体験することはできなかったのですから。

「さて。半端な時間に目が覚めちゃったおかげで調子が狂うぜ。どうしたもんか」

不満気に空を見上げるジュスティードさん。

おそらくそれは私に対してチャンスをくれたわけでもない、ただの本心でしかないものだったのでしょうけれど。

「でしたら」

一瞬で干上がった喉で、どうにか平静を装いながら。

「星を、見に行きませんか？」

暴れる胸の鼓動を抑えつけ。上手く笑顔を浮かべられているか、変な心配をしながら。

「素敵な場所を、知っているんです」

精一杯の、勇気を出して。

そんな私をちらりと見たジュスティードさんは、ふむ、と考える仕草をして。

「……ま、そんな日もアリか」

了解してくれた。

一気に全身の緊張が解けて、それと同時に心が融け出しそうな不思議な感覚に襲われる。

思わず飛び跳ねたくなる衝動を抑えつけて。それでは、と。

「ご案内します。あのふたりの邪魔はしたくありませんしね」

絶好のスポットは百羽に譲っちゃいますけれど。

世界はなにも、あの場所だけではないのですから。

閑話：魔王と少女と魔王（後書き）

姉さんが普段裏で何しているのかというと、だいたいこんな感じで弟とその周りのことを見守っています。

僕とふたりと角砂糖（前書き）

更新が遅くなってしまい……。

頻度はもう少し上げたいと常々……。

ええと、更に言おうと。

今回で海編終わりました。これは予想外……

僕とふたりと角砂糖

潮騒の音がやけに大きく聞こえた。

「う……うん……」

肌に熱を感じる。包むような、焼くようなそれが太陽のものと本能が理解した。

「……あれ？」

妙だな。朝の直射日光がこんなに強く入ってくるような部屋じゃなかったんだけど。

目を覚ます。

青空が、目に入った。

「……………お？」

えー、と。

はい？

体を起こそうと手をつくわずかに沈んだ。砂だ。砂浜の柔らかい砂。

嫌な予感をひしひしと感じながら体を起こすと、案の定、そこは砂浜だった。波打ち際。

白い砂が指の間をさらさらと流れていく。海風は穏やかで波の音も静か。

遠くでうみねこのなく声が聞こえた。

目の前に広がる海はどこまでも広い。視界を遮るものは何一つなく、ただ雄大な眺めがそこにはあった。

振り返るとそこも砂浜。延々と白い砂浜が続いている。水平線と地平線に挟まれた僕は呆然と空を見上げた。

「なんでやねん」

なぜに関西弁。

さてとどうしたものかと腕を組んで考える。

まずこの場所がどこなのかという話だが、そんな事わかるわけではない。ないのだが、おそらく地球上のどこかということはないだろう。

見渡すかぎりの水平線と地平線に挟まれる土地など聞いたことがない。まあ自分が知らないだけであるのかも知れないけれど。なのでこの判断はどちらかと言うと勘による判断が大きい。

「原因は……やっぱり昨日の山のせいかなあ」

姉さんがなぜか徘徊していたわけだし。ただでさえひどい空間の歪みが更に攪拌されてどこか別の世界にぼん、とつながっていたとしてもまあおかしい話でもないだろう。ひどい話だけど。

で、何かしらそういう『歪み』の欠片を体に引っ掛けてしまったまま布団に入ったのだとすれば……うんまあこういうこともあるのかも知れない。

「それにしても……どうするんだよこの状況……」

ぶっちゃけようか。

ツツコミ一人だと間が持たないのである。

さらに言えば受身な人間しかいないとストーリーも進めようがないのだ。

イベントが発生する条件もフラグもそもそも存在していない。どうしろというのか。

「立ってあるけ、なあんて言われても、なあ」

人がいないと。他人がいないと。

ううむ、自分が普段どうしているのか、いまいちばんやりと。ふむ。

「おひやはやひやひやべっっひょーおおおおうつっ！……！」

ふう。

理解に苦しむポーズと奇妙な声を上げて自分でもよくわからないテンションまで昇り詰めてみた。普段は感じられない開放感と背徳感とあと絶大な後悔が押し寄せる。

うむ。

何が『うむ』なのかはよくわからないけれど。

「こんなところを誰かに見られたらお嫁に行けないな……」

「すまぬ」

「うおおああああっ！！」

背後から響いた声に全力で飛び上がった。

見られた。すごいとこ見られたうわああああああっ！！！！！
羞恥で顔面を沸騰させながら振り返る。

——一気に冷めた。

「う、うおあああああああああっ?!?!」

生首がそこにいた。

アリア・イリス・リリス・パンドラの生首が砂浜に。

「空、空、落ち着く」

「う、わ、あ……な、生首がっ!!」

喋った。普通に。いつものテンションで。逆に怖い。

「……? もっと恐ろしいものならいくらでも見たことがあるハズ」

「いやいやいやいや、そりゃエグいグロいものは確かにいくらでも見てきたけど友人の生首は初めてだからね僕っ?!」

「……?」

リリスは首をかしげた。生首なのに。

……うん? 生首なのに?

「空、それは勘違い」

「……うん、僕もなんとなく事情がわかってきた」

ぼこり、と。

顔の横の砂が膨れ上がり飛び出したのは——腕だ。

彼女はその腕をまっすぐに僕に伸ばして、いつもの眠たげな表情のまま言った。

「——出して。さすがに、重い」

砂に埋もれていたリリスは私服姿だった。

袖のないシャツにホットパンツ。夏だというのに黒のストッキングに膝まであるブーツ。

軽装なのか重武装なのか判断に苦しむ姿だ。

ぱんぱんと軽く全身の砂を払い終わるのを待って声をかける。

「ええと。それでこの状況に心当たりは？」

「ない。こともない。可能性が無きにもあらず。という可能性」

結局どっちだ。

「空間干涉系魔法——というより魔封の一つ。自然的に発生はまずしない」

「てことは誰かの手が入っているってこと？　　そういえばリリス、

砂浜に埋まっていたけど……」

ふるふる、と首を横にふるリリス。

「あれはたまたま。この空間に出た際に、ああなっただけ」

……それ、危うく死ぬところじゃん。

いやまてそうなると。

「他にも誰かこの空間に来て埋まったり沈んだりする可能性がある……ってこと？！」

「……………おう、まい、がー」

驚愕する僕の言葉にリリスは両手をひらりと上げた。お手上げー。
んなこと言っている場合じゃない。

と、そこに。

どっぱん！

と、海が破裂した。十メートル以上の飛沫を上げて、海水が高く高く舞い上がる。

その中央から。

「つつつつつつつつ死ぬかと思ったああ！！！！ げほ、げほっ！ おえっ！！」

馬鹿が大声で飛び出した。

「夕陽っ！！」

「あん……げほけほっ？ おー、空じゃん。あとリリスさんも。いやもうビビったぜ、目が覚めたら海の底とかどんな罰ゲームだよ」

あ、罰ゲームで済むんだそれ。すげえなもうちょっと常識に歩み寄ろうよ。

今まで沈んでいたんだろうか。そうであつても夕陽なら驚くに値は――いやうん、驚くわ。その頑丈さと鈍さに。

「あーもう、濡れたわ。つうかなんだここ。光璃さんの別荘じゃ……ねーよな」

「見ての通りさ。リリスが言うには何かしらの『意図』が介在しているはずだって言うけど……と、それ以上に今は、この空間にいるのが他にもいないかどうかを……」

「いないよ、空」

僕の懸念をリリースは否定する。

「この空間に呼ばれたのは、きっと、あの肝試しのせいね」

僕が理解できずに首をかしげていると、夕陽が『あー』と何か得心がいったかの様子は。

はて。

どういうことか。

「いやな？ あの時俺ら、揃って落とし穴みたいなのに着ちたんだよ」

「正確には時空の裂け目」

「で、その向こう側でへんな蛇みtainな生き物と戦って」

「正確には異界の神威存在」

「んでまあ、帰ってきたんだけど」

「正確には世界の歪みに押し出された」

夕陽の言葉をいちいちフォローしてくれるリリースの存在が非常に有り難い。

ひとまず。

彼らはあの日、僕が以前異世界に呼ばれた時のように、その世界を脅かす存在と対決して……で、勝利を納めて帰ってきたようだ。

僕が言うのも何だが、世界ってそんな簡単に救われたり危機に晒されたりしていいのだろうか。甚だ疑問である。あるものの、姉さんも毎週世界を救ったり逆に世界を滅ぼしかけたりしているフシもあるし、まあそういうものだと思うとおこう。精神衛生上。

「その影響が、おそらく、魂魄に残ってる。そのせいで、呼ばれた」「ふうん。細かい原理はわからないけれど要はあの肝試しでふたり

は何かしらの因果を埋めこまれたと……で、なんで僕がここにいるわけ？」

「そらお前……ねえ？」

「こくこく」

夕陽とリリスが顔を見合わせる。

言いたいことがなんとなく判るだけに腹立たしい。

つまりまあ、それが僕という事だというただそれだけのことなんだろう。巻き込まれ体質ここに極まれり。

まあ引っ張り出された以上文句を言っても仕方ない。

「相変わらず割り切り早いなーお前」

「夕陽は割り切る以前の話だけどね」

何でもかんでも丸呑み。深く考えないとも言える。

「で、リリス。実際問題解決方法はあるの、この状況」

リリスは神妙な面持ちでこくりと肯いた。

「……ない」

「いやなぜ今肯いた。なぜ肯いた今?!」

「ノリが」

「君はギャグなのかマジなのかわかりにくいの!」

基本的に表情の起伏がないんだもん!

照れたように頬をかく仕草は可愛らしいけれど!!

この娘意外と調子がいいと言うか調子に乗りやすいというか。おかげで僕はいつも空回りですよええ。

「まあ実際使役者がいないことにはどうしようも」
「えー。ないの。ないんだ。うわー」

結構切実な問題じゃんそれ。いわば完全密室。全身黒タイツの人
もいないというのはバーローなどということもできないのである。
うん、僕もだいぶ参ってるね。色々ギリギリだろネタが。」

「てことは何、僕らここから出られないわけ、一生？」

「……………一生。うふ。一生夕陽と。うふふふ」

「リリース、どうかした……………ってぎゃあああああっ!!」

「うわリリースさん鼻血！ 鼻血がすげえ事になってますよ?!」

どばばばば、と凄まじい勢いの、なんというか、こう。

致死量じゃねえのかこれ。

そう思っていたらリリースがなぜかキリッとした表情でサムズアッ
プした。鼻血を流したまま。

「大丈夫。演出」

「ごめん意味分かんない」

わかんないったらわかんない。

しばし待ち。

「……………うん。へーき。落ち着いた」

「うん……………よかったよ……………」

心底。

ちなみに数メートル離れたところには血の池地獄ができています。
原料は。まあ。うん。

とりあえず、なんかよくわからないけれどリリースが失血死する前にこの空間を脱出しないといけない気がしてきた。とはいえ、唯一知識があるリリースがそうそうにお手上げ状態なのがあ。

「夕陽、何か解決策はある？」

「海の中で寝てた俺に聞かれてもなあ」

「まあ、そうだよなあ。そもそも大地ってパワープレイヤーだし」

「んだよまるで俺が力押ししかできないみたいじゃなーか」

「……………え？」

「待て待て待て待て！ 何だその『え、今まで気づいてなかったの、マジ？』みたいな顔は！！」

「いや、ていうか……………え、今まで気づいてなかったの、マジ？」

「復唱すんなよおお！！」

だって夕陽だし…………。

「別に俺って暴力的じゃねえよなあ……………ないですよ、リリースさん？」

「うん。夕陽は暴力的とかじゃない。単純なだけ」

「ほらな空」

「うんそうだね」

これで共通認識にズレがないことが証明されたわけだが。

夕陽も何が『ほらな』なのか。ちよつと国語小学校からやり直せ。

「…………でも。もしかしたらそれが、この場における唯一の回答かも」

思いついた。とばかりに人差し指をぴんと立てるリリス。
ふわり、と風もないのに彼女の髪が軽く浮いた。

「え？」

「つてーと、どういうことですか？」

「うん。だからね」

指先に光が集まり、きゅぴん、とファンシーな音を立ててそれを生み出した。剣というにはあまりにも大きすぎて。大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把すぎる物体を。

柄は赤い布が巻かれて刃は桃色。星や月の飾りで彩られながらも無骨な印象がどうしても拭い切れない違和感以外を感じられないそれは。

マジカルステッキ・ドラゴンスレイヤー。

棒がついてるんだからステッキでいいでしょ、という乱暴な理論によりステッキ扱いされているそれを、リリスはぶんぶんと頭上で二三度回す。

ちゃらららーん、という音楽がどこからともなく響いてきて、僕と夕陽は揃って彼女に背中を向けた。

ぴこん、きらん、ちゃらん、きゅいーん、などという効果音がBGMを盛り上げ、最後にしゃららーん、という効果音でBGMは途切れた。

「あー、リリスさん、もういいですか」

「うん。いいよー」

リリスの言葉に振り返る。

その時、ちょうどリリスは頭の上で回していた剣の剣先を砂浜に突き立てたところだった。

その結果。

ごばあつ。

と。

砂地が割れた。リリスは柄を両手で持ったまま、背中の方へと剣先を下ろしたのだけれど、まあなんというか、そこを起点に地平線の向こうまで大地が割れた。綺麗に。無粋に。遠慮無く。容赦無く。背筋を詰めた汗が流れた。相変わらずぶっ飛んでるなあ……。攻撃意志を持たない上での攻撃力では、知り合いの中でも髓一だよなあこれ。

これだけの事をしでかしておきながら、動作としては『ただ剣を置いただけ』であり攻撃の意味合いは欠片も含まれていないのだから恐ろしい。ドラゴンスレイヤーの能力はただ一点『安全かつ健全な破壊』に集約されているそうだ。なんだその詐欺臭いキャッチフレーズ。

「うん。調子はいいわ」

「そ、そうですか……」

頬が引き攣るのを自覚する。

魔法少女リリカルリスステタメントフォーム。

悪しき竜から人々を守るためのフォーム、と、まあそういう設定で創り上げたらしいそのフォームは、魔法少女と騎士が融合したかのような姿をしていた。

両手両足と胸を守るような軽装の鎧。魔法少女然としたふりふりのスカート。髪は動きのじゃまにならないように後ろの高い位置でまとめられている。

イメージカラーは赤で、ところどころに燃える炎と真紅の薔薇の意匠が施されていた。

まあぶっちゃけこれなんてエロゲ状態である。

そんな防具で意味があるのかと皆様思ったりするだろう。

意味はある。

恐ろしいことに攻撃力の部分でな。

リリカルリリステストメント。全フォームの中で唯一わかりやすい防具を装備しているくせに、攻撃力にカスタムするまでステータスを割り振った謎フォームである。

なぜそんな事になっているかというところ。

『鎧が、可愛かったから』

と、真顔で供述しくさった。意味わかんねえ……。

「……………それで。うっかりこけたら半径数十キロを壊滅させかねないわテヘペロフォームを、なぜ今ここで取り出したのか聞いてもいいかな」

「うん。だから」

リリスはドラゴンスレイヤーをおおきく振りかぶって。

縦に。

まっすぐに。

振り下ろした。

どかん、という音と言うか衝撃が全身を襲った。斬撃は海を割りねじ切れた空間が悲鳴を上げて散り散りに碎ける。衝撃波が四方八方に飛び散り破壊の爪痕を自由散漫にまき散らした。

この魔法は、あれだ。マジカルデストロイザンバー。宇宙怪獣だって倒してあげる、ってウインクされたやつだ。やめて怖い超怖い。

「正攻法がないのなら正面突破しかないわ」

「なるほどリリースさん、わかりやすいぜ!!」

「わかりやすすぎて逆に問題じゃありませんかねえ?!」

なんでさっきまで隣で一緒にドン引きタイムだった夕陽までノリ気なのってああそうか君暴力的って言うより単純な子だったね!!

「おいおい空落ち着けよ。俺は今まさに目から火を噴く思いだったんだぜ?」

「ビジュアル面で恐怖を覚える間違いはやめてくんないかな」

キモイというよりもはやエグい絵面を想像してしまった。どうしてくれようか。

「空……何が問題なの?」

「何がっていうか、むしろそんな恐ろしい真似をして大丈夫なのかと」

「けど解決方法がわからない以上、色々試すしかないわ」

「色々試すしかないのはわかるけどどう考えても最終手段じゃん……」

「大丈夫、大抵の場合最終手段を試すしかないもの。空の場合」

「僕? え、この状況僕のせいなの?!」

「ああまあそうだよなあ。俺とリリースさんだけならなんかこう、いかにもってイベントでもあったんだろうけど、お前が一緒だとなあ」

「何その理不尽許せないんだけど」

というかね夕陽、仮に君とリリースだけでこの空間に放り込まれた場合、リリースが解決に消極的になる可能性が大いに有り得るんだけどね? さすがに凝視するリリースの視線が怖いから口には出さないけどさ。

「いやとにかくさ……そんな大規模破壊をいきなり振りまいて後先がなくなったらどうするの」

「卵の殻を中から割るには内側から圧力をかけるしか……!!」

「微妙に納得しそうな理屈が出てきたな……」

言い得て妙な話だった。

「けどさあ、そんな空間とか世界とかボンボン壊して、僕ら無事に
出られるわけ？」

「……………。夕陽、全力でどのくらいの出力いける？」

「えーっと今だと雷二十本が限界っすかねー」

「なぜ答えない…………!!」

リリースはこくりと一度首を縦に揺らす。

「空……嘘は、良くない。どんな小さな嘘でも、それは歪みとなっ
て、いずれ大きな破綻を生むわ」

「え、あ、うん。そうだね」

「嘘は全ての始まりに成りうる。だからわたしは嘘は嫌いだし、翼
も同じよ。だからわたしたちはお互い、嘘をついたら怒るし怒られ
るわ」

たとえそれが、それぞれと関係のない場所で起こったことでも。

同じ感性を有するがゆえに、互いの感性を守り通すと。

それはひとつの約束なのだそうだ。

「うん……ええと、それは、うん。なんとなく分かったし僕からも
ぜひ姉さんと良い関係を築いて欲しいから嬉しい話なんだけど」

なぜ今そんな話を。超不穩。

「とゆーことで、嘘は言えないけどホントの事言うとか空が止めるの
でこのまま実行します」

「って案の定か待てやコラアアアアアアアアア！！！！！」

「夕陽空を止めて」

「うおわ、やめ、離せ夕陽!!」

ふわりと宙に浮かんだリリスを止めようとした瞬間、それを察知したリリスの指示により夕陽が立ちふさがる。くっ、背の高さと単純な腕力の差がある以上、正面突破は不可能だ。

「夕陽ちよつと、いきなり博打にでるのはどうなのさ！」

「つってもこの中で不思議現象の専門家はリリースさんくらいだろ？」

乱暴でも強引でも適当な答えじゃないんじゃないの」

「う……いやそうかも知れないけどさあ……」

「おっしやれやれリスさん！」

「オツケー夕陽いくわよー」

「うははははいい加減翼さん分が足りなくて辛くなってきたんだぜ!!」

「やる気無くした」

「えええええええええつ?！」

うわありリスがふてくされて衣装を解除した。

「ど、どうしたんですかりリスさん？」

「……べつに」

「いや、あの、別についていいながら脇腹をつねるのはちよつとイタタタ」

「むー」

「あ、あたたたた！　ちよっとリリースさん、何を怒ってるんすか？！」

「えい、えい、えい」

「ちよっ、つつつかれたらくすぐたいですってば！　あはは、やめ、ちよ、あはははは！！」

「この、このこのこの」

「ちよ、ま！　リリースさんもしかして単におもしろがってるでしょ……あははは！　ちよっと本当にやめ、くすぐった！　もー！！」

「あ、夕陽逃げちゃダメ」

「逃げますってば！！」

波打ち際を走って逃げる夕陽とそれを追いかけるリリース。

夕陽は困り顔で、リリースは膨れ面で。それでいてどこかお互いに楽しそうに。

キャツキャウフフ。

キャツキャウフフ。

……え、何この茶番。

僕は呆然と走り去るふたりを見送った。

え、なに今の意味分かんない。なんでいきなり小っ恥ずかしいラブコメが始まってんのしかも古いよ絵面が。

脱力してその場に体操座りをした。なんとなく。

視線の先ではついに足だけ海に入り水の掛け合いが始まっている。いやもう。

なんだかな。

十数分後、ふたりが帰ってきた。夕陽は頬に真っ赤な紅葉をもらっている。

というのも先程テンションが落ち着いてきたあたりで正氣に戻った夕陽が、ふとりリスから目を逸したのだ。

「……？ 夕陽、どうしたの？」

「いやあのまあその。ええとですね、非常に申し上げにくい事なんですけど……透けてます」

「……………？ —————っ?!?!?!?!?!」

顔をまっかにしたりリスのビンタが夕陽の頬に炸裂し太陽まで届きそうなほど高い音を響かせた。

おかげで元に戻っていたリスの機嫌がまたひん曲がってしまった。とはいえ、こちらは単なる照れ隠しだろうし、さっきも夕陽に何度もビンタのことを誤っていたし、さほど深刻なことにはならないだろう。

どちらかと言えば延々と砂糖でも吐きそうなラブコメを見せられた僕の精神の方が壊死寸前。

いやね、なんかもうね。夕陽は普通に楽しそうんだけどそれと向かい合うリスの笑顔っただけにないわあれ。どんだけ幸せなの君ってレベル。普段が無表情に近いだけにとんでもない破壊力。儚さと強さを同時に秘めたその笑顔は花が咲いたとかそんな例えではとても追いつかない。それを正面から見せられてるくせに普段と変わらない夕陽はちょっと校舎裏に呼び出されても文句言えない。

「おかえり……」

「おう、ただいまー。わるかったななんか」

「いやいいよ。あの空気に混ざるのはさすがに無理」

良心が咎めるというのもあるけれどそれ以上に甘ったるさに耐えられない。

「で、さっきの議論の蒸し返しになるわけだけど」

「「あ」」

揃って口をぽかんとあけるふたり。うんそうだね、戻ってこないでそのまま世界ぶち抜いてれば終わってた話だもんね。正直もう僕もそうされてたら止めてない。止める気力がない。

それでも素直に戻ってきちゃうんだからこの二人は割と似てるんだと思う。決して彼らの純真さにつけこむ僕が汚れているわけではない。きっと。

「リリースは変身解除してるし、夕陽もこの距離だと僕のほうが動き出しは早いでしょ。というわけでさっきの無茶方針はなしね」

「むう、空いじわる」

「なんだと……」

「そうだそうだー！ 空はいじわるだー！！」

にやろう、悪ノリしはじめやがった。

リリースが無表情に。

「そ・ら・が！」

夕陽が意地悪い笑顔で。

「い・じ・わ・る！」

「そ・ら・が！」

「い・じ・わ・る！」

「そ・ら・が！」

「い・じ・わ・る！」

「
そ
」

「いい……加減にせんかあああああああ……！！！！！！」

きやー。と蜘蛛の子を散らすように走りだすふたり。

「あ」

やばい普通に逃した。逃したけれどふたりはきやつきやつき
やはしやいで逃げるのに夢中でそんな事気づいてない。

夏の海辺を手をつないで笑いながら走る少年少女。うん、もう砂糖っか蜂蜜吐くぞ。

夕陽とかね、あれで結構氣が利くタイプだからね、走る早さをリスに合わせてたり無理してないか細かく伺ってたり。その度に視線がぶつかって、リリースは甘くはにかむ。夕陽もそれに合わせてまた笑う。

「うわあああ背中かゆい！いいいいいいいいいい！！！」

なにこれなにこれええええええつ?!

と、全身むずむずしてると。

「あんまあああああああああああああああああああああ
あああああああああい！」

ごぱあ！
と海が割れて黒ずくめで筋肉ムキムキのおじさんが出てきた。

ああ、あの人があれだ。この前肝試しの時に光璃さんからお仕置き

食らってた人だ。とところどころにのぞく縄のあとが生々しい。あれ結構痛いんだよなあ……。

宙に浮かんで黒いマントをはためかせ腕を組んで仁王立ちになったおじさんはいかにも怒り心頭といった様子。

ぜーはーぜーはーと深呼吸を繰り返したおじさんは、したたる海水もなんのその、きつと夕陽とリリスを睨みつけた。

「貴様らあ！ 状況わかっておるのか？ なあ？ ここ閉鎖空間だぞ、かえれぬのだぞ？！ なのになああああんで貴様らはいちやいちやいちやいちやいちやいちやいちやいちやいちや！」

「うわあなんあ怨念感じるなあ」
「やかましい貴様も外野のくせに！！」

おじさん涙目だった。なんか恋愛で辛いことでもあったのだろうか。

しかしながらそんなおじさんの主張に当の二人は。

「「？ いちやいちや？」」

とまあ。

ええええええええええ。君らいちやいちやしてる自覚なかったの？！

なんて僕が思ったのだからおじさんの怒りはもはや有頂天（誤用）。

「ちつくしょおお！ これだから！ こ・れ・だ・か・らリア充どもはさあああ！！ もう爆発しろ！ 爆発しろよ！！ 我の何が悪い、何が問題なのだあああ！！」

とりあえず……見た目、じゃないかなあ……酷な話だけど。
だって黒マントで黒づくめでムキムキって。需要の方向が見えないもん……。

「くそ、くそ！ さっさと空間攻撃で初めてしまえばいいものを！
それもこれもその貴様が止めるからせっかくの仕掛けがいつま
でも発動せん！！ さっさと手を出して爆発しろ！ リア充爆発し
ろよおおおお！！」

なに、この……切ないほどに切実な叫び。

何がひどいって、この状況で特に誘導さえしていないのに勝手に
ゲロってる辺りがひどい。

ひとりでわんわん叫ぶおじさんをよそに、リリスはマジカルリリ
スタメントに変身。夕陽も両手に風と雷をありったけ溜め込ん
でいた。

「くそ、こうなれば空間の歪みを利用した罠で分断して個別に料理
してやろうと思っていたのに！ 何だ貴様らは！ おのれジュステ
イードの仲間だけあってふざけおってからに！！」

おじさんは目を血走らせてらんらんと僕を見ていた。

何度か遭遇しているせいで変に因縁をもたれてしまったらしい。
厄介な……まあ、後ろのふたりに気づかないでいてくれるので有り
難い限りだけど。

「あの……おじさん？」

「ああ、何だコラァ！！」

うわあ、もうキャラさえ保ててないよこの人……あのふたりのラ
ブコメビームがよほど堪えたらしい。まあ、気持ちはよくわかるけ
れど。

けどまあ。

「後ろ、とりあえず、全力で防御したほうがいいですよ」
「ぬ？」

肩で息をするおじさんが振り向いて。
笑顔の夕陽と無表情のリリスが。全力で拳と剣を振りかぶったのを見て。

「——————」おのれリア充どもがああああああ！！
「」

いや。

断末魔がそれってどうなの。

空を埋め尽くした極光が晴れると、僕ら三人はいつの間にか砂浜に並んで寝転んでいた。いや、実際には僕から少し離れたところに夕陽とリリスが折り重なるように倒れていた。

どうやら僕は一足早く目覚めたらしい周囲を見回すと……うん、昨日の海だ。水平線には島が見えるし、振り返れば道路がある。ついでに海にはなんか黒いのがぶかぶか浮かんでる。一応おじさん、消し炭になったりはしなかったようだ。すごいな。

あの空間を作っていたおじさんを倒したことで戻ってこれたようだ。

ふう……なんというか、一日の始まりに無駄に疲れた気がする。太陽はまださほど高い位置にはない。割と長い時間あの空間にいた気はするのだけれど、こちらの時間とは同期はとれていなかったようだ。まあ、助かるといえば助かる。

何しろ変える前にみんなで別荘の大掃除をすることになっている

のだ。サボる訳にはいかない。

……つうか監視しとかないと何が起きるかわかんないしさ。

首を回しながら立ち上がる。さっくりと砂を踏む感触に心地よさを感じる。ていうか裸足だ。つうかパジャマだ。どういう仕組みなんだか。

て、よく見なくても折り重なるように倒れているふたりもパジャマだった。

……絵的に色々まずくないだろうか。まあいいか。

「おかえり」

「へ？」

突然投げかけられた言葉に間拔けな音を意図せず漏らした。

いつの間そこに居たのだろうか。堤防に腰掛けた綺月が穏やかな顔で僕らを見下ろしていた。

寝間着に使ったのであろうジャージ姿で、足にはサンダルを引っ掛けている。ちなみにジャージはぶかぶかだ。というのも、なぜか古くなった僕のジャージを彼女が欲しがったからだ。

いくらこまめに洗濯をしているとはいえ泥や汗の染みこんだジャージを女の子にあげるなんてとんでもなく抵抗を覚えて、こっさり捨てようとしていたのだが。

いつの間にか姉さん経由で渡っていた。

彼女の長い髪は頭の高い位置で一括りにまとめられポニーテールになっている。サラリと海風に流される髪がはらやらと舞い、陽光を浴びて輝く。

余った袖をひらひらと遊ばせる綺月の姿に、なんとなく見入る。

「……？　どうかした？」

「うん、なんか、きれいだなんて思っ」

「ふあ」

がきん、と音を立てて綺月が固まった。

「え……あ、ああ、うん、そ、そうね！　夜の海もそうだけど、朝の海も悪く無いわよね！！」

「え？　ああうんまあ海もきれいだけど、僕が言ったのは綺月のこおごぺあっ？！」

ぱしーん、と顔面に衝撃が走り目の前が真っ暗に。口の中じやり、と砂の感触を覚えて、それをぺっぺと吐き出す。

同時にぺたりと顔面から離れたそれは。

「……………サンダル」

「はー、はー、はー、はー」

見れば、綺月は腕を振り切った状態。片足のサンダルはなくなっ
て裸足になっている。

肩をいからせ目を吊り上げて息は荒い。過呼吸になっているのか
顔は真っ赤だ。

と、言うかだね。

「……あのさ綺月、さすがにこれ理不尽じゃない？」

「うううううるさいわねしょうがないでしょノーガードだったんだ
もんー！！」

何がさ。

しかし涙目にまでなれるとこちらが折れないといけない気がし

てくるのだから。

卑怯っていうか、ずるい。ぷくつと頬をふくらませてうつすら雫を瞳の端に浮かび上がらせて、微妙に視線を逸らされる。なぜだかわからないけれど、逆らえなくなる。

「はあ……はいはい、わからないけどわかったよ。とにかくほら、サンダル」

「ん」

「……女王様は朝から元気だねえ」

差し出された足にサンダルをはめる。

「……それじゃあ、帰りましょうか」

「うん……って、夕陽たちを起こさないと」

「放っておきなさいよ。リリースちゃん、あれはあれで満足してそうだし」

「はあ……いいのかなあ……」

「いいのいいの。……わたしだってそうするし」

「うん？」

「なーんでーない。ほら、帰りましょ。そろそろ翼ねーさんも起きる頃よ」

「ああそうだね。てことは涼莉も起こしてあげないと。……って何？！　なんで脇腹をつねるのさ！」

「……さあ？」

「ちょ、あた、いたたた！　や、やめてよ綺月！」

「んー」

「って、あははは！　ちょ、つつくのは！　つつくのは反則！　くっ！　あははは！　！」

「うふふふ、逃さないわよ」

「ちょ、やめ、あはははは！　あれ、なんかデジャヴ」

「どうしたの空？」

「いやなんか……ってだから綺月！ あはははは！」
「うりうり。あははは」

やけにテンション上げながらじゃれあうように別荘への道を歩いていった。

夏の太陽がゆっくりと昇る中。

海風を横から受けながら。

繰り返し繰り返し何度も何度も、互いの影は重なり離れを繰り返した。

彼女の嘘寝と魔王の帰宅

「……………」

笑い声が遠くへ離れて、やがて海の音に掻き消されるほど小さくなった。

わたしは砂浜で空を見上げていた。だって動けない。重い荷物が上に乗っているもの。

「……………」

正直重い。割と。すごく。

だから動けない。いや嘘。本当は動ける。

でも動かない。いややっぱり嘘。動けない。動けるわけがない。

だってさっきから全身が痺れるように暖かいんだもの。

こんなの、動けるわけがない。

だから。

起こしてしまうかも知れないから。

大きく広げたこの両腕も、やっぱり動かせない。

うん。

残念。

ってさあ。

わざわざ異世界まで来て何だと言うのだこの茶番劇は。

まったく。

ジュステイドもジュステイドである。我の事を散々無視してお
ってからに。わざわざ肉体改造してまでウケ狙いの格好をしたのが
台無しではないか。

その上おなごまで侍らせてるなど言語道断。天が許しても我が許
さぬ。もつともそれ以前に我ら魔王は元々天に許されるような存在
ではないが。

まあよい。異世界などに逃げおって腑抜けたかとも思っておった
が、いや実際腑抜けておるようだが、なるほど、以前よりなお手強
いと思わせるその佇まい。

面白いではないか。

そうか。それ程にこの世界が面白いか。

ならばよいでしょう。

いずれ主も我らの世界へ帰らねばならぬ身だ。

この世界でせいぜい羽根を伸ばして帰ってくるがよい。

決着は着けねばならぬのだ。それが先延ばしになるくらい、なんという事もなからう。

「ぶ……………」

ごぼごぼごぼ、と笑った拍子に泡が口からあふれる。水面に顔を付けているのだから致し方がない。

「ふむ」

水面に立つ。

視線を岸にやると、我に一撃をくれたつがい互いの手を握り合っ
つてなにやらもじもじしておる。

ふん。ガキどもめ。

「……………あー、腹立つ。帰ろう」

時空を切り裂き元の世界への扉を開く。
リア充など爆発してしまえば良いのだ。
けっ。

閑話：僕とみんなと大掃除（前書き）

帰り道編。その1

閑話：僕とみんなと大掃除

「はいはいっと。しゃーないし、アタシがこいつらの相手しといてやるよ」

「にゃー。涼莉も手伝うのー」

「十乃もメイドです。てつだいます」

「はいはいはーい。そういうのはアタシの影を抜けだせたらいいなさいな」

十乃ちゃんはまだ見習いでしょうに。更に言うと涼莉は片付けが終わると片付けるべき箇所が増えるという変わったスキルの持ち主――うんまあ、猫、だもんね……仕方ないよ。

にゃーにゃー合唱するふたりをぶら下げたままはっはっはと歩いて行くリアさんを見送った。

自分で外出とけて言っというてなんだけど、微塵も躊躇せずにサボるあの人の神経も大概凶太いな。

ⅡⅡ 大地の場合 ⅡⅡ

仕事の合間をみてちよっとみんなの様子をのぞくことにしてみた。「どう、調子は？」

夕陽と大地にはリビングその他共用部の大雑把な掃除を頼んである。力と身長のある二人なので、広い部屋でもいい具合にカバーできている。細かい部分については、本業のメイド長女と次女に丸投げしてしまえばいい。

「おお、空殿で御座るか。まあ順調といえば順調に御座るよ」

「何その微妙な物言い」

すっごい気になる。ちなみに、家具やら何やらが醸しだすロイヤルというかセレブというか、ぶっちゃけ身に余るオーラのせいで、実家の家具のように雑な扱いができない。

値段の相場を光璃さんに尋ねたことがあるけれど、

『あらあら、気にしなくていいんですよ。取り返しのつかないようなものは置いていませんから』

という返答だった。つまり値段を聞けば気にせずにはいられない程度のものだ判断した。

そうやって僕が若干の不安を覚えることを理解していて――ていうかむしろ不安を感じさせるために曖昧な返事しかくれなかったんだろう。千影さんに聞けばよかった。

まあ、そんなわけで貧乏性かつ一般人の僕としてはこの場を曖昧にするのは心臓に余計な負担をかけることに繋がるのだ。

……見た限りそんなの気にしてるのは僕一人らしいんだけどね。みんなすげー。郷に入れば郷に従えとはよく言うけどさ。

「何か気になることでもあったの？」

「気になるというか、気にしてはならぬというか……」

「え……っと、どういう？」

はつきりとしらない物言いに首を傾げるしかない。

大地はのどに骨が刺さったような微妙な表情で、くい、と無言のまま僕にその場所を指し示した。

机を移動させたせいだろう。その場所はカーペットがめくれて、フローリングの床が晒されていた。

晒されていたのだけれど。

……うん。その。まあ。ね。

「……………さて、いかがいたそうか、空殿」

「決断僕にぶん投げるんだ……」

床板にはシミが残っていた。

割と大きなシミだ。単純な形ではない。

中央に大きめのシミがあり、そこから四つほど、上下へと細長いシミが伸びていた。それらはそれぞれ一回曲がり、おおよそ中央のシミと同じくらいの長さであるように見受けられた。

さらに、上部からのびたふたつのシミの間には、丸いシミが浮かんでいる。

長さは、そう。

だいたい僕が寝転がったらこれくらいのサイズになるだろう。端的に言って。

——そのシミは人の形をしていた。

よくよく観察してみるとやけに赤黒い。

「大地……なんてもんを見つけてくれてるんだ君はっ?!」

「さすがにこれの責任を押し付けられても納得できぬで御座るよ?

」

「ていうか床板張り替えるとか、なんでそんな事もしてないんだ光璃さん……っ!!」

「……………それをする暇がなかった、とかそういうことで御座ったら」

「恐ろしいことを言うなよ……」

洒落になってない。

いやいやしかしいくら何でも。光璃さんがそんな、まさか。

……ねえ?

「そうだ、君の力でちょっとこの影の由来を遡れない?」

「ふむ……それは可能で御座ろうが……」

渋い顔になる大地。ぶっちゃけやりたくねえと表情が訴えていた。とはいえこれをこのままにしておくのも後味が悪い。主に僕が。

「まあ、やるだけやってみるで御座る」

大地も気になるのだろう。結局そんな結論になった。

彼は影に近づきしゃがみ込む。ポケットから小さな機械を取り出した。クルミのような形をした機械は、中央に青い水晶のようなものが埋まっており、その中に幾何学的な模様がちらちらと光っている。

指先で水晶の中の幾何学模様をくると操作をすると、機械の先端から細長い針が伸びてきた。大地はそれを、慎重に影に刺してまぶたを閉じる。

沈黙。

無言。

静寂。

それがしばらく続き。

「う……………」

かた、と、大地が震えた。

「……大地？」

「う、うううう。うううううぬおおおおおおおおっ?!?!?」

悲鳴をあげて大地が機械から手を放す。目は見開かれ、顔中に玉のような汗を浮かべていた。

なんだ。一体彼は何を見た。

やばい気配しかしない。

しばらく肩で息をしていた大地が、ふと、こちらを見た。

「……………ぬ？ 拙者は一体何を…………？」

「え、いや。今その影の過去を探っていたんだけど…………」

「影……………」

なぜか。大地は怪訝な表情で床の上の影を見る。

「…………！ そ、そうで御座った！ 確かに拙者、この影の過去を…
…見た、ハズ、なのに、なにも覚えておらぬでござる……………っ！
！ いや、見た、覚えているはず……………しかし、なぜか何も思い出す
ことが出来ぬのは、一体どういう事で御座るかっ?!」

……………なんという、ことでしよう。

どうやら彼は、見たということを確認しているのに、見た内容を
覚えていないのです。

何かがある。何かがあるのだ、この影には。

先ほどとは違う、気味の悪い沈黙が場を支配した。

ごくり、と喉を鳴らし、どちらともなく顔を見合わせた。

「……………大地」

「……………何用得御座ろう」

「……………カーペット、戻して、掃除、頑張ってね」

「……………で、御座るな」

見なかったことになった。

|| || 夕陽の場合 || ||

「夕陽、何か見つけちゃいけないものとか見つけてない？」

「いきなりその質問はなんなんだよ……」

「ごもっとも。とはいえ僕も具体的に何かを答えられるわけではない。なにせ僕は何も見なかったのだから。故に説明のしようがない。ないのだ。」

「まあ別に変なのは見つけてねえよ。いや変なのって言えば変なのばかりある家なんだけどよ……」

「まあ美術品の良し悪しなんて僕らに判るもんでもないしねえ」

「だよなあ。何だこの絵何が楽しいんだ」

「単純に綺麗な風景とかならまだ感心できるんだけど……ねえ」

「僕らの視線の先にあるのはいわゆる抽象画、というやつなのだろう。ぶっちゃけ適当に絵の具をぶちまけたように見えなくもない。」

「まあ、本当に絵の具を適当に塗りたいくったりなんかしたら色が混ざって大変な事になるのは確実で、ある種のルールや統一性を感じさせる以上、意図があつてこうしているんだろう、けど。」

「ううん、やはり僕には遠い世界であると感じざるをえない。」

「夕陽にはこれ、何に見える？」

「あー？ また難しい話だな……」

「夕陽は眉間にしわを寄せて人差し指を当ててしばらく考えたが、数秒で結論が出たらしく両手をぽんと打った。」

「うん、あれだほら、サンタクロースが煙突をぶっ壊してヘヴィメタやってるように見える」

「見えるかつ？！」

「なにそれ予想外にもほどがある。」

「じゃあお前は何に見えるよ」

その返しは当然预期していたので、僕はおそらく大抵の人が答えるであろう回答を口にした。

「海底神殿からひげの生えたうなぎが飛び出してきてリンボーダンスをしているように見える」

「見えんのかっ?！」

なぜか夕陽が超驚いていた。多少のズレがあってもそういうふうに見えると思うんだけど。

「え、ちよつとまでよこれのどこがうなぎだよ。ていうかひげの生えたうなぎってもうナマズじゃねーのか」

「いやいやだからほら、この部分がこう……で、ここが頭で、ね?」

「いや『ね?』じゃねえだろ! いいままずここがほら、煙突だろ、で、これがエレキギターで」

「いやちよつとまって。それはむしろリンボーダンスのバーでしょ。で、これが周りの火」

「違うって。どう考えてもそれはプレゼント袋だって。それにほら、ここに荒れ狂うトナカイがいんだろ?」

「ははは、何を言ってるのさ夕陽。それはトナカイじゃなくてシャチホコだよ」

「いやいやいや」

「まってまって」

むう。結論がでない。

「何を騒いでおられるのですか?」

「あ、千影さん」

僕らが言い合いをしていると、いつの間にやらメイド服姿の千影さんが後ろに立っていた。

ああ、ちょうどいいや。千影さんにも聞いてみよう。

「いや、夕陽とこの抽象画が何に見えるのかを考えていたんですけど。千影さんはどう見えますか？」

「……………抽象画、ですか」

千影さんがなにやら難しい顔をした。
はて。どうしたのだろうか。

彼女はしばらく何を言うべきか迷った様子だったが、諦めたようにため息をつく、声のトーンを落として、こう言った。

「その言葉、決してお嬢様の前では口になさらないで下さい」

「う、ん？　どういう事っすか？」

「いえ、ですからその絵を描いたのはお嬢様なのですが……………それ、『写真』ですのぞ」

……………はい？

僕と夕陽はきょとん、と顔を見合わせる。夕陽は狐につままれたような顔をしている。きっと僕も似たり寄ったりだろう。

絵画に視線を戻す。

色がなにかこう、ぐるぐると。ゆらゆらと。

まざり、伸び、うねり、飛び、弾け、自由に。

言葉では形容しがたいが、とにかく、そこには『現実』という枠組みが存在していない。ように見える。

写真？　え、これが？　本気……………というか正気？

これが現実にあるものなら見た人多分発狂するんじゃないだろうか。

絵ならまだしも現実にこんな物体が目の前に這い寄ってきたらこの混沌だよ、とツツコミが入る。

「……………あの、失礼ですが」

「お嬢様は先天的にも後天的にも視覚や認識の障害は持っておりませんし、稀に能力者にあるような固有感覚による現実の侵食も皆無です」

僕が尋ねようとしたことに先手を打たれた。気を利かされた、と言うべきか。

「あー。つまり、あれですか。なんつーかその、光璃さんは」

「ぶっちゃけ、絵心が、まあ」

結論を敢えてばかす僕らに、千影さんは視線をふとそらし、遠くを見るようにして。

「ふ」

と口元に哀しげな笑みを浮かべた。

きっとそれが答えなのだろう。

僕達は同じ悲しみを共有たような気がした。まあ気のせいであろう。

ああ、ちなみに。

あの絵は光璃さんが子供の頃に好きだったテレビ番組『超能天使クルちゃん』の絵らしい。

先月DVD BOXが発売になり、懐かしさに心うたれた光璃さんが描いたものだそうだ。

さらにちなみに。

彼女の中学からこっちの美術の評価は、例外的に『評価不能』の判定を下され続けているそう。

|| || リリスの場合 || ||

「わたし、そのアニメ、好き」

「え、マジで？」

現役魔法少女に『超能天使クルちゃん』についての意見を求めた所、そんな答えが。

「というか、わたしの魔法のいくつかは、あのアニメからもらってる」

「……………」

はた、と動きを止めてしまった。

いやだってリリスの魔法って……安全虐殺系とか安心拷問系とか健全壊滅系とかそんななんばかりじゃん……。アニメで放映しているの、それ。ていうかそれがBOXが出る程の人気ってどうなの。

「さすがに、そのまま使うのはどうかと思ったから、ちょっと自分なりのアイデアは加えた、けど」

「うん、多分そのアイデアの部分のせいで別物になってると思うよ」

むしろなっていないと困る。大の大人がガチで泣き叫ぶような魔法をテレビで放映して欲しくない。

基本方向性がグロかエグかに偏っているので。残念ながらエロはないのだけれどよくよく考えると被害者は大抵おっさんの類なので無くて正解だった。

「空はわたしの魔法を誤解している」

「え、そう？」

むしろよく理解していると思っているのだけれど。思い込みなのだろうか。

いやまあさりとて僕も彼女の魔法全てを知っているわけでもないのだし。

「わたしが本気をだせば、放送禁止どころか文章化禁止の憂き目に」

「誤解ってそっち?! 何その全力で不要な自信は!!」

「でも誤解は解いておくべき。相互理解超大事」

「理解するにしても順序があるでしょうに!」

なんと彼女は今まで手加減していたそうだ。主に描写的な意味で知る必要もなければ知りたくもない事実がココに明かされてしまった。

「そもそもの疑問なんだけど、リリースの世界の魔法少女ってどういうシロモノなわけ？」

「え」

きよと、と首を傾げる。

「今更その疑問なの……?」

「いやまあ」

僕もその疑問には同意だけでも。なんというか、いちいち追求してたら人生何回あっても足りない気がするのだ。僕の周りの面子

を並べてみると。

涼莉はまあいいとしても、大地やジュ様の事情なんてほとんど知らないし。リアさんとかいつの間にか姉さんと友達になってるし。さらに言えば、僕は幼馴染の綺月の事情ですら、本当は正しく知らないのだ。

だから、というわけでもないのだけれど。

ただまあなんというか、綺月の事情でさえちゃんと知る事のできない僕が、他の誰かの事情に踏み込んで、それで何かが出来るかというところ――僕はそれほど、自分を信用出来ない。

「……空？」

「ん。ああごめん、ちょっと考えこ」

「綺月？」

………なんで分かったんですかねこの人。魔法少女っていうか魔女じゃなからうか。

「魔女と魔法少女は、別物」

「いやほんとになんでわかるのかすっげえ疑問なんですが」

何このコ怖い。けどよく考えたら綺月も姉さんも同じ事を割と頻繁にしているのに気がついた。誰かプライバシーを保護してくれませんか。

「……まあ、綺月は難しいから」

「いやその言い方だと綺月本人が面倒くさい性格っぽく聞こえるって」

「割とその通り」

そうかなあ。割と素直で真っ直ぐだと思っただけ、あの娘。

そのせいで変な方向にも超音速で駆け抜ける時があるんだけど。

「主に空のせい」

「ええ？ 僕？」

何かしたっけ。特に何もしてないと思うんだけど。いや、そりやあまあたまにからかったりだの何だのはやったりも当然あるけれど、それは何ていうか、日々のじゃれあいみたいなものだし。

……思った以上にストレスになってたりするんだろうか。ええー……考えだすと急に不安に。

「うーん」

「……うん、わかった。あんまり深く考えなくていいよ、空」

「え、そう？」

「どうせ無駄だから」

「なんか酷いっ?！」

上げて落とすとか心臓に悪いからやめて欲しいと心底思う。

「悪いのは空だから」

うんうんとひとしきり納得するリリースに僕はもう何も言えない。
はあ。

「もういいよ僕が悪いってことで。……っと、所で掃除の方は順調？」

「おっけー。さっき準備が終わったから、今から終わらせるよ」

「準備? ……ああ、もしかして魔法で終わらせるつもりなの?。」

じゃあ僕、後ろ向いていたほうがいいかな。

「大丈夫。これくらいなら、変身しなくても問題ない」

リリースは手に持ったモップを軽く持ち上げ、頭上でくるくると回した。

モップの柄の先端にゆっくりと赤い光が集まる。光はじんわりと明滅を繰り返し、その度に光量を増していく。なんとなく、物騒と言いか不吉な色と言うか……なんか嫌な予感が。

「マジカルマジックハンド？」

すい、と光を振り下ろし、光が弾けた。一瞬目の前が光で埋め尽くされたけれどすぐに元通りに成り……特に変化はなかった。

「リリース？」

「うん、成功」

僕の疑問をスルーしたリリースは、いそいそとモップを片付けはじめた。いや、だから何も終わってないと思——。

きし

きしきし

かり

かりかりかり

「……………なに、この音？　　なんだか、部屋全体から響いているような」

ひっかくような、何かが引きずられるような、そんな音。
部屋中からそれが聞こえる。けれど、どこで音がなっているのか

わからない。なんだこれ、なんだこれ?!

ふと。唐突に音がやんだ。

リリースに問いかけようとそちらを見ると、なぜか彼女は両耳を手で塞いでいた。

その瞬間。

だん！
だん！
だん！
だん！
だん！
だん！

ずっ！　ずっ！　ずっ！　ずっ！
ずっ！　ずっ！　ずっ！　ずっ！

あし　あし　あしあしあし！

叩く音！
引きずる音！

無數の手が窓を叩く。のたうち回るように窓の上で手が踊る。走る。窓を埋め尽くすほど。

腕！！！！

「!!」

肺の息をすべて吐き出す。気づけば、家中から同じ音が響いている。なんだこれはなんだこれはなんだこれはなんだこれはなんだこれは。

その腕たちはまるで義務のように窓の上でのたうち回る。

のたうちまわって――のた、うち。

まわ……………って。

「……………ぞう、きん？」

無数の腕は全て雑巾を持っていた。

雑巾で窓を余すところ無く舐め回すように拭き回していた。

……………。まさ、か。

ぎぎぎ、と首をリリースに向ける。

リリースは。

ドヤ顔で。

「だいせいこーう」

「いまずぐ止めろおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「!!!!」

彼女の襟首を掴んでがくがく前後にゆすった僕の行いは許されて
しかるべきだと思う。

「まあ、なんつーか凄まじかったわね」

「でしようね……」

ゴミを外でまとめていると、リアさんが寄ってきた。やけに楽しそうなのは、中の騒ぎを外から楽しんでいたからだろう。

「まるっきり心霊現象だもんねえ。実際はキキーモラの大量召喚みたいなものっぽいけど」

「にしてもやり方とか限度とか……百羽さんなんて気絶してましたよ……」

綺月も危うく神仏召喚するところだったし。

いくらなんでもインパクトが強すぎた。

「光璃さんも平静を装ってましたけど動揺してましたよあれは」

「へえ。あのコでも動揺することがあるんだ」

「そりゃ、光璃さんだって人形じゃないんですから。姉さんはなんか大爆笑してましたけどね」

いや、本当。姉さんの笑いのツボがたまにわからない。

ちなみに以前、テケテケが出てきた時は半泣きだった。半泣きでぶった斬ってた。いじめかと思うレベルで斬りまくってた。テケテケも泣いてた。

「おいどうした少年。なんか遠い目してるよ」

「や、なんかどうでもいいことをふと思いついてしまいました」

「あっはっは。遠い目をするもんだから、なんかやな出来事でもあったのかと思ったよ」

「あー……」

軽く死にそうになった、という意味では嫌な思い出の部類になるのだろうか。

けどなあ。一応大地と出会ったきっかけだもんなあ。

「大変嫌な思い出でした」

「いきなり諦念たっぷりになったけど大丈夫？」

「いやまあ」

個人的な話だけれど、大地と僕って割とメンタリティが似通っている部分があるせいで、僕としてはちょっとやりづらい所があるのだ。まあ逆に、だからこそ手を抜かずにやり込められるしそれに罪悪感を感じない部分もあるんだけれど。

「リアさんは大地の出生とかは知っているんですか？」

「いんや。聞いちゃいけないけど、まああれだね。まともじゃないのは判るね」

「分かるんですか」

「んー、まあね。単純にあんたらの面子に混じってるっていうわかりやすい判断基準もあるんだけどそれ以上に、少なくとも現存するこの惑星の生命体の定義からずれてるってのはわかるかなあ。

一応アタシの特技としてね。この地球上の生命であればそれとわかるのよ」

「……ええと、一応あんなんでもこの地球上の生命体なんですけど。というかメイド姉妹や僕に次いで一般人の枠組みですよ、あれ」

「はあん、そうなんだ。んーじゃあまあ、時間軸が違うのかねえ。過去か未来か、よくわかんないけど」

「うわすげえ。正解ですあれ未来人ですよ。なんで分かったんですか」

「んー。まあぶっちゃけるとアタシって純正の人外であって純正の

吸血鬼じゃないのよ」

「……………はあ」

何か違いがあるんだろうか、それ。

「吸血鬼の属性は後付でねー。便利な能力がそろってるし補正がでかいから使ってるけど、捨てようと思えば自由に捨てられるわけ。一応これでも地上最強の生命体になるわけよ」

まー、宇宙規模でヤバイあんたの姉やら魔王やら、地球諸共心中国しかないお嬢様相手はちょっと分が悪いどねーなどと苦笑。

その対象となった魔王とやらは、砂浜でよりにもよってうつぶせになって寝ていた。

「……………あの、ジュス様。なぜうつぶせなんですか」

「日光が目障りだ」

ああ、そういう……確かにジュス様なら砂浜の熱なんてこともないだろうけども。

故に、少女二人組に砂に埋められる程度なんてことはないのだろう。ぶっちゃけとんでもなく恐ろしい事してるんだけどねキミら！
案外子どもには甘いよなこの人。

「って、それで結局人外設定だとなんで大地が未来人だってわかるんですか？」

「未来人だどうだって言うより、人間として不正かどうか……って感じかね。人の外側から見るとそういうのがよくわかんよ。」

組体操で誰が場所からずれているかとかさ、中から見てもわからないでしょ。アタシはそれが外から見える感覚を持ってるってわけよ。人に属する人外であるが故に枠組みの形がよくわかるのさ」

はあ、なるほど。

わかるようなわからないような。

まあとにかく、彼女独特の感覚で、およそ一般的な人間の枠組みに入るかどうかが判断できるということらしかった。

まあ、人外が人と間違って人外を襲うなんて、バカみたいなことが起きないための処置だろうね。

なんて、ちょっぴり照れ笑いを浮かべて彼女は言った。
どこに照れる要素があるのかわからなかった。

「ま、それはさておき。そろそろ掃除も終わりそうなので、帰る準備だけはしといてくださいね」

まさかジュス様も、砂まみれの格好で車に乗るなんてことはしないだろうし。

考えていると、ジュス様がムクリと体を起こした。上に乗っている砂などものともしていない。ぶっちゃけ、涼莉の身長とほぼ同じ高さまで積まれたそれは山と呼ぶに相応しい威容だったんだけれども。

あっけなく崩れ落ちた。

「きゃーっ」などと悲鳴を上げて突発的小規模な土砂災害に巻き込まれた少女二人はそれでもやはり楽しそうだった。

あらやだ、微笑ましい。

「……………あっちい」

「予想に反して汗だくですねっ?!」

砂から出てきたジュス様は汗だくだった。砂まみれとかそんなのどうでも良くなるレベルで滝のような汗を流している。

「な、なぜにそんなことに……」

「知るかうぜえ。おおかた、どっかの人外魔境が直下の地熱をいじったりしたんだろ」

「どっかの……」

ていうか。それって。

「――てへ☆」

「キャラとして似合わないごぶはっ!!」

したをちろりと出しておでこを叩いたリアさんに正直な感想を申し伝えようとしたのですが！　なぜか！　僕の影がアップパーカットかましてきやがった！！

何故だろーね本当！！

「な？　どっかの人外魔境だろ？」

「……………そうですね。ていうかどうするんですかその格好。今からシャワー使います？」

「あん？　もう掃除終わってんだろまた汚すのもなんだしな。こうすりゃ解決だ」

そう言ってジュス様は、手の中に琥珀の光を生んだ。
って。

「いやいやいや、ちょっとなににして！！」

「別に大したことしやしねーよ」

言葉通り、光は一瞬のまたたきを残して消えた。

そのときには、ジュス様の全身からは汗が消え去り、はりついていた砂も全てなくなってしまっていた。まさに早業である。

「…………おおう。相変わらず凄まじいですね」

過程をすっ飛ばして結果だけしか見えない。

「邪魔な原子を分解してるだけだからな。余波をちゃんと処理すりゃ大抵のことはコレで片が付く」

「はあ、なるほど。ところでやたら物騒な気配を感じますが余波の処理に失敗したらどうなるんですか」

「んなもんお前、宇宙から見て判るくらいの穴が開くに決まってるだろ」

当たり前顔して何言ってくれてんでしょかこの人は……。

「……ジュス様。お願いですからパンタグリユエルを猫型ロボットみたいな気軽さで使うのやめてくれません？ 正直、近くにいと心臓が止まりそうなんですが」

「別に心臓なんざなくても生きていられるようにしてやれるが」

違う。

そういう問題じゃない。

そういう問題じゃないから。

どうすれば伝わるんだろうかと何通りか説得方法を考えたものの、
尽く『代わりを用意する』『時間を巻き戻す』『歴史を切り替える』
『まあ適当に』等々の答えが返ってくる予測できてなんかもうどうしようもなかった。全て一度は言われた言葉である。チートというより生きているルールが違い過ぎてどうしようもなかった。

「空、どうしたの？」

うにゃー、と、背中に暖かな重みを感じる。

「落ち込んでますー。よしよし、ですよ」

小さな手のひらが僕の頭をやさしく撫でた。

謎の疲労感に襲われて膝を抱える僕を少女二人が慰めてくれた。

ううう、心が洗われるようだ。

けどね、キミらも原因の一端なんだよね。

なんだかなあ。

ほっこりした時点で僕の負けなんだよね。

「何か良いことでもありましたか」

「はい？」

「随分と締まりのない顔をしていらっしやったので」

「そんなにだらしなかったですか？」

「ええ。翼様との会話の中でもなかなか見ない顔でした」

「えー。僕姉さんと話してる時こそそんなだらしない顔してないですよー」

なぜか千影さんが目を見開いた。なにかおかしい事言ったか僕。

「そんな派手なりアクションしなくてもいいでしょうに。ねえ百羽さん」

「へ……え。あ、あの………ご、ごめんなさいっ」

なぜか涙目で謝られた。何か変な要求でもしたか僕。
じろり、と千影さんが半眼になる。

「あまり妹をいじめないで頂けますか」

「いや、今の僕の発言のどこに問題が……」

「優しいこのコが真実を言えるわけないじゃないですか」

「その発言が既に僕に優しくないですよ？」

「空様は打たれ強さに自信がおありでしょう」

にこやかな笑顔に反論する術がない。うごごご……。

「……それで、なにか御用があったのでは？」

「ああ、そうでした。いやさっきの怪奇現象で屋敷に何かしら被害があったりはしなかったかと」

「はうっ」

「……………ああ。その事でしたら問題ありません」

いや、今明らかに何かあった的な反応をですね。あなたの妹さんがですね。

はいごめんなさい余計なことは何も言いません。

どうしよう、このメイドさん目付きがすんごい怖い。

「千影さん、僕の時だけ妙に対応が雑じゃないですか？」

「そうでしょうか…………？ 百羽、あなたはどうかおもう？」

「ふあっ?! そ、その、それはえっと……………ご、ごめんなさいっ!!」

「ちょっと人のかわいい妹を泣かせるなんてどういいうつもりなのか」

「ええええええ今のも僕なんですかつ?!」

なぜか僕が責められていた。

判定基準厳しいな! ていうか今の流れはどう考えても千影さんが原因でしょうに!!

「なんていうか…………千影さん、僕の時だけ妙に対応きつくはないですか？」

特にご奉仕モード入っている時は。

つまり結論は僕相手にはご奉仕は在り得ないという回答だろうか。どうしようちょっと傷つく。

「そうでしょうか？ ……もしかしたら、あれが原因かもしれないね」

「あれ？」

「ぶっちゃけ空様を監禁してた際にほとんどの世話をしていたのは私ですから」

えー。

今明かされる衝撃の事実。

「何しろ当時のお嬢様ときたら……身なりは綺麗にしろといつつ基本的に接触は禁物。身の回りの世話は徹底的にされるものの少しでも情があるような仕草を見せたら逆上するような有様でしたから」
「うん、割と無理ゲーですよねそれ」

「そんなわけでして、空様相手だとそっけないと言うより突き放す対応が染み付いてしまっているのかもしれない。不快でしたら改めますが」

「いや、いいです」

だってそっけないとかそういうレベルじゃないもん。

改めた上で精神削るような扱い受けたら、それつまりナチュラルに僕を攻撃しているってことが明るみに出るわけで。

うん、結構キツイよねーそれ。あははははー。はあ……。

「あ、あの……大丈夫、ですか？」

「ああ百羽さん。心配しなくて大丈夫ですよ」

ぶっちゃけ割と慣れてはいるのです。ぞんざいな扱いやら理不尽な扱いやら。

しかしだからと言ってダメージがなくなるわけでもなく。人生な

かなかままならないね。

「さて。大体の掃除は終わった感じですね」

「ええ。皆様にお手伝いいただいたお陰で当初よりも早く終わりました」

「……………ていうかぶっちゃけ、後日ふたりで来て掃除するつもりだったでしょう」

「まさかそんな」

千影さんは表情を全く変えない。変えないんだけれど。

生憎と隣の同級生メイドさんは表情を隠すのが下手なんですよ。目を可愛らしく見開いていますよええ。何この娘かわいいな。

とはいえ、指摘しようとする『ほう、また妹を泣かせるつもりですかいい度胸ですね』という具合の視線の持ち主からどんな口撃が飛んでくるか分かったもんじゃないので黙る。同じ過ちは繰り返さない……………！

「…………まあ、そういう事にしておきます」

「そういう事も何もそうなのです」

「そ、そそそそうですよ空さん」

百羽さんは口を開かないほうがいいと思うなあ…………。

とはいえ、そんな百羽さんを見ている千影さんの表情は僕相手には決して見せない優しさが見られるので、今後も百羽さんのがんばりには期待したいと思う。

正面からあの表情を見ることができないのは、結構残念だと思うけれども。

「そういえば、僕が監禁されてた時からメイドやってたんですね、千影さん」

「と言うよりもあなたを監禁する事がきっかけでメイドになったようなものですね」

「なん……だと……」

……どうしよう、知りたくなかった事実ばかりが掘り起こされる。僕も聞かなくやいいのになんで話題をほじくり返したかな。

「翼様の話はお嬢様から伺ってありましたから方が一がないように、と。本来であれば監禁自体を諫められたら良かったのですが、なにせ当時のお嬢様の癪癪は……」

「まあ全国紙どころか世界レベルのニュースになるよりはマシですよ……」

「はあ……私は去年からお仕えしていますが、数年前はそれほど、だったのですか」

百羽さんは感心しているような困っているような。まあ下手をすれば主の陰口になる内容だしね。

とはいえさすがに当時の光璃さんは人道的に見て擁護できる感じではなかったわけで。や、誘拐されるまで僕も知らなかったんだけどね……。

「今こうして落ち着いていることを考えると、あの監禁事件もある意味でよかったといえるのかも知れませんかね」

「いやよくねーよ」

思春期の少年の心にとんでもなく深いトラウマ刻んでますからね？

「あ、あううすみません空さん！ あのその、ええと、何かしらお詫びは私からも……！！」

「いやいや、今は別に遺恨があるわけでもないからお詫びなんてい

いよ」

ただあの事件を肯定されるのはなあ。さすがに。

「そうですね。私も今のは失言でした。申し訳ありません」

千影さんは綺麗に腰を折って頭を下げた。

「ええ、まあそのくらいで」

「ふえ？　そ、そんな簡単でいいんですか？」

いいんです。謝罪さえ貰えれば僕としてはそれで。むしろあんまり続けたい話題でもないし。
ともあれ。

「それじゃま、帰る支度でもしましょうか」

「ええ」

「え、ええー……なんだかんだ言ってお姉ちゃん空さんと仲いいじゃないですか……」

釈然としない様子の百羽さんだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6318s/>

姉さん（が）、事件です

2011年11月27日18時50分発行